

6 昆虫類

昆虫相変化の概要

「岡山県版レッドデータブック 2009」発刊以降今日まで、岡山県でも昆虫相に重大な変化を引き起こしかねない出来事が相次いで起こっている。以下主な事項を例記する。

- ① 地球温暖化を主原因とする異常気象が、その規模には違いがあるものの、この10年間に県内環境にも変異をもたらした（台風の巨大化、熱帯夜の増加、降水量の急変などによる河川環境の変化など）。特に2018年に発生した西日本豪雨は、多くの犠牲者と甚大な生活基盤や農業などへの被害を与え今日でも復興の努力が続けられている。必ずしも因果関係などは明確になっていないが、昆虫類の生態や分布などにも多くの影響があることが予測され、今後の調査が待たれる。関連して、防災のインフラ整備も大型化、多様化しているが、従来の環境配慮型整備が後退傾向にあることが気になる。
- ② ナラ類の集団枯れ死（ナラ枯れ）。かつて、ナラ類は主に薪炭源として、直径約10cm以上が伐採される機会が多く雑木林などでは若木が目立っていたという。近年のカシノナガキクイムシ（養菌性キクイムシ）の媒介するナラ枯れは、長寿木がその生殖条件がよいため、結果的に大径木に集中した。数年前がピークだったと思われるが、県北各地で多数のナラ類の大径木が伐採され今日も継続されている。
コナラ、ミズナラなどに依存する昆虫が多数知られているので昆虫類への影響も無視できないと思われる。
- ③ 鳥獣被害も見逃せない問題を提起している。イノシシ・シカなどの野生動物の急増が生物相の変化や幾つかの種の激減に関与しているとの報告が増加している。県内でも、シカによる食草や吸蜜植物への影響を懸念する声を耳にするのが影響実態は不明である。「全日本鹿協会」は、シカとの共存の道を提起しているが、実現は容易なこととは思われない。県北から県南まで、全県的に分布を広げているソウシチョウなどの外来鳥類の捕食行動により昆虫類の減少を危惧する声もある。
- ④ ソーラーパネルに関わる問題。エネルギー問題も重要な議題であるが、県内でも各地で大型施設が設置され、さらに計画が進行中である。その設置場所の多くは、雑木林、草地、休耕田などで、いわゆる人里昆虫の生息地であり、その影響も無視できない。
- ⑤ 県内各地の草原では、生活との関係性が脆弱になり、放置されたまま自然遷移している例も多く、草原性昆虫類の減衰が懸念される。県内に点在する湿地も、乾燥化や外来植物などの侵入により、その姿を大きく変えている例も多く、湿原性昆虫類の減少が心配される。
- ⑥ 各地で活躍している自然関連団体などでは構成員の高齢化が進行し、次世代の担い手も思う様に育たず、自然や昆虫の盛衰などを調査する主体の弱体化も今後の昆虫相解明などにも危惧される要因と思える。

選定種の状況

選定種の決定については、文献記録を集積整理したデータベースを基本に、部会で実施した現地調査、さらには各委員の日常的調査活動などの結果も共有しつつ、候補種リストを作成し論議を重ねて決定した。結果的には前回ランク外の多くの種がリストアップされ、前回は選定した種でも、今回除外した種もあり全体としては、265種（前回は173種）を選定した。選定種の大幅増加は種の存続を脅かす要因（森林・林相の変化、池沼・河川の改修と変化、草原・草地の無管理などなど）が依然として進行中であることの反映と思える。

前回絶滅種とした6種（ベッコウトンボ、マダラナニワトンボ、カワラハンミョウ、ルイスハンミョウ、シータテハおよびウラジャノメ）は依然絶滅状態であり、今回はマルエンマコガネ、オオウラギンヒョウモンとヒョウモンモドキの3種も絶滅種として認定せざるを得ない状況であることが確認された。

絶滅危惧Ⅰ類では、前回17種から、今回30種と大幅に増加した。特にウスイロヒョウモンモドキについては、2015年鏡野町指定重要文化財（天然記念物）に指定され、その後2016年には「種の保存法」（絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律：1993）で、フサヒゲルリカミキリとともに「国内希少野生動植物種」として追加指定された。

2018年3月には鏡野町（恩原）のウスイロヒョウモンモドキ生息地は岡山県指定重要文化財（天然記念物）にも指定された。フサヒゲルリカミキリ、ウスイロヒョウモンモドキの2種は全国的に見ても岡山県が唯一の生息地である可能性が極めて高く、保護活動が精力的に行われているが、人為的繁殖などでなく、生息地の拡大と生息環境の好転を目指した活動に環境省をはじめ関係各位の努力に期待したい。

絶滅危惧Ⅱ類は51種をリストアップした（前回20種）。絶滅危惧Ⅰ種と同傾向であるが、ヒラサナエなどのトンボ類、カメムシ目ではタガメやミズスマシ類、コウチュウ目ではゲンゴロウ類さらにトビケラ目の種など、いわゆる水生昆虫と呼ばれる種が多数を占めている。県内での水域環境の変化、消失などが主要因と考えられる。

準絶滅危惧については74種を選定した（前回49種）。このランクでも、いわゆる水生昆虫が多く挙げられている（トンボ目、カメムシ目ミズムシ類、コウチュウ目ではゲンゴロウやガムシ類、ネクイハムシ類、トビケラ目の数種など）。さらに衰亡の原因が必ずしも確認できていないが、12種のチョウ類が選定されている。次回には多くの種が上位ランクに移行する可能性をひめている。

情報不足、留意ランクでは、評価をするに十分な資料がないものの、その動向や環境変化次第で上位ランクに変わりうる種やその分布特性（岡山県が分布の限界となっている種など）や環境特性の指標となる種などを選定している。

昆虫類は極めて多様性に富む生物群で県内では約10,000種が記録されている。それに比べ昆虫の分布や生態などを調査する専門家や愛好家が少ない上に、特定の専門分野に偏る傾向がある。従って、分野による情報の濃淡もあり全体としてバランスのとれた結果になっているとは言い難いことをご容赦いただきたい。そのような中でも、委員全体の努力は評価したい。

謝辞

本書作成には、多くの方々のご協力をいただきました。

ご協力いただいたの方々のお名前を掲げて、感謝の意を表します。

青野孝昭	(故)池田綱介	市毛勝義	井上 清	井上泰江	岩城孝志
岩田泰幸	江木寿男	大草伸治	北山 拓	黒田健二	小松 貴
近藤光宏	清水 晃	角南海心	関根一希	高井幹夫	館 卓司
谷田一三	東城幸治	長瀬博彦	中野一成	中村剛之	西本浩之
福田竹美	松本光平	水井颯麻	水元 誠	三宅誠治	安田剛長
矢代 学	山田 勝	渡辺恭平	村尾竜起	藤谷俊仁	内田臣一
野崎隆夫					

神奈川県立生命の星・地球博物館 株式会社山田養蜂場

九州大学大学院比較社会文化学府・生物体系学教室 倉敷昆虫館

倉敷市立自然史博物館 公益財団法人岡山県環境保全事業団 自然環境研究所

(伊藤國彦)

ガガンボカゲロウ

Dipteromimus tipuliformis McLachlan

カゲロウ目 ガガンボカゲロウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

飛翔力が弱く河川源流部の地域変異の多い種であり、近づいても逃げないので容易に採取されやすい。本県の生息地と個体数はまだ少なくはないが、近年減少が著しい。原因としては、源流部開発、農薬散布、凍結防止剤散布などが考えられる。

分布

日本固有種。本州・四国・九州・奄美大島に分布。県内は県中部から北部の源流域に生息する。

形態・生息状況

幼虫の体長は20mmに達し、成虫の後翅は著しく退化しており、殆ど前翅のみで飛行する。幼虫は源流部の淵の岩面や石上に生息する。羽化期は5月下旬から10月に及び年1世代とされている。

主要文献

Tojo & Matsukawa (2003), 石綿ほか (2018)

(吉鷹一郎)



撮影：吉鷹一郎



オビカゲロウ

Bleptus fasciatus Eaton

カゲロウ目 ヒラタカゲロウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

本県源流域に局所的に生息しているが、元々希少な上、近年個体数の減少が著しい。要因としては、源流部開発、農薬散布、凍結防止剤散布などが考えられる。

分布

国内では本州・四国・九州の河川源流部に生息。韓国にも分布。

形態・生息状況

成虫は前翅の中ほどと後翅の後縁部に黒色の帯状斑紋をもつ。幼虫は急流の岩盤上の飛沫帯に生息する。羽化時期は初夏。

主要文献

石綿ほか (2018)

(吉鷹一郎)



撮影：吉鷹一郎



コバネアオイトトンボ*Lestes japonicus* Selys

トンボ目 アオイトトンボ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

再調査をしているが、記録のある場所やその周辺でも見つからず、絶滅した産地が多いと考えられる。また、池沼開発（埋め立て、護岸工事）により生息に適した池沼がどんどん失われている。

分布

岡山県では、30年以上前の古い記録がほとんどで、産地は非常に局所的である。

日本では本州、四国、九州に分布しているが、分布はかなり局所的で産地は激減している。日本と朝鮮半島、中国、ロシアに分布する。

形態・生息状況

体長38mmから44mmの中型のイトトンボで、明るい金緑色をしている。胸部の金緑色部上端が後ろへ張り出さないことで、同属他種と見分けられる。平地から丘陵地の抽水植物が繁茂し、水質のいい池沼に生息している。産卵は、連結して植物組織内に行われるが、比較的柔らかい組織の植物を好むようである。岡山県での記録は6月中旬から9月上旬にかけてある。

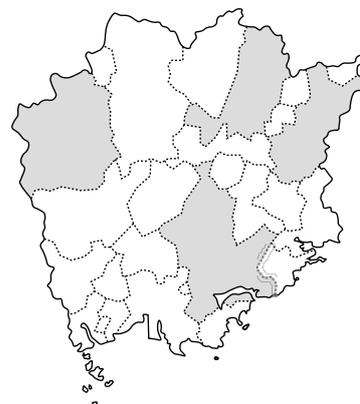
主要文献

赤枝 (1965), 美作虫の会 (1968), 安江 (1974), 渡辺 (1979), 岡山県編 (1985)

(守安 敦)



撮影：北山 拓（茨城県産）

**アオハダトンボ***Calopteryx japonica* Selys

トンボ目 カワトンボ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

岡山県東部・北部では、まだ多産地があるものの、産地は局所的で、生息に適した河川の河川開発（護岸工事、水質汚濁）、用水路の改修により生息数が近年減少している。

分布

岡山県では、県北から県南まで分布しているが、産地はかなり局所的で、水質の良い緩やかな流れにのみ生息している。日本では本州と九州に分布している。海外では、朝鮮半島から中国、ロシアにいたる地域に分布する。

形態・生息状況

体長は55mmから63mmで、ハグロトンボに似た中型のトンボ。雄の翅が、青紫色に輝くこと、雌の翅が褐色で、白い偽縁紋があることで、ハグロトンボと見分けられる。幼虫は細長く、褐色で、ハグロトンボによく似ており、ヨシなどの挺水植物やクロモなどの沈水植物が繁茂する緩やかな清流に生息し、水草につかまって生活している。羽化は、挺水植物の茎などで行われ、岡山県では5月中旬から始まる。成虫は8月頃まで見られる。ハグロトンボとの混生地では、ハグロトンボより早く出現する。未熟個体は、羽化水域近くの挺水植物周辺で生活している。交尾は、雄の求愛セレモニーの後行われる。産卵は、雌が単独で水面下の植物の組織内に行われ、潜水産卵も行う。

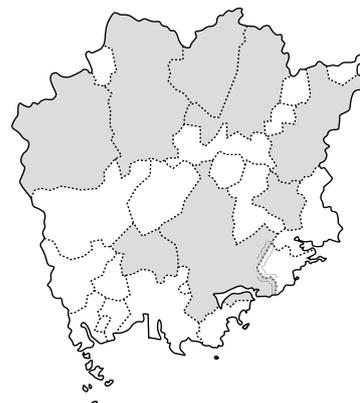
主要文献

美作虫の会 (1968), 守安 (1997d)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



グンバイトンボ

Platynemis foliacea Selys

トンボ目 モノサシトンボ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

岡山県北部・東部では、まだ多産地があるものの、産地は局所的である。河川開発（護岸工事）で生息に適した河川や用水路が少なくなってきたおり生息地が減少している。

分布

岡山県では、東部での記録が特に多いが、産地は極限され、西では、高梁川本流までの記録がある。大中河川から吉備高原の水田の横を流れる緩やかな小川にまで生息している。

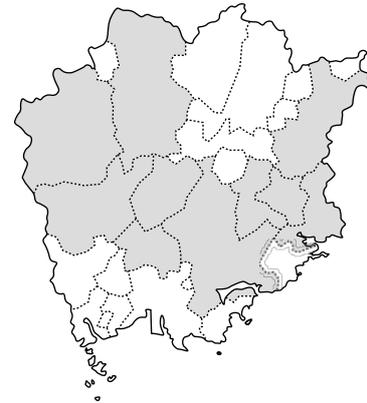
中国北部に生息する種の亜種で、宮城県以西の本州・四国・九州に分布し、島部での記録はない。全国的には生息地の減少が進んでいる。海外では、中国に分布する。



撮影：守安 敦

形態・生息状況

体長37mmから41mmのモノサシトンボに似た腹部の細長いトンボで、雄の中後脚の脛節は白く扁平で軍配の形に似ている。幼虫は、イトトンボ型で、尾鰓が大きく幅広い。羽化は、岸辺の植物の茎などで行われ、岡山県では、羽化が5月上旬から始まる。成虫は7月下旬までの記録がほとんどであるが、真庭市（旧八束村）で8月下旬の記録がある。未熟個体は、河畔のヨシ原や草むらに移り生活する。産卵は、植物の組織内に行われ、連結して行われることが多い。



主要文献

美作虫の会 (1968), 守安 (1997a)

(守安 敦)

ベニイトトンボ

Ceriagrion nipponicum Asahina

トンボ目 イトトンボ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

全国各地で減少していたが、最近になって新たに発見されており、水草の移動・放逐が原因である可能性がある。岡山県でも、2013年の玉野市を皮切りに、毎年新産地が相次いで発見されている。分布の調査とあわせて、今後定着するかどうか見守っていく必要がある。

分布

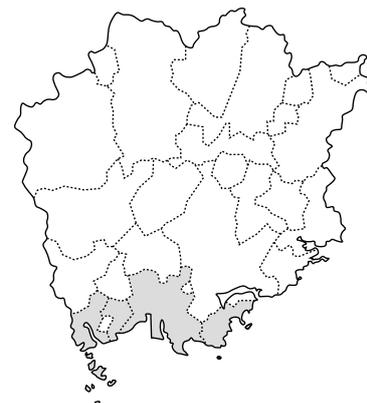
日本では、本州、四国、九州に分布しているが、産地は局地的である。全国各地で減少していたが、最近になって新産地の発見が相次いでいる。岡山県でも、県南に広く分布している可能性もある。朝鮮半島や中国に分布が知られている。



撮影：守安 敦

形態・生息状況

体長が32～45mm、体色は雄が朱赤色、雌は緑がかった淡褐色で、腹部背面に黒色斑はない。リュウキュウベニイトトンボに酷似するが、本種は雄の複眼が赤くなることや尾部下附属器が短いことで区別できる。主に平地～丘陵地の抽水植物や浮葉植物の繁茂する池沼に生息する。5月上旬から羽化が始まり、9月頃まで未熟な個体も見られる。雄は、池の縁に生えている草本類にそって移動しながら雌を探し、他の雄と出会うと激しく争う。雌を見付けるとすぐに交尾し、しばらくして連結したまま水面の植物組織内に産卵する。



主要文献

小原ほか (2014), 守安 (2015)

(守安 敦)

ヒヌマイトトンボ*Mortonagrion hirosei* Asahina

トンボ目 イトトンボ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

県内の生息地は一カ所のみであり、乾燥化も進んでいることから生息環境が現在は失われている。その後、再確認もされていないことから、絶滅に向かっていると考えられる。

分布

倉敷市で、2004年6月3日に1雄、7月18日に1雌が採集されているが、その後再確認されていない。

宮城県以南の太平洋側と日本海側、瀬戸内海周辺部、九州の大分県、福岡県、対馬に産地があるが、非常に局所的である。瀬戸内海周辺では、岡山県の他、大阪府と山口県の周防灘沿岸一帯で生息が確認されている。東北地方の多産地は、東日本大震災の津波でほとんどが消滅している。海外では、台湾、中国に分布する。

形態・生息状況

体長は29mmから34mmで、成虫の体色は雄と雌で異なるが、山口県や対馬では、雄と同色型の雌が見つかっている。生息場所は、汽水域のヨシ原で、5月下旬から9月上旬にかけて成虫が見られる。交尾は午前中に行われ、その後、雌が単独でヨシの組織内に産卵する。夜は集団で寝ていることも知られている。羽化直後は、ヨシ原周辺の草原で見られることもあるが、ほとんどヨシ原から出ない。

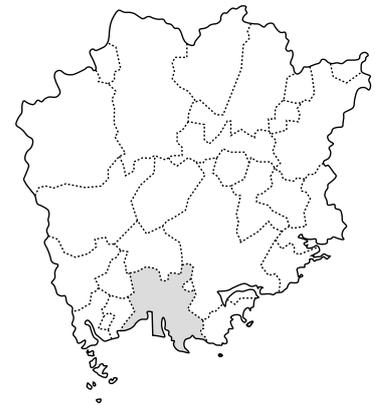
主要文献

千田ほか(2004)

(守安 敦)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：奥島雄一)

**モートンイトトンボ***Mortonagrion selenion* (Ris)

トンボ目 イトトンボ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

放棄水田の湧き水による湿地など、比較的個体数の多い生息地はあるものの、温暖化や林相変化(植生遷移)により乾燥化する可能性がある。また、湿地の開発により生息地が減少しつつある。

分布

岡山県では、県北から県南まで産地は点々とあるが、十数カ所程度であり小規模なものが多い。また、湿地開発や周辺の開発で、すでに絶滅した産地もある。北海道南端部から本州・四国・九州に分布するが、産地は局所的である。海外では、朝鮮半島、中国、ロシアに分布する。

形態・生息状況

体長22mmから32mmで、成熟した雄は、胸部が黄緑色で腹端がオレンジ色になり美しい。未熟な雌は、オレンジ色であるが、成熟すると明るい緑色になる。丘陵地の湿地や水田周囲の溝、放棄水田に生息し、湿性植物におおわれた部分の浅い水たまりに幼虫がみられる。羽化したばかりの未熟な個体は、周辺の草むらで生活する。産卵は単独で、柔らかい植物の組織内に行われる。成虫は、岡山県では、5月中旬から8月上旬の記録がある。

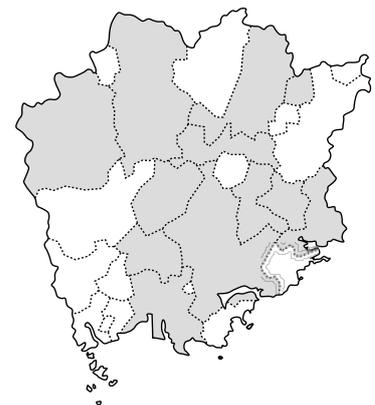
主要文献

美作虫の会(1968)、重井(1976b)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



ムスジイトトンボ

Paracercion melanotum (Selys)

トンボ目 イトトンボ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

もともと個体数が少ない上に、同属他種と見分けにくく、十分調査がされているとは言いがたい。今までの採集の記録も、十数個体のみであり、今後の調査が必要である。

分布

岡山県では、2市に限られ記録があるが、他の市町村でも採集や撮影がされており、詳しい調査が必要である。国内では、宮城県以南の池沼に見られる。近年関東地方では分布が北上している。海外では、朝鮮半島、台湾、中国、ベトナムに分布している。

形態・生息状況

体長30mmから39mmで、雄は成熟すると、斑紋や複眼が青色になる。雌は、褐色から緑色の個体が多いが、雄のような青色の個体も知られている。雌雄が連結したまま産卵するが、雌が単独で産卵することもある。潜水産卵をすることもある。平地の浮葉植物や沈水植物が繁茂する開放的な池沼や高梁川などの大河川に繁茂するエビモなどの沈水植物の上でも採集されている。岡山県では、6月中旬から10月中旬の記録がある。

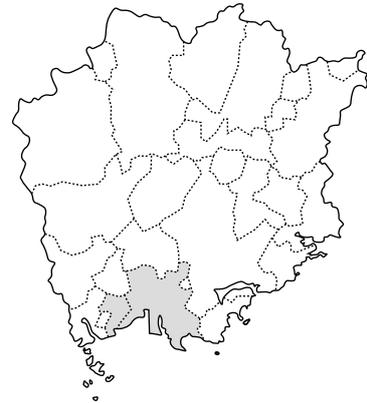
主要文献

守安 (1998a)

(守安 敦)



撮影：水井颯麻



ネアカヨシヤンマ

Aeschnophlebia anisoptera Selys

トンボ目 ヤンマ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

個体数が非常に少なく、池沼開発（埋立、護岸工事）や湿地の乾燥化により本種の生息に適した池や湿地が失われており、個体数が減少しつつあると考えられる。

分布

岡山県では、南部の海岸に近い場所や島部を中心に記録がある。日本では、宮城、新潟から南の本州と四国、九州に分布するが、産地は局所的である。海外では、朝鮮半島、中国に分布する。

形態・生息状況

体長75mmから88mmの大型のトンボで、ヤンマ科ではあるが、腹部がくびれず円筒形なのが特徴である。同属のアオヤンマとは、大きさや体色の違いで区別できる。幼虫は、褐色で細長い紡錘形をしている。平地や丘陵地のヨシなどの背の高い挺水植物が繁茂する池や湿地に生息する。幼虫は植物の根際や底にたまった植物性の堆積物の中にかくれている。羽化は、夜半から早朝にかけて挺水植物の茎で行われる。成虫は黄昏飛翔性があり、昼間は林内の枝にぶら下がっている。産卵は、湿地の湿った土や朽ち木に行われる。岡山県では、7月下旬から9月中旬の記録がある。

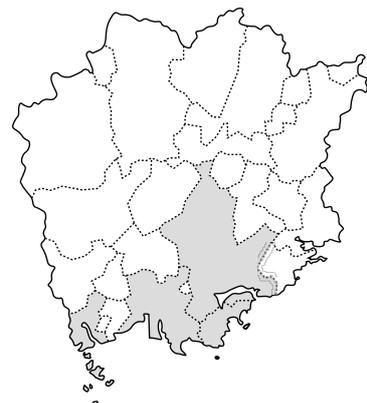
主要文献

安田 (2019)

(守安 敦)



撮影：安田剛長



アオヤンマ*Aeschnophlebia longistigma* Selys

トンボ目 ヤンマ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

分布が県南部の3市町に限られ、もともと生息地が少ないことに加えて、池沼開発（埋立、護岸工事、水質汚濁）などにより、生息できる環境の池が減少している。また、数年前まで多産地がいくつかあったが、環境が悪化しているように見えないにもかかわらず、今ではほとんど本種が見られなくなっている。特に最近では、本種の見撃情報も少なくなっている。

分布

国内では、本州・四国・九州に見られるが産地は限定される。海外では、朝鮮半島、中国、ロシアに分布している。

形態・生息状況

体長66mm～79mmの中型のヤンマ。体色は、鮮やかな緑色で、雄雌で体色の変化が少ない。幼虫は、大型で、ネアカヨシヤンマの幼虫に似るが背棘はない。幼虫は、ヨシやガマ、マコモなどの背の高い植物の繁茂する池沼や湿地に生息する。雄は抽水植物を縫うように飛翔し、雌を見付けると交尾し、周辺の植物に止まる。雌は単独で、ヨシやマコモの茎につかまり植物組織内に産卵する。雄は、朝夕の黄昏時に活発に摂食する。岡山県では、5月上旬から8月下旬にかけての記録がある。

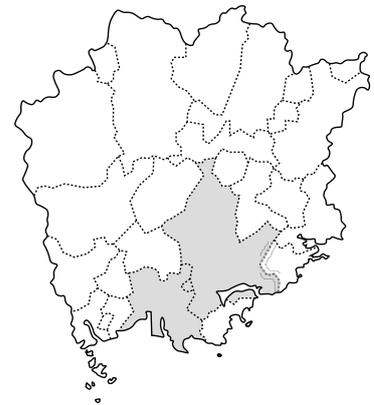
主要文献

赤枝 (1964)

(守安 敦)



撮影：守安 敦

**ミヤマサナエ***Anisogomphus maackii* (Selys)

トンボ目 サナエトンボ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

本種の生息に適した河川中下流域は、河川改修がよく行われており、本種の生息に適した環境が失われ生息地が減少しつつある。詳しい調査が必要である。

分布

岡山県では、大中河川の中下流域で幼虫や羽化殻が見つかるが、成虫の記録はあまり多くない。

国内では、本州・四国・九州に見られるが産地は局所的である。海外では、朝鮮半島、台湾、中国、ロシア、ネパールに分布している。

形態・生息状況

体長50mmから59mmの中型のサナエトンボで、腹部先端が平たく広がる。幼虫は、緩やかな流れの砂泥底に潜って生活している。幼虫は、河川中下流域で採集され羽化も見られる。羽化は、午前中に行われ、河川下流域の河口から10kmあたりで行われることもある。未熟個体は、真夏に県北の1000m程度の山の尾根筋や山頂付近の低い植物の葉上で見られる。8月下旬頃から河川中上流域の堤防などで縄張り活動をしている雄を見かけるようになる。産卵は、雌が単独で打水して行われる。岡山県では、6月下旬から羽化殻が採集され、8月中旬まで成虫が採集されている。

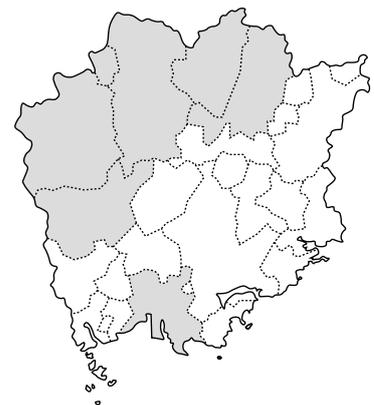
主要文献

赤枝 (1973), 守安 (1997c)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



ナゴヤサナエ

Stylurus nagoyanus (Asahina)

トンボ目 サナエトンボ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

岡山県下の3大河川下流部だけに生息しているが、最近、個体数が減少しており、河川開発により生息環境が破壊されつつある。

分布

岡山県では、3大河川の下流部に分布しているが、個体数は少ない。日本特産種で、北陸から四国、九州に分布するが、産地は著しく局所的である。

形態・生息状況

体長59mmから65mmの大型のサナエトンボで、黒地に黄色の条斑がある。幼虫は平たい紡錘形で、腹部第9節が長いのが特徴である。幼虫は、大河の下流域に生息しているが、潮の干満のある汽水湖にも生息する。羽化は、杭や、護岸、岸辺の石や砂で主に午前中に行われる。岡山県では、7月上旬から8月上旬にかけて羽化し、9月中旬ごろまでの記録がある。また、大河から分岐し、町中に流れ込んだ水路でもよく羽化が見られる。雄は、河川周辺の灌木の葉上や川岸の石、護岸などに止まり縄張りをもつ。時々、近くの水面上をホバリングを交えて低く素早く飛んではもどってくる。異常渇水時には、川岸の浅い泥の部分で幼虫が得られたこともある。

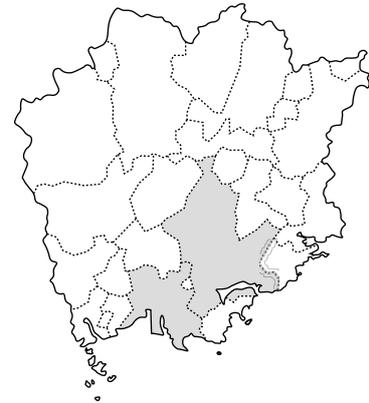
主要文献

赤枝 (1958, 1959), 重井 (1976a), 守安 (1998b)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



ヒロシマサナエ

Davidius moiwanus sawanoi Ashahina et Inoue

トンボ目 サナエトンボ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

岡山県では、唯一の生息地周辺が開発されつつある。また、湿地の植生遷移により乾燥化も進んでいることから、個体数も減少しており急速に絶滅に向かっていると考えられる。

分布

岡山県では、今のところの真庭市内の数カ所のみ生息している。鳥取県、島根県、広島県にも分布しており、産地は、5地域に限られる。日本特産種である。

形態・生息状況

体長36mmから49mmの小型のサナエトンボで、体色は、ヒラサナエと酷似する。モイワサナエ *Davidius moiwanus* (Matsumura & Okumura in Okumura) の中国地方個体群(亜種)で、モイワサナエと同様に、大顎の基部に黄色斑があるが、雄では、尾部附属器の形状が異なっていることで見分けられる。幼虫は、平たく、体色は褐色から黒褐色で、同属の他種と非常によく似ている。寒冷な山間の湿地に生息しており、緩やかな細流にたまった細かい砂の中や植物の根際に潜り込んで生活している。岡山県の生息地は、花崗岩地帯の非常に傾斜の緩やかな谷間にできた明るい湿地で、夏でも水温は約20℃ほどである。羽化は、岡山県では、5月中旬から下旬にかけての午前中に行われ、成虫は7月上旬まで見られる。

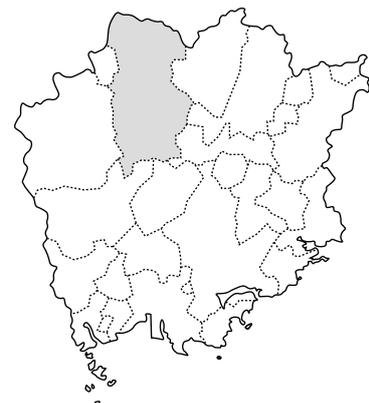
主要文献

大島・莉部 (2001), 守安 (2002, 2003)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



ヒラサナエ

Davidius moiwanus tarui Asahina et Inoue

トンボ目 サナエトンボ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

岡山県の県立森林公園は、比較的安定した生息地であるが、他地域は、湿地の植生遷移により乾燥化が進んでいる。

分布

岡山県では、県立森林公園から恩原高原にかけての地域にのみ生息している。県立森林公園が、本亜種の分布の西限にあたる。石川県、滋賀県、京都府、兵庫県に分布しているが産地は非常に局所的である。日本特産種である。

形態・生息状況

体長36mmから49mmの小型のサナエトンボで、体色は、黒地に黄色の条斑がある。中国地方から北陸に分布するモイワサナエ *Davidius moiwanus* (Matsumura&Okumura in Okumura) の本州中部個体群(亜種)で、モイワサナエとは、大顎の基部に黄色斑がないことや、尾部附属器の形状が異なっていることで見分けられる。幼虫は、平たく、体色は褐色から黒褐色で、同属の他種と非常によく似ている。岡山県では、標高約700m以上の山際にできた明るい湿地に生息している。幼虫は、緩やかな細流の植物の根際や、ほとんど流れのない湿地の泥の中に潜り込んで生活している。羽化は、岡山県では、5月中旬から5月下旬にかけての午前中に行われ、成虫は7月下旬まで見られる。

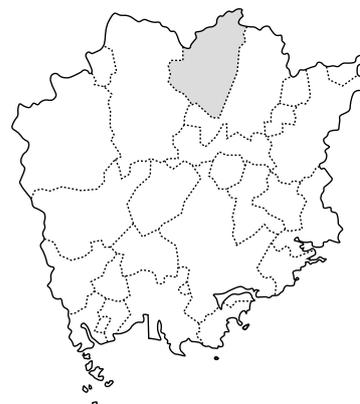
主要文献

井上 (1972)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



オグマサナエ

Trigomphus ogumai Asahina

トンボ目 サナエトンボ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

岡山県では、多産地はまだ残されているものの、見られなくなった生息地もあり、池沼開発(埋立、水質汚染、周辺開発)や薬剤散布により減少していると考えられる。

分布

岡山県では、南部に記録が多い。多産地もあるが、環境がよくても本種が生息していない池もあり、薬剤の散布などの環境汚染が原因の可能性もある。

日本特産種で、静岡・岐阜・福井県より西の本州・四国・九州に分布する。四国は徳島県のみで記録がある。

形態・生息状況

体長47mmから52mmの小型のサナエトンボで、まれに、黒条がフタスジ型の個体も見られる。幼虫は、平地や丘陵地の池や丘陵地周辺の溝、河川敷にできた池などに生息し、フタスジサナエと混生している事も多い。羽化は、水際の植物の上や泥の上で行われ、フタスジサナエより早く羽化が始まる。気温の高い年は、羽化が早く期間が短くなる。未熟個体は、羽化水域周辺の草原や枯れ草、林道の土の上などでよく見られる。成熟した雄は水際の植物の上や土の上でなわばりをつくる。産卵は単独で行われる。岡山県では、早い年で4月上旬から羽化し、6月下旬まで見られる。

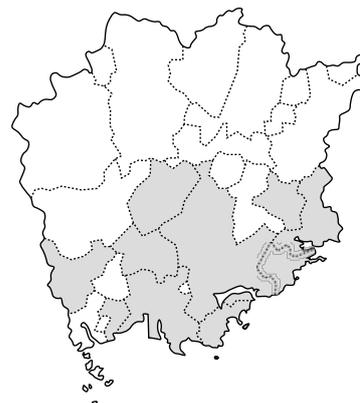
主要文献

安東 (1952)、森 (1996)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



ムカシヤンマ*Tanypteryx pryeri* (Selys)

トンボ目 ムカシヤンマ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

岡山県全域に分布しているものの、特異な環境に幼虫が生息しているため分布は限られ、森林伐採や湿地の開発・乾燥化などにより、個体数が減少しつつある。

分布

日本特産種で、本州及び九州に分布する。岡山県では、北部県境付近から南部の海岸近くまで点々と分布しているが、産地はかなり局所的である。

形態・生息状況

体長63mmから80mmの大型のトンボ。体色は、黒地に黄色い斑紋が反復されている。幼虫は、大型で、やや四角張った体型をしており、全身に荒い毛が生えている。幼虫は、山地の湿地や斜面の水がしたたり落ちるような場所のコケなどの間に穴を掘って生活している。穴には水がたまっていることも多い。羽化は、夜間から早朝にかけて行われる。羽化後の未熟な個体は比較的遠くまで移動する。成虫は止まっていることが多く、林間の道路上や電信柱、木の幹、大きな岩の上、建物の壁などで見られる。産卵は、しめった柔らかいコケや地面に産卵管をさして行う。岡山県では、5月上旬から6月下旬にかけての記録がある。

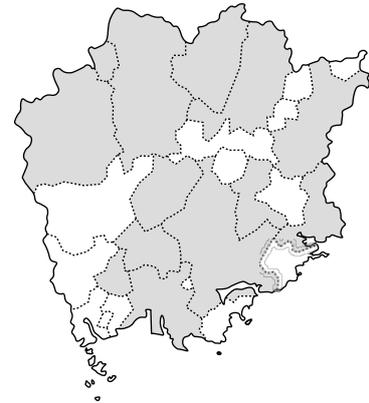
主要文献

水野 (1953)

(守安 敦)



撮影：守安 敦

**ハネビロエゾトンボ***Somatochlora clavata* Oguma

トンボ目 エゾトンボ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

産地が局所的であることに加え、以前記録のある産地のいくつかは、池沼・湿地開発（埋立、乾燥化）や生息地周辺の森林伐採により見られなくなっており、生息地が失われつつあると考えられる。

分布

岡山県では、県南部に限られており、比較的海岸に近い生息地が多い。丘陵地のきれいな細流や湿地の中の細流、細流が流れ込む池に生息しており、島部でも採集されている。国内では、北海道・本州・四国・九州に分布し、海外では、朝鮮半島に分布する。

形態・生息状況

体長58mmから66mmの中型のトンボで、全身が金属光沢のある暗緑色をしている。雄は、尾部先端の付属器の形、雌は、同族他種より長い産卵弁で区別できる。幼虫は、水のきれいな丘陵地の細流や湿地に生息している。未熟個体は、羽化水域を離れた林間や池に伴う湿地の上を飛翔する。成熟した雄は、流れの上で縄張りを持ち、ホバリングを交えた往復飛翔をして雌を待つ。産卵は、雌が単独で、腹部を水面や泥に打ち付けて行われる。岡山県では、6月下旬から10月上旬にかけて成虫の記録がある。

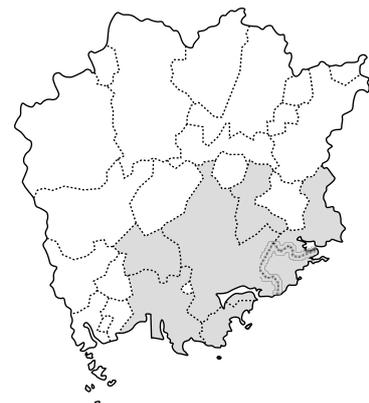
主要文献

重井 (1981), 守安 (1997b)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



キイロヤマトンボ

Macromia daimoji Okumura

トンボ目 エゾトンボ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類

●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

本種は、幼虫の生息環境が特殊であるため、河川開発（護岸工事等）、豪雨による護岸の攪乱により、生息できる環境が失われつつあり、個体数が減少している。

分布

岡山県では、3大河川の中下流域や、中河川に生息しているが、川辺に竹林や雑木林がある部分の細かい砂質底に限って生息しているため、産地は局所的で個体数は少ない。大中河川以外では、倉敷市内の丘陵地の細流が流れ込む池にできた砂質底で終齢幼虫が見つかったことがある。

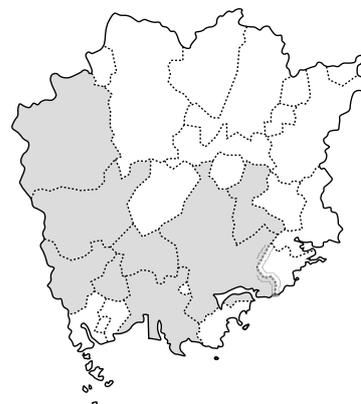
日本では、福島県以南の本州、四国、九州に分布しているが局所的である。海外では、朝鮮半島、台湾、中国、ロシア、東南アジアに分布する。



撮影：守安 敦

形態・生息状況

体長75mmから83mmの大型のトンボで、胸部は、青緑色の金属光沢、全身に黄色条斑がある。同族のコヤマトンボに酷似するが、腹部第3節の黄色斑が上下に分断されることで見分けられる。幼虫は、砂底の河川に生息しており、堰の上流部や淵にたまった非常に細かい砂の中に浅くもぐって生活している。6月上旬から羽化し始め、成虫は7月頃まで見られる。未熟個体は、河川周辺の林間や橋脚の間などに集まり、ゆっくりと飛んで摂食する。縄張り活動は、午前と午後の日差しの弱い時間帯に川面を低く飛び行われる。



主要文献

渡辺 (1979), 守安 (1994, 1996a, 1996b, 1996c)

(守安 敦)

ベッコウトンボ

Libellula angelina Selys

トンボ目 トンボ科

●岡山県：絶滅

●環境省：絶滅危惧ⅠA類(CR)

選定理由

1964年の岡山市北区矢津での2雄の記録を最後に採集されておらず、本種の生息に適した池沼も、池沼開発（埋め立て、護岸工事）により失われていることから本県では絶滅したと思われる。

分布

岡山県では、岡山市北区矢津、備前市香登で記録されているが、絶滅したものと思われる。

日本では宮城・新潟県以南の本州・四国・九州に産地があったが、現在は、静岡県、山口県と福岡県、大分県、鹿児島県の5～6地域のみとなっている。海外では、朝鮮半島と中国北中部に分布する。



撮影：守安 敦（福岡県産）

形態・生息状況

体長39mmから45mmの中型のトンボで、雄は成熟すると体色が黒褐色、雌は茶褐色になる。平地から丘陵地のヨシ、ガマ、マコモなどの背の高い挺水植物が繁茂する、開放水面がまばらに見える池に生息している。岡山県では、5月上旬から下旬の記録がある。

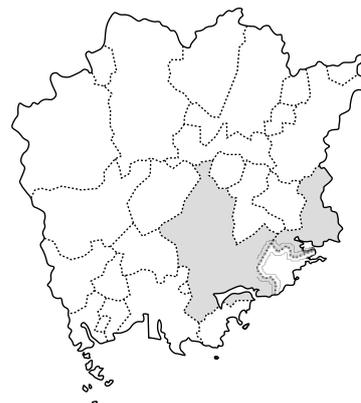
関係法令の指定状況

国内希少野生動植物種

主要文献

安東 (1952), 赤枝 (1964), 松本 (2014)

(守安 敦)



ハッチョウトンボ

Nannopyha pygmaea Rambur

トンボ目 トンボ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

本種は、日当たりのよい湿地にのみ生息しており、このような環境は開発や温暖化による湿地の乾燥化、植生遷移によりどんどん失われているため、年々生息地は減少している。

分布

岡山県では、県北部から南部まで点々と分布しているが、産地は限られ、個体数も多くないところがほとんどである。近年、水田の管理放棄により、一時的に湿地化した場所で見つかることがある。

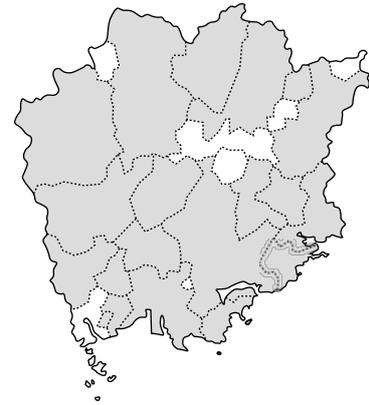
日本では、本州・四国・九州に分布するが、離島には産しない。海外では、朝鮮半島、中国から東南アジア周辺、台湾、フィリピンからオーストラリアに至る広範な地域に分布する。



撮影：守安 敦

形態・生息状況

世界的にも、最も小さいトンボのなかまに属し、日本産不均翅亜目の中では、最も小型で、体長は、約17mm～21mmである。体色は、雄と雌で著しく違い、雄は成熟すると、赤くなるが、雌は、黄色と褐色である。幼虫は、平地から山地の日あたりのよい湿地に生息し、湿性植物におおわれた部分の小さな水たまりやわき水の泥の中にひそんでいる。羽化後も羽化水域をあまり離れない。雄は、細い植物の茎に止まり、縄張りを形成する。産卵は雌が浅い水面を連続打水して行われ、雄が近くで見守ることが多い。岡山県では、5月下旬から8月下旬にかけて見られる。



主要文献

近藤 (1951), 青野ほか (2013)

(守安 敦)

アキアカネ

Sympetrum frequens Selys

トンボ目 トンボ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

近年個体数が全国的に激減しており、岡山県でも個体数が減少する傾向が続いている。原因の一つと考えられているのが、最近使われはじめた稲の農薬である。そのほかの原因も考えられ、今後、個体数の変化について、調査を継続する必要がある。

分布

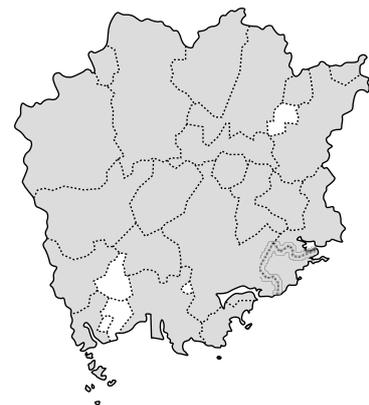
国内では、離島も含めほぼ全国に分布する。海外では、朝鮮半島、中国、ロシアに分布している。

形態・生息状況

体長32mmから46mmで、雄は成熟すると腹部のみ赤くなる。雌は腹部背面が赤くなる個体がいる。同属他種とは、胸部の斑紋等で見分けられる。平地から山地の水田や池沼に生息する。産卵は、雌雄が連結し腹部先端を泥に打ち付けて行われる。未熟な成虫は、夏の間、県北にある1000m級の山の頂上付近で過ごし、秋になり気温が下がってくるにつれ県南に移動してくる。しかし、最近では温暖化により移動が遅れる傾向にある。倉敷市で見られるのは、11月下旬以降が多くなっている。



撮影：水井颯麻



主要文献

美作虫の会 (1968), 黒田・伊藤 (2017)

(守安 敦)

ナニワトンボ

Sympetrum gracile Oguma

トンボ目 トンボ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

県内でも、生息に適する池沼が、池沼開発（埋め立て、護岸工事、その他の池の改変、水質汚濁）により失われているため、生息地が減少している。

分布

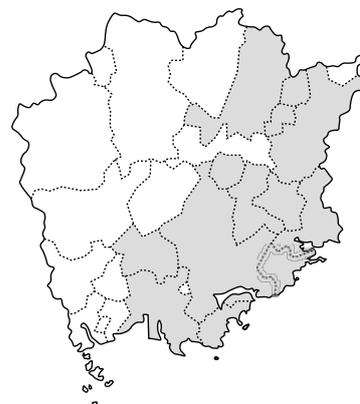
岡山県では、津山周辺と県南部・東部に分布している。多産地もいくつか残されているが、ほとんどの生息地で個体数は少ない。日本特産種で、本州と四国の一部に分布する。近畿地方と、中国・四国の瀬戸内海に面した地域に見られるが、産地は著しく局地的である。



撮影：守安 敦

形態・生息状況

体長は32mmから39mmの小型のアカトンボのなかまで、未熟な個体は、黄色に太い黒条があるが、雄は成熟すると全身が青色になる。雌では、褐色になる程度で大きな変化はない。幼虫は、平地から丘陵地の、近くに森林のある、水際になだらかな土の部分があるような、挺水植物が茂る浅い池に生息する。大河川の河川敷にできた池でも生息が確認されている。未熟個体は、羽化水域を離れて夏を過ごし、秋に再びもどってくる。産卵は、雌雄が連結することもあるが、雌が単独で行うこともある。岡山県では、6月下旬から11月上旬にかけての記録がある。



主要文献

安東（1956）、守安（1996b）

（守安 敦）

ノシメトンボ

Sympetrum infuscatum (Selys)

トンボ目 トンボ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

近年個体数が全国的に激減しており、岡山県でも、もともと個体数はあまり多くなかったが、最近では目撃することさえなくなっている。原因の一つと考えられているのが、最近使われはじめた稲の農薬である。そのほかの原因も考えられ、今後、個体数の変化について、調査を継続する必要がある。

分布

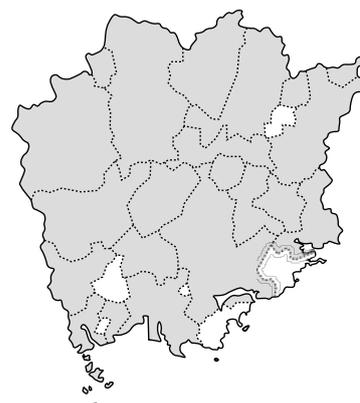
国内では、九州から北海道まで広く分布している。海外では、朝鮮半島、中国、ロシアに分布している。



撮影：守安 敦

形態・生息状況

体長37mmから52mmで、翅の先端が褐色である。雄は成熟すると体全体が赤褐色になる。雌は、背部のみ褐色になる。雄は、池の周囲にある比較的高い枯れ草の先端に止まっていることが多い。同属他種とは、胸部側面の斑紋等で見分けられる。平地から山地の水田や池沼に生息しており、雌雄が連結し繁茂する植物の上に卵をばらまくように産卵する。雌が単独で産卵し雄が警護することも多い。



主要文献

安江（1955）

（守安 敦）

マダラナニワトンボ

Sympetrum maculatum Oguma

トンボ目 トンボ科

●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧 I B類 (EN)

選定理由

本種の記録は、1954年の岡山市北区での一例のみであり、生息していた可能性のある池も池沼開発（埋め立て、護岸工事）により、生息環境は失われている。度重なる調査でも見つかっていないため、絶滅したと思われる。

分布

岡山県での記録は、1954年11月2日に、岡山大学の小村達夫氏により岡山市北区（岡山大学周辺）で採集された1雄のみである。採集地の詳しい地名はわからない。

日本特産種で、本州のみに分布し、産地は局地的で最近激滅している。

形態・生息状況

体長は34mmから40mmで、熟しても赤くならず、黒化する小型のアカトンボのなかまで、体色は、雄雌ともに黒地に黄色斑がある。平地から丘陵地の林に囲まれた水際になだらかな土の部分があるような、挺水植物が繁茂した水質の良い池や湿地に生息する。産卵は、雌雄が連結して行われ、水際の湿った土の上などで、ホバリングしながら腹端で空を打っておこなわれる。

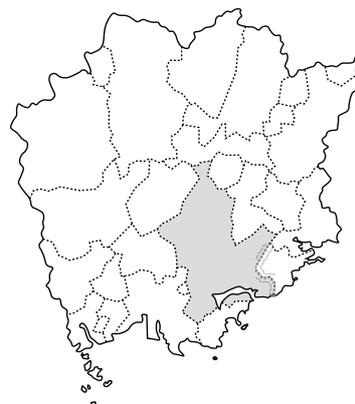
主要文献

林 (1964)

(守安 敦)



撮影：井上 清（兵庫県産）



オオキトンボ

Sympetrum uniforme (Selys)

トンボ目 トンボ科

●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：絶滅危惧 I B類 (EN)

選定理由

2009年ごろ新産地が相次いで発見されたが、最近確認されておらず、生息地が破壊された例もあることから、急速に個体数が減少していると考えられる。

分布

倉敷市の生息地は、1980年代に池の北部が埋め立てられ絶滅したと思われる。津山市の記録は、観察のみで、その後確認されていない。また、1997年に、吉備中央町で写真撮影されたが、場所は未確認のままである。2006年瀬戸内市の錦海塩田跡地で再発見され、その後、2009年10月に総社市で1カ所、岡山市で2カ所見つかっている。瀬戸内市の錦海塩田跡地には、メガソーラーが2018年に設置され、その後の生息状況については未確認である。日本では、本州、四国、九州に分布しているが、産地は局所的である。海外では、朝鮮半島から中国、ロシアに分布する。

形態・生息状況

体長は44mmから52mmで日本産アカトンボのなかまでは最も大きい。体色は橙黄色で、翅全体が淡い淡黄色をしており、雄雌ともあまり差がない。幼虫は平地や丘陵地のヨシなどが繁茂する、よく開けた大きな池沼に生息する。未熟個体は、しばらく池周辺にいますが、その後、羽化水域を離れ、林で生活しているようである。岡山県では、9月下旬から11月中旬の記録がある。

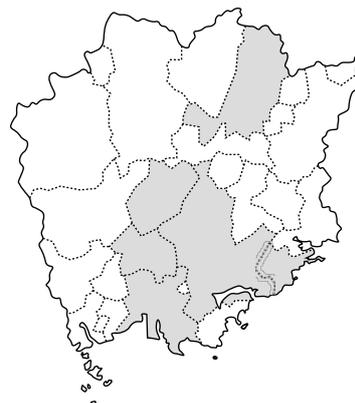
主要文献

林 (1962), 守安ほか (2010), 越山ほか (2017)

(守安 敦)



撮影：守安 敦



ミヤマノギカワゲラ

Yoraperla uenoi Ricker

カワゲラ目 ヒロムネカワゲラ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

本州の高冷地のみで生息する種である。県内ではわずかに二か所で確認され、生息についての情報は極めて乏しい。

分布

本州の高冷地に産し、県内では高標高の小さな沢・飛沫帯で確認されている。

形態・生息状況

小型のカワゲラで、「ヒロムネ」という名のとおり、幼虫・成虫とも横長の幅広い胸部をもつ。幼虫の前～後胸および脚の腿節などには明瞭な剛毛が生じる。頭部は横長で首をすくめているように見える。近畿地方以西は目にする機会が少ない。



幼虫

撮影：吉鷹一郎（滋賀県産）

主要文献

稲田（2001），清水ほか（2018）

（吉鷹一郎）



シノビアミメカワゲラ

Megaperlodes nigera Yokoyama, Isobe et Yamamoto

カワゲラ目 アミメカワゲラ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

河川源流部に局所的にわずかな個体数が生息している。近年生息情報が途切れており、生息が極めて危ぶまれる。生息を脅かす原因として、森林開発、農薬散布、凍結防止剤の散布などが考えられる。

分布

本州東に分布するがほとんどの産地で個体数が少ない。本県生息地は国内最西端で近隣県では確認されていない。

形態・生息状況

体長：雄18～29mm，雌27～30mm。前翅長：雄19～20mm，雌24～26mm。長翅で大型のカワゲラ。特徴は腹部背板と腹板の間に乳白色で紅色をおびた膜質部の存在である。3～4月に羽化する。幼虫は頭部がアンバランスに大きく、黒褐色と黄褐色の鮮やかなコントラストを示す。



成虫



幼虫

所蔵：吉鷹一郎

主要文献

稲田ほか（1998），稲田（2001），吉鷹（2004），清水ほか（2018）

（吉鷹一郎）



トゲナナフシ

Neohirasea japonica (de Haan)

ナナフシ目 ナナフシムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

大型の昆虫にもかかわらず今までの記録が少なく、産地が極限されているため存続基盤が脆弱である。

分布

県内では1907年頃に記録されていたがその後長いこと記録がなく1997年・1998年に県南及び県北で確認された。

県外では本州（関東地方以西）、四国、九州、八丈島、淡路島、五島列島福江島、奄美大島に分布する。

形態・生息状況

体長57～75mm、体色は淡黄褐色～黒褐色。

全身に大小のトゲや小瘤粒がある。温潤な林床や茂みを好むが秋以降は日当たりのいい山道などに出ることが多い。主に地表で活動しサクラ類、アザミ類、バラ類、シダ類などを食べる事が知られている。野外では雌だけが確認されていて単為生殖。

雄は飼育下の一例だけが報告されている。

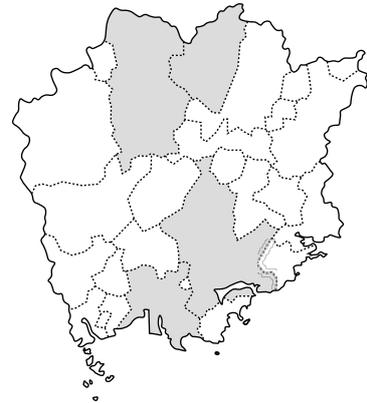
主要文献

小川（2009）

（山地 治）



所蔵：倉敷市立自然史博物館
（撮影：山地 治）



クツワムシ

Mecopoda niponensis (de Haan)

バッタ目 クツワムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

かつては、県内に広く分布していたが、道路工事（林道工事）や土地造成などにより、近年の分布域は減少傾向にある。

分布

県南では1982年以降、新たに採集されていない。県中部、北部では生息が確認されているが生息地は限定される。

国内では、本州（関東以西）、四国、九州、隠岐、対馬に分布

形態・生息状況

体長（翅端まで）雌雄ともに50～53mm。緑色型と褐色型が知られる。近似種のタイワンクツワムシとは雄の前翅の幅が広く短いことや鳴き方が異なることで区別できる。成虫は8～10月に出現。林縁や河原などの背丈の高い草むらに生息し、雄は、暗くなってから「ガチャガチャ…」と大きな声で鳴く。卵越冬で年1化。

主要文献

倉敷昆虫同好会（1988）、日本直翅類学会（2006）

（高橋 元）



撮影：近藤光宏



カワラスズ*Dianemobius furumagiensis* (Ohmachi et Furukawa)

バッタ目 ヒバリモドキ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

河川改修や川相変化に伴う生息地の減少が危ぶまれる。

分布

県内では1978年頃に確認されているが、その後は長い間記録されないまま今日に至っていた。しかし2000年には県南で記録されたが、既存の生息地は少ないと思われる。国内では、本州、四国、九州に分布。

形態・生息状況

体長は雄で8.4mm前後、雌で7.5mm前後（産卵器を含まない）。マダラスズに酷似するが、前翅基部が白く、小顎髯の先端が白いことで区別できる。成虫は8～11月に出現。川原の砂礫地に生息するが、線路の敷石の間やダム堰堤のコンクリートブロックから発見された例もある。雄は「チリチリ…」と鳴く。

主要文献

岡山県（1978）、財団法人リバーフロント整備センター編（2000）
（高橋 元）



所蔵：倉敷市立自然史博物館
（撮影：山地 治）

**セグロイナゴ***Shirakiacris shirakii* (Bolivar)

バッタ目 バッタ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

土地造成や道路工事等による生息環境の消滅、変化に伴い絶滅が危惧される。

分布

県内では主として南部から記録されているが、分布は局所的であり、近年特に減少傾向にある。国内では、本州、四国、九州、対馬、佐渡島、壱岐、対馬、南西諸島に分布。

形態・生息状況

体長（翅端まで）雄で35mm前後、雌で26～40mm前後。幼虫、成虫共に複眼に6条の縦縞模様がある。前胸背面が濃い褐色をしている。成虫は8～11月に出現。堤防斜面や山の斜面など地表が深く覆われた草地に見られる。低湿地に比較的多いが、局所的である。イネ科植物を食草としている。卵越冬で年1化。

主要文献

岡山県（1978）、日本直翅類学会（2006）

（高橋 元）



撮影：青野孝昭



ヤマトマダラバッタ*Epacromius japonicus* (Shiraki)

バッタ目 バッタ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

海岸開発による、自然海岸（砂浜）の消滅、変化により絶滅寸前。

分布

県内における本土側の生息地は、砂浜の改修工事などによって絶滅。現在では、島嶼部が唯一の生息地。国内では、北海道、本州、四国、九州に分布。

形態・生息状況

体長（翅端まで）雄で30mm前後、雌で30～35mm。体色は白い地色に暗褐色の点々模様があり、周囲の砂浜に溶け込むような保護色となっている。成虫は8～10月に出現。自然度の高い砂浜に生息する。雑食性で、ハマゴウ、ハマヒルガオ、ハマボウフウなどの海浜植物やその種子の他、小型昆虫の死骸や糞を摂食することが知られている。卵越冬で年1化。

主要文献

近藤（1984b）、青野（1988）、近藤（1997）、重井ほか（1998a）、近藤・渡辺（2001）、日本直翅類学会（2006）

（高橋 元）



撮影：青野孝昭

**カワラバッタ***Eusphingonotus japonicus* (Saussure)

バッタ目 バッタ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内唯一の生息地は、本種の生息に適したレキ質の河原から、植生遷移の進んだ河原に急速に改変しつつあり、生息地は一層狭められている。

分布

2000年に県中部から、2003年に県南部から、それぞれ河川敷から記録されているが、分布は極めて局所的である。日本固有種であり、北海道、本州、四国、九州に分布。

形態・生息状況

体長（翅端まで）雄で25～30mm、雌で40～43mm。体色は、河原の小石と紛らわしい青灰色をしている。後翅中央部に褐色の半円帯があり、その内側は鮮やかな青色をしている。成虫は7～9月に出現。食草としてメヒシバ、ヒメムカシヨモギ、セイヨウカラシナを利用し、特に幼虫期にはノミノツヅリやナガミノヒナゲシの種子をよく摂食することが分かっている。卵越冬で年1化。

主要文献

日本直翅類学会（2006）、近藤（2008）、池田ほか（2010）

（高橋 元）



撮影：池田綱介



ガロアムシ科の一種

Galloisiana spp.

ガロアムシ目 ガロアムシ科

●岡山県：留意 ●環境省：該当なし

選定理由

谷筋のガレ場や洞窟、ドリーネなど特殊な環境に生息する。県内で得られた標本の数が少なく、県内における分布記録は一部の地域に集中している。現時点では生息環境は安定していると考えられるが、今後大規模な開発や乾燥化が進んだ場合には減少する恐れがある。

分布

県内では主に北部の中国山地及び中部の吉備高原で記録がある。ガロアムシ目昆虫は国内から6種が既知種として知られ、北海道から九州まで広く分布している。分類学的研究が遅れており、今後も各地で未記載種が見つかる可能性が十分にある。

形態・生息状況

幼虫は白色～乳白色である一方、成虫は褐色。幼虫と比べ、成虫は個体数が少ない。雌成虫は腹部末端に産卵管を持つことから、成虫における雌雄の識別は容易。県内の個体群は有眼であり、香川県女木島に分布する既知種チュウジョウムシ *Galloisiana chujoi* Gurney (無眼) とは明らかに別種。未記載種の可能性が考えられる。

主要文献

日本直翅類学会編 (2016)

(中濱直之)



撮影：末長晴輝



ヒナカマキリ

Amantis nawai (Shiraki)

カマキリ目 カマキリ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

県内での記録は僅かで詳細が不明ではあるが、生息地が局限されていて、環境の変化で存続が危ぶまれる。

分布

県内では南部の2か所で確認されている。
県外では本州(新潟以西)、四国、九州、対馬、南西諸島に分布する。
国外では台湾、韓国に分布。

形態・生息状況

体長雄12～14mm、雌13～16mmの日本産の中では最小のカマキリで、体色は褐色型だけが知られている。主に常緑広葉樹林に住むがメダケ類の林や沿岸の松林などにも見られる。

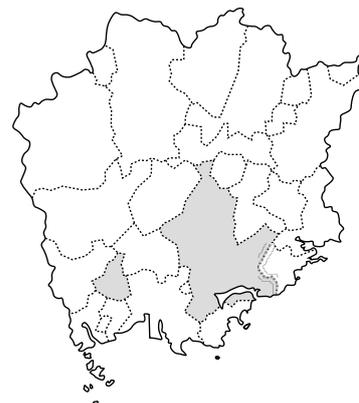
主要文献

伊藤・安東 (1986)

(山地 治)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：山地 治)



ウスバカマキリ

Mantis religiosa (Linnaeus)

カマキリ目 カマキリ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

県内での記録は僅かで詳細が不明ではあるが、草原や河川敷などの開けた環境に生息する種であり、そのような場所は開発によって失われたところも多く、本種の生息地も狭められていると考えられる。

分布

県内では岡山市と総社市で確認されている。
 県外では北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。
 国外では東南アジア、旧北区に分布。

形態・生息状況

体長雄50～66mm、雌60～66mm。緑色型は乳白色を帯びた緑色で、前翅前縁に沿って赤褐色、褐色型は乳白褐色～淡褐色で前翅前縁に沿って茶褐色。

草原や河川敷などに生息するが干拓地、造成跡地などの人工的な環境にも見られる。

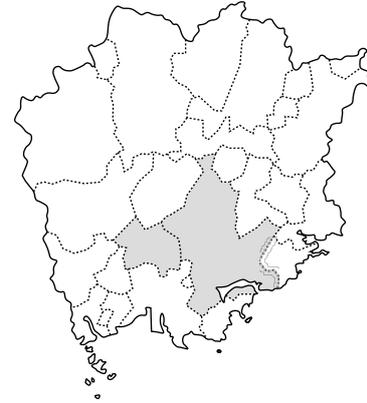
主要文献

伊藤・安東(1986)

(山地 治)



所蔵：倉敷昆虫館
 (撮影：山地 治)



コエゾゼミ

Auritibicen bihamatus (Motschulsky)

カメムシ目 セミ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内の産地は分布西限に近く、その生息地は中国山地の脊梁部に局限される。同属のエゾゼミ類の中で最も高標高域に分布する北方系の種であり、地球温暖化の進行による影響が懸念される。

分布

県内では、県北部の中国山地脊梁部に分布する。県外では、北海道、広島県以東の本州、四国に分布する。特に本州では、東中国山地以東に分布するコエゾゼミ、西中国山地以西に分布するキュウシュウエゾゼミと2種の分布境界となっている。

形態・生息状況

全長50～56mmの中型のセミ類。中胸背は黒地に黄色のW紋を有し、前胸背を取り囲む黄白色の帯は左右2箇所切断される。これらの特徴が酷似するキュウシュウエゾゼミとは、雄腹弁が細長く左右がはっきりと分かれることなどで区別される。

概ね、標高700mを超える高標高域の広葉樹林帯に生息し、7月上旬～8月頃に成虫が出現する。なお、エゾゼミ類の発生数は年変動が大きく、いわゆる「当たり年／はずれ年」が生じるため、単年のみでの増加・減少で絶滅リスクを判断するのは早計である。

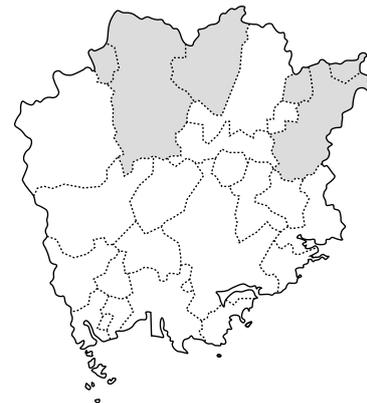
主要文献

岡山県(1978)、林・税所(2011)

(野崎達也)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
 (撮影：山地 治)



ヒメハルゼミ*Euterpnosia chibensis* Matsumura

カメムシ目 セミ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

シイ・カシ類の極相林に生息し、その多くは社叢林などの特殊環境であるため産地は局限される。

分布

県内では、1985年に県中部で初確認され、シイ・カシ類からなる常緑広葉樹林が残された社叢林を中心に分布している。

県外では新潟県・茨城県以西の本州、四国、九州、奄美諸島、大東島に分布する。大東島のは別亜種ダイトウヒメハルゼミとされる。日本固有種。

形態・生息状況

全長33～38mmの小型で細長いセミ類。ハルゼミ類の名をもつが、成虫は初夏（6月下旬～7月頃）に出現する。

シイ・カシ類のよく茂った常緑広葉樹林への偏在傾向が強く、生息地には相当数がみられるが、少し離れると全くみられなくなる。

昼過ぎから夕方まで間欠的に鳴くが、ピークは午後4時以降で、特に日没前に大合唱する。灯火にも飛来する。

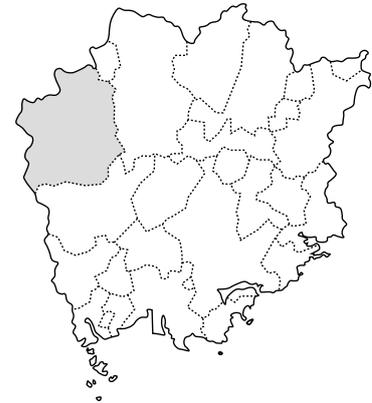
主要文献

安田（2008）、児島（2015）

（野崎達也）



所蔵：倉敷昆虫館
（撮影：山地 治）

**タカイホソアワフキ***Neophilaenus sachalinensis* (Matsumura)

カメムシ目 アワフキムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

元来、東日本の標高1,000m以上の山地帯上部～亜高山帯に分布する種であるが、本県においては標高100m足らずの沿岸部に多産地があり、極めて特異な分布を示す。

分布

県内では、瀬戸内市の沿岸部にある林縁草地1カ所の産地が知られるのみである。

県外では、北海道、本州北部の高標高域に分布しており、西日本の低山帯における産地は本県以外には知られていない。国外では、韓国、極東ロシア、シベリア、モンゴルに分布する。

形態・生息状況

体長6～8mmの小型のアワフキムシ類。イネ科草本に寄生することが知られているが、その産地は非常に局所的である。本県の産地でも、林縁草地のスウィーピングにより多数が得られている。

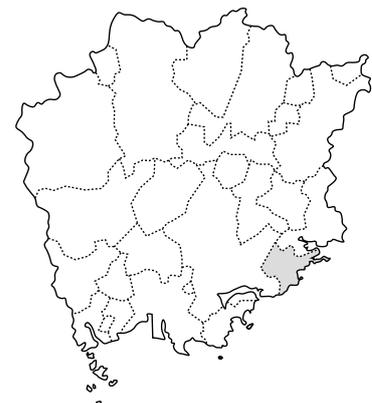
主要文献

野崎・野崎（2006）

（野崎達也）



所蔵：野崎達也



カワムラヨコバイ

Mimotettix kawamurae Matsumura

カメムシ目 ヨコバイ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

全国的に記録の少ない種であり、産地は局限される。県内でも1産地が知られるのみである。

分布

県内では、瀬戸内市の沿岸部において1カ所の産地が知られるのみである。

県外では、本州、四国、九州に分布する。国外では、韓国、極東ロシア、台湾に分布する。

形態・生息状況

体長4.5～5.8mm。体は赤褐色～黒褐色で、前翅に小白斑を散りばめる。樹林性のヨコバイ類であるが、寄主植物は明らかになっていない。

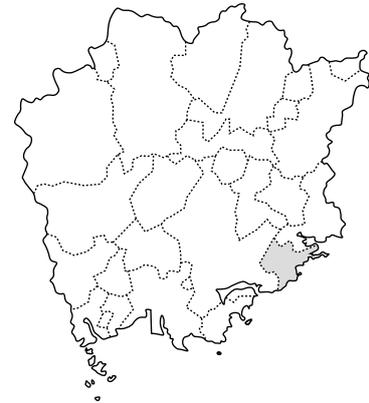
主要文献

野崎・野崎 (2006)

(野崎達也)



所蔵：野崎達也



ヒメミズカマキリ

Ranatra unicolor Scott

カメムシ目 タイコウチ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

主に県中南部の池沼に生息するが、抽水植物が豊富な水域に依存するため、その生息環境は脆弱である。

分布

県内では、県中南部を中心に抽水植物が豊富な池沼に分布する。

県外では北海道、本州、四国、九州から琉球列島まで広く分布する。国外では、朝鮮半島、ロシア極東部、中国に分布する。

形態・生息状況

体長24～32mmの小型のミズカマキリ類。よく似たミズカマキリとは、体サイズが小さいこと、呼吸管が短く前翅長より短いことなどで区別できる。

抽水植物が豊富で、比較的水深のある池沼に生息する。主にアメンボ類やマツモムシ等の水生昆虫を捕食する。

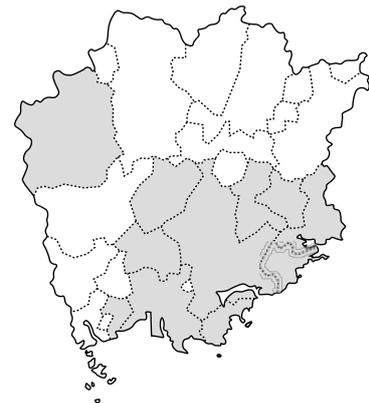
主要文献

山地 (1989), 川合・谷田編 (2005), 野崎・野崎 (2005)

(野崎達也)



所蔵：野崎達也



タガメ

Kirkaldyia deyrolli (Vuillefroy)

カメムシ目 コオイムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

灯火に飛来した個体により分布が確認されることが多く、県内でもかつては平野部にも広く分布しており、県中部の道路沿いの水銀灯や球場の照明に飛来する姿がよく見られたが、現在は局所的で少ない。水質汚濁、農薬散布、池沼開発、用水路改修、水田の放棄や転作、その他（走光性が極めて強く、水銀灯が減少の一因と考えられる）によって減少したものと思われる。

分布

県内に広く分布していたが、最近では北中部の池から記録されている。

県外では、北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布。
国外では台湾、朝鮮半島、中国、アッサムに分布。



所蔵：山地 治

形態・生息状況

大型の水生半翅類で体長48～65mm。雄より雌の方が大きい。

翅が発達し、特に後翅は乳白色で大きい。生息地は静水域で水量が安定している広くて深い、マコモなどの水草が豊富にある水域である。捕食性で、魚・カエルなどを捕らえ、その体液を吸う。成虫態で越冬し、6月頃から水面上に突き出た杭や植物の茎等に産卵する。雄は孵化するまでの間、卵の世話をを行い乾燥しないよう頻繁に給水する。

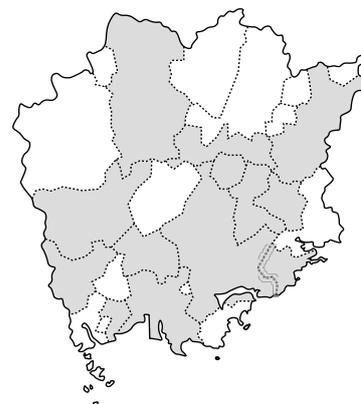
関係法令の指定状況

種の保存法に基づく特定第二種国内希少野生動植物種

主要文献

西崎（1986）、山地（1989）、野崎・野崎（2005）

（末宗安之）



ミゾナシミズムシ

Cymatia apparens (Distant)

カメムシ目 ミズムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

全国的に記録の少ない種であり、産地は局限される。池沼に生息するが、もともと生息密度が低い種であり、近年、個体数がさらに減少する傾向がある。

分布

県内では、県中南部の池沼で散発的に記録がある。

県外では本州、四国、九州に分布する。国外では、韓国、中国、インドなどに分布する。

形態・生息状況

体長5.0～5.9mmの小型のミズムシ類。一見するとコミズムシ類に似ているが、下唇の横条を欠くほか、前脚跗節が細長い指状で先端に爪をもつことなどで容易に区別される。安定した止水域に生息するが、その密度は一般に低い。生態については詳しく分かっていないが、捕食肉食性が強いとされる。

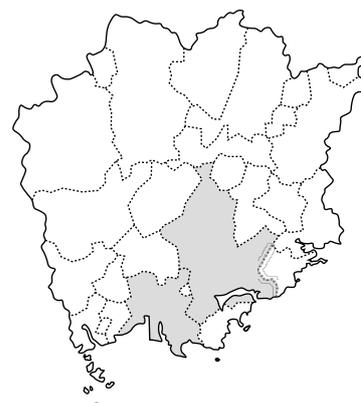
主要文献

川合・谷田編（2005）、野崎・野崎（2005）

（野崎達也）



所蔵：野崎達也



ホッケミズムシ*Hesperocorixa distanti hokkensis* (Matsumura)

カメムシ目 ミズムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県中南地域の池沼に生息するが、産地は限られ、生息数は少ない。

分布

県内では、県中南部の池沼で散発的に記録がある。
 県外では山形県以南の本州、四国、九州に分布する。

形態・生息状況

体長9.5～11mmの大型のミズムシ類で、東日本に分布するミズムシ *Hesperocorixa distanti* の亜種とされる。同属の他種とは、腹面がより白っぽく、胸部剣状突起が二等辺三角形となることで区別される。水生植物の多い池沼に生息するが、使用されていない期間のプール等で見つかることもある。3月頃、特定の溜池に集合して繁殖し、水底の落ち葉や小枝に産卵する。新成虫は6月頃に現れて、繁殖水域に留まるほか、一部は分散する。

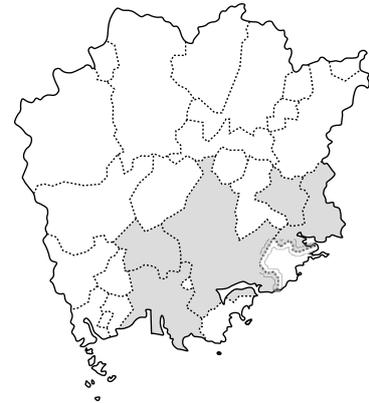
主要文献

重井ほか (1983), 山地 (1989), 湯浅 (1996), 川合・谷田編 (2005), 野崎・野崎 (2005)

(野崎達也)



所蔵：野崎達也

**オオミズムシ***Hesperocorixa kolthoffi* (Lundblad)

カメムシ目 ミズムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内全域の池沼に生息するが、産地は限られ、生息数は少ない。

分布

県内では、県北から県南地域まで広範囲の池沼で記録があり、同属の大型ミズムシ類の中では最も多くみられる。

県外では近畿地方以西の本州、四国、九州に分布する。国外では韓国、中国、ロシア極東に分布する。

形態・生息状況

体長9.8～11.9mm。日本最大のミズムシ類で、同属の他種より体幅が広く丸みがある。また、腹面は濁黄色で、胸部剣状突起がホッケミズムシより長く舌状となることで区別される。水生植物の多い池沼に生息するが、使用されていない期間のプール等で見つかることもある。3月頃、特定の溜池に集合して繁殖し、水底の落ち葉や小枝に産卵する。新成虫は6月頃に現れて、繁殖水域に留まるほか、一部は分散する。

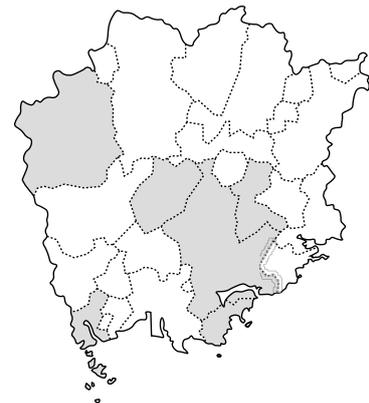
主要文献

山地 (1989), 近藤 (1998), 川合・谷田編 (2005), 野崎・野崎 (2005)

(野崎達也)



所蔵：野崎達也



ナガミズムシ*Hesperocorixa mandshurica* (Jaczewski)

カメムシ目 ミズムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県中南地域の池沼に生息するが、産地は限られ、生息数は少ない。

分布

県内では、県中南部の池沼で記録があるが、同属の大型ミズムシ類の中では最も少ない。

県外では近畿地方以西の本州、四国、九州に分布する。国外では北朝鮮、中国、ロシア極東に分布する。

形態・生息状況

体長9.0～10.4mm。日本最大のミズムシ類で、同属の他種より体幅が細く、華奢な印象を受ける。また、腹面は濃黄色で、胸部剣状突起がホッケミズムシより短く正三角形形状となることで区別される。水生植物の多い池沼に生息するが、使用されていない期間のプール等で見つかることもある。3月頃、特定の溜池に集合して繁殖し、水底の落ち葉や小枝に産卵する。新成虫は6月頃に現れて、繁殖水域に留まるほか、一部は分散する。

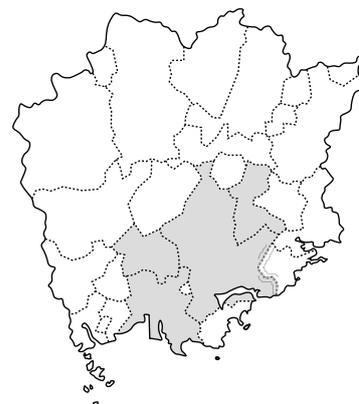
主要文献

川合・谷田編 (2005), 野崎・野崎 (2005)

(野崎達也)



所蔵：野崎達也

**ヒメコミズムシ***Sigara matsumurai* Jaczewski

カメムシ目 ミズムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

主に県中北部の池沼や水路に生息するが、流れの緩やかな浅い水域に依存するため環境改変の影響を受けやすく、生息環境は脆弱である。

分布

県内では、県中北部の池沼や水路に分布する。

県外では本州、四国、九州に分布するが、産地はやや局所的である。

形態・生息状況

体長3.5～4.3mmの小型のミズムシ類。同属の他種とは、体のサイズが小さいことでもろうじて区別できるが、確実な同定には、雄前脚跗節のペグ列の形状や頭部中央の凹み、あるいは交尾器の検鏡が必要となる。

他のミズムシ類に比べて浅い水域を選好し、ため池流入部の浅場や湿地、水田脇の水路などに生息する。植食性（珪藻類）と考えられている。

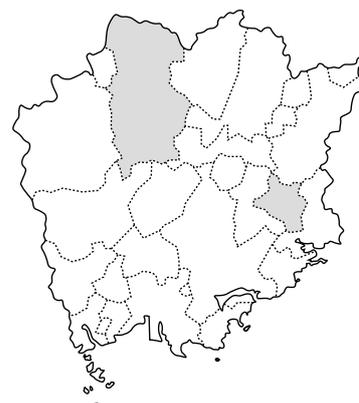
主要文献

川合・谷田編 (2005)

(野崎達也)



所蔵：野崎達也



ミヤケミズムシ*Xenocorixa vittipennis* (Horváth)

カメムシ目 ミズムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県中南部の池沼に生息するが、局所に集中分布する傾向が強いため環境変化の影響を受けやすく、生息環境は脆弱である。

分布

県内では、県中南部の池沼に分布する。

県外では本州、四国、九州に分布する。国外では、台湾、中国に分布する。

形態・生息状況

体長7.2～9.1mmの中型のミズムシ類。県内には同サイズの類似種は分布しないため、他種との区別は容易。

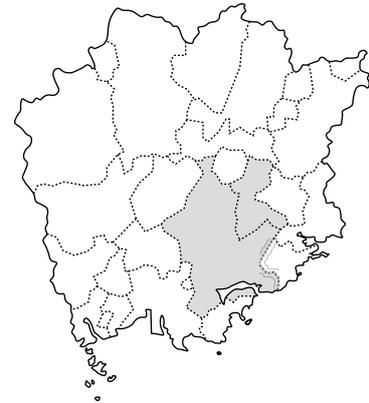
水生植物の豊富な池沼に生息し、高密度で群生するため普通種のような印象を与えるが、産地は局所的である。植食性（珪藻類）と考えられている。

主要文献

山地 (1989), 川合・谷田編 (2005), 野崎・野崎 (2005)
(野崎達也)



所蔵：野崎達也

**オヨギカタビロアメンボ***Xiphovelia japonica* Esaki et Miyamoto

カメムシ目 カタビロアメンボ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

全国的に記録の少ない種であり、産地は局限される。池沼や細流の流入部付近に見られるが、もともと既産地が少ない上に、水辺環境の悪化に伴って減少傾向が著しい。

分布

県内での分布は長く知られていなかったが、近年、新見市から発見・報告された。

県外では東海地方以西の本州、四国（徳島県）、九州（福岡県）から知られているが、産地は局所的である。

形態・生息状況

体長2mm前後のカタビロアメンボ類で、雄は小判形、雌は菱形。体色は光沢のない暗色で、体表面に黒色細毛を密生し、銀灰白色毛による紋が中胸背・腹部背板及び結合板にみられる。また、中脚跗節が長く脛節とほぼ同長であることで、県内に分布する酷似種と区別できる。ふつう無翅型であるが、ごく稀に長翅型が現れる。

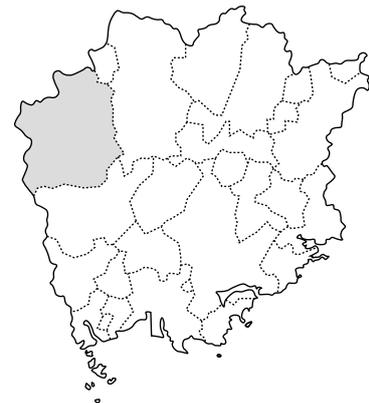
池沼や細流の流入部付近など、緩やかな流れのある環境に依存し、水際近くに群生して水面上を素早く動き回る。上述のとおり、無翅型が大半であるため、水系を超えるような分散能力は低い。

主要文献

川合・谷田編 (2005)
(野崎達也)



所蔵：野崎達也



エサキアメンボ*Limnporus esakii* (Miyamoto)

カメムシ目 アメンボ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

全国的にも減少傾向が顕著な種である。ヨシ等の抽水植物が豊富な池沼に依存するため、その生息環境は脆弱である。

分布

県内では、県南部の池沼や河畔のヨシ原で数例の記録があるが局所的。

県外では北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、中国に分布する。

形態・生息状況

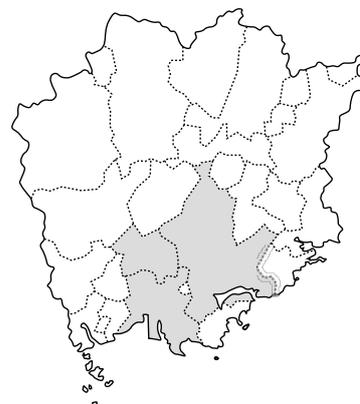
体長7.9～10.5mmの小型で細長いアメンボ類。体は暗赤褐色～褐色で、体側の銀白色の毛による縦帯がよく目立つ。ヨシ等の抽水植物群落内のやや暗い水面で生活し、早春や晩秋以外は開放水面では見られない。水面に落ちた昆虫類を捕食する。

主要文献

山地 (1989), 川合・谷田編 (2005), 野崎・野崎 (2005)
(野崎達也)



所蔵：野崎達也

**ゴミアシナガサシガメ***Myiophanes tipulina* Reuter

カメムシ目 サシガメ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

里山依存種で、かつては珍しくなかったようであるが、生息環境（古い木造家屋等）の減少と相まって、近年では全国的にほとんど見られなくなった。県内でも3例が知られるのみである。

分布

県内では、吉備高原地域及びその周辺において1978年、2005年、2014年の3例が確認されている。

県外では本州、四国、九州に分布するが、いずれの地域においても最近ほとんど見られなくなっている。国外では、朝鮮半島、中国、オーストラリアに分布する。

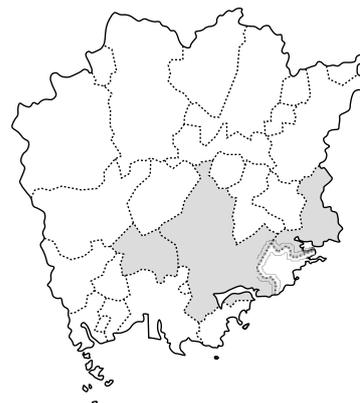
形態・生息状況

体長16～17mmのサシガメ類で、一見するとガガンボのような細長く華奢な外観をもつ。体は淡褐色で、腹部は濃淡の斑紋が連続するほか、前脚腿節には3つの暗色環状紋をもつ。また、全身に長毛が密生し、これに細かなゴミを纏う。前脚は捕獲脚となり、獲物を捕獲して体液を吸汁する。

人間生活と密接に関わりあった生態を有する種で、国内における記録の大半は古い木造家屋の床下から見つかっている。稀に灯火にも飛来する。

主要文献

岡本 (2007), 石川ほか (2012)
(野崎達也)

所蔵：倉敷昆虫館
(撮影：山地 治)

フサヒゲサシガメ

Ptilocerus immitis Uhler

カメムシ目 サシガメ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

県内で確認された生息地は2カ所に限られ、近年の採集記録が全くない。全国的にも産地が少ないうえに近年の採集例を聞かない状況で個体数の減少が心配されている。

分布

県内では県中南部の2カ所のみで知られている。国内では本州・四国・九州で記録があるが、その分布は極めて不連続で産地は限られている。また、いずれの地域でも近年の採集記録を聞かないよう現状での分布状況は明確でない。

形態・生息状況

体長6～7mmのやや小型のサシガメで、淡褐色に黒色斑紋を備え脚や触角が極めて長い剛毛で覆われた特徴的な種である。マツの幹に群生してアリを誘引してそれを捕食すると言われている。

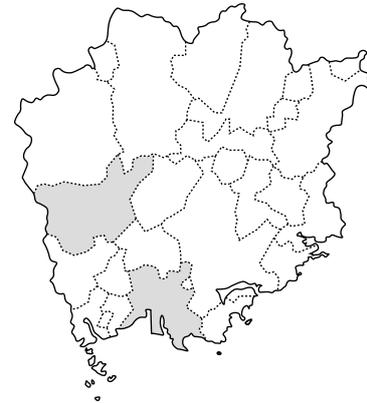
主要文献

楠田(1964), 渡辺(2001)

(渡辺昭彦)



所蔵：丸山宗利
(撮影：渡辺昭彦)



ハリサシガメ

Acanthaspis cincticrus Stål

カメムシ目 サシガメ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

全国的に記録の少ない種であり、産地は局限される。県内では2例の記録があるのみで、継続的に安定した産地は知られていない。

分布

県内では、県中南部から2例の記録があるのみである。

県外では、本州、四国、九州に分布する。国外では、朝鮮半島、中国、ミャンマー、インドに分布する。

形態・生息状況

体長14.5～16mmのサシガメ類。体は一様に黒く、直立長毛と平伏短毛に覆われる。前胸背側角は棘状に突出し、広葉に4つの黄褐色紋が横一列に並ぶ。革質部には、逆ハの字状の乳白色の縦紋があり、よく目立つ。

珍しい種で、草原などの荒地の地表に生息する。幼虫はアリの死骸やゴミを背負ってカモフラージュし、近付いてきたアリを捕食するという特異な生態をもつ。

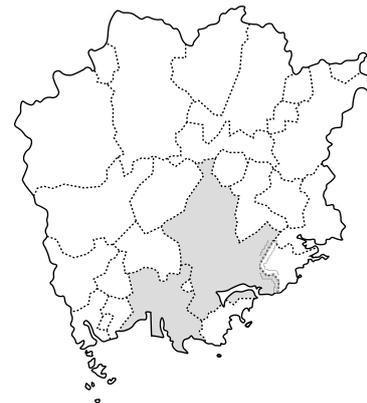
主要文献

石川ほか(2012)

(野崎達也)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：近藤光宏)



ヨツモンカメムシ*Urochela quadrinotata* (Reuter)

カメムシ目 クヌギカメムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

主に県北部の山地帯にみられるが、その生息地は局限される。

分布

県内では、主に県北部の落葉広葉樹林に分布する。

県外では北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では、朝鮮半島、ロシア極東部、中国北部に分布する。

形態・生息状況

体長12.5～16.5mmの大型種で、赤褐色の体色に4つの黒紋を備え、非常によく目立つ。ニレ科植物を選好し、ハルニレやケヤキなどの樹上で生活する。晩秋には、寄主植物となるハルニレの葉上に多数が集まるのを見ることがある。

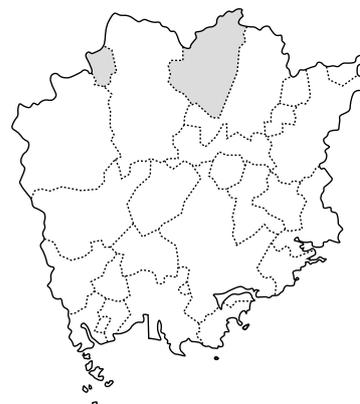


撮影：山地 治

主要文献

山地・福田 (2003), 石川ほか (2012)

(野崎達也)

**ジムグリツチカメムシ***Schiodtella japonica* Imura et Ishikawa

カメムシ目 アワフキムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

もともと分布が局所的であるのに加え、草原の土中に生息するため発見例が極めて少ない。草原環境の改変や樹林化の進行等の影響を受けやすく、その生息環境は脆弱である。

分布

県内では、古い採集記録 (1965年) が1例あるのみである。本記録は、高梁川の河川敷において、出水直後の漂着ゴミより得られており、同水系の上流側に生息地があったと推察される。

県外では本州、九州に分布する。

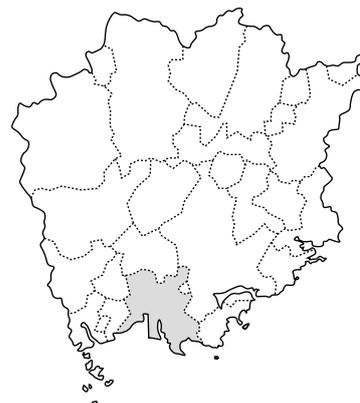
形態・生息状況

体長4.0～5.8mmのツチカメムシ類。頭部前縁は鈍鋸歯状で、前脚は鎌状、後脚は著しく肥大しその跗節はヘラ状となるなど、土中生活に適した特異な形態をもつ。イネ科草本の生える草原の土中に生息するが、分布は局所的である。

所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：山地 治)**主要文献**

石川ほか (2012)

(野崎達也)



シロヘリツチカメムシ

Canthophorus niveimarginatus Scott

カメムシ目 ツチカメムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

日当たりのよい草地に生息する典型的な草原性種である。草原環境の改変や樹林化の進行等の影響を受けやすく、その生息環境は脆弱である。

分布

県内では、県中南部の草地に分布するが産地は局所的である。県外では本州、四国、九州に分布する。国外では、朝鮮半島、中国、ロシア、ベトナム、インドなどに分布する広域分布種。

形態・生息状況

体長6～8mmの中型のツチカメムシ類。光沢のある黒っぽい藍色で、体の側縁は黄白色に細く縁どられる。

日当たりのよい草原環境に生息し、幼虫はカナビキソウに寄生する。雌成虫は卵を保護する習性がある。

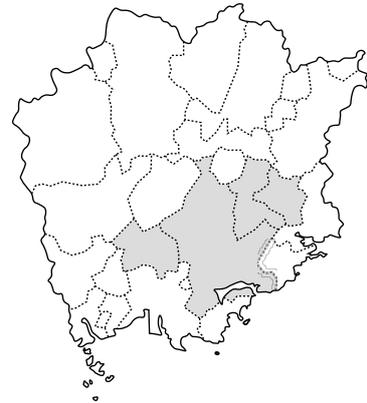
主要文献

山地・福田(2001), 石川ほか(2012)

(野崎達也)



所蔵：野崎達也



ニシキキンカメムシ

Poecilocoris splendidulus Esaki

カメムシ目 キンカメムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

生息地が石灰岩地帯に限られ、全国的な分布も局限される。また、大型の美麗種であるため、採集圧のリスクも高い。

分布

県内では、主に県中北部の石灰岩地帯に分布する。

県外では本州、四国、九州に分布する。国外では、朝鮮半島、中国に分布する。

形態・生息状況

体長16～20mmの大型種で、光沢のある金緑色に紫赤色の帯紋をもつ美麗種。幼虫がツゲで育つため、本州、四国、九州の山地に限られた地域で発見される。また、園地や霊園などに植栽されたツゲからも見つかることもある。

幼生期の生態については、1959年に県内の個体群において解明され、これによると5齢幼虫で越冬し、翌春ツヅラフジやアケビの茎から養分を吸って成虫になり、まもなく産卵期を迎える。

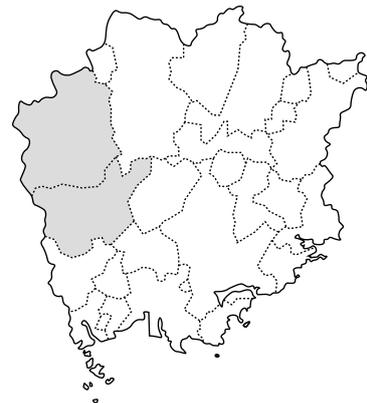
主要文献

石川ほか(2012)

(野崎達也)



所蔵：山地 治



イシハラカメムシ*Chalazonotum ishiharai* (Linnavuori)

カメムシ目 カメムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

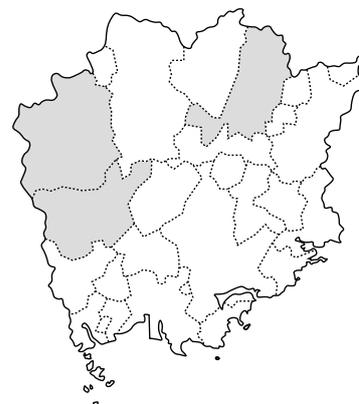
主に県中北部の山地帯にみられるが、その生息地は局限される。

分布県内では、主に県北部の落葉広葉樹林に生息している。
県外では本州、四国に、国外では朝鮮半島に分布する。**形態・生息状況**

体長9～11mm。体色は黄緑がかった褐色から暗色を呈し、黒色点刻を散りばめる。小楯板の先端にある黄白色紋がよく目立つ。成虫・幼虫ともミツバウツギの実を吸汁する。個体数は少ない。



所蔵：野崎達也

主要文献山地・福田 (2001), 野崎 (2005), 石川ほか (2012)
(野崎達也)**フタテンカメムシ***Laprius gastricus* (Thunberg)

カメムシ目 カメムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

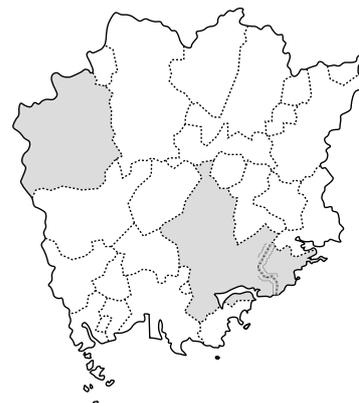
主に海岸草地に生息する草原性種であり、海浜環境の改変による影響を受けやすく、その生息環境は脆弱である。

分布県内では、主に県南部の海岸草地に分布するが、内陸部の草地環境においても稀に発見例がある。
県外では、本州、四国、九州、屋久島に分布する。**形態・生息状況**

体長11～14mm。褐色地に黒色点刻を散布するほか、小楯板の前側角に名前の由来となった一対の黄白色小斑をもつ。一般に、海岸近くの草地に生息し、ススキなどのイネ科植物の根際で生活する。灯火にも飛来する。



所蔵：野崎達也

主要文献野崎・野崎 (2005, 2006), 石川ほか (2012)
(野崎達也)

オオナギナタバチ

Megaxyela togashii Shinohara

ハチ目 ナギナタバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

小型種ではないが1986年に高梁市で1個体記録されているのみである。近隣の兵庫、広島でも記録されているが採集個体は極めて少ない。採集が難しい種類の可能性があり今回は判断する情報が少なすぎるので情報不足にした。

分布

県内では1986年に1雌が高梁市(旧川上郡備中町油野)で採集されているのみ。北海道、本州、四国、に分布している。

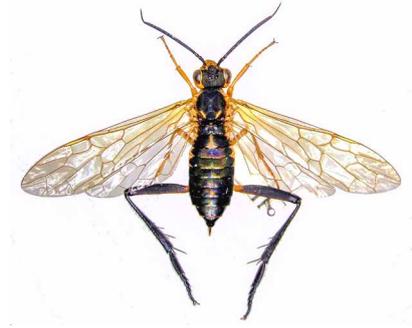
形態・生息状況

体長は14mm内外。体色は緑黒色、前・中脚は褐色、後脚は大部分が黒色。触角は11節からなり第3節が著しく長い。成虫は5月頃発生し幼虫はオニグルミの葉を食べる。

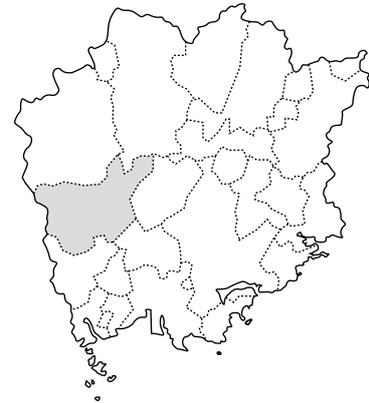
主要文献

渡辺(1992)

(加藤 学)



所蔵：渡辺昭彦



イトウハバチ

Neocolochelyna itoi Takeuchi

ハチ目 ハバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

大型種で、食草であるサルナシの分布域が広いにもかかわらず、1984年に英田郡西栗倉村で確認されているだけである。既知記録地は山地の原生林的な植生環境である。本種の生息地の微妙な植生の変化は本種の生存を脅かす可能性がある。

分布

県内では1984年7月に1雌が英田郡西栗倉村若杉で採集されているのみ。日本固有種で本州、四国、九州に分布しているが局地的で食草であるサルナシの分布域に比べ非常に制限される。九州の英彦山では減少しているとの情報がある。

形態・生息状況

体長は15mm内外。赤褐色で黒色斑がある。触角は垂棍棒状。山地の原生林植生域に生息し、5～6月に羽化し、サルナシに産卵する。

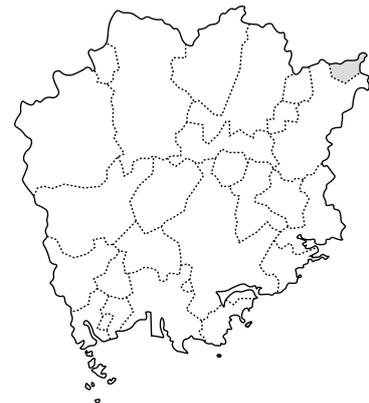
主要文献

渡辺(2001)

(加藤 学)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：近藤光宏)



ルリコシアカハバチ*Siobla metallica* Takeuchi

ハチ目 ハバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

県内では新庄村の毛無山山麓でのみの記録であること、43年間追加記録がないこと、色彩が目立ち小型種でないこと、成虫の出現期間が長いこと、ハチの調査の進んでいる神奈川県では急減してしまったことを加味すると個体数が著しく減少している可能性がある。しかし岡山県内でハバチを調査している研究者が少ないので、今後のさらなる情報を蓄積したうえでランクを判断するのが望ましい。

分布

県内では新庄村山麓において1969年と1976年に採集されているのみ。本州、四国に分布している。隣県の兵庫県では、岡山県と鳥取県との境界の宍粟市、養父市、新温泉町での20～30年前の1990年代の記録が複数ある。兵庫県県境の西粟倉村や美作市の山地にも生息している可能性がある。

形態・生息状況

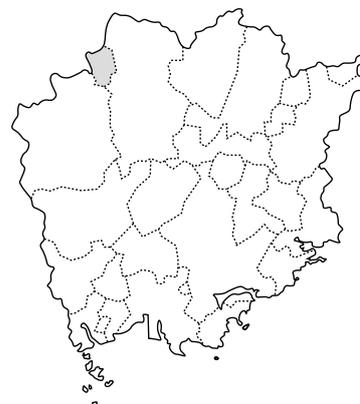
体長は14mm内外。腹部が藍黒色の光沢のある山地性のハバチ。食草は不明であるが食草が減少している可能性もある。本県では成虫は6月の1ヶ月間出現している。岡山県での正確な生息状況の把握が急務である。

主要文献

近藤・三宅 (1975), 近藤 (1979), 内藤ほか (2004)
(加藤 学)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：近藤光宏)

**ウマノオバチ***Euurobracon yokahamae* (Dalla. Torre)

ハチ目 コマユバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

2010年以後、記録地域、記録数が若干増加傾向にある。近年、本州各地の栽培クリ畑や畑周辺の雑木林における観察事例が増えている。クリ畑やクリ園の荒廃で寄主であるミヤマカミキリが安定して生息しているために本種が一時的に増えているようである。本来の寄主の生息地は野生に生えるコナラやクリやシイ類などと考えられ、クリ畑やクリ園が消滅すれば再び稀な種になると推察される。

分布

2010年までに真庭市、鏡野町、和気町で記録があったが局地的な分布でかつ毎年記録できていなかった。2010年以後は個体数の記録は少ないものの短期間に総社市、赤磐市、津山市の新分布地が確認された。一方で本種の多産地の鏡野町塚谷では、クリ園のクリ林が伐採されたことにより、生息地が消滅した。本州、四国、九州、国外は中国、台湾、朝鮮半島、インド、ラオス、タイに分布する。

形態・生息状況

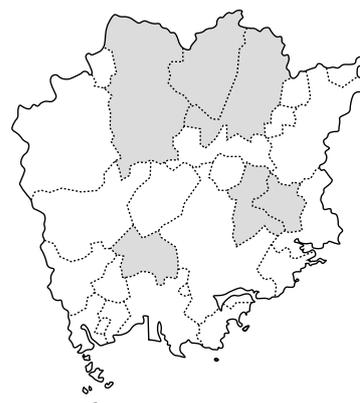
体長は20mm内外。赤褐色で雌は特徴的で体長の4～8倍程度の産卵管をもっている。5月頃出現する。寄主は、ミヤマカミキリであることが最近解明された。

主要文献

加藤 (2005), 磯野・磯野 (2013), 脇本 (2013), 加賀ほか (2018), 武田・武田 (2019)
(加藤 学)



撮影：加藤 学



オオハラナガツチバチ

Megacampsomeris grossa (Fabricius)

ハチ目 ツチバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

大型種で2004年以前までは岡山県の広範囲から複数記録されているが、2005年以後は記録が少ない。記録減少の理由は不明であるが、減少傾向にある可能性がある。

分布

2000年代前半まで岡山県に広くに生息していたと推測される。本州、四国、九州、屋久島、奄美諸島、国外では台湾、中国、東南アジア、インドに分布している。日本産は亜種*M.g. matsumurai*とされている。

形態・生息状況

体長は雌25～32mm内外、雄20～25mm。頭・胸部に黄褐色の長毛が生え腹部は黒く雌1～3節に白色毛、雄1～5節に黄白色の帯がある。夏から秋に出現する。大型のコガネムシ科の幼虫を幼虫の餌とする。河川敷から丘陵地まで広い環境で記録されている。

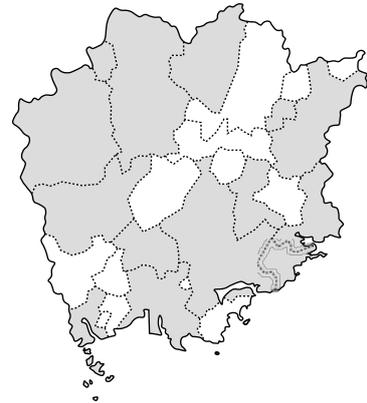
主要文献

同和鋳業株式会社（2001）、国土交通省（2012）、倉敷昆虫同好会（2012）

（加藤 学）



所蔵：黒田健二
（撮影：加藤 学）



スギハラクモバチ

Leptodialepis sugiharai (Uchida)

ハチ目 クモバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

本種は、営巣適地である朽ち木の豊富な、大木のある多湿な林に生息すると思われる。しかし県内ではそのような環境は少なくなってきた。未発表記録も含めると広範囲に分布していることが推察できるが、個体数は少ない。大型のクモバチ類は全体的に減少傾向にあるので、本種も今後、減少しても増加することは考えにくい。

分布

笠岡市、岡山市内の数か所、鏡野町、倉敷市で記録されているが、実際には広く分布している模様。本州、四国、九州、対馬、屋久島、奄美大島、国外では台湾に分布している。千葉県や京都府では絶滅が危惧されている。

形態・生息状況

体長は雌19～28mm、雄13～21mm。体は黒色で、顔面、頭盾、上唇、触角の柄節や梗節などが黄色で翅は橙黄色している。朽ちた切り株や樹洞内の腐朽材に営巣し、アシダカグモやコアシダカグモをなど大型の徘徊性のクモを狩る。

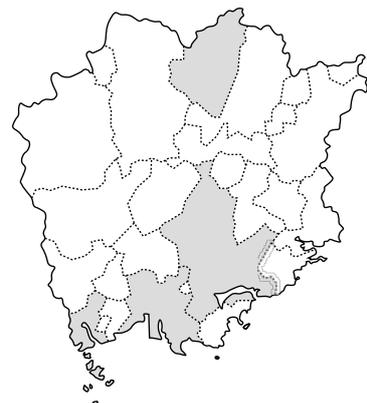
主要文献

伊藤・安東（1981）、加藤ほか（2007）、奥島・瀬島（2007）、青野（2015）

（加藤 学）



撮影：青野孝昭



アケボノクモバチ

Anoplius eous Yasumatsu

ハチ目 クモバチ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

大型種で2005年に総社市で記録されてから10年以上記録がない。獲物のハシリグモやキクヅキコモリグモの豊富にいる水辺（水田、小川、池など）に限って生息するので、生息数は多くない。水辺周辺に営巣場所となる木の杭などが減少し、コンクリートが打たれている場所が増えてきていることも減少の要因となる。さらに水田で使用される農薬は脅威となる。今後、本種の生息に適した環境が格段に少なくなっていくと考えられる。

分布

倉敷市、総社市で記録されているのみで、もともと記録数が多くない。本州、対馬、国外ではヨーロッパに分布している。

形態・生息状況

体長は雌12～20mm。黒色で、雌の腹部第2背板から第4背板の基部に灰白色の微毛斑あるいは帯がみられる。水辺に生息し、ハシリグモやコモリグモを狩るために水中に潜る。巣は土中や材中に作る。かなり数を減らしていると推察でき、再記録が期待される。

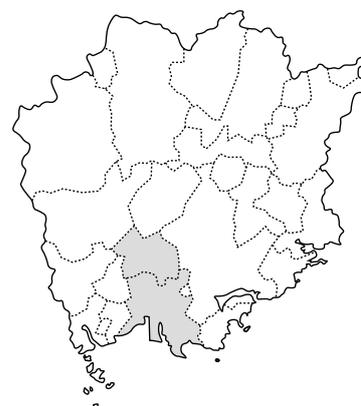
主要文献

青野・近藤（1986）、国土交通省（2007b）

（加藤 学）



撮影：清水 晃（埼玉県産）



キオビクモバチ

Batozonellus annulatus (Fabricius)

ハチ目 クモバチ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

大型種で1990年代までは県南部を中心に複数記録されていたので、比較的普通だったのかもしれないが2005年に総社市真壁総社大橋上流で記録されたのが最後に10年以上正式な記録がない。広い既存分布地から姿を消した理由として獲物の大型のコガネグモ類と営巣適地である海浜地・川原の草地の減少が考えられる。しかし、生息適地と思われる環境での調査でさえ、成虫を確認できていない。

分布

2000年以前は主に県の中中部から南部にかけて広く分布していたようであるが、急減してしまったようである。現在は生息地が局地的であるうえ個体数も少ないと推察される。近年倉敷市で確認された（未発表）が2017年の洪水後の生息調査はされていない。本州、対馬、国外ではヨーロッパに分布している。

形態・生息状況

体長は雌23～28mm，雄16～18mm。雌は頭部、中胸背は橙黄色、前伸腹節は黄褐色から赤褐色。雄は体に黄斑をもち別種と感ずるほど色彩が異なる。コガネグモ科のクモを狩り、狩猟後日没を待って開けた場所の土中に穴を掘り獲物を運びこむ。本州では6～10月に成虫を観察できる。

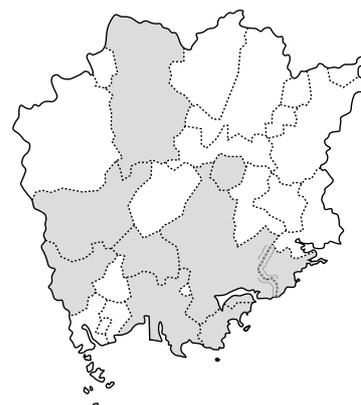
主要文献

近藤（2009）

（加藤 学）



所蔵：加藤 学（鳥取県産）



ヤマトツクモバチ

Homonotus japonicus Yasumatsu

ハチ目 クモバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

1993, 1994年に岡山市玉柏で記録されただけで、その後は全く記録されていない。本種の生息地であるススキやカヤの群落はまだ残っているなので今後の動向に注視したい。

分布

岡山市玉柏で記録されているだけである。実際にはもう少し広く分布している可能性が高い。本州, 四国, 対馬, 国外では朝鮮半島に分布している。

形態・生息状況

体長は7.5～12mm。体は円筒形。黒色で頭盾下縁及び大顎は橙褐色。ススキやカヤの葉を折り曲げて産室とするヤマトコマチグモに捕食寄生する。

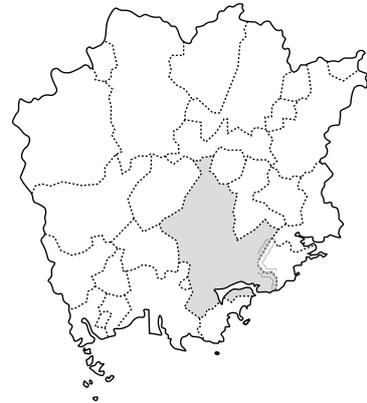
主要文献

財団法人リバーフロント整備センター編 (1997)

(加藤 学)



所蔵：清水 晃 (石川県産)



フタモンクモバチ

Parabatozonus jankowskii (Radoszkowski)

ハチ目 クモバチ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

既知記録は、2004～2010年の真庭市、鏡野町、高梁市の3件のみである。本種の幼虫の餌となる大型のオニグモが人家周辺で激減してしまったこと、宅地様式の変化にともない「縁の下の地面」などの営巣適地の減少により、生息地が狭まり今後増加する要因が見当たらない。

分布

真庭市と鏡野町と高梁市で記録があるのみであるが、未発表記録の分布も加味すると県内には昔から広く分布していた可能性が高い。過去の記録が少ないのは、もともと生息数が多くなかったうえに大型種でありながら俊敏な動きをするので採集しにくかったからと思われる。本州, 四国, 九州, 対馬, 屋久島, 国外では朝鮮半島, 中国, 沿海州に分布している。

形態・生息状況

体長は雌20～30mm。体は黒色で、顔面両側の縦斑と腹部第3背板基部の帯斑は黄色から橙色。オニグモのみを狩り、古い人家の縁の下の地面や石垣の隙間など利用し営巣する。古い人家や神社周辺などにまだほそぼそと生息していると思われる。

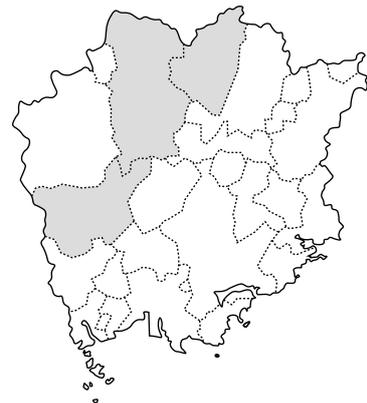
主要文献

加藤ほか (2007)

(加藤 学)



所蔵：加藤 学



イバリアリ*Strongylognathus koreanus* Pisarski

ハチ目 アリ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

国内での記録は2県3か所のみで県内では最初の記録以来50年近く確認されていない。

分布

県内では倉敷市鷲羽山から報告されただけである。

国内では岡山県と山梨県からのみ知られていて現存が確認されているのは山梨県の一か所のみである。国外では朝鮮半島から知られている。

形態・生息状況

働きアリの体長3mm。黄褐色のアリでカマのような大あごを持つ。トビイロシワアリの巣を乗っ取り巣に寄生するという特異な生態を持つようである。山梨県の生息地では広大な川の河原に沿ってコロニーが数か所存在しているのが確認されている。

県内での採集環境は不明だが河原の調査で再確認できるかもしれない。

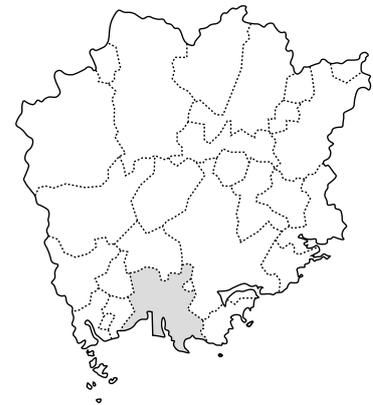
主要文献

Collingwood (1976)

(山地 治)



撮影・所蔵者：小松 貴（山梨県産）

**ツノアカヤマアリ***Formica fukaii* Wheeler

ハチ目 アリ科

●岡山県：留意 ●環境省：情報不足 (DD)

選定理由

北方系の種であり分布が県北の二次草原に限られる。

分布

1980年代に生息が確認された真庭市の2産地ではそれ以来追加個体が得られていないが、近年、周辺地域の継続的に管理された二次草原で新たに1産地が見つかった。日本国内では北方系の分布を示し、本県は本種の分布の西限に近い。

北海道、本州に分布し、国外では中央アジアに分布する。

形態・生息状況

頭部後縁中央が明瞭にくぼむことから同属近似種と区別される。県下では継続的に管理された二次草原で営巣が確認されている。過去には多数個体がヤマナラシのアブラムシに集まる様子が目撃されている。

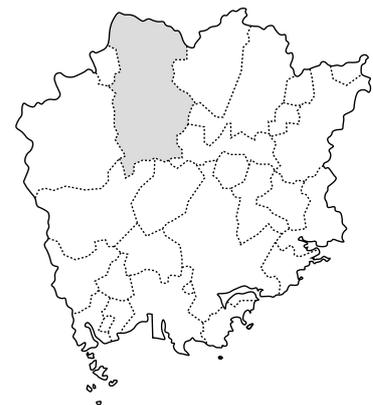
主要文献

近藤 (1999a)

(大生唯統)



所蔵：大生唯統



キボシトックリバチ

Eumenes fraterculus Dalla Torre

ハチ目 スズメバチ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

トックリバチの大型種である。2000年前半までは岡山県の広範囲から複数記録されているが2006年以降記録がない。主に河川敷や裸地のある広い草地環境に生息している。過去の生息環境と一見変わらない場所での調査でも本種の生息の確認ができない。

分布

かつては、岡山県に広く生息していた可能性はあるが、ここ10年間は正式な記録はない。本州、四国、九州、国外では中国、ロシアの一部に分布している。

形態・生息状況

体長は雌15mm内外、雄13～14mm。腹部第1節背面に1対の黄色紋と後縁に黄帯を持ち、腹部大2節も1対の目立つ黄紋がある。また小盾板と背板に黄色い斑紋がある。一見キアシトックリバチに似るがこれらの特徴と頭盾の形態で区別できる。シャクガ科、メイガ科、ハマキガ科等のガの幼虫を狩る。巣は、草の茎や木の枝だけでなく石などに徳利状の壺を複数密着して作られることが多い。

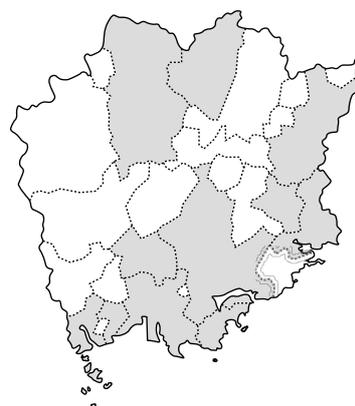
主要文献

国土交通省 (2006), カミシマ技研株式会社 (2007), 加藤ほか (2007), 国土交通省 (2007a, 2007b)

(加藤 学)



所蔵：加藤 学



キオビホオナガスズメバチ

Dolichovespula media sugare Ishikawa

ハチ目 スズメバチ科

●岡山県：留意 ●環境省：該当なし

選定理由

中国地方に分布する個体が本亜種の西限にあたる。本県の中国山地に広く生息していると推察されるが既知記録は少ない。

分布

県内では新見市、新庄村、真庭市、鏡野町、美作市の広葉樹の多い山間部で記録がある。北海道では別亜種を産し、国外ではヨーロッパにも分布している。

形態・生息状況

体長は女王19～22mm、働き蜂14～16mm、雄は15～20mm。女王蜂はキイロスズメバチに擬態しているため同定に注意を要する。働き蜂は、黄色と黒色の斑紋をもつ。500m以上の山地に生息し5～9月頃に出現する。巣は木の枝などにつくられ、巣材は植物の繊維状の部分を使用しているためアシナガバチの巣のように和紙状になる。攻撃性はホオナガスズメバチ類の中で最も強い。

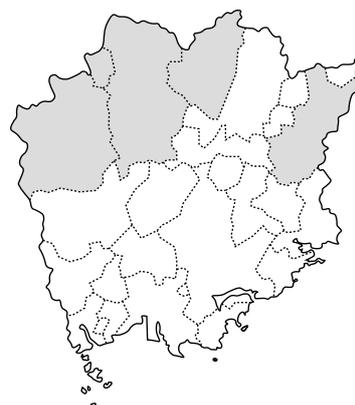
主要文献

近藤 (1999b), 加藤ほか (2007)

(加藤 学)



所蔵：加藤 学



ヤドリスズメバチ

Vespa austriaca (Panzer)

ハチ目 スズメバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

クロスズメバチ属の中では約20mmと比較的大型種であるが、真庭市菅谷にて1999年の1例のみの記録である。スズメバチでありながら自ら巣も作らず働き蜂ももたない永久的社会寄生という特殊な生態で繁殖に制限がある。また新成虫雌の生産が十数頭～30頭と少ないと推定されている。さらに本県の中国山地には寄主のツヤクロスズメバチは局地的で少ない。山地の森林伐採などの林相の変化により寄主の生息状況が悪化すれば、本種は絶滅する可能性が高いと推察されるが正確な生息密度の詳細がつかめていない。

分布

県内では真庭市のみの記録であるが、ツヤクロスズメバチが生息している中国山地には少ないながらも生息していると思われる。北海道、本州に分布する。国外ではヨーロッパ、北アジア、北アメリカに分布。

形態・生息状況

体長は雌17～20mm、雄は12～16mm。働き蜂はいない。体は黒色で斑紋は黄色。山地性のツヤクロスズメバチに社会寄生する。訪花習性もあるので、営巣場所以外でも採集される可能性がある。6～9月頃に出現する。

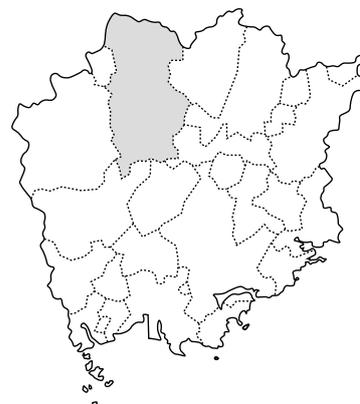
主要文献

近藤 (2000)

(加藤 学)



所蔵：加藤 学 (北海道産)



フジジガバチ

Ammophila clavus japonica Kohl

ハチ目 アナバチ科

●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

2006年真庭市で記録し、その後の再調査でも記録されていない。本種の生息には、安定した広大な草地環境と営巣場所となる適度な裸地が必要と考えられる。そのような環境は、人為的に遷移が進まないよう定期的に草刈りや草焼きを行い管理しなければならない。県内では、高原地帯の特殊な場所しか生息が見込めない。

分布

県内では2006年に蒜山高原の一角で分布が確認されているのみ。1940年に鳥取県大山の麓の草原で記録され、2014年に近隣の大山方面での記録がある。昔、大山で本種を沢山採集したことがある情報(遠藤彰氏/故人、私信)から、かつては蒜山大山方面に広く分布していたと推察している。また、山口県宇部市、広島県呉市で古い記録があるので、岡山県南部にもかつては生息していた可能性がある。

日本を含む極東アジアをはじめ、東南アジア、オーストラリアにまで分布するが、沖縄以南のものは亜種を異にする。本亜種は日本では本州、四国、九州に生息するが産地は極めて少ない。

形態・生息状況

雌の体長は30mm前後、頭部、胸部は黒色、腹柄節と脚の大部分は橙色、雄は体長25mm前後、雌よりも黒色味が強く腹柄の2節の下半分が赤褐色で他は黒色である。草原に生息し、成虫は6～9月頃出現し、裸地に営巣しウスムラサキクチバ(チョウ目)を狩ることが知られている。

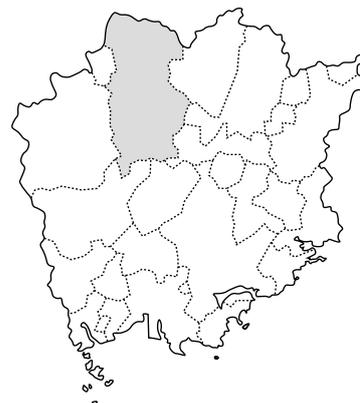
主要文献

田口 (1987), 田中・田中 (2008), 加藤 (2017)

(加藤 学)



所蔵：加藤 学



ニッポンモンキジガバチ

Sceliphron deforme nipponicum Tsuneki

ハチ目 アナバチ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

丘陵地や山地の林内や林縁に生息している。かつては県内に広く分布していたが2000年以降確認例が極めて少ない。原因は不明であるが森林植生や森林面積の変化が関与しているのかもしれない。明らかに近年減少が著しい。

分布

高梁市、井原市、浅口市、新見市、鏡野町などから記録されている。2001年以降、津山市でも生息の確認はできている。2005年頃までは鏡野町のセイヨウミツバチを飼育する空の巣箱内で巣を確認できたが、それ以降からは営巣を確認していない（未発表）。本種は国内の他に朝鮮半島、台湾、中国、ロシア、東南アジア、インドなどに分布するが、本亜種は日本本土に生息している。他県では絶滅の懸念のない種であるようだが、岡山県では明らかに激滅している。

形態・生息状況

体長は15～20mm。体は黒色で前胸背板、中胸側板、小盾板、前伸腹節に黄色紋がある。腹部第1、第2節の後縁は赤褐色。ハエトリグモを狩ることが知られている。7月から10月に出現し、暗い場所に泥で複数の育室を作るが、上塗りをしない。

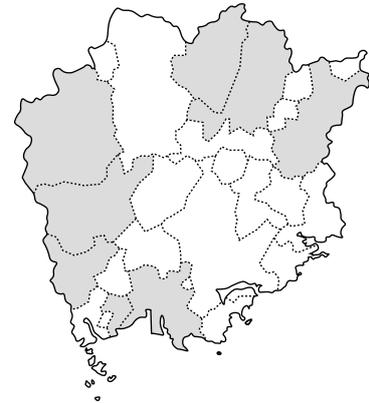
主要文献

加藤ほか（2007）

（加藤 学）



所蔵：加藤 学



キゴシジガバチ

Sceliphron madraspatanum kohli Sickmann

ハチ目 アナバチ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

約80年前までは田園地帯の人家周辺などにも生息する普通種であった。第二次世界大戦後、開発、幼虫の餌となるクモや営巣場所の減少、農薬、競合種（近縁種のアメリカジガバチ）の存在など本種を取り巻く複合要因により絶滅寸前まで追いやられてしまったと考えられる。競合種と共存している県もあるので競合種説だけが要因とは考えにくい。県内の本種の生息適地と考えられる平地での競合種での高密度での分布状況から主要因と考えざるを得ない。

分布

2000年倉敷市真備町の高梁川の河川敷での記録を最後として正式な報告がない。約10年前に笠岡諸島で生息を確認しているが（未発表）、笠岡諸島でもアメリカジガバチの密度は高い。国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。近畿・中国地方、高知県の西日本での減少が著しいようである。

形態・生息状況

体長は20～28mm。黒色で前胸背板に1対の黄紋、腹柄も黄色で特徴的な種類である。オニグモ類の幼体とハナグモ類などを主に狩ることが知られている。巣は人家の軒先などに泥で複数の育室を作った後に泥の上塗りをして固める。

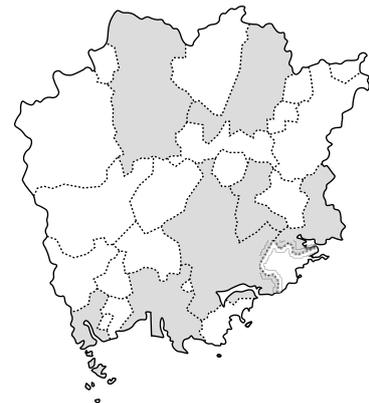
主要文献

国土交通省（2002）、井上（2018）

（加藤 学）



所蔵：加藤 学（千葉県産）



フクイアナバチ

Sphex inusitatus fukuianus Tsuneki

ハチ目 アナバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

既知記録数は少ないが、調査が進むにつれて極めて稀でないことが分かってきた。しかし、営巣適地となる山道など裸地のアスファルト化やコンクリート化、幼虫の餌となるハネナシコロギス（バッタ目）の生息環境の広葉樹の減少、成虫のカロリー源となる訪花植物の減少など、本種を取り巻く生態系の悪化や破壊により容易に激減する可能性がある。

分布

県内では1987年に初記録され、その後、津山市、鏡野町、真庭市（未発表）でも生息が確認されている。岡山県内の正確な分布状況は不明である。本種は本州、九州、国外では中国に生息している。かつては国内で局地的な分布を示していたが、近畿圏にも広く生息していることが分かってきた。

形態・生息状況

体長は30mm前後。体全体が黒色で、顔面も黒い長毛で覆われ、翅も全体が黒ずんでいる大型のアナバチ。山道の裸地、人家の庭や空き地などの地中に営巣し、幼虫の餌としてハネナシコロギスを狩る。ハネナシコロギスは雑木林の樹上生活者で県内に広く分布するも個体数は多くない。

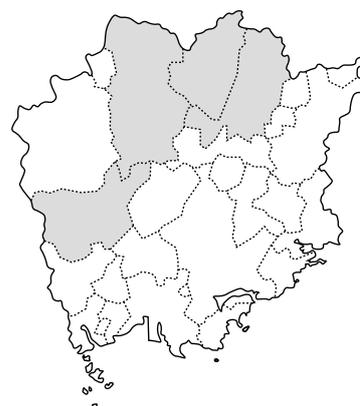
主要文献

原田 (1987c), 原田 (1996), 加藤ほか (2007)

(加藤 学)



所蔵：加藤 学



クロケラトリバチ

Larra carbonaria (Smith)

ハチ目 ギングチバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

かつては県内の田園地帯や畑地に普通に生息していたと思われるが何故か記録は少なく局地的な分布を示す。2007年以降正式な記録がないが2019年に鏡野町で生息を確認している。田畑、湿地が減少し、圃場整備などにより幼虫の餌となるケラの好適な湿地環境が失われつつあること、農業散布の影響により今後、減少することが予測される。

分布

県内では倉敷市、総社市、鏡野町、真庭市（未発表）で確認されているが県南の記録は1990年代と古い記録のみである。激減傾向としても、おそらくまだ県下に広く生息していると考えられる。小さいハチではないので今後注視すれば正確な生息状況を把握できると考えられる。日本以外では朝鮮半島、台湾、東南アジアに分布する。

形態・生息状況

体長は10～18mm。全身黒色、巣を作らず、ケラを一時麻痺させケラの巣を利用する。鏡野町ではまだ生息を少ないながらも確認することができる。

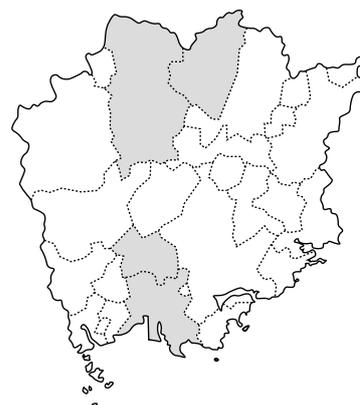
主要文献

加藤ほか (2007)

(加藤 学)



撮影：加藤 学



ヤマトコトガタバチ

Lyroda nigra japonica Iwata

ハチ目 ギングチバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

川原や草地環境が本種の主な生息地であるが、2005年以降記録がない。河川敷周辺の開発などにより大型アナバチ類の減少にともない本種が減少している可能性がある。

分布

県内では倉敷市、総社市、鏡野町で記録がある。減少傾向としても、まだ県下に広く生息していると思われる。本種が他県のレッドデータブックで選定されたことはない。日本産のものは本亜種とされ本州、四国、九州、対馬、屋久島に、国外では朝鮮半島、中国、ロシア、インドに分布する。

形態・生息状況

体長は7～12mm。黒色、頭部、前・中胸背面に真鍮色の短毛を密生する。土中に空けられた小型哺乳類や大型アナバチ類の坑を利用しそこから水平方向に坑道を掘り、巣とし幼虫の餌はヒシバツタ類を狩る。微小種ではないが、本種の県内における詳しい生息状況は不明である。

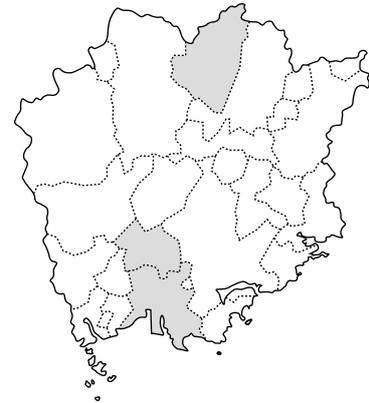
主要文献

加藤ほか (2007)

(加藤 学)



所蔵：加藤 学



ニッポンハナダカバチ

Bembix niponica niponica Smith

ハチ目 ギングチバチ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

本種の営巣適地は大河川敷や海浜周辺の広大な細砂地である。しかし河川や海浜周辺の開発や護岸工事により本来の生息地が大幅に失われつつあり生息地が限られている。そのような状況の中でも2009年以後、新たな産地が確認されているが、公園の砂場や墓地など人工的な環境も含まれる。早急に既存の集団営巣地を保全しなければ将来、著しく減少する可能性がある。

分布

県内では岡山市、総社市、真庭市、新見市でこれまで記録があるが生息環境が限られているため局地的な分布を示す。2009年以後は、岡山市、総社市、新見市、玉野市(未発表)で確認されている。北海道、本州、四国、九州、屋久島、伊豆諸島。国外では別亜種が朝鮮半島、台湾、中国、モンゴルに分布する。

形態・生息状況

体長は20mm内外。頭部、胸部は黒色で腹部は黒色と黄白色のまだら模様となり砂色に似ている。主に海浜や河川敷の砂地に営巣しハエ目を狩り幼虫の餌とする。広い細砂地があれば、生息しているとは限らないが、生息密度が高い場所であれば集団営巣する。幸いそのような場所が県内にはまだ幾つか残っている。

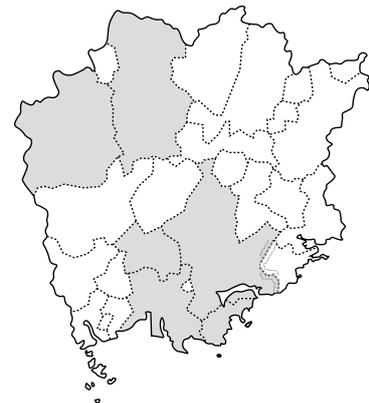
主要文献

近藤 (2007, 2013), 青野 (2014)

(加藤 学)



撮影：加藤 学



キアシハナダカバチモドキ

Stizus perrisi Dufour

ハチ目 ギングチバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

主に県内の大河川敷や海浜周辺から複数記録されている。2000年以降も安定した記録があるが、本種の生息環境である大河川の河川敷や海浜地域は大規模な工事が行なわれやすく人工的な環境になりやすい。今後、本種の密度の高い既存分布地の保全がなければ他県のように減少する可能性がある。

分布

県内では笠岡市、倉敷市、総社市、岡山市、玉野市で記録がある。生息地は限られるが、既存記録地での生息は健在傾向。新産地はまだ県南や瀬戸内海の島々で見つかる可能性がある。北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国、ロシア、モンゴルに分布する。栃木、千葉、神奈川、福井では、絶滅危惧Ⅰ類に選定されている。



撮影：加藤 学

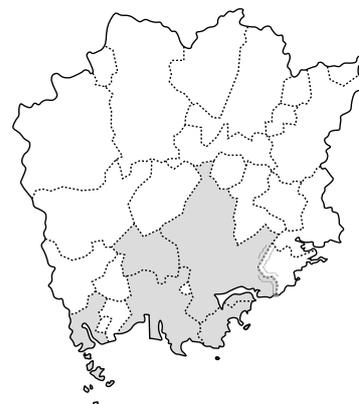
形態・生息状況

体長は20mm内外。黒色の体に黄色の斑紋と赤褐色の脚をもつ美しい大型のハチ。河川敷や海浜地帯の日当たりの良い裸地に営巣する。幼虫の餌としてバッタ類やササキリを狩る。

主要文献

黒田・伊藤 (2017)

(加藤 学)



アナキアシブトハナバチ

Pseudapis mandschurica (Hedicke)

ハチ目 コハナバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

既知記録地は岡山市牟佐と矢原の旭川河原のみで、1986年の記録を最後にどこからも記録がない。既知記録地周辺での再調査では確認できていない。局地的に分布する種なので、県内の分布および生息状況がつかめなかったため情報不足種とした。

分布

岡山市牟佐と矢原の限られた地域でのみ記録されている。本州、九州に分布するが分布は極めて局地的である。国外では、極東ロシア、中国、朝鮮半島、モンゴルに分布。

形態・生息状況

体長は9～10mm。体は黒色。肩板は著しく伸張している。雄の後脚は著しく変形し、後脚頸節は基部付近に黄色の長い突起物がある。特徴的な形態をしているし微小種ではないので、採集していたら気付くことが多いと思われる。夏から秋にかけて出現しノブドウ、ヤブカラシ、キツネノマゴ、ゴマ等の花に訪花する。まずは本県での再記録が望まれる。

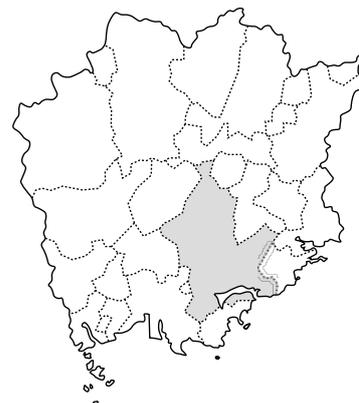


収蔵：村尾竜起（熊本県産）

主要文献

原田 (1987b)

(加藤 学)



オオトガリハナバチ*Coelioxys fenestrata* Smith

ハチ目 ハキリバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

県の南部から北部まで記録があるが、ほとんどが2000年より前の記録で2003年の和気町での記録が最後である。かつては県内で普通であったかもしれないが何らかの要因で激減した可能性がある。本種はオオハキリバチに労働寄生するがオオハキリバチは現在も県内では普通である。寄生生態は異なるが同種を寄主とするハラアカヤドリハキリバチも県内に広く普通に分布している。

分布

岡山市、総社市、高梁市、津山市、美作市、和気町から記録されている。近年の未発表記録から、個体数は少なくとも県内に広く分布していると考えられる。本州、四国、九州、種子島、国外では中国、朝鮮半島、台湾に分布する。

形態・生息状況

体長は雌17～23mm。雄14～18mm。体は黒色。頭部の毛は大部分が顔面の毛で黄色褐色～赤褐色している。7～10月に出現し、カラスザンショウやトウネズモチなどに訪花する。

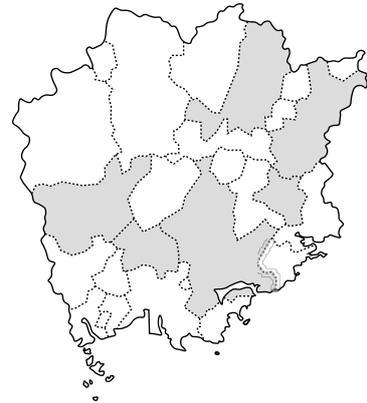
主要文献

美作虫の会 (1968), 伊藤・安東 (1981, 1989), 近藤 (1991), 原田 (1994), 脇本 (2004)

(加藤 学)



所蔵：加藤 学

**キバラハキリバチ***Megachile xanthothrix* Yasumatsu et Hirashima

ハチ目 ハキリバチ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

岡山県の南部を中心とした地域から局地的に記録されていたが2000年以降の記録が少ない。多くは海浜地域や河川敷で記録されており、それらの生息地の開発や破壊などにより減少していると推察される。

分布

倉敷市、岡山市、備前市、鏡野町、津山市で記録されている。かつては県北にも分布していたが、現在では県内の海浜地域に限定し分布しているようである。瀬戸内海の島にも残存しているかもしれない。本州中部以南、伊豆諸島、四国、九州、屋久島、種子島、国外では中国、朝鮮半島に分布している。福岡県と中国地方での減少が著しいようである。

形態・生息状況

体長は雌15～17mm、雄12～15mm。腹部背面は黄褐色の毛でおおわれている美しい大きなハキリバチ。主に海浜地帯や河川敷の砂地に営巣する。ハギ類やノアズキなど主にマメ科に訪花し7～9月に出現する。

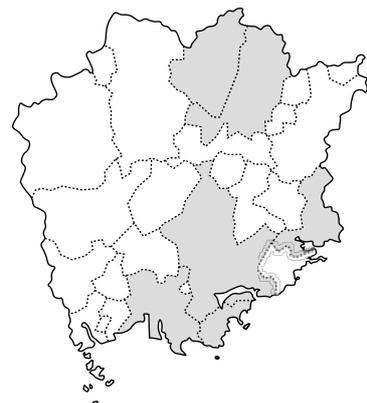
主要文献

加藤ほか (2007), 黒田・伊藤 (2017)

(加藤 学)



撮影：黒田健二



ネジロハキリバチ

Megachile disjunctiformis Cockerell

ハチ目 ハキリバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

1947年に倉敷市で初記録されて以来、県南部を中心に記録があったが、1999年の和気町での記録が最後になる。それ以降は、玉野市で目撃しているが（未発表）、正式な記録はない。原因不明であるが比較的大型種で目立つ色彩をしているにも拘わらず報告がないので明らかに減少していると思われる。

分布

倉敷市、岡山市、瀬戸内市、和気町に2000年以前まで広い地域で記録されていた。かつては県南部には広く分布していたと思われる。海浜地を好む傾向にあるようであるが、それ以外の場所でも記録されている。南方系種で本州中部以南、四国、九州、琉球列島、国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布している。高知県、鳥根県、福岡県では減少してしまったようでレッドデータブックに選定されている。

形態・生息状況

体長は雌13～18mm、雄10～14mm。体は黒色で、前伸腹節と腹部第1背板に純白の毛があり、翅は先端の2/3が強く黒ずむ。営巣は竹筒など既存坑を利用し樹脂と泥を使用する。ハマゴウ、ハギ類などに訪花し7～9月に出現する。

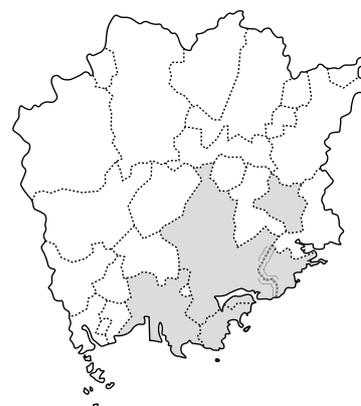
主要文献

青野（1951）、伊藤・安東（1981）、原田（1987a）

（加藤 学）



所蔵：村尾竜起（鹿児島県産）



クズハキリバチ

Megachile pseudomonticola Hedicke

ハチ目 クモバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

岡山県では北部の限定された地域のみ記録され2006年以降から目撃もできていない。かつては岡山県北部に広く分布していた可能性があり、減少していると考えざるを得ない。理由は不明であるが以前より既知生息地での訪花植物のハギ類が減少傾向であること、営巣場所となる樹木の空洞が減少していることが考えられる。

分布

1960年代に津山市で3例の記録がある。また鏡野町市場の山田養蜂場の周辺では2005年頃までハギ類の花で訪花個体を観察できていたが、現在では全く確認できていない。本州、九州、対馬、屋久島、種子島、国外では中国、台湾に分布している。国内でも減少傾向である。

形態・生息状況

体長は雌17～20mm、雄16～18mm。体は黒色で、触角と脚は赤褐色をおびる。腹部第2背板後縁に顕著な明色の毛帯がある。一見、普通種のオオハキリバチとスミスハキリバチに似るので同定には注意を要する。営巣は既存坑を利用し、育房にはクズの葉を利用する。ハギ類などに訪花し7～9月に出現する。

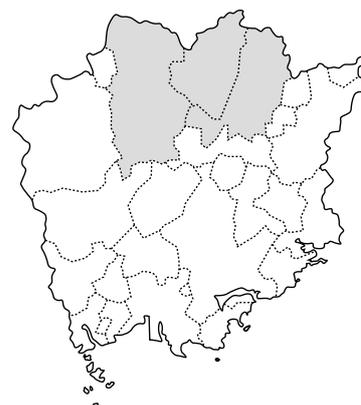
主要文献

美作虫の会（1968）、加藤ほか（2007）

（加藤 学）



所蔵：加藤 学



ヤマトハキリバチ*Megachile japonica* Alfken

ハチ目 ハキリバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

1965年に津山市山下で初記録された後、2004年に岡山市乙子、2012年に笠岡市カプト東町で記録があるくらいである。従って単発的かつ局地的な記録のみである。また本種の主な営巣地が開発されやすい河川敷や海浜地の砂地なので注意が必要である。

分布

笠岡市、岡山市、津山市で記録されているのみである。かつては広く分布していたと推察できるが現状は把握できていない。北海道、本州、四国、九州に分布している日本固有種。神奈川県では激滅している。

形態・生息状況

体長は雌11～13mm、雄10～11mm。体は黒色で、灰白色の長毛で覆われている。他の同属の種類より早く5月の連休には出現する。主に砂地に穴を掘って営巣するが、近くに砂地のない場所でも採集されている。フジの花に好んで訪花するらしい。本種の生息していそうな近くのフジの花を調査しても本種を確認できないのは、本種が減少してしまったことが考えられる。

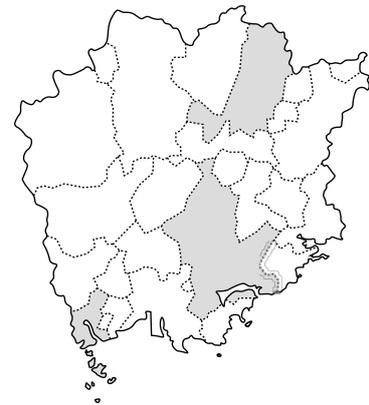
主要文献

美作虫の会（1968）、国土交通省（2007a）、加藤（2016）、長瀬・渡辺（2018）

（加藤 学）



所蔵：加藤 学

**シロスジフトハナバチ***Amegilla quadrifasciata* (Villers)

ハチ目 ミツバチ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県南の限られた地域でのみ記録されており、2000年以降の記録数が少ない。主な生息地である海浜地周辺では、開発の脅威にさらされやすく海浜地および訪花植物の減少など本種を取り巻く生態系が悪化している。

分布

倉敷市二日市のような内陸部でも記録はあるが、その他は海浜地周辺である。2016年には玉野市沼で確認されている。実際にはもう少し県南に広く分布している可能性が高い。本州、四国、九州、国外では旧北区に分布しているが、国内における分布は局地的で減少傾向にある。

形態・生息状況

体長は14～16mm。腹部第1～4背板後端の白毛帯は完全でスジボソフトハナバチより幅広い。7～9月に出現し、ムクゲ、ミゾソバ、リアトリス、ゴマなども訪花するが、海浜地ではハマゴウが有力な資源植物になっていることが知られている。

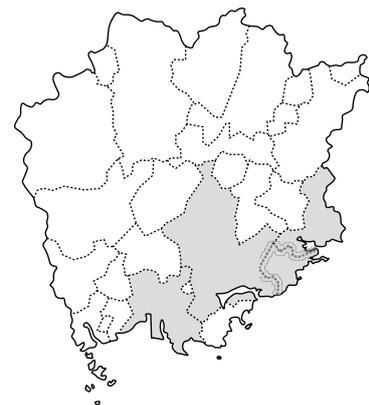
主要文献

黒田・伊藤（2017）

（加藤 学）



撮影：黒田健二



ウスルリモンハナバチ

Thyreus centrimacula (Perez)

ハチ目 ミツバチ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県南と中央部の限られた場所でのみ記録されており、2000年以降の記録数が少ない。主な生息地である海浜地周辺では、開発の脅威にさらされやすく海浜地および訪花植物の減少など本種を取り巻く生態系が悪化している。さらに本種は労働寄生という寄生性の習性をしているために寄主の生息に大きく左右される。

分布

総社市奥原、備前市鹿久居島では1980年代の複数の記録、倉敷市二日市の2000年以後の記録はあるが、確認された場所は限られる。現在、玉野市沼が安定した産地で複数の確認例がある。現在も瀬戸内海の島々の海浜地に局所的に生息していると推定される。本州、四国、九州の限られた地域に分布しているが、国内における分布は局地的で既存分布地では減少傾向にある。

形態・生息状況

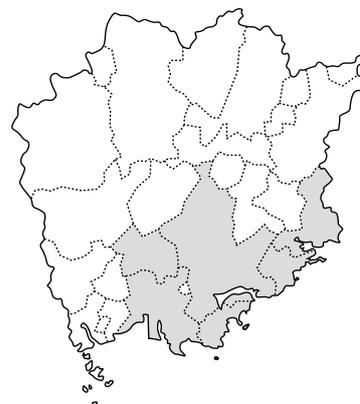
体長は11～12mm。頭胸部の体色は、黒色で斑紋をなす羽状毛は白青色でナミルリモンハナバチより水色がかかる。準絶滅危惧種のシロスジフトハナバチに労働寄生すると推定されている。夏～秋に出現し、ハマゴウなどに訪花する。岡山県では、海浜地以外のやや内陸地でも記録されている。

主要文献

小橋 (2004), 大對ほか (2016), 黒田・伊藤 (2017)
(加藤 学)



所蔵：黒田健二
(撮影：加藤 学)



クロマルハナバチ

Bombus ignitus Smith

ハチ目 ミツバチ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

岡山県では2010年より前までは、主に外来のセイヨウオオマルハナバチがトマトハウス内の受粉に利用されていた。2014年以降、環境省などの関係省が在来の本種への転換を推奨し、利用の安易さの面もあり、かなり普及しはじめている。その利用されている群は別産地のため逸脱による遺伝子汚染が危惧される。実際に既に絶滅した県から本種が採集されている事例があり、今後遺伝子レベルでの研究の蓄積が必要になってくるだろう。

分布

これまでの記録から過去から現在にわたりほぼ県内全域に確実に生息していると考えられる。調査が継続できている鏡野町では現在でも普通に生息していることを確認できている。本州、四国、九州、国外では中国の一部と朝鮮半島に分布しているが、国内においては多くの地域で減少傾向にある。

形態・生息状況

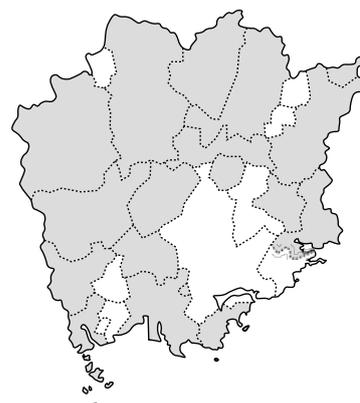
体長は女王20～23mm, 働き蜂11～19mm, 雄14～19mm。女王、働き蜂は頭部・胸部ともに黒色の毛で覆われる。一見、クマルハナバチに似るので同定には注意を要する。ハウスで受粉に使用されている個体と野生種との形態的な区別は困難である。木本・草本各種の花を訪れるので生態系での役割は極めて大きい。

主要文献

美作虫の会 (1968), 青野・奥島 (1994b), 重井ほか (1997, 1998a, 1998b), 加藤ほか (2007), 長瀬・渡辺 (2018), 光畑 (2018)
(加藤 学)



撮影：加藤学



キバネツノトンボ

Libelloides rambur (McLachlan)

アミメカゲロウ目 ウスバカゲロウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

開発による草地の消滅や治水工事による河川敷の整備などで、生息基盤が脅かされている。特に最近では、太陽光発電所の設置に伴う土地の造成は無視できない。また一方で、里山における草地管理の在り方が変化し、植生遷移により草地が消滅しているほか、除草剤の影響も想定される。過疎化と共に増加した休耕地を掘り所に発生している場所もあるが、それらもいずれ消滅する可能性が高い。

分布

県内では中北部から主に記録がある。南部では1940年代に倉敷市から発見例があるものの、近年の記録は無い。

国内では本州・九州に分布する。



撮影：千田喜博

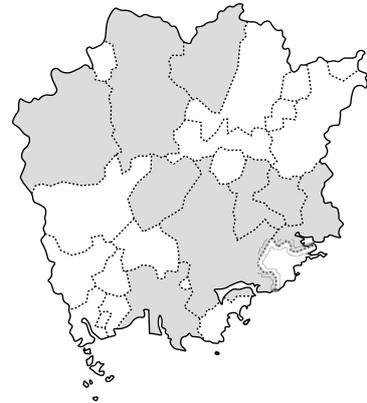
形態・生息状況

体長30mm，前翅長25mm程度で，雌の方がやや大きい。外見は一見トンボ類を思わせるが，触角は長く，先端が潰れた様に丸い。体はほとんど黒色で毛深く，前翅は透明，後翅は黒褐色と黄色のまだら模様。河川敷や里山の草地に生息し，年1回4～6月頃に出現する。日本産のツノトンボで唯一の昼行性の種で，晴天の日には生息地の低空を俊敏に飛翔する。卵は草の茎や低木の枝などに産まれ，幼虫は草の根際や石下に潜み，他の小動物を捕まえて体液を吸う。

主要文献

日本昆虫目録編集委員会編（2016）

（千田喜博）



オオミズスマシ

Dineutus orientalis (Modeer)

コウチュウ目 ミズスマシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

かつては岡山県中部・南部の池や水域に普通に見られたが20年ほど前に大部分の地域で見られなくなった。

ミズスマシ類は水汚染の影響を一番に受ける水面を生活圏としているので農薬等の水質悪化が疑われる。

最近になって再び生息地が発見されつつあるが，限られた地域であり環境の悪化によって絶滅が危惧される。

分布

県内では中南部を中心に全県的に分布していたが現在は南部の少数の地点で確認されているに過ぎない。

県外では北海道，本州，四国，九州，琉球に分布し，国外ではサハリン，シベリア，朝鮮半島，中国，ベトナムに分布する。



所蔵：山地 治

形態・生息状況

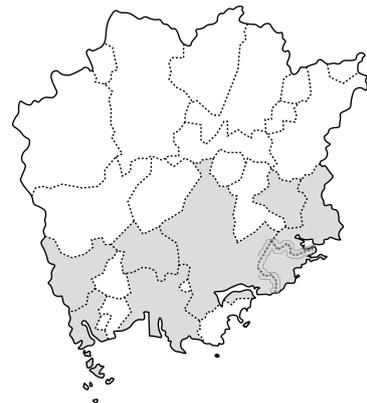
体長7～12mmのミズスマシで，上翅は黒褐色で側縁は黄色，腹側や脚は黄褐色。

山間部や平地の池の表面を滑るように泳ぎ水面に落ちてくる小昆虫などを捕食する。

主要文献

青野・奥島（1994a）

（山地 治）



ヒメミズスマシ*Gyrinus gestroi* Régimbart

コウチュウ目 ミズスマシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

南部や北部の池や水域に見られたが、2000年以降の記録がなかった。最近になって南部で再発見されたが狭い水系で水質悪化により依然絶滅の危険性は高い。かつて見られた北部の水田でもその後いなくなってしまった。

分布

県内では北部南部の記録があったが、一時全域で見られなくなった。最近になって南部の水域で再発見された。

県外では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。
国外では台湾に分布する。



所蔵：山地 治

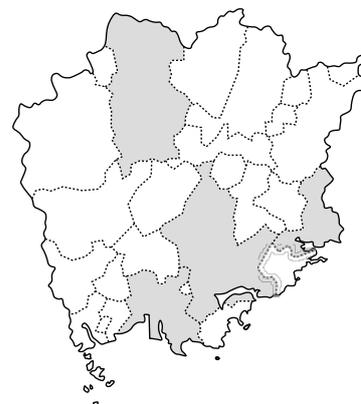
形態・生息状況

体長4.6～5.2mmでミズスマシよりも小さい。体色は光沢のある黒色，脚は黄色，中後脚はオールのような形状をしている。池や止水域の水面を滑るように泳ぎ落ちてくる小昆虫などを捕食する。しばしば水面を輪を描くように回る。

主要文献

山地 (1985)

(山地 治)

**ミズスマシ***Gyrinus japonicus* Sharp

コウチュウ目 ミズスマシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

かつて全域の池や水域に普通に見られたが、2000年頃を境に全ての地域で見られなくなり水質悪化が疑われた。最近になって南部で再び発見されたが依然絶滅の危険性は高い。

分布

県内では中部南部を中心に広く分布していた。
県外では北海道、本州、四国、九州に分布する。
国外では朝鮮半島、台湾に分布する。

形態・生息状況

体長6mm前後のミズスマシで、体色は鈍い光沢のある黒色，脚は黄色，中後脚はオールのような形状をしている。池や止水域の水面を滑るように泳ぎ落ちてくる小昆虫などを捕食する。しばしば水面を輪を描くように回る。

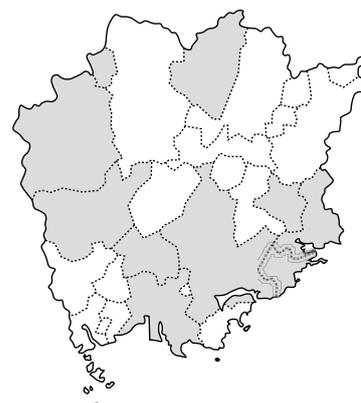
主要文献

青野・奥島 (1994a)

(山地 治)



所蔵：山地 治



コオナガミズスマシ*Orectochilus punctipennis* Sharp

コウチュウ目 ミズスマシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

20年以上記録されていない。河川改修によって環境が変わったのか発見できなくなっている。

分布

県内では河川の中流で記録されている。

よく似た大型のオナガミズスマシが山地溪流に生息するのに対し本種は中流域の河川に生息している。

県外では本州、四国、九州に分布する。

国外では台湾に分布する。



所蔵：山地 治

形態・生息状況

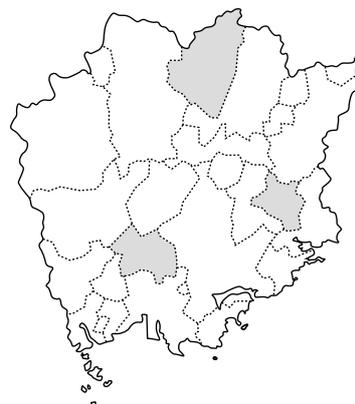
体長6mm前後の小型のミズスマシで、体色は黒褐色で体型は細長い。中・後脚は水面を泳ぐのに適したオール状になっている。

河川の中流域に生息し、流れのある浅い水面を泳ぐ。

主要文献

山地 (1987)

(山地 治)

**オナガミズスマシ***Orectochilus regimbarti regimbarti* Sharp

コウチュウ目 ミズスマシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

山地の河川に生息するミズスマシで河川改修などで減少していると思われるが、昼間は植物の根際などに潜んでいて確認が難しい。水生昆虫の中でもミズスマシ類は水質汚染の影響を受けやすいと思われており、注視していく必要がある。

分布

県内では中国山地帯と吉備高原に分布が知られている。

県外では本州、四国、九州に分布する。

形態・生息状況

体長8.7～10.2mmのミズスマシで、体色は黒色で黄土色に光る微毛に覆われている。複眼が上下に分かれていて、水面、水中を同時に見ることが出来る。山地帯の清流に生息し、夜間水面を泳ぎ灯火にも飛来する。

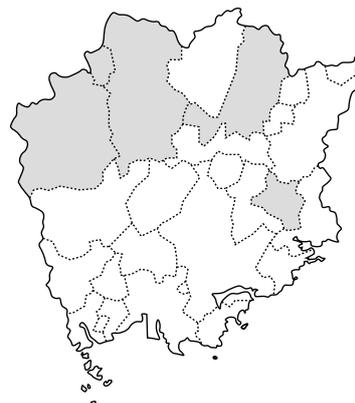


所蔵：山地 治

主要文献

岡山県 (1993)

(山地 治)



キベリマルクビゴミムシ

Nebria livida Bänninger

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

県内からは古い記録が2例のみで、近年の生息情報は全く無く生息の再確認が望まれる。以前は民家の庭先の畑でも多く見られ、わざわざ記録されることもないような種であったがいつの間にかひっそりと姿を消してきた。全国的にも岡山県と同様に近年減少が著しい種として知られている。生息環境の開発や農薬散布などのより生息が脅かされる種である。

分布

県内からは南部平野部からの古い記録がわずかに知られているが、上記のように注目されて報告されるような種で無かったこともあり、本来の分布域の推定も難しい状況である。国内分布は、北海道・本州・四国・九州と広範囲であるが、ここでも各地で衰退が著しく現状は不明な点が多い。



所蔵：倉敷昆虫館
(撮影：山地 治)

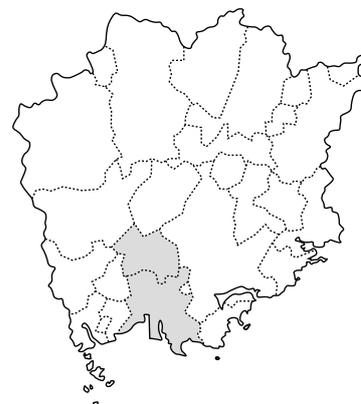
形態・生息状況

体長15mm前後の中型でやや平たい体型のゴミムシで、体色は黒色で前胸・上翅の周囲・脚は黄褐色である。人家近くの畑地などに生息する。

主要文献

小野 (1951)

(渡辺昭彦)



ヨドシロヘリハンミョウ

Callytron inspeculare inspeculare (W. Horn)

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

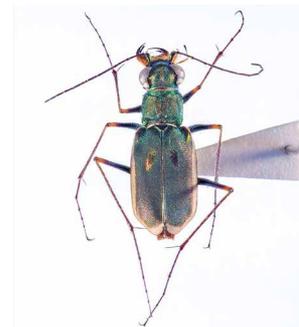
選定理由

現存している生息地は1カ所のみであり、近年では成虫を見つけることが困難になってきている。吉井川河口付近で多数見られたという記録もあるが、護岸が整備され、その場所では絶滅している。アシ原の付随した自然状態の浜の残されている場所は僅かであり絶滅が危惧される。

分布

県内では旭川河口付近、吉井川河口付近での記録があり河口から離れた標高150m付近の水銀灯に飛来した記録もある。

県外では瀬戸内海に面した本州、四国と九州の海岸線、種子島に分布する。



所蔵：山地 治

形態・生息状況

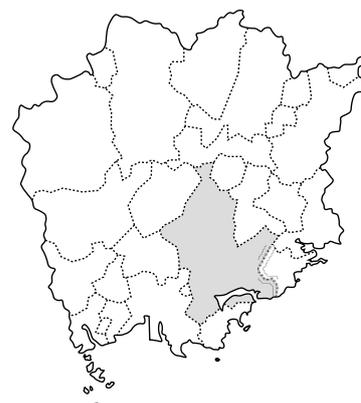
体長9～12mmのハンミョウで体色は緑色を帯びた暗い灰色で翅の側縁に白帯がある、よく似たシロヘリハンミョウとは側縁の白帯が太く雌の上翅にある鏡紋が不鮮明で光沢がないことなどで区別される。

大きな河川の河口付近の泥状の水辺に生息し短い距離を飛び、ハエなど昆虫を捕食する。幼虫も泥状の地面の穴に潜り、近くを通る小生物を捕食する。巣穴は満潮時に水没するような場所にある。

主要文献

山地 (2002)

(山地 治)



シロヘリハンミョウ

Callytron yuasai yuasai (Nakane)

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

倉敷市の海岸で記録されている。

生息地は近距離の2カ所のみであり生息範囲が狭いため土地の改変によって絶滅する恐れがある。

シロヘリハンミョウは国内では岡山県以外は外洋に面した海岸に生息していて外洋から遠く離れた瀬戸内海の中ほどにある岡山県の生息地は貴重である。

分布

県内では児島半島南端の狭い岩浜に生息している。県外では本州、四国、九州、伊豆諸島、対馬、琉球に分布し、国外では朝鮮半島、中国、台湾、海南島、ベトナムに分布している。



所蔵：山地 治

形態・生息状況

体長9～12mm、体色は緑色を帯びた暗色で上翅の側縁及び翅端の白帯は細く、細かいがはっきりとした網目状印刻を持つ。

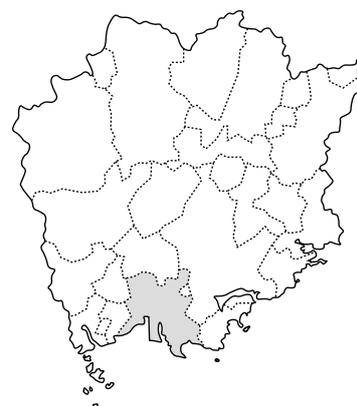
前胸背板後角はやや張り出し、雌の上翅にある鏡紋は明瞭で光沢があることなどで近似種のヨドシロヘリハンミョウとは区別される。

狭い岩浜に生息していて岩や崖に止まりながら短い距離を飛行する。垂直に近い崖面にも止まることが出来る。

主要文献

奥島 (1994), 土畑 (1997)

(山地 治)



カワラハンミョウ

Chaetodera laetescrpta laetescrpta (Motschulsky)

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

高梁川、吉井川の下流で記録が2例あるだけで1960年以降現在まで追加記録がない。

当時は灯火に飛来したものが採集されており、生息環境の変化に加えて灯火に誘引されることで個体数の減少をまねいたものと思われる。瀬戸内海側の本種の記録地は僅かであり本種の分布を考える上で岡山県の記録は極めて重要である。

分布

県内では倉敷市と岡山市に記録がある。

県外では北海道、本州、四国、九州に分布、国外では朝鮮半島、中国、サハリン、シベリア南東部、モンゴルに分布する。

所蔵：倉敷昆虫館
(撮影：山地 治)

形態・生息状況

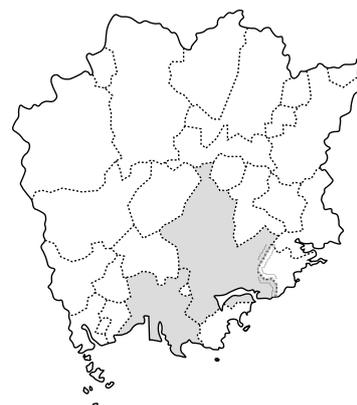
体長14～15mm前後のハンミョウで、体色は背面が白地に暗色の紋があるが、地域により暗色の紋の大きさが異なる。腹部は金属光沢のある紫銅色。海岸の砂地などに生息し近い距離を飛び小さな昆虫などを捕食する。

幼虫は地中に堅穴を掘って潜み、近くを獲物が通ると鋭いキバで捕食する。

主要文献

青野・小野 (1976)

(山地 治)



ルイスハンミョウ*Cicindela lewisi* Bates

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧 I B類 (EN)

選定理由

1966年に高梁川下流域で水銀灯に飛来した個体一例があるだけで現在まで他に追加記録がない。

採集地点付近は河川改修されゴルフ場や工場地帯となっている。近くに本種の生息できるような砂地の岸辺は残っていない。

全国的にも生息地は少なくいずれの地においても減少が報じられている。

分布

県内からは高梁川河口の一例だけが知られている。

中部以西の本州、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島、済州島、中国北部に分布する。

形態・生息状況

体長15～18mm上翅は暗色で肩紋、中帯紋、翅端紋は白い。腹部は青緑ないし青紫色の光沢を有す。

河口付近の砂地に生息し昆虫などの微小生物を捕食する。

幼虫は地面に縦穴を掘りその中に隠れ、近くを通る獲物を捕食する。

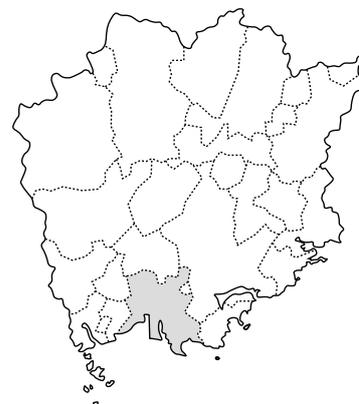
主要文献

青野 (1987)

(山地 治)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：山地 治)

**エリザハンミョウ***Cylindera elisae elisae* Motschulsky

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県南部の海岸や県中北部の河川の河原や湿地に生息しているが護岸工事などで生息に適した海岸線や河川敷が減少している。多数生息していた海岸で護岸工事の後まったく見られなくなったところもあり普通に見られた本種が激減している。

分布

県内では自然海岸や河川敷きの砂地などに分布している。

国内では北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島に分布し、国外では中国、台湾、シベリア南東部、モンゴル、チベットに分布。

形態・生息状況

体長9～11mmのハンミョウで緑色を帯びた暗色の背面に上翅の両側と曲がった模様が翅の合わせ目に向かって伸びているが会合部までは達しない。翅端部も白い。かつては、海岸や河川の砂地に普通に見られた。

海岸に生息している個体と河川中流などに生息している個体は形態的に区別可能だという説もある。

幼虫は湿った地面に穴を掘って潜み、近くを通った昆虫などを捕食する。

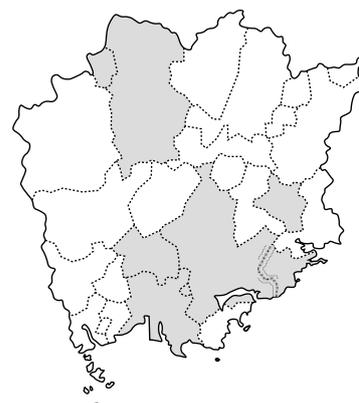
主要文献

青野 (1983)

(山地 治)



所蔵：山地 治



ホンハンミョウ*Cicindela gracilis* Pallas

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

1950年代には南部丘陵地での記録があるがその後の記録は中国山地帯のみで南部の産地では絶滅したと思われる。

中国山地帯の牧場や山道で生存が確認されているが植生の遷移や開発等により環境が変化してきており、存続が危ぶまれる。

分布

県内では蒜山高原、恩原高原周辺などに分布しているが岡山市、倉敷市の南部丘陵地では絶滅したと思われる。

県外では北海道、本州、四国、九州に分布し、国外ではモンゴル、シベリア、朝鮮半島、中国北部に分布する。



撮影：山地 治

形態・生息状況

体長10～12mmの体型の細いハンミョウで、体色は黒く、上翅の両側に白紋がある。後翅が退化し飛ぶことは出来ない、草のまばらに生えた山道や高原で素早く歩き回る姿はヤマアリなどのアリにそっくりである。アリに擬態しアリを捕食すると言われている。

幼虫は地面に穴を掘り、近くを通った小昆虫などを捕食する。

主要文献

桂 (1973)

(山地 治)

**オサムシモドキ***Craspedonotus tibialis* Schaum

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

かつては海岸や河原で普通に確認できたが、最近の記録は少なく、2000年以降の採集記録は2件しか確認できなかった。倉敷市沙美海岸では海岸を整備して以降の記録がない。護岸工事や水辺の整備などで生息環境である砂地が減少し、本種も激減しているものと思われる。

分布

県内で真庭市と県南部の海岸や河原に分布する。

県外では北海道、本州、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。



所蔵：山地 治

形態・生息状況

体長20～24mmの大型のゴミムシで、体色は光沢の無い黒色。

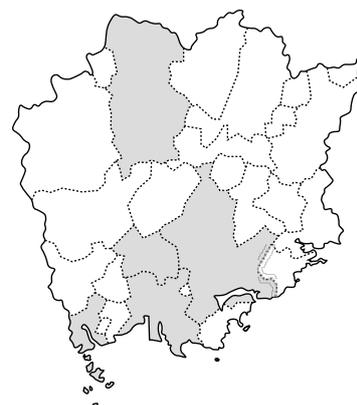
特異な形をしていて他のゴミムシとは容易に区別できる。

海岸や河原の砂地に生息し、昼間は砂の中に潜っていることが多い。

主要文献

青野 (1989)

(山地 治)



キバナガミズギワゴミムシ*Bembidion yokohamae* (Bates)

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

河口近くの汽水域の浜辺に生息しているゴミムシで元々生息範囲が限られている上、河川改修によって生息場所は僅かになっていて、少しの環境変化で絶滅の可能性がある。

分布

岡山市の旭川と吉井川の河口近くで記録されている。
県外では本州、四国、九州に分布する。

形態・生息状況

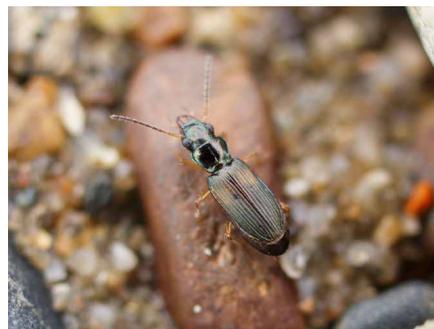
体長4.2mm前後の細長いゴミムシで背面は暗色、不明瞭な暗黄褐色の紋を持つ個体が多い。近似種のキバネキバナガゴミムシとは上翅の色や後転節が正常な形であることなどで区別できる。

大きな河川の河口近くの汽水域の浜に生息し、満潮時には水中の石の間にいると考えられる。

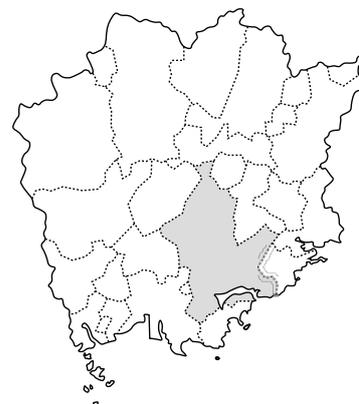
主要文献

山地 (1994)

(山地 治)



撮影：山地 治

**キバネキバナガミズギワゴミムシ***Bembidion aestuarii* S.Uéno et Habu

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

河口近くの汽水域の浜辺に生息しているゴミムシで生息可能範囲がもともと限られている上、河川改修によって生息場所は僅かになっている。少しの環境変化で絶滅の可能性がある。

分布

岡山市の旭川と吉井川の河口近くで記録されている。
県外では本州、四国、九州に分布する。

形態・生息状況

体長4.5mm前後の細長いゴミムシで背面は黄褐色、不明瞭な暗色の紋を持つ個体が多い。近似種のキバナガゴミムシとは上翅の色や後転節が長いことなどで区別できる。

大きな河川の河口近くの汽水域の浜に生息し、干潮時には泥状の地面を歩き回る。満潮時には水中の石の間にいると考えられる。しばしばキバナガミズギワゴミムシと混生する。

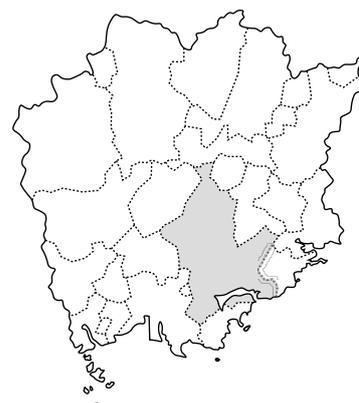
主要文献

山地・渡辺 (1991)

(山地 治)



撮影：山地 治



ドウイロハマベゴミムシ*Pogonus itoshimaensis* Habu

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

瀬戸内市の塩田跡地の湿原に生息していて、生息地は人為的な環境で不安定である。隣接する広大な土地が開発されたことにより、本種の生息地に影響が出ることが懸念される。

全国的に見ても産地は数か所しかなく、県内の産地は貴重である。

分布

瀬戸内市の塩性湿地の狭い範囲に分布する。

県外では北海道、本州、九州に分布。

形態・生息状況

体長約6.5mmのゴミムシで、体色は真鍮色で光沢がある。

汽水域のアシ原に背接する裸地に生息し粘土質の地面のひび割れの中やアッケシソウの根際などに潜みながら地面を歩く。瀬戸内市の産地では同属のハマベゴミムシと同所的に生息している。

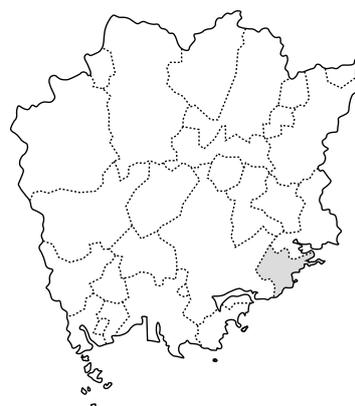
主要文献

山地 (2000)

(山地 治)



撮影：山地 治

**ハマベゴミムシ***Pogonus japonicus* Putzeys

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

瀬戸内市の塩田跡地の湿原で記録されており、生息地は人為的な環境で不安定である。

隣接する広大な土地が開発されたため、生息地の環境が変われば絶滅の恐れがある。

全国的に見ても産地は数か所しかなく、県内の産地は貴重である。

分布

瀬戸内市の塩性湿地の狭い範囲に分布する。

県外では北海道、本州、四国に分布する。

形態・生息状況

体長約6.5mmのゴミムシで、体色は黒褐色で上翅の周囲は赤褐色。汽水域のアシ原に接する裸地に生息し粘土質の地面のひび割れの中やアッケシソウの根際などに潜みながら地面を歩く。瀬戸内市の産地では同属のドウイロハマベゴミムシとは同所的に生息している。

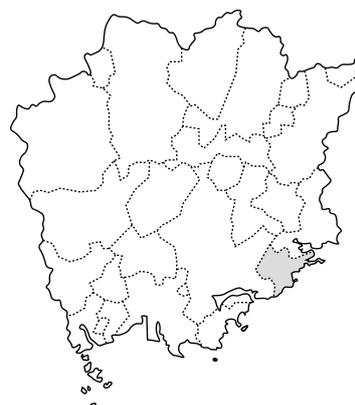
主要文献

山地 (2000)

(山地 治)



所蔵：山地 治



オオサカアオゴミムシ*Callistoides pericallus* (Redtenbacher)

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

1963年4月4日、倉敷市酒津の高梁川東岸で泥地の石下から採集された個体だけが知られている。確認地域は道路を中心とする開発で環境が変わってしまった。

図鑑には関東地方の平地ではやや多いがほかでは少ないという記述があるが、最近では関東地方でもかなり減少している。

その後の記録がないことより絶滅した可能性もある。

分布

倉敷市の高梁川東岸で採集された個体だけである。
本州、四国、国外では中国に分布する。

形態・生息状況

体長12mmのゴミムシで前胸は赤褐色、上翅は黒緑色で、側縁は黄褐色。

アシ原など平地の湿地に生息し、冬季は湿度を保った土壤中に潜って成虫態で越冬する。

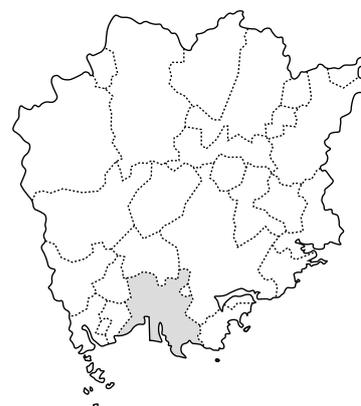
主要文献

大研 (1968)

(山地 治)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：山地 治)

**アオヘリアオゴミムシ***Chlaenius praefectus* Bates

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠA類(CR)

選定理由

倉敷市と総社市で50年以上前に採集されその後1996年になって津山市で発見され、現在は中国山地の狭い場所2か所で知られている。全国的にも産地は限られるうえ近年減少が著しく、県内の個体群は全国で残された数少ない産地である。

分布

倉敷市、総社市、津山市に記録がある。

県外では本州、四国、九州、南西諸島に分布し、国外では台湾、中国、東南アジアに分布する。

形態・生息状況

体長16.5mm～17mmの中型のゴミムシで、前胸背は銅緑または赤銅光沢が強く、上翅側縁は緑色に光る。

湿地性のゴミムシと思われ、かつては日本各地で記録されていたが、現在も生息しているのは日本では数カ所である。

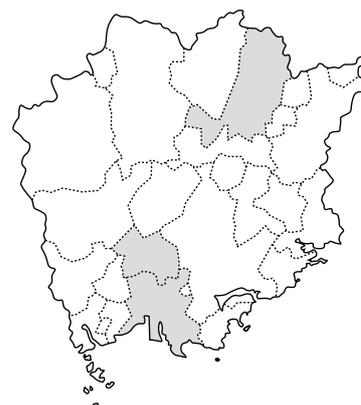
主要文献

山地 (1996)

(山地 治)



撮影：山地 治



ツヤキベリアオゴミムシ*Chlaenius spoliatus motchulskyi* Andrewes

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

1963年に倉敷市で灯火に飛来した個体が知られている。
その後長期間記録がなく、記録された付近は現在では市街地の一部
になっていて現在の生息は考えられない。

一時期は絶滅が疑われたが、最近になって県南部の湿地で再発見
された(未発表)。全国的にも稀な種として知られていて新しく発
見された県内の産地も環境変化によって絶滅する恐れがある。

分布

倉敷市で記録されている(最近の記録地は非公開)。
北海道, 本州, 四国, 国外では朝鮮半島, 中国に分布する。



撮影：山地 治

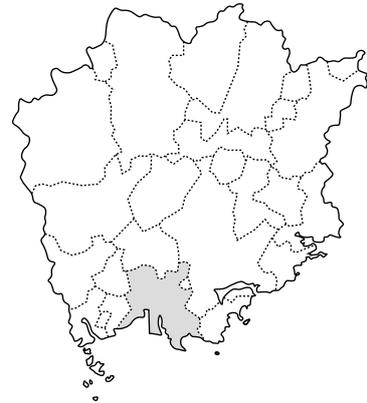
形態・生息状況

体長15.5～16mmのゴミムシで、頭胸部は赤銅色に、上翅は金緑
色で光沢があり、上翅の側縁部は黄褐色。
平地の湿地に生息する。

主要文献

山砥(1968)

(山地 治)

**ホソアトモンアオゴミムシ***Chlaenius junceus* Andrewes

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

県内での記録は1カ所のみであり、国内では他に静岡県の一例だ
けが知られている非常に稀な種である。

30年以上たっても追加記録が出ないのは特殊な環境に生息してい
るのかもしれない。その解明のためにも注視していなければなら
ない。

分布

県内では美作市の一例だけが知られている。
国内では他に静岡県からの一例が知られている。
国外では中国, ジャワからの記録がある。

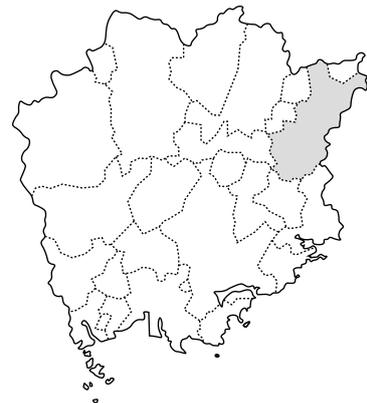
形態・生息状況

体長10.5～12.2mm前後のゴミムシで、頭部は銅色で光沢が強い。
前胸背板は黒色で弱い銅光沢があり、側縁部は青緑色で光沢が強
い。ただし、岡山県産の個体はこの部分が黒色である。上翅は黒色
で、翅端紋は汚黄色。山間部の水田の畔で採集されている。

主要文献

笠原・松本(1989)

(山地 治)



チョウセンゴモクムシ

Harpalus crates Bates

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類

●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

高梁川の下流域で記録があるが未発表記録を入れても最近20年間の記録がない。河川下流は河川改修で河川敷を整備されるとそこを生活の場所としていた種は逃げ場もなく減少していくものと思われる。

分布

倉敷市、総社市で記録されている。
本州に分布し、国外では朝鮮半島、中国に分布する。

形態・生息状況

体長12～16mmのゴミムシで、ゴモクムシの中では少し大型の種類になる。全体黒色で上翅に弱い銅色光沢がある。
河川敷や草地に生息し、灯火にも飛来する。

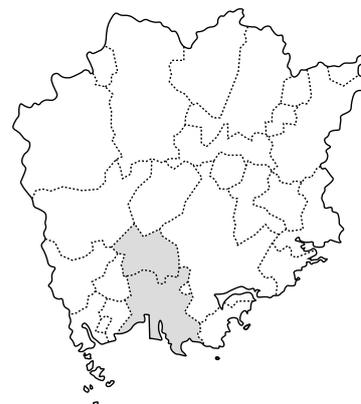
主要文献

青野 (1983)

(山地 治)



所蔵：山地 治



オオヒラタツクリゴミムシ

Brachyodes virens (Wiedemann)

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：情報不足

●環境省：絶滅危惧ⅠA類(CR)

選定理由

50年以上前に倉敷市から記録され未だに追加記録が出ない。
また、全国的にも産地は限られるうえ近年減少が著しく、県内の記録は極めて重要である。ツクリゴミムシ類はすべて湿地の水辺に生息しており都市開発等で生息に適した湿地は減少している。
記録された場所の近くでは同じく希少な湿地性のゴミムシが数種記録されていて、現在では市街地になっているが記録された当時は湿地が広がっていたものと思われる。
本種を含む湿地性の昆虫はあまり調査されていない。分布・生態の解明には継続的な調査が必要である。

分布

県内では倉敷市の一例だけが知られている。
本州、四国、九州に分布し、国外では東南アジア、フィリピン、インド、スリランカに分布する。

形態・生息状況

体長15.5～17mmのツクリゴミムシで池や湿地の水際に生息し、採集地点は現在では湿地環境は残ってなく、同地点では絶滅したと考えられる。

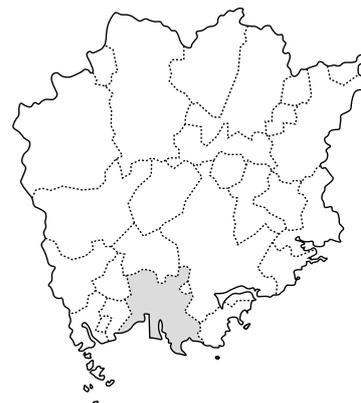
主要文献

山砥 (1968)

(山地 治)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：奥島雄一)



オオトックリゴミムシ*Oodes vicarius* Bates

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

護岸工事されていない池の岸辺や湿地に生息する種であるが、池の整備や湿地の開発などで生息環境は著しく減少している。
2000年以降記録されていない。

分布

県内では北部や南部の湖や池の岸辺で分布が知られている。
国内では本州・九州に分布する。

大陸の草原には近縁種がいくつか知られているが、本種は日本特産種である。



所蔵：山地 治

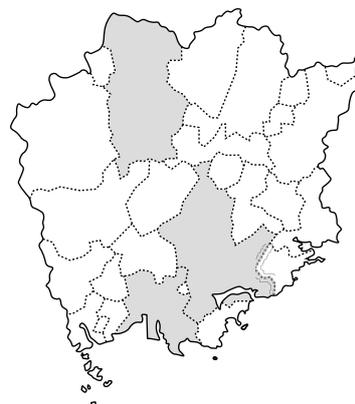
形態・生息状況

体長12～13mm前後の中型のゴミムシで、体色は黒色。池端などの湿地に生息し、冬期は粘土質の土中に潜り成虫で越冬する

主要文献

重井ほか (1989)

(山地 治)

**ヒョウゴマルガタゴミムシ***Amara hiogoensis* (Bates)

コウチュウ目 オサムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

記録がある場所は植生の豊かな湿度の高い場所が多く、近年の温暖化や開発に伴う地面の乾燥化で生息地の減少が危惧される。
元々全国的に記録の少ない種であるが近年の記録はさらに少ない。

分布

県内では西部に記録が偏在しているが石灰岩地域に特有であることも考えられる。

本州、四国、九州に分布し国外では中国に分布する。

形態・生息状況

体長13.5～15.5mmの中型のゴミムシで、体色は光沢のある黒色、近似のナガマルガタゴミムシに似ているがより幅広く大きい。灯火に飛来してきたものなどが採集されている。湿度が高いと思われる地域で記録されている。

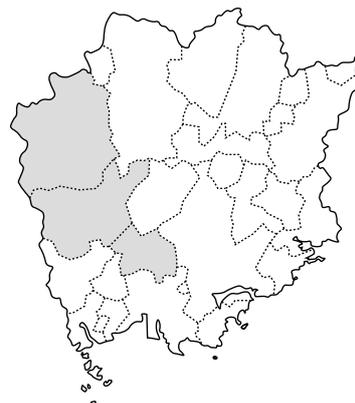


所蔵：山地 治

主要文献

青野 (2001)

(山地 治)



クビボンコガシラミズムシ*Haliphus japonicus* Sharp

コウチュウ目 コガシラミズムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

県内の記録は2カ所のみ。このうち2000年以降の記録は1カ所に留まる。後者の生息地は河川の緩流域とワンドであり、河川開発、川相変化、水質汚濁などによる影響が懸念される。

分布

県内では真庭市からのみ確認されている。
県外では北海道、本州、四国、九州に分布する。

形態・生息状況

体長2.7～3.3mm。卵形で前胸背および上翅は淡黄色、頭部は暗褐色。前胸背板の基部両側には中央付近まで伸びる縦条をそなえる。河川の緩流域やワンド、水の流入がある池などに生息する。旭川では河川緩流域の藻類中から多数が確認された。

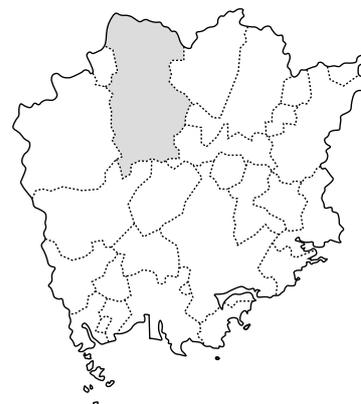
主要文献

山地(1987), 渡部(2015)

(渡部晃平)



所蔵：渡部晃平

**クロホシコガシラミズムシ***Haliphus basinotatus* Zimmermann

コウチュウ目 コガシラミズムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

最近記録されたコガシラミズムシ科の種で、水生植物の豊富な浅い池に生息するが水辺環境の変化により環境の良好な池は減少している。

全国的にも産地が限られていて県内の産地は貴重であり今後の盛衰は注視していかなければならない。

分布

岡山市から発見された。県外では本州、九州に分布する。

形態・生息状況

体長3.5mm。体型は逆卵型で頭部は小さい。

背面は黄色地に黒い紋があり、点刻列が顕著である。

マダラコガシラミズムシによく似ているが上翅会合部の黒線が細く第一点刻列に達しないことで区別できる。

水生植物の豊富な池に生息する。

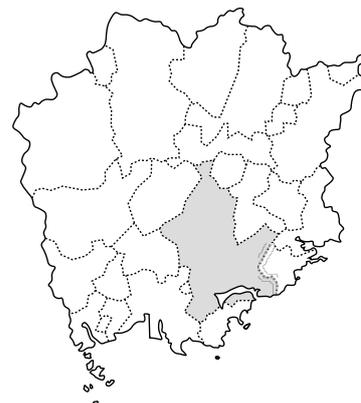
主要文献

井上・中島(2009)

(山地 治)



所蔵：渡部晃平(石川県産)



キイロコガシラミズムシ

Haliphus eximius Clark

コウチュウ目 コガシラミズムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

記録されている地点数は3カ所のみであり、このうち2000年以降の記録は2カ所と少ない。このうち1カ所ではブラックバスなどの侵略的外来種が生息しているほか、ゴミ投棄も見られる。池沼開発、圃場整地、外来種食害、水質汚濁等が懸念される。

分布

県内では赤磐市と岡山市から知られていたが、近年倉敷市でも発見された。

県外では本州、四国、九州、八重山に分布する。

形態・生息状況

体長3.2～3.6mm。卵形で色彩は黄褐色。上翅には黒紋をそなえず、点刻が黒い。ため池や水田、明渠などから確認される。幼虫はシャジクモ類を食べる。灯火に飛来する。

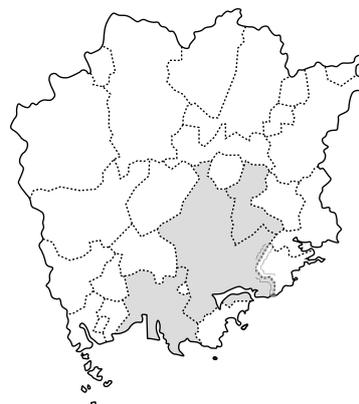
主要文献

山地 (1989), 渡部・新田 (2013)

(渡部晃平)



所蔵：渡部晃平



マダラコガシラミズムシ

Haliphus sharpi Wehncke

コウチュウ目 コガシラミズムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

全国的に少ない種である。岡山県では複数の生息地が知られているが、主要生息環境が水田や明渠、浅い湿地であることから、圃場整地、農薬汚染、耕作放棄などによる影響が懸念される。特に農薬は、影響のある薬剤が施用されることになれば地域単位で急速に激減する恐れがある。

分布

県内では中南部の止水域で記録されている。

北海道、本州、四国、九州に分布するが局地的である。

形態・生息状況

体長3.0～3.5mm。卵形で色彩は黄赤褐色。上翅には黒紋をそなえる。ため池からも少数が発見されるが、水田や明渠では高密度で生息することが多い。幼虫はシャジクモ類を食べる。灯火に飛来する。

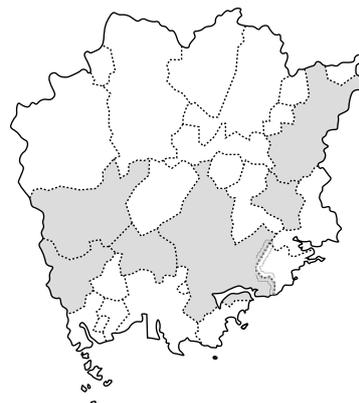
主要文献

山地 (1990, 2005), Nakanishi (2012), 渡部・日鷹 (2013), 渡部・新田 (2015)

(渡部晃平)



撮影：渡部晃平



ムツボシツヤコツブゲンゴロウ

Canthyrus politus (Sharp)

コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

県内では岡山市内の3例でしか記録がない。本種は中県南部の低地のジュンサイなどが生えて植生が豊富なため池に生息しており、そのような生息地は水質汚濁や外来種の侵入、開発等によりその生息基盤はきわめてぜい弱であり、生息地の環境悪化や消滅が心配される。

分布

県内では岡山市の3例が知られている。他に未公表であるが、倉敷市内でも1ヶ所の生息地を確認しており、近年の発生も確認されている。

本州、四国、九州から南西諸島に分布し、国外では中国から知られている。



所蔵：末長晴輝

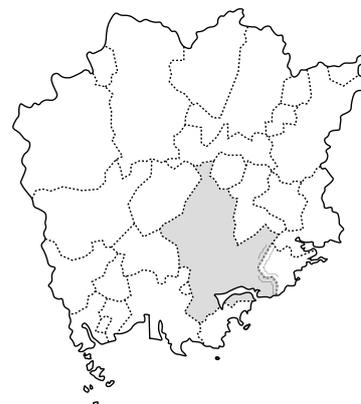
形態・生息状況

体長2.4～2.6mmのゲンゴロウで、上翅は黒地に6紋の黄色い斑紋を装うが、変異があり斑紋を全く欠く型も出現する。成虫はジュンサイなどの浮葉植物をはじめとした水生植物の豊富な低地のため池に生息しており、生息地での個体数は多い。

主要文献

井上・中島(2009), 山地(2012)

(末長晴輝)



キボシチビコツブゲンゴロウ

Neohydrocoptus bivittis (Motschulsky)

コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

県内では2ヶ所しか生息地が知られておらず、いずれの生息地も低地のため池であり水質汚濁や外来生物による捕食圧、植生減少、土地開発、マニア捕獲などによる脅威にさらされており、その生息基盤はきわめてぜい弱である。

分布

国内では本州と四国、九州の数十か所でしか記録されておらず、現存する生息地もわずかにしか残されていない状況である。県内では赤磐市と倉敷市の丘陵地にあるため池で得られている。国外では台湾、中国、タイ、ミャンマー、ベトナム、インドに分布する。



所蔵：末長晴輝

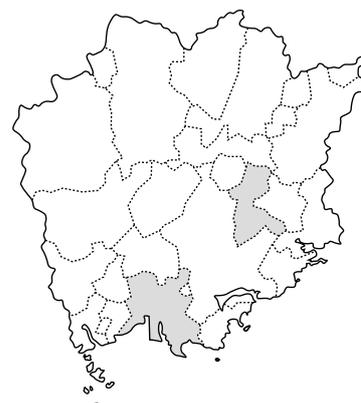
形態・生息状況

体長約4mmの小型のゲンゴロウの仲間で、頭部と前胸、触角、脚は黄褐色である。上翅は黒地に3対の細長い黄褐色の斑紋を装う。成虫は池のへのりの浅瀬に生息し、水際の植物の根際にいると考えられる。

主要文献

森・北山(2002), 末長(2017a)

(末長晴輝)



ムモンチビコツブゲンゴロウ*Neohydrocoptus* sp.

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

最近記録された小型のゲンゴロウで、水生植物の豊富な浅い池に生息する。

全国的にも産地が限られていて県内の産地は貴重であり今後の盛衰は注視していかなければならない。

分布

岡山市の湿地で確認された。

県外では本州、四国、九州に分布する。

形態・生息状況

体長2.2mmの小型のゲンゴロウで体型は長い逆卵形。

背面は網状印刻に被われやや強い光沢がある。

チビコツブゲンゴロウに近似であるが上翅が無紋であることにより区別される。



所蔵：渡部晃平
(福岡県産)

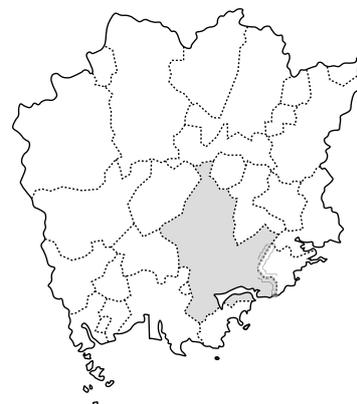
特記事項

未記載種であるが環境省のレッドリストには登録された。

主要文献

森・北山(2002)

(山地 治)

**キベリクロヒメゲンゴロウ***Ilybius apicalis* Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

かつては県南部の平野の用水路などに見られたが最近の30年ほどの記録が見当たらない。平地の水環境は悪化しており、かなり減少しているものと思われる。

分布

県南の用水などで記録されている。

県外では北海道、本州、四国、九州、南西諸島(トカラ)に分布。国外では朝鮮、中国などに分布する。

形態・生息状況

体長8～10mm前後のゲンゴロウで、体型は長い楕円形。

背面は弱い金銅光沢を帯びた黒褐色で、肩部から後方へ徐々に広がる黄褐色の帯紋がある。

ヨシなどが生えている比較的大きな池沼に生息している。

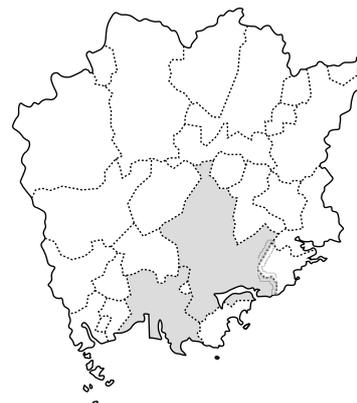


所蔵：山地 治

主要文献

山地(1986), 森・北山(2002)

(山地 治)



キベリマメゲンゴロウ

Platambus fimbriatus (Sharp)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

主に河川の中下流で記録されているが、そのような場所の川岸は整備されて環境が変わってしまった場所も少なくない。

最近の異常天候により増水、河原の様相の一遍などによりかなりの影響を受けているものと思われ減少が危惧される。

分布

県内では主に河川の中、下流に分布しているが上流域での記録もある。

県外では北海道、本州、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島、中国に分布する。

形態・生息状況

体長6.5～8.0mmの中型のゲンゴロウで、体型は長楕円形でやや厚い上翅は黒褐色で周囲に沿って黄色い紋があり、側縁は黄色。河川清流の岸辺近くの浅い部分に住む。

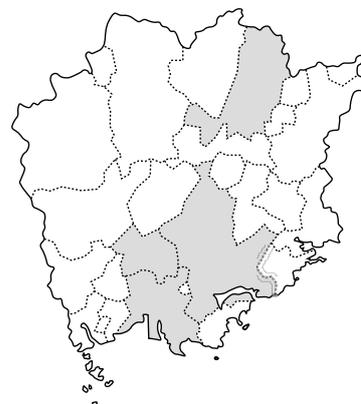
主要文献

山地 (1990), 森・北山 (2002)

(山地 治)



所蔵：山地 治



モンキマメゲンゴロウ

Platambus pictipennis (Sharp)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

主に河川の上中流で記録されている種で、そのような場所の川岸は整備されて環境が変わってしまった場所が多い。

最近の異常天候により増水、河原の様相の一遍などによりかなりの影響を受けているものと思われ、かつては河川のよどみなどで普通に見られたが2000年以降の記録が極端に少なくなった。

分布

県内では主に河川の上、中流に分布している。

県外では北海道、本州、四国、九州に分布し、国外ではサハリン、朝鮮半島に分布する。

形態・生息状況

体長6.5～8.7mmの中型のゲンゴロウで、上翅は黒褐色で強い光沢があり、黄色い紋があるが個体変異が著しい。

河川清流の岸辺近くの浅い場所の石の下や植物の間に見られる。

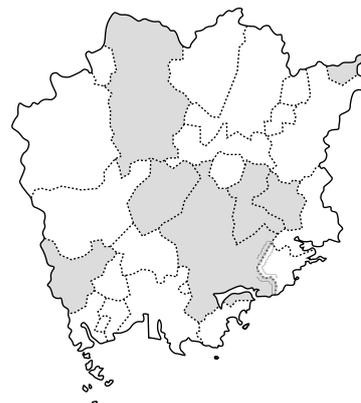
主要文献

桂 (1973), 森・北山 (2002)

(山地 治)



所蔵：山地 治



オオヒメゲンゴロウ*Rhantus erraticus* Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

確認されているのは真庭市北部に限られ、生息地は数カ所で個体数も少ない。生息地の多くは遷移の進行した耕作放棄地や湿地であることから、圃場整地や哺乳類の掘り起こしによる漏水、自然災害による土砂の堆積など、生息環境の悪化および消失が懸念される。

分布

県内では真庭市北部で発見されているのみ。
県外では北海道、本州に分布している。

形態・生息状況

体長13～14mm。体型は長めの楕円形で扁平。光沢は鈍い。頭部の複眼間にある褐色の紋が扇型になること、前胸背中央部の黒紋が横長になること等により、近似種のヒメゲンゴロウと区別できる。

止水域に生息し、薄暗く浅い湿地状の水域を好む。岡山県では6月に幼虫が確認されている。

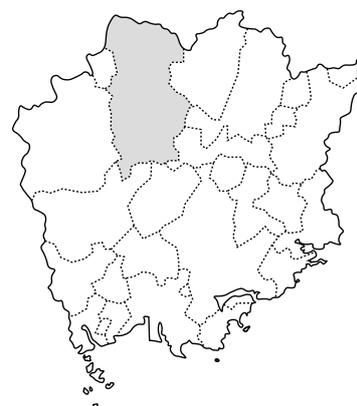
主要文献

森・北山（2002）、渡部（2011、2013、2015）

（渡部晃平）



撮影：渡部晃平

**マルガタゲンゴロウ***Graphoderus adamsii* (Clark)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

岡山市と総社市の古い記録があるが、最近30年近く記録がない、全国的にも産地は限られるうえ近年減少が著しく、県内の記録は極めて重要である。

分布

県内では岡山市と総社市の記録が知られているだけである。

県外では北海道、本州、四国、九州に分布、国外では朝鮮半島、中国などに分布する。

北海道には同属の近縁種カラフトマルガタゲンゴロウも分布している。

形態・生息状況

体長12～14.5mmの中型のゲンゴロウで、体型は卵形で強く盛り上がり光沢がある。全面に微細な点刻を装う。

自然度の高い池に生息するが護岸工事や水質悪化などが原因なのか発見できなくなった。

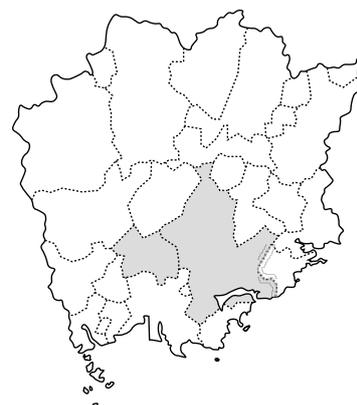
主要文献

山地（1990）、森・北山（2002）

（山地 治）



所蔵：山地 治



マルコガタノゲンゴロウ

Cybister lewisianus Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠA類(CR)

選定理由

1952年に倉敷市の記録があり、1980年代には美作市の池に生息していることが確認され、別の池での確認例もあったが、直後に確認出来なくなり、その後県内からは一切確認されていない。

全国的にも稀な種類として知られていて絶滅が危惧される。

分布

県内では倉敷市と美作市に記録がある。

本州、九州に分布し、国外では中国、インドシナ半島に分布する。

形態・生息状況

体長21～26mmの大型のゲンゴロウで、体型は卵型で比較的厚い。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で強い光沢がある。側縁の黄縦帯紋が翅端に向かって細くなる。体下面は黒褐色。

水生植物の生えた比較的大きな池沼に生息するが極めて稀な種類である。

大きさの近い近似種のコガタノゲンゴロウとは体型、腹部の色で区別される。

特記事項

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種

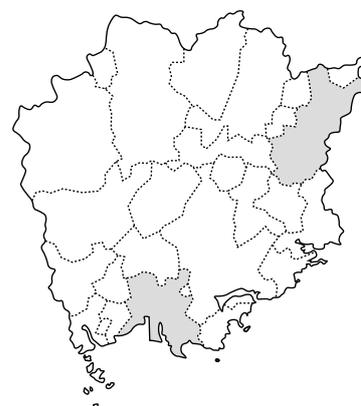
主要文献

森・北山(2002)

(山地 治)



所蔵：山地 治



コガタノゲンゴロウ

Cybister tripunctatus lateralis (Fabricius)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

1930年代から1950年代に少数の記録があるがその後長期間に渡って記録が途絶えた。この間には県内からは絶滅していた可能性がある。最近になって県北部から記録されたが詳細は発表されていない。鳥取県では生息が確認されており、その分布拡大が県内に及んだものと思われる。まだ個体数は少なく、再び絶滅が危惧される。

分布

県内では岡山市と総社市に古い記録がある。

最近になって県北部で再発見されたが詳細な地名は発表されていない。

本州、四国、九州、伊豆諸島、小笠原、琉球に分布し、国外では朝鮮半島、中国に分布する。

形態・生息状況

体長24～27mmの大型のゲンゴロウで、上翅は黒褐色、側縁の黄縦帯紋は翅端に向かって細くなる。体下面は黒褐色。

池や湖などの止水域に生息し水中の小さい生物を捕食する。

大きさの近い近似種のマルコガタノゲンゴロウとは体型、腹部の色で区別される。

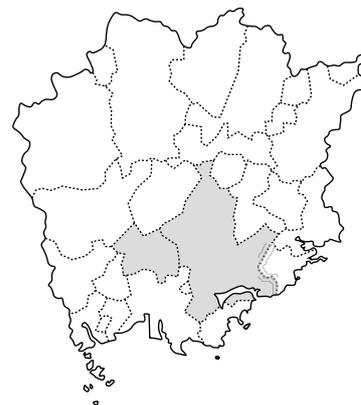
主要文献

吉岡(2011)

(山地 治)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：山地 治)



ゲンゴロウ

Cybister chinensis Motschulsky

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

かつては県内に広く分布していた生息地であった水田が農薬の使用等で生息できなくなり、各地のため池も圃場整理や乾燥化によって消失している。かつて生息していた池がその後の調査で確認できなくなったところが多い。

分布

県内に広く分布していたが、最近では北中部の池から記録されている。

形態・生息状況

大型のゲンゴロウで体長34～42mm。池沼に生息し、水中をすばやく遊泳する。体形は卵型で比較的扁平。背面は緑色あるいは褐色を帯びた暗褐色で強い光沢があるが、雌では弱い。頭部、前胸背、及び上翅の側縁部は黄色～淡黄褐色。ゲンゴロウ類は蛹化のために上陸する必要があるため、コンクリート護岸のなされた池では繁殖が出来ない。

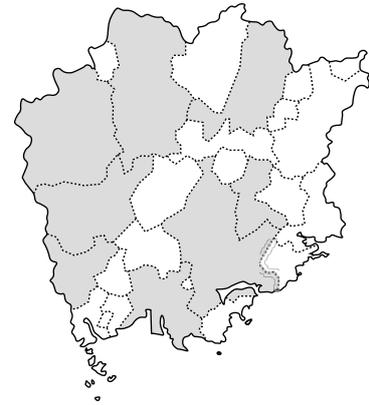
主要文献

栗原(1939), 森・北山(2002)

(末宗安之)



撮影：山地 治



シマゲンゴロウ

Hydaticus bowringii Clark

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

かつては池や水たまりなどで普通に見られたが、20年ほど前から記録が無くなり、そのころ急速に減少したものと思われる。

分布

北部や中南部の池で確認されている。

県外では北海道、本州、四国、九州、南西諸島(トカラ中之島、宝島)、国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布している。

形態・生息状況

体長12.5～14mm中型のゲンゴロウで、体型は卵形でよく膨隆し、光沢がある。

体色は黒褐色の上翅に黄色い筋が入る。幼虫、成虫とも止水域の水中にいる。

成虫の後脚はオール状になっていて泳ぐのに適した形態をしている。しばしば灯火に飛来する。

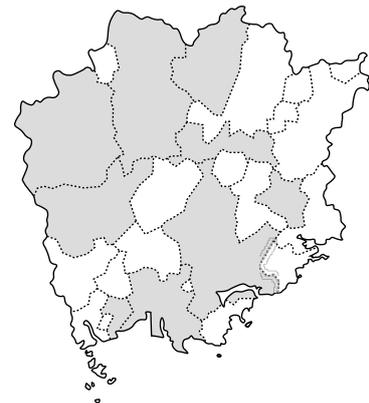
主要文献

青野(1996) 森・北山(2002)

(山地 治)



所蔵：山地 治



コマルケシゲンゴロウ*Hydrovatus acuminatus* Motschulsky

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

県内の記録は10例未満。2000年以降に確認された生息地は数カ所である。生息地の中には休耕田も含まれているため、遷移の進行による陸地化や圃場整地などによる生息地の消失が懸念される。

分布

県内では、中南部のため池や休耕田、湿地などに局地的に分布する。

アフリカ大陸から日本にかけて分布する広域分布種であり、国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。南西諸島および九州においては比較的普通に見られるが、四国および本州においては局地的である。



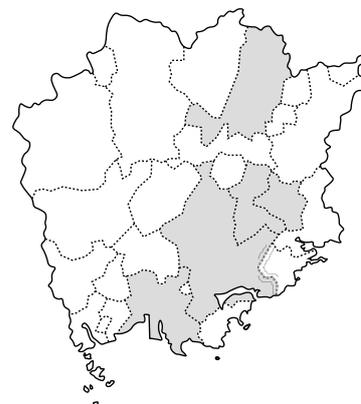
所蔵：渡部 晃平

形態・生息状況

体長2.0～2.5mm。体色は黄赤褐色。卵形で厚みがある。上翅の網状印刻は弱く、光沢が強い。雄交尾器中央片の先端部が扇状になることで、同属の近似種から容易に識別できる。水生植物が豊富な止水域の浅瀬に生息し、水田でも見られる。灯火に飛来する。

主要文献

青野 (1983, 1996, 2000), 山地 (1994), 渡部 (2015)
(渡部晃平)

**オオマルケシゲンゴロウ***Hydrovatus bonvouloiri* Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

生息地は1カ所のみで、個体数も少ない。唯一の生息地にはブラックバスなどの侵略的外来種が生息しているほか、ゴミ投棄も見られる。今後の水質汚濁や池沼開発も懸念される。

分布

県内で確認されているのは倉敷市のため池1カ所のみ。

インドから日本にかけて分布し、国内では本州、四国、九州、南西諸島で確認されている。南西諸島においては生息地が比較的残されているが、九州以北の生息地は局地的である。

形態・生息状況

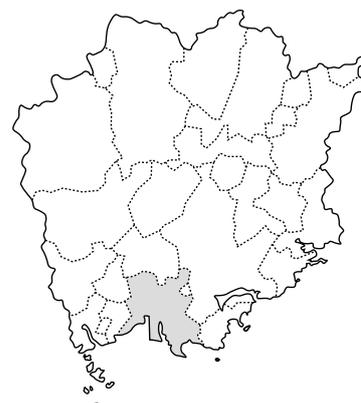
体長3.0～3.8mm。体色は暗赤褐色。卵形で厚みがある。背面は全体的に光沢が強い。水生植物が豊富な止水域の浅瀬に生息する。灯火に飛来する。

主要文献

末長ほか (2017)
(渡部晃平)



所蔵：渡部晃平



サメハダマルケシゲンゴロウ

Hydrovatus stridulus Biström

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

生息地は1カ所のみで、生息個体数も多くはない。唯一の生息地にはブラックバスなどの侵略的外来種が生息しているほか、ゴミ投棄も見られる。今後の水質汚濁や池沼開発が懸念される。

分布

県内で確認されているのは倉敷市のため池1カ所のみ。

東南アジアから東アジアに分布しており、最近になって日本や台湾から発見された。分布の北限は石川県の舳倉島。南西諸島では比較的普通に見られるものの、本州における生息地は局地的である。

形態・生息状況

体長2.5mm前後。体色は黄赤褐色。卵形で厚みがある。上翅の網状印刻は強く鯪肌状となり、雄触角は幅広い。水生植物が豊富な止水域の浅瀬に生息する。灯火に飛来する。

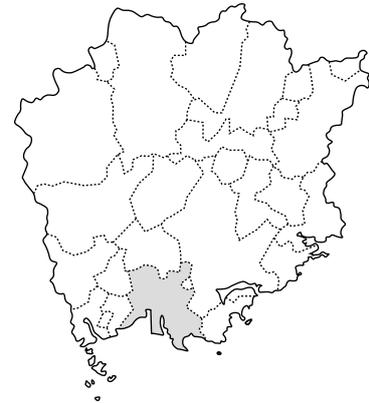
主要文献

末長ほか（2017）

（渡部晃平）



所蔵：渡部晃平



マルケシゲンゴロウ

Hydrovatus subtilis Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

既知記録数は少なく、2000年以降の確実な記録がない。県内記録の中には同属の近似種と誤同定した記録も含まれる可能性があり、実情は不明。加えて、池沼開発、湿地開発、圃場整地、水質汚濁、外来種食害等による影響も懸念される。

分布

県内では中南部から記録されている。

全国的に希少な種で、本州、四国、九州、南西諸島から記録されているが、南西諸島における記録の大半は近似種の誤同定である可能性が高い。

形態・生息状況

体長2.4～2.7mm。体色は黄赤褐色。卵形で厚みがある。上翅の網状印刻は強く、光沢がある。水生植物が豊富な止水域の浅瀬に生息する。灯火に飛来する。

特記事項

過去の記録は同属他種の誤同定の可能性があるため、再検討の必要がある。

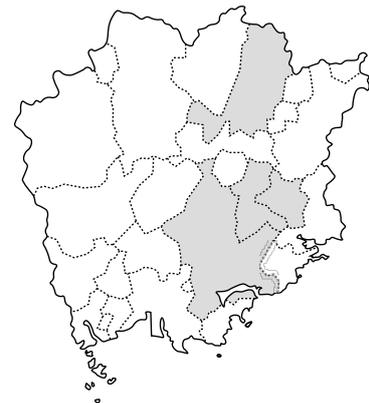
主要文献

山地（1989）

（渡部晃平）



所蔵：渡部晃平（石川県産）



キボシケシゲンゴロウ*Allopachria flavomaculata* (Kamiya)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

1987年に一度採集されたがその後の記録がない。

採集地点の河原は一度整備されてから採集出来なくなった。流水性のゲンゴロウは流れの緩慢や水深、水際の植物など環境が変われば生息出来なくなるものと考えられる。

分布

県内では岡山市の旭川中流域の岸辺で採集されているだけである。本州、四国、九州に分布する。

形態・生息状況

体長約2.5mm内外の小型のゲンゴロウで、体色は黒色に黄色い紋がある。全国的に分布は局地的で個体数の少ない種であり、河川の浅い水中に生息し、石の隙間や落ち葉の下などを泳ぐ。

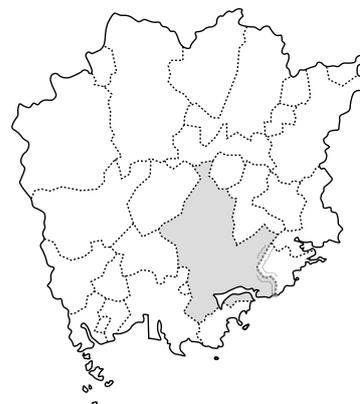
主要文献

山地 (1989), 森・北山 (2002)

(山地 治)



所蔵：山地 治

**ケシゲンゴロウ***Hyphidrus japonicus* Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

池や放棄水田などに普通に見られたが最近になって激減したようで2000年以降の記録がない。

分布

県内では中部、南部の池に分布。

県外では北海道、本州、四国、九州、南西諸島（トカラ列島、沖永良部島）に分布。国外では朝鮮半島、中国に分布している。

形態・生息状況

体長3.8～5.0mm。体型は短卵形。背面は黄褐色から黄赤褐色で雄は光沢が強い。雌では光沢が強い個体から光沢をほとんど欠く個体までいる。

池沼、水田、湿地などの止水環境に広く見られ、灯火にも飛来する。

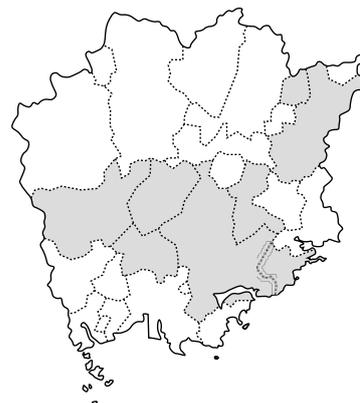
主要文献

森・北山 (2002)

(山地 治)



所蔵：山地 治



ヒメケシゲンゴロウ*Hyphydrus laeviventris laeviventris* Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

1998年に記録されたがその後の記録がない。近似種で普通に見られたケシゲンゴロウも激減しているようで、本種の生息確認が必要である。

分布

県内では備前市鹿久居の記録がある。
県外では本州、四国、九州に分布している。

形態・生息状況

体長4.3～5.0mm。体型は短卵形。背面は暗黄赤褐色で光沢は雄雌ともにやや強い。ケシゲンゴロウに似ているがかなり黒っぽく点刻も粗いことなどから区別できる。

池沼、放棄水田、湿地などの止水域に生息するが産地は局所的で少ない。

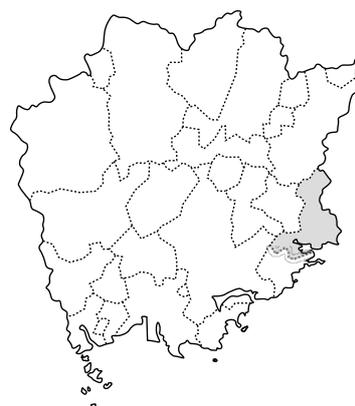
主要文献

森・北山(2002)

(山地 治)



撮影：渡部晃平（石川県産）

**ルイスツブゲンゴロウ***Laccophilus lewisius* Sharp

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

1990年代中頃まで各地の池に普通に見られたがその後の記録が無い。

池や用水などの止水域に生息する水生昆虫は水質の汚染の影響を受けやすいようで本種も水質悪化により減少しているものと思われる現状の生息を確認する必要がある。

分布

北部、中部、南部に分布していた。
県外では本州、四国、九州に分布。国外では中国に分布する。

形態・生息状況

体長3.9～4.7mm。体型は逆卵形で幅広い。背面は短黄褐色～黄褐色で微細な網状印刻に被われやや強い光沢がある。

植生の豊かな低地の池沼、湿地、放棄水田などの止水域に生息する。

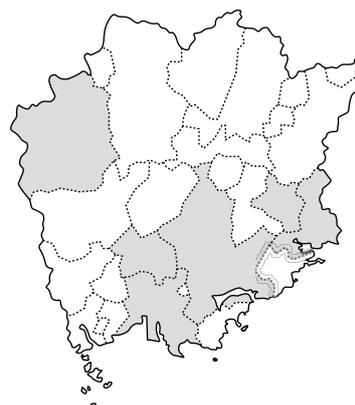
主要文献

山地(1986), 森・北山(2002)

(山地 治)



所蔵：山地 治



シャープツブゲンゴロウ

Laccophilus sharpi Régimbart

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類

●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

1990年代中頃まで各地の池に普通に見られたがその後の記録が無い。

池や用水などの止水域に生息する水生昆虫は水質の汚染などの影響を受けやすいようで本種も水質悪化により減少しているものと思われ現状の生息を確認する必要がある。

分布

県内では中南部の池に分布していて、県外では北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布し、国外では台湾、東南アジア、インド、ネパール、イラン、サウジアラビア、オーストラリアに分布している。



所蔵：山地 治

形態・生息状況

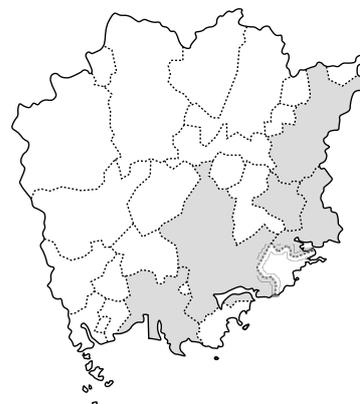
体長3.9～4.7mm。体型は逆卵形で幅広い。背面は短黄褐色～黄褐色で微細な網状印刻に被われやや強い光沢がある。

植生の豊かな低地の池沼、湿地、放棄水田などの止水域に生息する。

主要文献

船越 (1958), 森・北山 (2002)

(山地 治)



チュウブホソガムシ

Hydrochus chubu Balfour-Browne et M. Satô

コウチュウ目 ガムシ科

●岡山県：情報不足

●環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

最近になって県南の湿地で発見された。
全国的には稀な種類で西日本の産地は少ない。
良好な水質の池が少なくなっていることより存続が危ぶまれる。

分布

県内では南部の湿地で発見されている。
本州、四国、九州に分布する。

形態・生息状況

体長2.5mm、体色は暗褐色で上翅の点刻列は顕著、間室は隆起する。近似種のヤマトホソガムシとは、下唇基節の中央が丸くくぼむ点と、上翅第3, 5, 7, 9間室が隆状となる点で識別できる。植生の豊かな池の岸付近に生息していてそういう場所をかき回すと水面に浮いてくる。

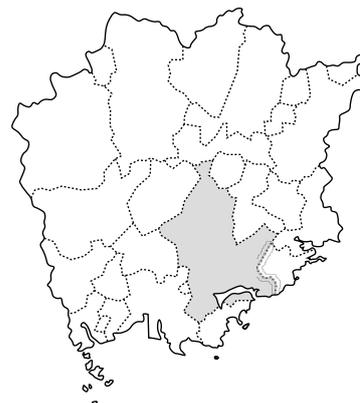


所蔵：山地 治

主要文献

井上・中島 (2009)

(山地 治)



アリアケキイロヒラタガムシ

Enochrus bicolor (Fabricius)

コウチュウ目 ガムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

1994年に*E. yukikooae*として新種記載され、その後旧北区に広く分布する本種と同物とされた。水質の良い湿地などに生息するとされ、欧州では内陸部でも記録がある。しかし、むしろ海岸部で発見されることが多く、塩性湿地に依存していると考えられる。既知産地が全国的に数少ないことに加え、本種の生息に適した塩性湿地は開発によって急速に失われており、存続基盤は脆弱化している。

分布

県内では瀬戸内市の塩性湿地のみから記録されている。

国内では本州・四国・九州から記録があり、国外では旧北区一円から広く知られている。

形態・生息状況

体長5～7mmほどで、体は長卵形、背面は黄赤色～黄褐色だが、頭部は淡黄色。近縁種からは上翅の条溝・点刻の状態などの形質で識別できるが、雄交尾器の確認するのが確実である。

近縁種と同じく、水中で植物質や動物遺体などを食べていると考えられる。灯火にも飛来する。

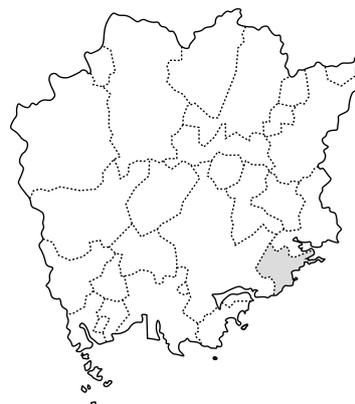
主要文献

Jia & Wang (2010), Kawakami & Hayashi (2010)

(千田喜博)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：千田喜博)



エゾコガムシ

Hydrochara libera (Sharp)

コウチュウ目 ガムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

北方系の種で全国的にも稀、県内では2か所で記録されているが、最初に記録された真庭市の池は水位が下がり消滅した。

継続的な生息地は確認出来ないでいる。

分布

真庭市と新見市で記録されている。

北海道、本州に分布。国外では朝鮮半島、中国に分布する。

形態・生息状況

体長16～18mmの中型のガムシ。水生植物が繁茂する池や放棄水田等に生息している。黒色で長楕円形、背面は膨らみ、腹面はほぼ平たい。近似種のコガムシとは後棟の刺突起が長いこと等で区別できる。

北方系のガムシで西日本の分布地は飛び石的で少ない。

隣接する広島県では東部に比較的分布地が多い。

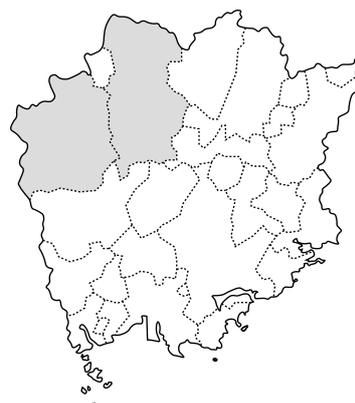
主要文献

山地 (1987)

(山地 治)



所蔵：山地 治



コガタガムシ*Hydrophilus bilineatus caschmirensis* Kollar et Redtenbacher

コウチュウ目 ガムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

1951年に倉敷市で記録されてから60年間記録が途絶えていた。最近になって県南部から立て続けに記録されだして、明らかに生息地が増えてきたと思われる。

全国的に見るとかつては普通種とされていたが、ほとんどの地域で激減したようである。

県内での本種の増減は今後注視していかなければならない。



所蔵：山地 治

分布

県内では1951年に倉敷市での記録があり、2012年以降瀬戸内市、岡山市で確認された。

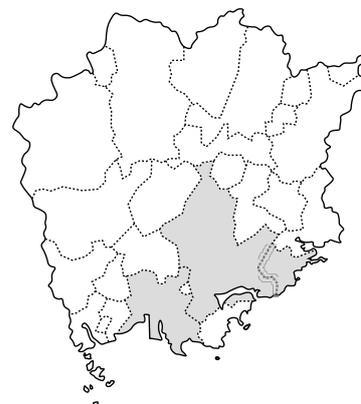
本州、四国、九州、琉球に分布、国外では台湾、中国、東南アジア、カシミール、インド、スリランカに分布する。

形態・生息状況

体長23～28mmの大型のガムシで、黒褐色。近似種のガムシとは少し小さく腹部が細毛に覆われて後胸突起が腹部第4節に達することで区別できる。

(ガムシは腹部が無毛で後突起が腹部第2節に達する)。

植物の豊富な池に生息する。

**主要文献**

小野 (1952)

(山地 治)

ヤマトモンシデムシ*Nicrophorus japonicus* Harold

コウチュウ目 シデムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

記録が少なく、2000年以降記録が途絶えている。

主に平地に生息する本種は都市開発や河川改修などによってネズミなどの小動物の生息地が減少することに直に影響されていると思われる。現在の生息の調査が必要である。

分布

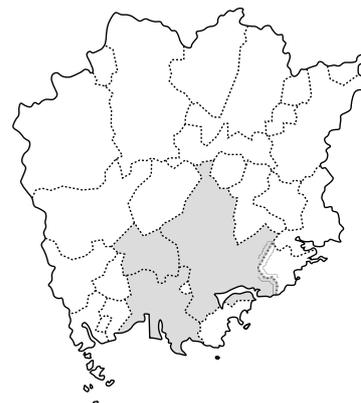
県内では岡山市、倉敷市、総社市に記録があり、県外では本州、四国、九州に、国外では朝鮮半島、中国、モンゴル、台湾に分布している。

形態・生息状況

体長14～25mm背面は黒色、上翅に赤紋がある。

後脛節は明瞭に湾曲し、触角の球桿部は先端3節が橙色。赤紋は会合線に達しない。

主に平地に産し山地には少ない。河原での腐肉トラップなどで確認されている。

所蔵：倉敷昆虫館
(撮影：山地 治)**主要文献**

船越 (1958)

(山地 治)

オオツノハネカクシ*Bledius salsus* Miyatake

コウチュウ目 ハネカクシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

かつては全国的に見られる普通種で、特に塩田の流下盤に坑道を穿つことから、「本邦製塩業上の大問題」とも評される害虫であった。しかし、製塩方法が変化し塩田が廃されたことで生息基盤が脆弱化した。加えて、開発によって本種の生息に適した塩性湿地や干潟が失われており、現存している生息地は全国にも数少ない。

分布

県内では瀬戸内市の塩性湿地と高梁川河口からの記録がある。国内では本州・四国・九州・隠岐に分布し、韓国と中国からも記録されている。

形態・生息状況

体長6～7mmほどで、体は細長く、頭部・前胸背板・上翅は赤褐色、腹部は黒色。雌雄ともに前頭部に1対の突起を備え、雄はそれに加えて前胸背板に1本の角を有する。

生息地の地面に坑道を穿ち、昼間はそこに潜み夜間に活動する。灯火にもよく飛来する。年3～4回発生するとされる。

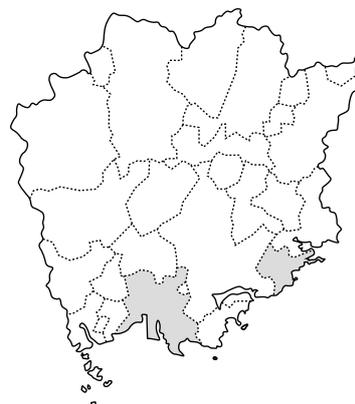
主要文献

Miyatake (1963), 松沢 (1964)

(千田喜博)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：千田喜博)

**オオクワガタ***Dorcus hopei* (Saunders)

コウチュウ目 クワガタムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

かつては県内に広く分布していたと考えられるが、手入れされた雑木林の減少に加え、個体数の減少にはクワガタブームによる集中的な採集圧も影響している可能性がある。近年における採集記録はきわめて少ない上、1990年代以降は、国内外の産地に由来する生体がペットとして大量に流通するようになり、野外で発見された個体でもペット由来の可能性がある。そのような逸出個体は、野生個体との交雑により、遺伝子汚染を引き起こすことが危惧される。

分布

県内では、主として平地から低山地にかけての里山的環境に見られるが、おそらく分布は局所的で生息地においても個体数は少ないと思われる。

亜種*D. h. binodulus*は、北海道、本州、佐渡島、四国、九州、対馬、朝鮮半島、中国東北部に分布。別亜種が中国中南部（黄河以南）から知られる。

形態・生息状況

体は全体黒色でがっしりとしている。体長は雄21.0～76.6mm、雌22.0～48.0mm。樹液に集まるが、昼間は大木の樹洞に隠れていることが多い。

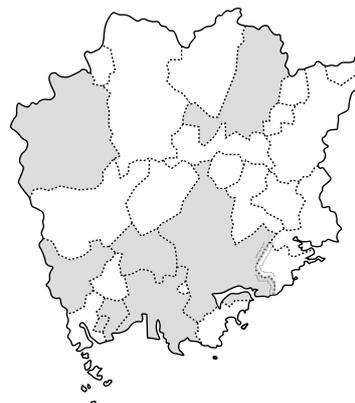
主要文献

池上・奥島 (2011), 岡島・荒谷監修 (2012)

(奥島雄一)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：奥島雄一)



クロモンマグソコガネ

Aphodius variabilis Waterhouse

コウチュウ目 コガネムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

50年以上前の記録と標本が残されているがその後の記録がない。全国的に絶滅に瀕している種であるが他県の産地によっては現在も生息している所もあり、県内に生息地が残っている可能性もある。

分布

県内では南部，中部での記録と標本が残されている。

国内では本州，九州，伊豆半島，対馬，トカラ列島，国外では朝鮮半島に分布する。

形態・生息状況

体長5～7mmのマグソコガネで，体色は黄褐色で上翅中後部に黒い紋がある。成虫は晩秋～早春に出現して平地～低山地で日向の牛馬，犬，人糞などに集まる。

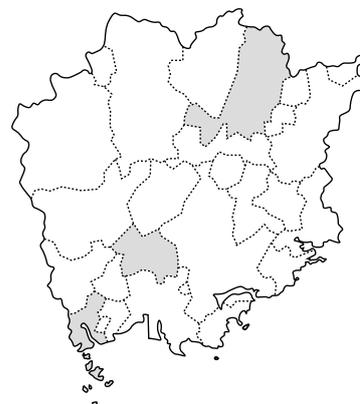
主要文献

竹内・山地 (1996)，川井ほか (2005)

(山地 治)



所蔵：倉敷昆虫館
(撮影：山地 治)



オオフタホシマグソコガネ

Aphodius elegans elegans Allibert

コウチュウ目 コガネムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

50年ほど前の記録が多く，最近の記録は少ない。牧場の牛馬などの糞に依存していると言われていて，牛馬の飼育形態や飼料の変化，感染予防薬剤の影響などによって全国的に減少しているとされている。2019年にわずかながら生息していることが確認された。

分布

県内ではかつては北部から南部まで分布していた。県外では北海道，本州，四国，九州，佐渡，伊豆諸島，壱岐，対馬，五島列島，トカラ列島，奄美大島に，国外では朝鮮半島，中国に分布する。

形態・生息状況

体長11～13mm。光沢のある黒色で，上翅は黄色で各翅の後半に大きな黒紋がある。

牧場などのオープンランドの牛馬の糞に集まり，糞の下の地面に穴を掘り，貯めた糞に産卵し，幼虫はその糞を食べて成長する。

春と秋に個体数を増す。

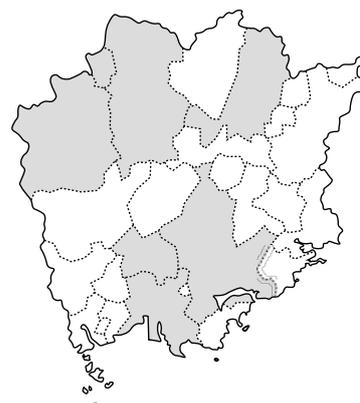
主要文献

川井ほか (2005)

(山地 治)



所蔵：山地 治



ヨツボシマグソコガネ

Aphodius sordidus (Fabricius)

コウチュウ目 コガネムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

40年ほど前の記録が多く、牧場の牛糞の下に多く見られたが、最近の30年間は記録がない。糞虫類は牛馬の飼育形態や飼料の変化、感染予防薬剤の影響などによって全国的に減少しているとされており、本種の生息も危ぶまれる。

分布

県内では北部、中部、南部に分布していた。県外は北海道、本州、四国、九州、佐渡、伊豆諸島、対馬に、国外では朝鮮半島、シベリア、コーカサス、ヨーロッパに分布する。

形態・生息状況

体長5.0～7.8mm光沢のある黄褐色で、上翅は肩部と後方に一對ずつの黒紋を持つ。

牧場などのオープンランドの牛馬の糞に集まり、糞の下の地面に穴を掘り貯めた糞に産卵する。幼虫はその糞を食べて成長する。

秋に個体数を増す。

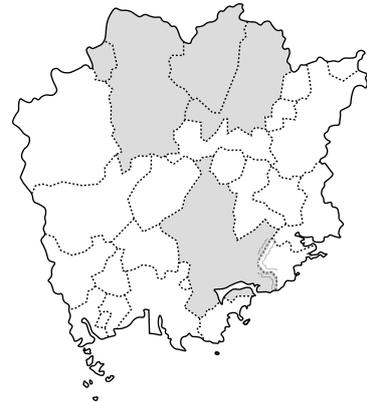
主要文献

川井ほか (2005)

(山地 治)



所蔵：山地 治



セマルオオマグソコガネ

Aphodius brachysomus Solsky

コウチュウ目 コガネムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

鏡野町で50年以上前に採集された標本が残されているだけである。全国的にも減少している種であり、現在でも生息している場所は少ない。牧場での飼料・病気予防の薬剤などで糞虫類が減少していることもあり、県内では絶滅しているかもしれない。

分布

県内では鏡野町で記録されている。

県外では北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島に分布する。国外は朝鮮半島、シベリア東部、中国に分布する。

形態・生息状況

体長7.5～11.0mm光沢のある黒色で時に上翅基部両側・翅端部に黄色紋を表す。背部は強く膨隆する。

放牧場などのオープンランドに生息し、新鮮な牛・馬の糞に集まる。

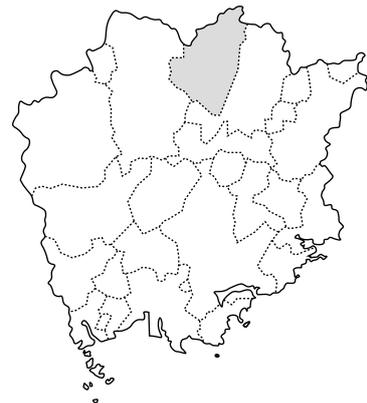
主要文献

竹内・山地 (1996), 川井ほか (2005)

(山地 治)



所蔵：山地 治 (北海道産)



ダイコクコガネ

Copris ochus (Motschulsky)

コウチュウ目 コガネムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

現存する標本や文献記録により、戦前までは吉備高原以北の放牧地周辺に生息していたことが確認できているが、現在では県北の一部の地域を除いて絶滅した可能性が高い。生息地域においても近年の生息情報がなく、状況が悪化している可能性がある。生態は近縁のゴホンダイコクコガネとほぼ同様と考えられるが、本種の方がより大きな体のため、多量のエサを必要とし、広い生息環境とウシなどの大型動物の存在が欠かせないと考えられる。家畜の寄生虫駆除剤として使用されるイベルメクチンの悪影響が報告されている。

分布

県内では、県北部の一部の牧場周辺での生息情報がある。

北海道、本州、佐渡島、伊豆諸島（大島、式根島、三宅島）、九州、奄岐、五島列島、大隅諸島（口永良部島、屋久島）、済州島、朝鮮半島、中国、モンゴル、ロシア南東部に分布する。

形態・生息状況

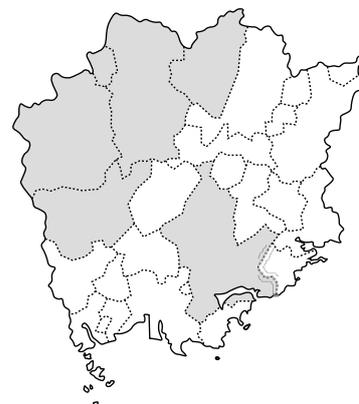
体は全体黒色で、厚みのあるだるま型。体長は18.0～30.0mm。大型の雄では、頭部に湾曲した長い角と前胸背板に顕著な突起を備える。森林や放牧地に生息し、主に新鮮な牛糞に集まる。日没直後には、灯火によく飛来する。地中に糞玉を作り、幼虫は其中で育つ。

主要文献

川井ほか（2005）、堀（2005）、岡島・荒谷監修（2012）
（奥島雄一）



所蔵：倉敷市立自然史博物館
（撮影：奥島雄一）



マルエンマコガネ

Onthophagus viduus Harold

コウチュウ目 コガネムシ科

●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

選定理由

1954年までの記録があるがその後の追加記録がない。
南西諸島を除く地域ではほぼ絶滅していて岡山県でも現在は生息していないと思われる。

分布

県内では総社市と岡山市の古い記録があり、最近になって未整理標本の中から1940年台の標本も複数発見され、かつては普通に分布していたことが伺える。

岡山市百間川原尾島遺跡からは15世紀の井戸の底から本種の左上翅が発掘されている。

北海道、本州、四国、九州、佐渡、伊豆諸島、対馬、五島、屋久島、種子島、琉球に分布し、琉球では普通に産するがその他の地域では激滅している。

国外では朝鮮半島、中国に分布する。

形態・生息状況

体長5～9mmのコガネムシで、黒色、時に頭胸部は紫銅色を帯びる。

3～10月に人獣糞に集まり腐肉にも来る。

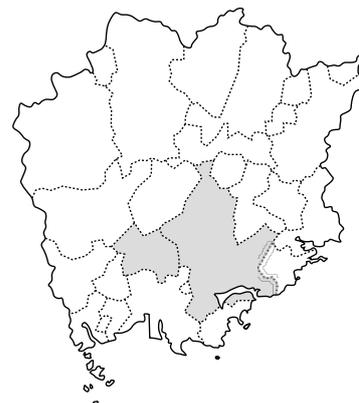
琉球を除く本土地域では激滅している。

主要文献

森（2018）
（山地 治）



所蔵：倉敷市立自然史博物館
（撮影：山地 治）



アカマダラハナムグリ

Anthrachophora rusticola Burmeister

コウチュウ目 コガネムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

幼虫の生息環境が特異で、肉食の大型鳥類の巣やその周辺で見られることから、本種の生息にはそれらの鳥類が営巣できるほどに十分な餌場を含む自然環境と広大な空間が必要と考えられる。過去に生息情報のあったいくつかの地域では宅地造成などによって生息地が消滅し、すでに絶滅したと考えられる。鳥類研究者の協力による生息確認例が増えているが、生息状況が改善されているとは言えない。

分布

県内では中南部の丘陵地を中心として局地的に生息情報がある。手つかずの自然林よりも里山的環境を好むようである。

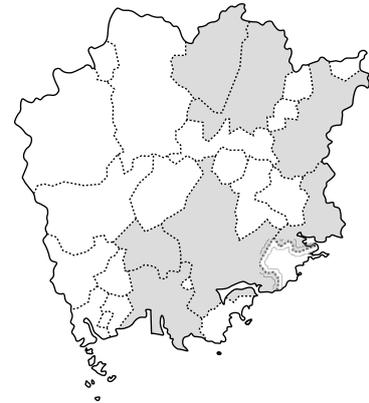
北海道、本州、佐渡島、隠岐、淡路島、向島、四国、小豆島、九州、平戸島、伊王島、五島列島（久賀島）、下甌島、屋久島、台湾、朝鮮半島、中国、ロシア東部、ベトナム北部に分布する。



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：奥島雄一)

形態・生息状況

体背面は赤褐色で小黒点を散在する。体腹面は光沢のある黒色。体長は15.0～21.6mm。ほかのハナムグリ類に比べて脚が短い。成虫は4月から9月にかけて現われ、樹液に集まることが知られている。他県では成虫がクヌギやアベマキの樹液に群集する例が知られているが、県内ではそのような光景は観察されていない。近年の調査で、幼虫はワシタカ類やコウノトリ、カワウ等の肉食の大型鳥類の巣やその周辺の残滓に生息していることが明らかとなっている。



主要文献

楨原ほか(2004), 酒井・藤岡(2007), 岡島・荒谷監修(2012), Koshiyama, Miyata & Miyatake(2012)

(奥島雄一)

オオチャイロハナムグリ

Osmoderma opicum Lewis

コウチュウ目 コガネムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

もともと県北部の中国山地周辺のみが生息していたと考えられる。幼虫の生育には樹洞のあるミズナラやブナなどの大木が不可欠であるが、戦後の植林や開発によって県内の安定したブナ林は著しく減少し、さらに樹洞を有するほどの大木はきわめて限定的であるため、生息地は局限されている。

分布

県内では、県北に残るわずかなブナ林周辺にのみ生息しているが、記録は少ない。

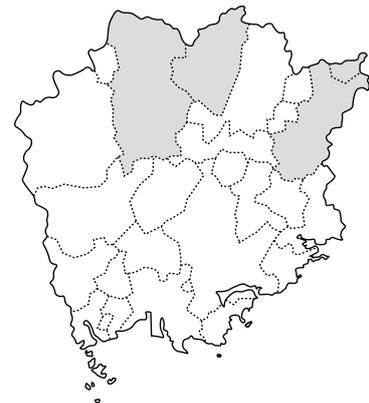
本州、宮島、四国、九州、馬渡島、平戸島、屋久島、韓国に分布する。



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：奥島雄一)

形態・生息状況

体は黒褐色でつやがあるが、体表は点刻やしわを備える。体長は26.3～36.1mm。前胸背板は肩部よりかなり幅が狭く、特に雄で目立つ2隆条を備える。大木の樹洞に棲み、花や樹液には集まらない。成虫は香気を発し、樹洞中のその香りで生息を確認することができる。幼虫も樹洞に棲み、腐植土を食べて成長する。通常2年1化で、新成虫は秋に羽化し、そのまま翌年の初夏まで蛹室内に留まる。



主要文献

酒井・藤岡(2007), 岡島・荒谷監修(2012)

(奥島雄一)

クロコモンタムシ

Poecilonota variolosa (Paykull)

コウチュウ目 タムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

造成された大きな団地の未着工部分などに生えているヤマナラシに発生していることが記録されている。

団地内の宅地の境目付近の斜面にも植樹はあるが、いずれすべてのスペースが着工されれば本種の生息は困難になると思われる。

団地近くの小規模な生息地もあったが開発で林が無くなりその生息地は消滅している。

岡山県産は西日本亜種 subsp. *yanoi* Y.Kurosawa (亜種名：ヤノコモンタムシ) とされていて、県内で発見されるまでは三重県、奈良県、兵庫県から数頭が採集されていただけの稀亜種であった。



所蔵：山地 治

分布

県内では赤磐市に分布している。

県外では北海道、本州に分布。国外では朝鮮半島、中国北部、極東ロシアに分布する。

形態・生息状況

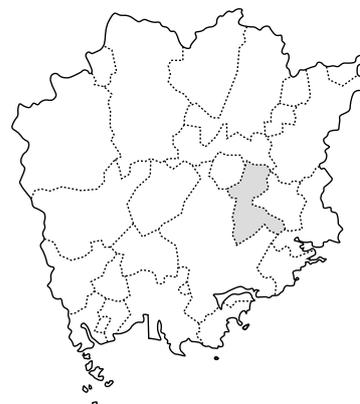
体長12～17mm。背面は黒褐色で淡褐色の紋を散布する。体下面は紫銅色。5月下旬～7月上旬にかけてヤマナラシの衰弱木に集まる。

幼虫は衰弱木に穿孔し羽化した成虫は幹に楕円形の穴を開けて出てくる。

主要文献

那須・古村 (1994)

(山地 治)



アヤスジミゾドロムシ

Graphelmis shirahatai (Nomura)

コウチュウ目 ヒメドロムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

全国的に記録が少ないヒメドロムシの一種で、県内では旭川の下流域の限られたニッチでしか確認されていない。下流域の中でも流水が豊富で急流を含む流れに変化がある部分を好むため、河川改修工事等によりその生息地が失われるおそれがある。

分布

県内では旭川の下流域の一部のみに生息が知られている。

県外では、山形と宮城、新潟、東京、愛知、兵庫、島根での記録があるが、現存する産地は愛知と島根、新潟の3県の限られた場所しか知られていない。

形態・生息状況

体長約4mmの中型で、上翅の黒地に黄色い縦じま模様が織り交ぜられた美しい模様が特徴的なヒメドロムシである。

河川中下流域に生息しており、川底に沈んだ流木にしがみついている。また、成虫の発生時期も7～8月に限られる。県内での産地は比較的水質が悪く、流木が豊富で急な流れを含むといった下流域の中でも特異な環境に見られた。

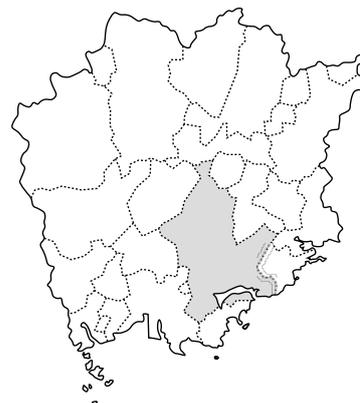
主要文献

吉富ほか (1999), Hayashi (2007), 岩田ほか (2012), 国土交通省 (2018), 末長・山地 (2018)

(末長晴輝)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：末長晴輝)



ケスジドロムシ*Pseudamophilus japonicus* Nomura

コウチュウ目 ヒメドロムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

県内では高梁市での一例が知られるのみである。河川の上流から下流まで広く生息する種であるが、県内ではそういった場所での調査は十分といえず今後さらなる調査が必要である。また、発生時期が短いのもこれまでほとんど見つからなかった要因のひとつと考えられる。

分布

県内では高梁市の1例が知られるのみである。国内では、本州から九州に分布し、河川の上流から下流域に広く見られる。

形態・生息状況

体長4.8～5.3mmでヒメドロムシ科最大種である。体色は黒色または焦げ茶色で、鋭いつめを備えた長い脚が特徴である。流水性で、成虫幼虫ともに河川上流から下流域の水中にある流木についていることが多い。小型の幼虫は水中に露出したツルヨシの根際にも見られる。成虫の発生時期は比較的限られており、特に6～7月に多い。

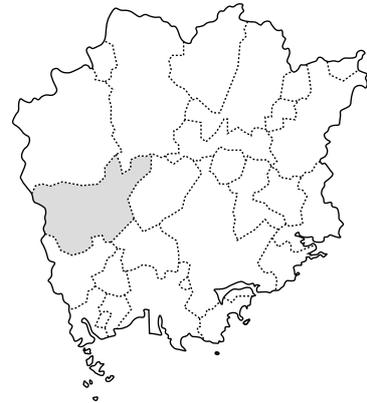
主要文献

井上・中島(2009)

(末長晴輝)



所蔵：渡部晃平（石川県産）

**オオウバタマコメツキ***Cryptalaus yamato* Nakane

コウチュウ目 コメツキムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

県内で確認された生息地は1カ所に限られ、1例の記録が知られるのみである。全国的にも産地が少なく採集例の少ない種であるが、近年の採集例を聞かない状況で個体数の減少が心配されている。

分布

県内では吉備高原の一角の1カ所のみで知られている。国内では本州の近畿地方以西・四国・九州で記録があるが、その分布は極めて不連続で産地は限られている。また、過去においても多少まとまった採集例があるのは基準産地の奈良県春日山のみである。

形態・生息状況

体長30mm前後の極めて大型かつ太い体型のコメツキムシで、黒色と鮭肉色の2色の鱗片毛による斑紋で全体が覆われている。中標高のよく発達した混交林に生息する。生体面では判明していないことが多いが、春日山では主にシデの立ち枯れで採集されている一方で岡山県の個体はマツの枯れ木から得られている。

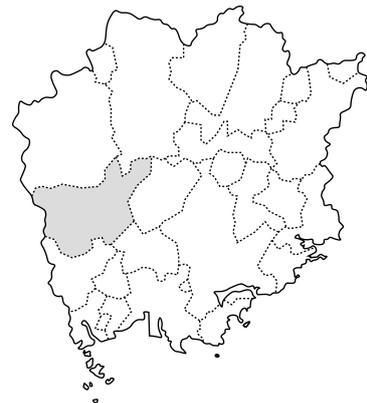
主要文献

渡辺(1977)

(渡辺昭彦)



所蔵：渡辺昭彦



フタスジカタビロハナカミキリ

Brachyta bifasciata Olivier

コウチュウ目 カミキリムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内からは中国山地に遺存するブナ・ミズナラ林に生息しその下層植生であるヤマシャクヤクに依存しているが、県内にそのような環境がわずかしか無いうえに近年シカの食害によって下層植生の破壊が著しいため生息環境が急速に失われている。

分布

県内では中国山地に遺存するブナ・ミズナラの天然林に分布が知られているが、局地的で不連続である。国内では、本州と四国の山間地に限って分布しているが、そこでも分布は局地的かつ不連続であり個体数も多くない。



撮影：渡辺昭彦

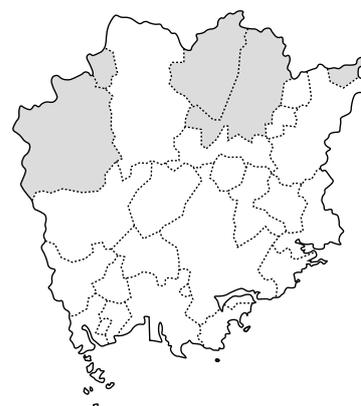
形態・生息状況

体長20mm前後でずんぐりした形の中型カミキリムシで、上翅は鮮やかな黄色で3対の黒斑を持ち翅端は黒色、脚と触角の一部が黄色で残りの部分は黒色の特徴的な種である。成虫は春期にブナ・ミズナラの天然林に出現し山地のヤマシャクヤクの花に集まるものを見ることが多い。

主要文献

道信 (1963)

(渡辺昭彦)



ヨツボシカミキリ

Stenyrinum quadrinotatum Bates

コウチュウ目 カミキリムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

県内の広範囲に採集記録が知られ、かつては里山に生息する普通種として産していたが近年急激に個体数を減じている。その減少要因は諸説あってよく判っていないが、全国的にも個体数の減少が著しい種でありその保全が求められている。

分布

県内からはほぼ全域から多くの記録が知られ、かつては県下一円に普通に見られたものである。しかし、近年の記録は少なく現在の分布域についてはよく判らない状況である。国内では北海道から九州及び主要な周辺島嶼と広範囲に分布が知られているが、岡山県と同様に近年の減少が著しく現状の分布状況は不明な点が多い。



所蔵：渡辺昭彦

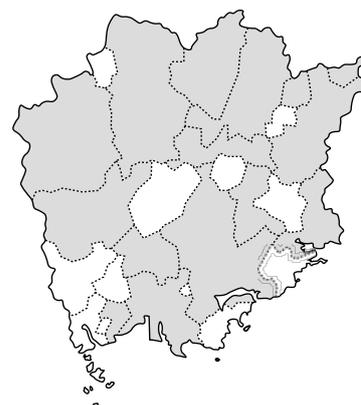
形態・生息状況

体長10mm前後のやや小型のカミキリムシで、全体赤褐色で上翅に2対の淡色斑紋があり、他種と容易に見分けることが出来る。主に里山環境に生息し人家周辺で見かけることが多く、クリを初めとして各種の花に集まるほか灯火にも良く飛来する。

主要文献

岡本 (1964), 橋本 (2012)

(渡辺昭彦)



アカアシオオオカミキリ

Chloridolum japonicum Harold

コウチュウ目 カミキリムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県内の生息地は津山盆地周辺のみ知られ、生息域は極めて局地的である。また、本種は生息環境を集落近郊のクスギを主体とする里山林に依存しているが、その生息地の開発により生息環境は急速に狭まっており個体数も減少しつつある。

分布

県内では津山盆地の一角のみに分布が知られる。国内では、本州・四国・九州と比較的広い範囲に分布が広がっているが、いずれの地域でも分布は局所的で普通に見られるものではない。

形態・生息状況

体長30mmに及ぶ大型のやや細長く、触角や脚も長いカミキリムシである。全体は強い金属光沢の金緑色で、触角と脚は赤褐色の特徴的な美しい種である。本種は、里山のクスギを主体とするいわゆる雑木林に生息する。成虫は盛夏期に出現し、夜間クスギの生木でやや衰弱した木の幹に集まり活発に活動し樹液にもよく集まる。幼虫はそのような木の樹皮下を加害する。

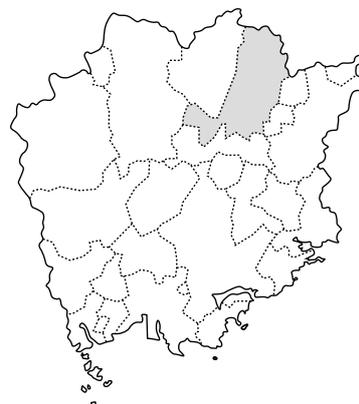
主要文献

道信 (1963), 中野 (2006)

(渡辺昭彦)



所蔵：渡辺昭彦



アカネクスジトラカミキリ

Cyrtoclytus monticallisis Komiya

コウチュウ目 カミキリムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

確認された生息地は2カ所に限られ、生息個体数も多くない。生息環境は局所的で安定的な保全が望まれる。

分布

県内では中標高の良く保存された自然林に分布が知られているが、産地は局地的で2カ所に限られる。鳥取県から比較的近年に記載された種で、北海道と本州の日本海側を中心とした地域に分布が知られているが、不連続であり産地は限られる。

形態・生息状況

体長12mm前後の細長い中型のカミキリムシで、黒褐色に2対の黄色の帯状斑紋があり触角は短い。外観も行動も蜂に似ており擬態しているものと思われる。良く保存された自然林に生息しており、成虫は早春に出現するが花に集まることもほとんど無く、時にエゾエノキの枯れ枝に見られることもあるが、その姿を見ることは希である。幼虫はエゾエノキの枯れ枝に食入する。

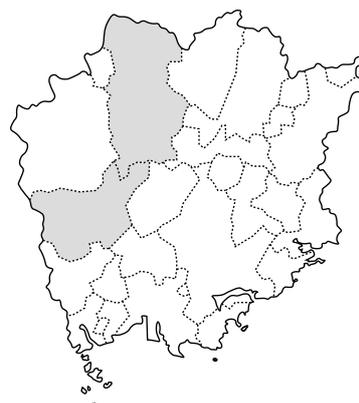
主要文献

永幡 (1996)

(渡辺昭彦)



撮影：渡辺昭彦



フサヒゲルリカミキリ

Agapanthia japonica Kano

コウチュウ目 カミキリムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠA類(CR)

選定理由

県内の生息地は1カ所のみであり、生息個体数も減少している。また、全国的にも産地は限られるうえ近年減少が著しく、県内の個体群は国内で最もまとまったものであり極めて重要である。開発の影響を受けやすい草原環境が生息基盤であることも影響が大きい。

分布

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られているだけである。大陸の草原には近縁種がいくつか知られているが、本種は日本特産とされている。北海道から本州にかけて点々と分布記録が残されているが、その分布は極めて局地的かつ不連続であり、現時点で確実な生息が確認されているのは岡山県と長野県に限られる。



撮影：中野一成

形態・生息状況

体長16mm前後の中型のカミキリムシで、体色は金属光沢を帯びた黒藍色で触角には房状の長毛塊が目立つ。山地の草原に生息し、成虫は6～7月に出現してユウスゲの生葉をかじり、幼虫はその茎に食入し地下で蛹化する。

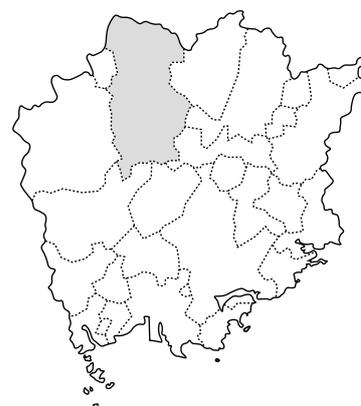
関係法令の指定状況

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種

主要文献

近藤 (1984)

(渡辺昭彦)



ヒメビロウドカミキリ

Acalolepta degener Bates

コウチュウ目 カミキリムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

確認された生息地は1箇所のみで生息地が限られているうえ、生息個体数も多くない。また、生息基盤が乾性草原に限られるため開発などの影響を受けやすく脆弱である。そのため、全国的にも生息地の破壊などで個体数の減少が著しく安定した生息地は限られている。

分布

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られているだけの局地的な分布である。国内では、本州・四国・九州の広い範囲に分布が知られているものの、その生息環境から生息地は局地的かつ不連続で限定される。



撮影：中野一成

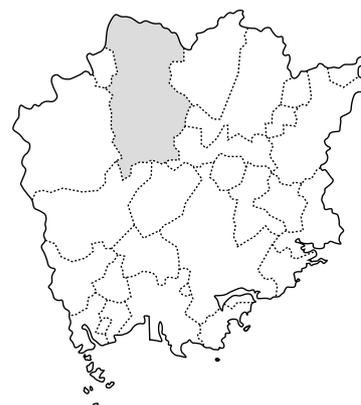
形態・生息状況

体長10mm前後の中型のカミキリムシで、全体褐色のビロウド光沢を帯びた微毛に覆われ、上翅には灰色の不明瞭な斑紋をまじえる。山地の乾性草原に生息し、成虫は6～7月に出現する。幼虫はオトコヨモギの生きた茎を加害し、成虫はその枯葉に潜んでいるのを見ることが多い。

主要文献

奥田 (1984), 山地 (2003b)

(渡辺昭彦)



ムネホシシロカミキリ*Olenecamptus clarus* Pascoe

コウチュウ目 カミキリムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では1例の分布記録が知られているだけである。近年の記録が全くなく生息の再確認が望まれる。本種は集落や畑周辺のクワの古木に依存するため、開発などにより生息環境が失われやすく、留意する必要がある。

分布

県内では蒜山高原の一角で分布が知られているだけである。国内では、北海道・本州・九州に点々と分布が知られているが、その分布は局地的で不連続であり安定した生息状況の産地は少ない。

形態・生息状況

体長12mm前後で細長く全体に華奢な中型カミキリムシで、全体が光沢のない純白色で上翅に3対の黒斑を持ち脚は赤褐色の特徴的な種である。主に、山間地の人里付近で人家や畑地周辺のクワに見られる。成虫は7～8月に出現し、クワの生葉を裏側から不規則にかじり、幼虫はその枯れ枝に加害する。

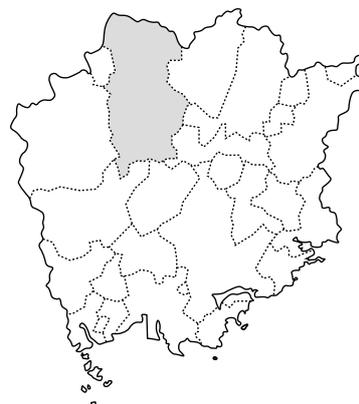
主要文献

岡本 (1964)

(渡辺昭彦)



所蔵：倉敷昆虫館
(撮影：山地 治)

**イネネクイハムシ***Donacia provostii* Fairmaire

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

本種は多くの生息地において絶滅が危惧されているアサザやガガブタのほか、減少傾向にあるヒツジグサに依存しており、その生息地は開発の影響を受けやすい県南部から県中央南部に限られており、生息基盤はきわめて弱い弱である。

分布

県内では県南部から県中央南部にかけて分布し、ため池のアサザやガガブタ、ヒツジグサ、ハス、ヒシ葉上に見られる。しかし、多くの場合複数種の水生植物が混生するなど条件を満たした池でないとならないようである。

国内では北海道から九州まで分布しているが、西日本では一般的に生息地が限られている。国外は朝鮮半島、極東ロシア、中国、台湾、東南アジアに分布する。

形態・生息状況

体長6.0～7.5mmで、体背面は金色から銅色、紫銅色などの金属光沢を帯びる。ガガブタネクイハムシに似るが、後腿節のトゲが小さいことで区別できる。成虫は5～11月に発生し、浮葉植物の上に見られるほか、灯火に飛来することもある。

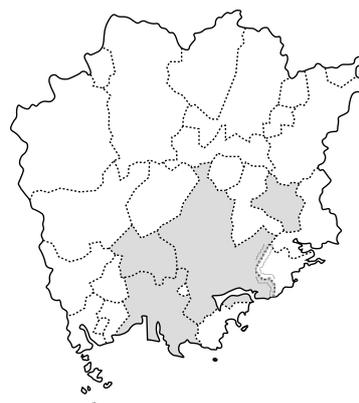
主要文献

林 (2004), 山地 (2012), 脇 (2019)

(末長晴輝)



撮影：末長晴輝



キンイロネクイハムシ*Donacia japana* Chûjô et Goecke

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

岡山県内では3ヶ所に産地が限られており、多くの産地でホストとしているミクリも減少傾向にある。また、生息地である湿地環境も開発や遷移等による存続が危ぶまれる。

分布

県内ではかつて鯉ヶ窪湿原の1ヶ所しか生息地が知られていなかったが、近年になって井原市と吉備中央町で見つかった。多くの産地ではミクリ類の葉上で見られ摂食も確認されている。一方、新見市内の個体群はミクリが自生しない湿地でも見られ、スゲの花に訪花しているところが観察されている。県外では北海道から九州まで分布し産地は局地的である。国外は朝鮮半島と中国に知られるが、近縁種と混同されている疑いが指摘されている。



撮影：山地 治

形態・生息状況

体長7.0～8.9mmで体全体が銅色の金属光沢を装い、上翅に二対の赤色の斑紋がある。成虫は5～8月に低山地の湿地や池のへりで見られ、ミクリ類の葉を食害するほかスゲ類に訪花する。

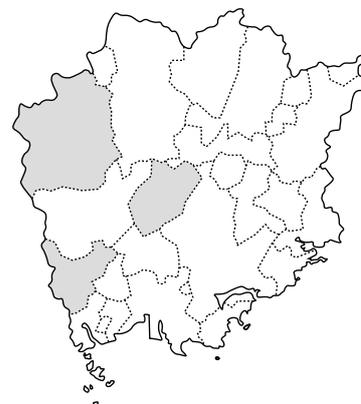
関係法令の指定状況

「岡山県自然保護条例」により、自然環境保全地域（鯉ヶ窪地域）の野生動植物保護地区において保護すべき種に指定されている。

主要文献

林 (2004), 山地 (2012), 木下 (2019)

(末長晴輝)

**カツラネクイハムシ***Donacia katsurai* Kimoto

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

1981年に記載された日本固有種で愛知県以西の本州と九州に分布しているが、その分布域は局地的である。県内では、数か所の低層湿原から高層湿原で確認されているが局地的で、いずれの産地も開発や植生の遷移などによりその生息基盤はきわめてぜい弱である。

分布

日本固有種で、国内の分布は愛知県以西の本州と九州に知られており、多くの産地が低地である。県内では5か所の湿地でしか確認されていない。

形態・生息状況

体長6.0～8.0mmで、全体が銅色から赤銅色の金属光沢を装う。成虫は5～6月に出現し湿地や池、休耕田などのハリイ類を好んで食害するほか、スゲ属やイグサ属に訪花する。幼虫は土中で植物の根を食べる。

関係法令の指定状況

「岡山県自然保護条例」により、自然環境保全地域（鯉ヶ窪地域）の野生動植物保護地区において保護すべき種に指定されている。

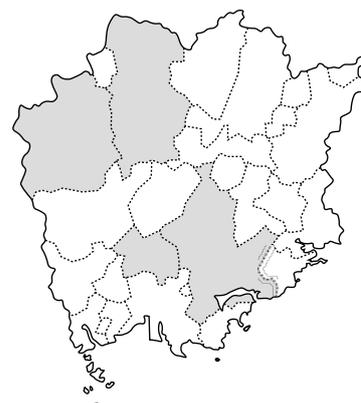
主要文献

林 (2004), 山地 (2012)

(末長晴輝)



撮影：末長晴輝



オオネクイハムシ*Plateumaris constrictiollis* (Jacoby)

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では北部の中国山地の一角と吉備高原西部一角の3か所に限られており、うち1ヶ所の生息地では近年の調査でも確認されておらず、生息地内の絶滅が心配される。他の2ヶ所の生息地は保護されており採集圧等の心配はないが、湿地の乾燥化や植生の遷移等による生息環境の変化に注視する必要がある。

分布

県内では3か所の高層湿原で生息が確認されている。

日本固有種で、北海道から中国地方まで広く分布し、3亜種に分類されている。

形態・生息状況

体長約6.6～10.5mmの大型のネクイハムシで、体色は金属光沢を帯びた銅色で脚は黒褐色から黄褐色と変異がある。成虫は6月に出現し、スゲ属やイグサ属に訪花する。幼虫は湿地の土中で单子葉類の根を食べる。

特記事項

岡山県に分布する個体群は亜種ssp. *toyamensis* Tominaga et Katsura とされる。

関係法令の指定状況

「岡山県自然保護条例」により、自然環境保全地域（鯉ヶ窪地域）の野生動植物保護地区において保護すべき種に指定されている。

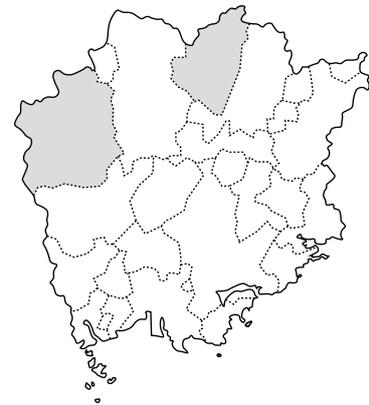
国指定天然記念物（鯉ヶ窪湿原、本種が種指定で採集規制）

主要文献

野尻湖昆虫グループ（1985）、林（2004）（末長晴輝）



撮影：末長晴輝

**タグチホンヒラタハムシ***Leptispa taguchii* Chûjō

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では2ヶ所で記録があるが、環境の遷移に弱い草原地帯での記録も含まれる。そういった草原地帯を維持するには山焼きや草刈りなど人の手入れが必要であり、本種の存続には定期的な人による手入れが必要不可欠であると考えられる。

分布

日本固有種で本州と九州に分布する。県内では蒜山高原の一角と津山市での2ヶ所の記録が知られる。県外でも分布域が限られており、多くの記録が沢沿いや草原地帯などに限られる。

形態・生息状況

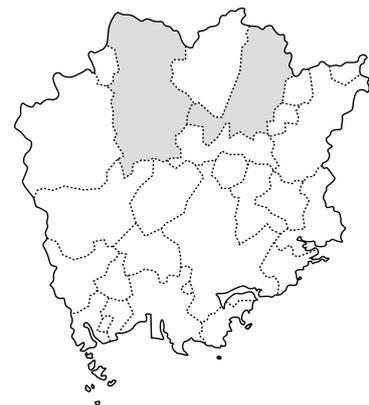
体長約4.2～4.5mmで全体がつやにおおわれた黒色のトゲハムシの仲間である。トゲハムシの仲間は体がトゲで覆われるのが特徴であるが、本種にはそういったトゲを欠いているのが特徴的である。成虫は5～7月頃に出現し、草原地帯のススキの新芽の間に潜り込んで隠れている様子が観察される。

主要文献

木元・滝沢（1994）、山地（2003a）（末長晴輝）



所蔵：末長晴輝



クロスジカメノコハムシ

Cassida lineola Creutzer

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られているだけである。生息地は山焼きや草刈りなどによる維持管理がなされている草原地帯であり、本種の存続には定期的な人による手入れが必要不可欠であると考えられる。

分布

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られているだけである。本種はヨーロッパからユーラシア大陸一円に分布している広域分布種であるが、日本を含むユーラシアの極東部に分布する個体群はヨーロッパ産と形態差があり分類学的再検討を要する。国内では、長野県や島根県などの草原地帯に分布しているが、局所的である。

形態・生息状況

体長約5.7～8.7mmのカメノコハムシで、上翅に黒い筋があるのが特徴である。未成熟個体は緑色であるが、成熟するにつれて赤みが強くなっていく。ホストは草原地帯のオトコヨモギである。近年の調査では生息地で継続して発生が確認されている。

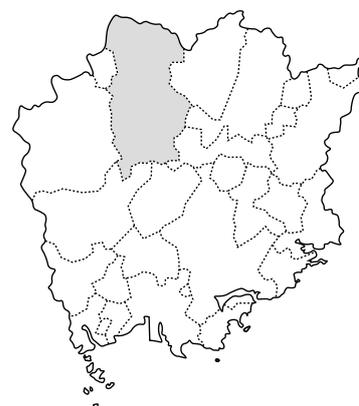
主要文献

木元・滝沢 (1994), 渡辺 (1994)

(末長晴輝)



撮影：末長晴輝



クロカメノコハムシ

Cassida mongolica Boheman

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られているだけである。生息地は山焼きや草刈りなどによる維持管理がなされている草原地帯であり、本種の存続には定期的な人による手入れが必要不可欠であると考えられる。

分布

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られているだけである。県外では九州の熊本県と大分県の草原地帯にしか知られておらず、蒜山高原が本州で唯一の産地である。国外はモンゴルと中国、極東ロシアに分布する。

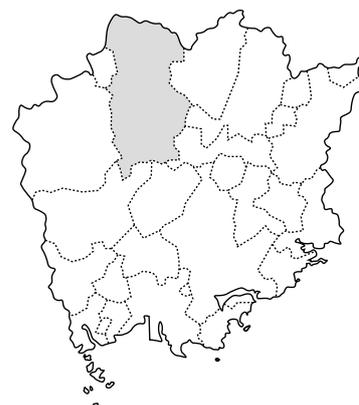
形態・生息状況

体長約7.5mmで、体色は黒色で前胸の前縁に1対の三角形の白紋を装う。上翅に微小な刺毛を装い、これが他種と区別する特徴となる。成虫は火山性の草原や定期的な山焼きが行われる草原などに生息し、6～8月に出現しノアザミの葉上で見られる。

主要文献

Suenaga (2013)

(末長晴輝)

所蔵：末長晴輝
(熊本県産)

セスジカメノコハムシ

Cassida vibex Linnaeus

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では県北の草原や湿地に生息しているが、その生息地は局地的で、山焼きなどによる人の管理がなされている草原も含まれる。そのような生息地は開発や遷移による植生変化が懸念され、その生息基盤はきわめて弱いである。

分布

県内では新庄村と真庭市、新見市の数か所が知られるが、その生息地のほとんどが草原か湿地である。

県外では北海道から九州まで生息地が知られているが、分布域は局地的である。国外はモンゴルやロシアからヨーロッパまで広く分布している。

形態・生息状況

体長約6.2～7.8mmで体色は全体が緑色で上翅の会合部に広く黒いすじが入るのが特徴である。山地の草原や湿地に生息し、成虫は5～9月に出現してキセルアザミなどのアザミ類の葉上や葉裏に見られる。

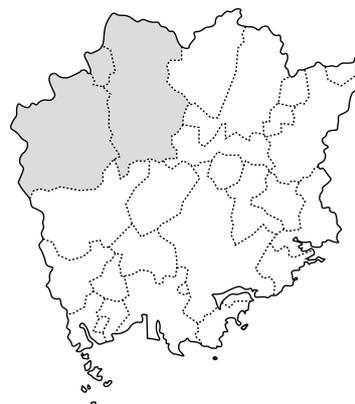
主要文献

木元・滝沢 (1994), 山地 (2012), 滝沢 (2014)

(末長晴輝)



撮影：末長晴輝



シラタカハムシ

Chrysolina seriepunctata (Weise)

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では1993年に得られた1例しか記録がなく、近年の調査で再発見できていない。生息地は高層湿原であるが、その生息基盤はきわめて弱い弱で個体群規模も小さいことからその存続が危惧される。

分布

県内では津山市北部の高層湿原の1ヶ所に分布が知られているのみである。

本種は国内では2008年に採集された標本に基づいて2016年に山形県から初めて記録され、その後本県と広島県から標本が確認された。分布がきわめて局地的なうえ、現在も生息が確認されているのは山形県の2ヶ所のみである。

形態・生息状況

体長約5.5mmの中型のハムシで、体色は金属光沢を帯びた銅色である。湿地に生息し、ミズオトギリが宿主であることが知られている。また、成虫は夜行性である。

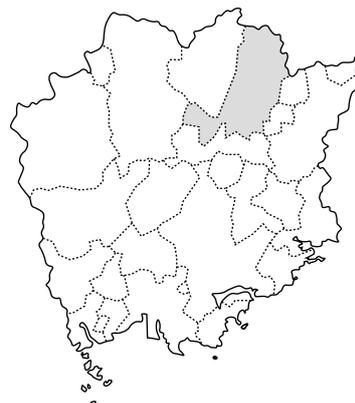
主要文献

齋藤・南 (2016), 武田 (2016), 末長・竹本 (2017)

(末長晴輝)



所蔵：末長晴輝



ニッコウルリハムシ

Chrysolina nikkoensis (Jacoby)

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では鏡野町と津山市の3か所しか知られていないが、近年の確認例がない。また、いずれの地域もシカによる食害が激しい地域でその下草がほとんど食べつくされている状況である。ホストであるオトギリソウ類は、シカは好まないが他の植物が食べつくされている状況だと食害することもある。そのため、シカの食害が激しい地域では本種の存続が憂慮される。

分布

県内では鏡野町と津山市の3か所しか知られていない。うち津山市内の産地はシカによる食害が激しく、近年の調査ではオトギリソウが見つからず本種の再発見に至らなかった。

県外では北海道、本州、佐渡、九州に分布するが局地的である。日本固有種。

形態・生息状況

体長約5.5～7mmで体色は全体が青藍色で上翅の点刻が列状になるのが特徴である。山地の林縁に生息し、成虫は5～7月にオトギリソウ類を摂食する。夜間に活動していると考えられる。

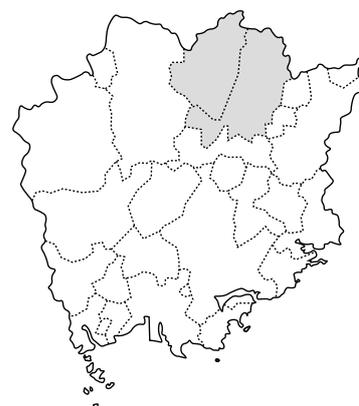
主要文献

滝沢 (2007), 齋藤 (2012), 山地 (2012)

(末長晴輝)



所蔵：末長晴輝



アオバホンハムシ

Apophyllia viridipennis (Jacoby)

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では2ヶ所で記録があるが、環境の遷移に弱い草原地帯での記録も含まれる。そういった草原地帯を維持するには山焼きや草刈りなど人の手入れが必要であり、本種の存続には定期的な人による手入れが必要不可欠であると考えられる。

分布

日本固有種。県内では蒜山高原の一角と真庭市での2ヶ所の記録が知られる。県外でも分布域が限られており、多くの記録が草原地帯や湿地などに限られる。

形態・生息状況

体長4.2～5.0mm前後のハムシで、頭部と前胸は黒色で上翅は緑色の金属光沢を装う。触角は黒色で基部数節が黄褐色である。足は黒色で腿節と脛節の基部および先端部がわずかに黄褐色となる。体表に白い微毛を装う。ホストはヤマハッカとアキノタムラソウの記録があるが、蒜山高原の生息地では7月頃に出現しシロネの葉上で見られる。

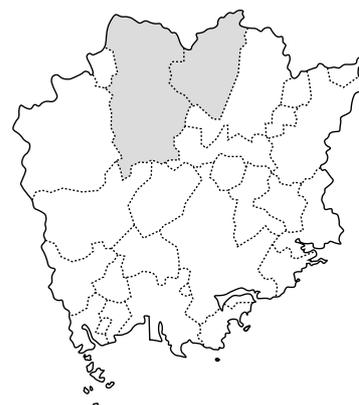
主要文献

木元・滝沢 (1994), 滝沢 (2011), 山地 (2012)

(末長晴輝)



所蔵：末長晴輝



クロバハラグリハムシ

Euliroetis abdominalis (Baly)

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では津山市と西粟倉村の2か所でしか記録がない。また、他県の採集状況から本種は湿地に依存していると考えられ、その生息基盤は脆弱であると考えられる。

分布

県内では津山市と西粟倉村の2ヶ所しか知られていない。本種は国内では栃木県渡良瀬遊水地など多産する地域もあるが、一般的に分布は局地的でまれな種である。それぞれの採集状況から、本種は湿地に依存している種と考えられる。日本固有種。



所蔵：末長晴輝

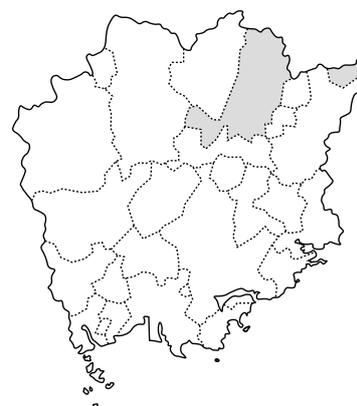
形態・生息状況

体長約5.4～6.2mmの中型のハムシで、頭部と前胸が赤褐色で、上翅や脚が黒色である。腹部が強くえぐれるのが本種の顕著な特徴である。ホストはよく分かっていない。

主要文献

木元・滝沢 (1994), 山地 (2004), 末長 (2014)

(末長晴輝)



スジグロオオハムシ

Galeruca spectabilis Faldermann

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られているだけである。生息地は山焼きや草刈りなどによる維持管理がなされている草原地帯であり、本種の存続には定期的な人による手入れが必要不可欠であると考えられる。

分布

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られているだけである。国内では、本州の草原地帯に分布しているが、局所的で記録も少ない。国外では中国から中央アジア、ロシア南部から知られている。

形態・生息状況

体長約9mmの大型のハムシで、体色は褐色で上翅に4対の明瞭な隆起条を装う。触角と脚は全体黒色である。

成虫は7～10月に地表を歩いている個体が多いため、ホストなど生活史はよく知られていない。

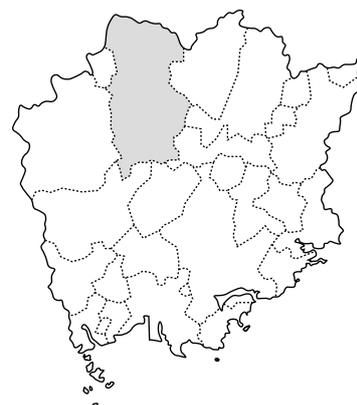
主要文献

木元・滝沢 (1994), 滝沢 (2011), 末長 (2017)

(末長晴輝)



所蔵：末長晴輝



ルリナガツツハムシ*Smaragdina mandzhura* (Jacobson)

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では2ヶ所で記録があるが、環境の遷移に弱い草原地帯での記録も含まれる。そういった草原地帯を維持するには山焼きや草刈りなど人の手入れが必要であり、本種の存続には定期的な人による手入れが必要不可欠であると考えられる。

分布

県内では蒜山高原の一角と岡山市の旭川河川敷での記録がある。県外では九州の福岡県平尾台や大分県塚原高原、日出生台、佐賀と長崎県境の大野原高原、熊本県瀬の本高原など数か所しか生息地が知られておらず、岡山県内の2ヶ所が本州で唯一の産地である。国外では中国や朝鮮半島に分布する。



所蔵：末長晴輝

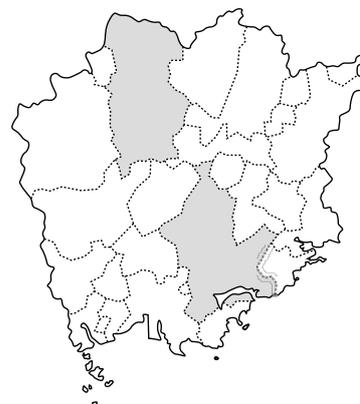
形態・生息状況

体長約3.8mmのツツハムシで、体色は金属光沢を帯びた青藍色である。河川敷や山焼きが行われる草原地帯に生息し、成虫は6～7月に出現してハギ類の葉上で見られる。

主要文献

木元・滝沢 (1994), 渡辺 (1994), 今坂 (2005, 2009), 滝沢 (2007), 青野 (2008), 今坂・大塚 (2011), 山地 (2012)

(末長晴輝)

**ウスグロスジツツハムシ***Cryptocephalus fulvus* Goze

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では旭川流域の1ヶ所しか知られておらず、本種が河川敷のオトコヨモギに依存していることから、河川改修や植生の除去、遷移などにより生息地が失われるおそれがある。

分布

県内では旭川流域の下流域の河川敷で得られた記録がある。近年の調査では高梁川水系でも生息が確認されている。

国内では本州のみに分布し、国外では朝鮮半島、中国、シベリアからヨーロッパまで分布する。

形態・生息状況

体長約2.0～2.5mmの小型のツツハムシで、全体黄褐色で上翅の会合部が黒色となる。河川中下流域に生息し、7～8月の盛夏に出現しカワラヨモギの葉上でヨツボシアカツツハムシとともに見られる。

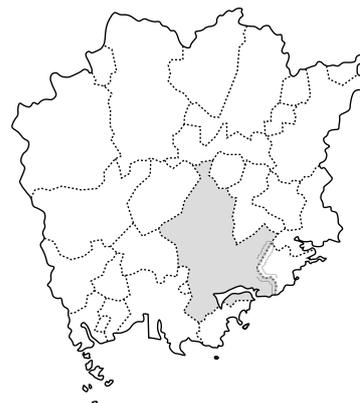
主要文献

木元・滝沢 (1994), 財団法人リバーフロント整備センター編 (2000), 滝沢 (2007)

(末長晴輝)



所蔵：末長晴輝



オオサルハムシ*Chrysochus chinensis* Chevrolat

コウチュウ目 ハムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では美作市の一例の記録しか知られておらず、35年近く追加記録がない。また、本種は湿地環境のイヨカズラなどに特異的に見られ、そういった生息地は局限されており開発等により生息地が減少している可能性が高く、動向に留意する必要がある。

分布

県内では美作市の1ヶ所しか記録がない。他県でも生息地は局地的で減少傾向にある。国外では朝鮮半島や中国、シベリア、モンゴルから知られている。

形態・生息状況

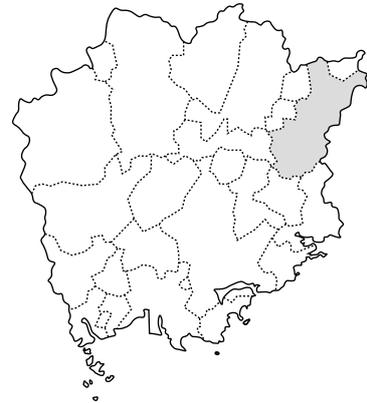
体長11～13mm前後の大型のサルハムシで、体色は金属光沢を帯びた青藍色である。他県では湿地環境に生息し、4月～8月に出現しイヨカズラやガガイモ、カモメヅル類、サツマイモなどの被害例が知られる。

主要文献

今坂 (1980), 木元・滝沢 (1994), 滝沢 (2009), 鈴木 (2017)
(末長晴輝)



所蔵：末長晴輝
(長崎県産)

**カギアシゾウムシ***Bagous bipunctatus* (Kôno)

コウチュウ目 ゾウムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

湿地を中心に生息しており、県内の湿地環境の減少に伴い生息地の減少が危ぶまれる。

分布

県内では2例のみ確認されており、倉敷市弥高山山系のみから記録されている。

形態・生息状況

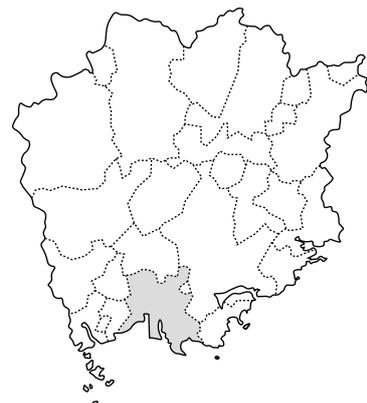
体長3.7～4.2mmほどの小型のゾウムシで、体型は細長く、附節第3節は長さと同幅が等しく、先端は浅く切れ込む。オモダカの果実に産卵する様子が報告されている。

主要文献

O'Brien et al. (1994), Yoshitake・Yoshida (2013)
(藤澤侑典)



所蔵：山地 治



フタホシカギアシゾウムシ

Bagous kagiashi Chujo et Morimoto

コウチュウ目 ゾウムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

湿地を中心に生息しており，県内の湿地環境の減少に伴い生息地の減少が危ぶまれる。

分布

県内での記録は，倉敷市の一例のみである（青野，2000）。

形態・生息状況

体長2.5～3.9mmで，体型は細長く，跗節第3節はわずかに広がるが先端の切れ込みはない。湿地に生息し，湿生，水生植物に依存していると考えられる。

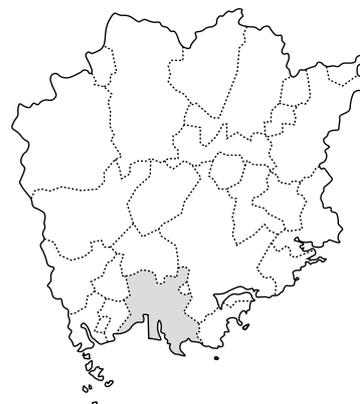
主要文献

O'Brien et al. (1994)，青野 (2000)，林 (2012)

(藤澤侑典)



所蔵：山地 治



スゲヒメゾウムシ

Limnobaris albosparsa Reitter

コウチュウ目 ゾウムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

湿地環境に生息し，スゲ類に依存しているため，今後生息環境の減少・悪化に伴い生息数は減少すると考えられる。

分布

本州，韓国，シベリアに分布する。県内では中・北部の湿地環境でのみ報告がある。

形態・生息状況

体長2.8～3.2mm前後で，体色は黒色で光沢がある。上翅間室に1列の長楕円形白色鱗片を装う。湿地環境に生息し，オニスゲ，カサスゲ，アゼスゲを利用する。

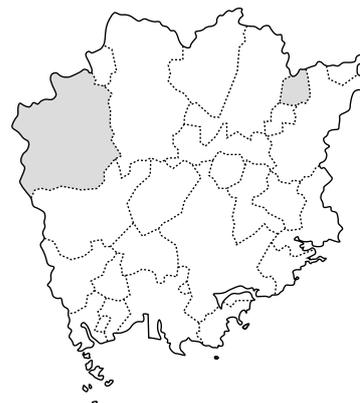
主要文献

Yoshihara (2016)

(藤澤侑典)



所蔵：山地 治



ババスゲヒメゾウムシ*Limnobaris babai* Chûjô et Morimoto

コウチュウ目 ゾウムシ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

湿地環境に生息し、スゲ類に依存した生活史を持つ。県内では、こうした環境は少なく、今後湿地環境の減少・悪化に伴い生息数の減少が考えられる。

分布

本州、九州に分布する。県内では、北部の湿地環境から記録がある。

形態・生息状況

体長3.5～4.4mm前後で、体側面および下面はまばらな微小鱗片のみを装い、前胸背板と上翅は無毛。湿地のカサスゲ、アゼスゲ、アブラガヤを食草として利用する。

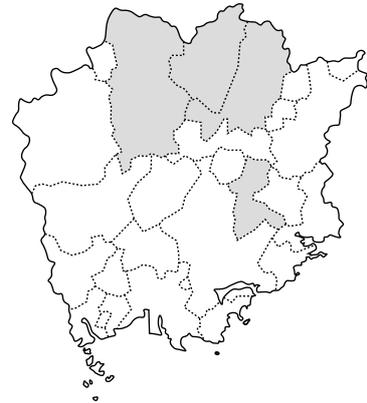


所蔵：山地 治

主要文献

Yoshihara (2016)

(藤澤侑典)

**ウスチャスゲヒメゾウムシ***Limnobaris ochraceosquama* Yoshihara

コウチュウ目 ゾウムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

高梁川、旭川河口のごく狭い範囲に生息しており、環境の変化でいつ絶滅してもおかしくない。

分布

県内では倉敷市の高梁川河口の狭い範囲が知られているだけである。最近旭川河口付近でも確認されたが同じく狭い範囲である。

県外では1952年に兵庫県神崎川で採集された一頭のみが知られている。

形態・生息状況

体長3.7～4.2mm小型のゾウムシで、体色は金淡黄色。

5月、河口の浜に生えているコウボウシバの葉の上で発見された。高梁川の産地は砂浜で非常に狭い範囲に生えているコウボウシバから発見され、近くには同様の環境はみられない。

旭川の産地も同様に狭い範囲である。



所蔵：山地 治

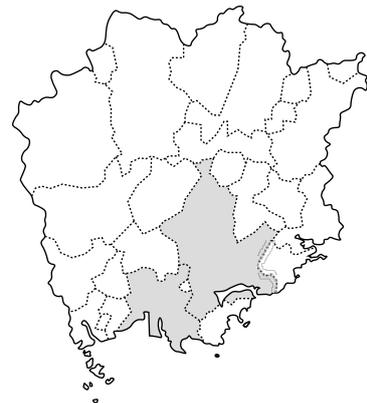
特記事項

タイプ産地

主要文献

Yoshihara (2016)

(山地 治)



クロオビシロタマゾウムシ

Cionus latefasciatus Voss

コウチュウ目 ゾウムシ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

本種の生息で有名だった四国剣山ではシカの食害によって食草のオオヒナノウスツボが激減しほぼ見られなくなっている。

岡山県の生息地ではまだシカの食害は及んでいないがシカの進出によって食草が無くなれば絶滅の可能性がある。シカの進出へのなんらかの対策が必要であろう。

分布

県内では蒜山高原の一角に限って分布が知られている。
四国特産とされていたが本州の数か所から記録がある。

形態・生息状況

体長4.2～4.8mm前後のゾウムシで、丸い体型で白色毛に覆われ上翅の中央に黒い帯がある。

山地の草原に生息し、成虫は5～8月に出現してヒナノウスツボに集まる。

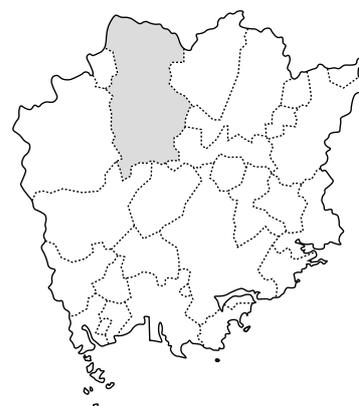
主要文献

山地 (2013)

(山地 治)



撮影：山地 治



カスミハネカ

Nymphomyia alba Tokunaga

ハエ目 ハネカ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：情報不足 (DD)

選定理由

県内では2箇所記録があるだけであり、長年県内から記録はないとされる。全国的に確認されている生息地は少ない。

分布

県内では真庭市で記録があるだけである。岡山県以外では、これまで京都、奈良、三重、長野、群馬、栃木、徳島の各府県と国後島から記録されている。

形態・生息状況

成虫は体長3mm程度であり、翅の周縁部は長毛で縁取られ、翅脈はほぼ完全に消失する。幼虫は流れの緩やかな川の中流域に生息し、成虫は晩秋から早春の間に発生源の水面上で群飛する。

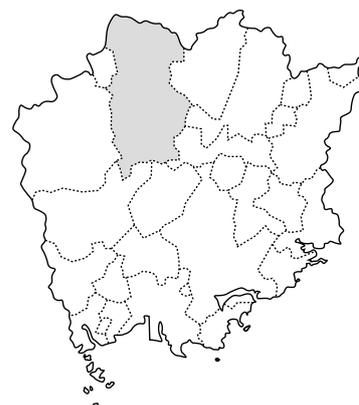
主要文献

岡山県 (2010), 中村ほか (2015)

(吉澤聡史)



撮影：中村剛之 (群馬県産)



ハマダラハルカ*Haruka elegans* Okada

ハエ目 ハルカ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

森林性の種であり、全国的に記録が少なく、森林環境の悪化により、生息に影響を及ぼす可能性がある。

分布

日本固有種であり、本州、四国、九州から記録がある。

形態・生息状況

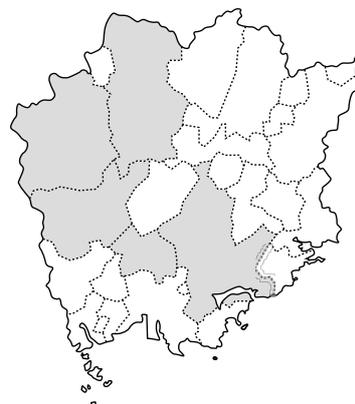
体長10mm前後の種であり、体は光沢のある黒色、翅は黒褐色に多数の白紋を有する。成虫は3～5月に出現し、幼虫はネムノキなどの朽木の樹皮化に生息する。近年、総社市からの記録がある。

主要文献

岡山県 (2010), 岡本 (2017), 埼玉県環境部みどり自然課 (2018)
(吉澤聡史)



所蔵：九州大学大学院比較社会文化学府生物体系学教室
(撮影：吉澤聡史) (福岡県産)

**ネグロクサアブ***Coenomyia basalis* Matsumura

ハエ目 クサアブ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：情報不足(DD)

選定理由

国内における分布は広いが、大型種でありながら記録が少なく、湿地や森林で確認された例が多いため、環境悪化で生息に影響を及ぼす可能性がある。

分布

サハリン (樺太), 北海道, 本州, 四国, 九州

形態・生息状況

体長14～25mmの大型種であり、メスはオスに比べて大型となる。体は、オスでは黒褐色、メスでは赤褐色であり、ともに黄色の細毛に覆われる。翅は褐色を帯びる。成虫は5～7月に出現し、幼虫の生活史は不明である。近年、久米郡美咲町、加賀郡吉備中央町から記録があり、未発表ではあるが、美作市と岡山市からも確認されているとの情報がある。

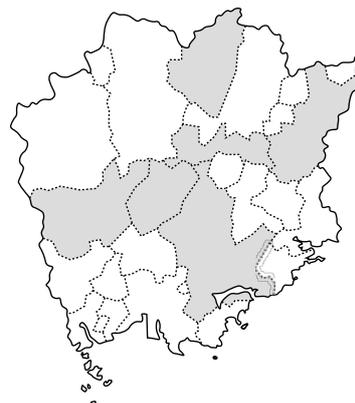
主要文献

岡山県 (2010), 奥島・植松 (2016), 埼玉県環境部みどり自然課
(2018)

(吉澤聡史)



所蔵：九州大学大学院比較社会文化学府生物体系学教室
(撮影：吉澤聡史) (北海道産)



コガタミスアブ*Odontomyia garatas* Walker

ハエ目 ミズアブ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

国内における分布は広いが、全国的に個体数が減少しているとされる。また、水田や湿地に生息し、環境悪化で生息に影響を及ぼす可能性があり、三重県と京都府では絶滅危惧種に選定されている。

分布

国内では北海道、本州、四国、九州、沖縄本島であり、国外では台湾と中国である。

形態・生息状況

体長10～13mmの種であり、体は、頭部と胸部の一部が黄緑色であり、腹部は背側から見ると黒色と黄緑色で縞様である。オスはメスに比べて複眼の面積が大きくなり、メスはオスに比べて黄緑色の部分が多い。成虫は5～7月に出現し、幼虫は水生である。

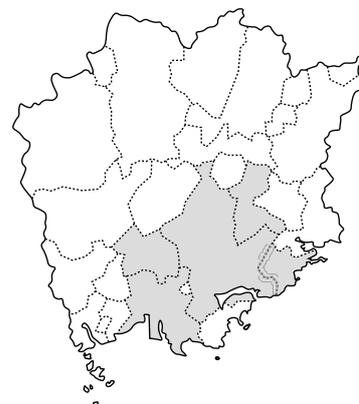
主要文献

吉田・八木 (2012)

(吉澤聡史)



所蔵：九州大学大学院比較社会文化学府生物体系学教室
(撮影：吉澤聡史) (長崎県産)

**トラツリアブ***Anastoechus nitidulus* (Fabricius)

ハエ目 ツリアブ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

岡山以外の都道府県では愛知、三重、大阪、兵庫、山口、愛媛において記録があるとされるが、いずれも古い標本か写真撮影に基づくものである。近年、生息が確認されているのは岡山県だけである。

分布

県内では倉敷市、玉野市、笠岡市で記録があるが、近年記録があるのは倉敷市と玉野市の一部だけである。

国外ではユーラシア大陸に広く分布する。

形態・生息状況

成虫の体長は10mm程度であり、全体的に黄色の毛でおおわれる。国内では10月から11月に確認されており、セイタカアワダチソウ等に訪花する。海外ではトノサマバッタなどのバッタ科の種の卵鞘に寄生することが知られるが、国内における本種の宿主は未知である。

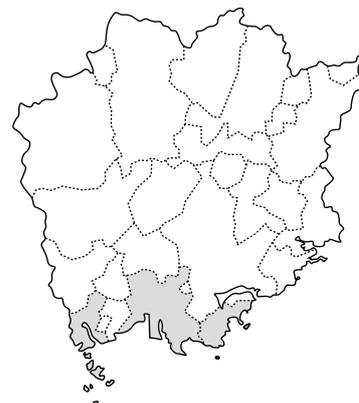
主要文献

Katbeh-Bader & Arabyat (2004), 紺野・古田 (2006), 紺野ほか (2010)

(吉澤聡史)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：奥島雄一)



スズキベッコウハナアブ

Volucella suzukii Matsumura

ハエ目 ハナアブ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

本種は本州と四国において記録があるが、記録は少なく、岡山県内においても3つの市で記録があるだけである。

分布

県内では倉敷市、総社市、津山市で記録があり、総社市においては、近年オオスズメバチの巣から採集された記録がある。

形態・生息状況

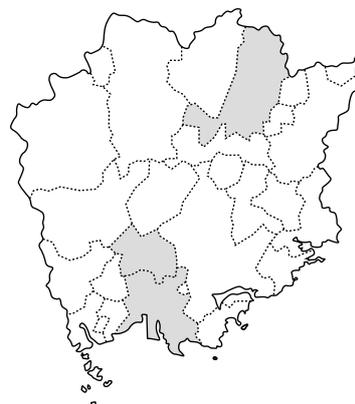
体長12～16mmのハナアブであり、体色は頭部と胸部が赤色であり、腹部は黒色である。成虫は薄暮の時間に樹液に集まる。幼虫はスズメバチ類の巣内に発生する。

主要文献

岡山県 (2010), 岩田 (2010), 埼玉県環境部みどり自然課 (2018)
(吉澤聡史)



所蔵：倉敷市立自然史博物館
(撮影：奥島雄一)



ハチモドキハナアブ

Monoceromyia pleuralis (Coquillett)

ハエ目 ハナアブ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

全国的に個体数は多くないとされる。岡山県では記録があるものの、目撃・採集された個体数は多くない。

分布

国内分布は本州、四国、九州である。県内では主に倉敷市から記録がある。

形態・生息状況

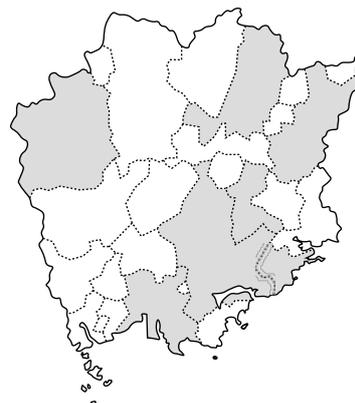
体長20mm程度のハナアブで、フタオビドロバチに似ており、腹部の基部が強くくびれる。成虫はクヌギなどの樹液に集まり、樹皮下に産卵する。

主要文献

岡山県 (2010), 埼玉県環境部みどり自然課 (2018)
(吉澤聡史)



所蔵：九州大学大学院比較社会文化学府生物体系学教室
(撮影：吉澤聡史) (神奈川県産)



フタオビアリノスアブ

Metadon bifasciatus (Matsumura)

ハエ目 ハナアブ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

湿地で確認された例が多く、環境悪化で生息状況が悪化する可能性が高い種である。全国的にも個体数は多くないとされ、岡山県でも記録が数例であり、個体数は多くないと考えられる。

分布

北海道、本州、四国。県内では真庭市と新庄村で記録がある。

形態・生息状況

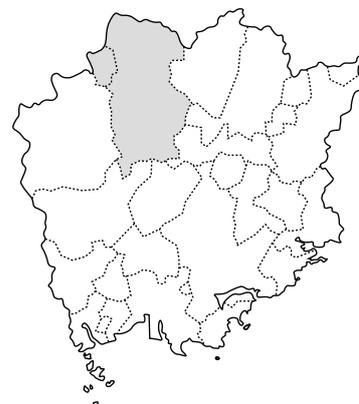
体長11～15mmのハナアブで、腹部は比較的細長く、第1～3節の後縁に黄色の帯がある。幼虫はシワクシケアリの巣に生息する。成虫は初夏から夏に見られ、湿地の草上で確認された例が多い。

主要文献

岡山県 (2010), 埼玉県環境部みどり自然課 (2018)
(吉澤聡史)



所蔵：九州大学大学院比較社会文化学府生物体系学教室
(撮影：吉澤聡史) (青森県産)



ハマベニクバエ

Leucomyia alba Schiner

ハエ目 ニクバエ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

海浜性の種であり、海岸環境の悪化によって減少している可能性が極めて高い種であり、県内からの記録も少ない。

分布

国内では本州、四国、九州、奄美大島、沖縄本島、先島諸島と広く分布するが、県内では倉敷市のみで確認されている。国外の分布は東洋区である。

形態・生息状況

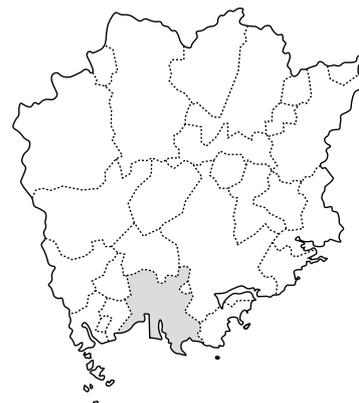
体長8～10mmの種であり、雌雄ともに前頭の幅が複眼1つ分よりも広く、メスではオスよりもさらに広がる。体は全体的に灰色であり、翅は透明である。成虫は海岸に春から秋に出現し、幼虫は死んだ魚などの動物の死骸を摂食する。

主要文献

Kano et al. (1967)
(吉澤聡史)



所蔵：九州大学大学院比較社会文化学府生物体系学教室
(撮影：吉澤聡史) (福岡県産)



オオナガレトビケラ*Hymalopsyche japonica* (Morton)

トビケラ目 ナガレトビケラ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

幼虫は山地の急流に生息する。本県では源流部の岩場に生息しているとの情報がある。

分布

国内では本州・四国に分布。国外ではインドから中国・台湾に多くの種が分布し、北アメリカの1種を含み、50種ほど知られている。日本では1種だけが分布する。日本では本州中部では山地溪流に広く分布するが、山地はやや局限される。

形態・生息状況

大型種で終齢幼虫の体長15～37mm、成虫の前翅長は雄で16～23.5mm、雌では22～26mmで、雄よりも大きい。幼虫は中胸～腹部第8節側面に太い幹から多数の上に向けた総状の鰓を持つ特異な形状をしている。蛹室は小石で頑丈な楕円形のドーム状で基盤の大石に固く付着する。成虫は黄褐色で前翅がやや尖り、少し暗い斑紋を散らす。

主要文献

鶴石 (1999), Tsuruishi (2003), 谷田ほか (2018)

(吉鷹一郎)



撮影：高井幹夫 (福島県産)

**マルバネトビケラ***Phryganopsyche latipennis* (Banks)

トビケラ目 マルバネトビケラ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県内の溪流で広くみられる種であったが、近年個体数の減少が激しく、かつての生息地が次々に消失している。原因としては、豪雨による流失や森林での農薬や融雪剤の影響が考えられる。

分布

ヒマラヤから日本にかけて4種が知られる小さな科であるが、中・大型のトビケラ。国内は北海道・本州・四国・九州・佐渡島に分布。県内は県北部から県南部の森林内の溪流の緩流部などに広く生息するが、個体数は多くはない。生息地では幼虫はみられるも成虫の確認例が少なく、近年の減少が著しい。

形態・生息状況

幼虫は比較的大型で、25mmに達する。幼虫の頭部は濃褐色で顕著な斑紋はない。成虫の前翅は全体に褐色で、濃褐色の特徴的なまだら模様が見られる。羽化時期は初夏から秋。幼虫は森林内の溪流緩流部の落ち葉の堆積部に生息する。水中で枯葉や砂粒を絹糸で綴り合せて独特の柔軟で粗雑な筒巣をつくり、蛹化の際それを縮めて堅くする。近縁種にシロフマルバネトビケラ *P. brunnea* がおり成虫の前翅斑紋で区別できる。

主要文献

野嶋 (2017), 谷田ほか (2018)

(吉鷹一郎)



撮影：吉鷹一郎



ムラサキトビケラ*Eubasilisa regina* (McLachlan)

トビケラ目 トビケラ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

トビケラの国内最大種の一つであり、後翅の美しい紫色の反射光で知られる。県内の産地溪流に広く生息していたが近年個体数を減少させている。原因として、森林開発、農薬・融雪剤などの影響、近年の豪雨による流失などが考えられる。

分布

国内では北海道・本州・四国・九州・佐渡島・隠岐島（島後）・対馬に分布する。県内では北部から南部まで広く生息するが、個体数は多くはない。これまでの生息地でも幼虫は見られるが成虫の確認が非常に少なくなっている。

形態・生息状況

成虫の前翅長30～45mmの大型種。後翅には濃紫色で先端近くに黄色の帯状斑がある。幼虫は森林内の溪流の緩流部に棲み、枯葉を利用して断面が六角形の大型の筒巣をつくる。成虫は樹液に集まることもあり、成虫の出現期は初夏から秋とされる。

主要文献

野嶋 (2017), 谷田ほか (2018)

(吉鷹一郎)



撮影：吉鷹一郎

**ヤチトビケラ***Oligostomis wigginsi* Nishimoto et Kawase

トビケラ目 トビケラ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

現在見つかっている県内の生息地はわずかであり、生息個体数は多くはない。全国の産地が限られていることから本県の生息地は極めて重要である。

分布

国内では青森県・兵庫県・岡山県で記録があるだけである。

形態・生息状況

前翅長10～13mm程度。翅は褐色地に濃褐色の斑紋を有し、網目模様を呈する。前翅の斑紋は不明瞭な個体が多い。触角は黒色。森の中の湿地や水たまりに生息し、成虫は5月に見られる。2006年新種登録（西本・河瀬2006）。

主要文献

西本・河瀬 (2006), 野嶋 (2017)

(吉鷹一郎)



撮影：西本浩之（青森県産）



ハルノマルツツトビケラ

Dolichocentrus sakura Nozaki

トビケラ目 カクスイトビケラ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

ロシア南ウズリー産の雄3個体を基に1935年Martynovによって本種の同属種が原記載されて以来長らく情報がなかったが、2017年に岡山県から近縁種の本種が発見され、雌、幼虫、蛹などが初めて明らかになった（Nozaki 2017）。国内では現在確実な生息が確認されているのは岡山県のみである。河川下流部の人為的な自然改変の多いところに生息するため、種の存続は極めて脆弱で数年で絶滅することもあり得る状況にある。

形態・生息状況

幼虫は小型でマルツツトビケラ属に似るが、腹部第8節の背側面のこぶ状隆起を持たないことや前胸背面を横断する隆起が前胸前縁に達しないことなどから区別できる。幼虫の筒巢は円筒形だがマルツツトビケラ属の筒巢より外面がやや粗い。成虫の体長5～10mmで、県内では3月に羽化する。

主要文献

Nozaki (2017), 谷田ほか (2018)

(吉鷹一郎)



撮影：野崎隆夫



ヤマトビイロトビケラ

Nothopsyche montivaga Nozaki

トビケラ目 ホタルトビケラ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

現存している県内生息地はわずか数か所であり、生息個体数も多くない。全国でも産地はわずかである。また、県内の個体群は他県に比べ極めて非常に低標高で市街地にも近い所に生息していることが知られており生態上極めて貴重である。しかしこのことが種の保存上では大きな脅威となっている。保存を脅かす原因としては、生息地の市街化、森林開発、農薬・凍結防止剤などの薬剤散布、近年の豪雨による林床の表土流失などが考えられる。

分布

本州・四国・九州の幾つかの高標高地において確認されている。本県の生息地は最北端および最東端である。完全陸生のトビケラは世界で4種のみ。

形態・生息状況

成虫の前翅長10数mm前後。休眠をする種の多いことで有名なホタルトビケラ科の中で最も小型の種である。幼虫・成虫の全生活史で完全に陸上生活をするという非常に世界的に珍しい生態を持つ種である。水生昆虫から陸生昆虫への進化を考えさせる種でもある。本県で幼虫は夏に休眠し晩秋11月に成虫に羽化する。写真の雌成虫は翅が短く飛べない特徴を持つ。

主要文献

Nozaki (1999, 2002), 谷田ほか (2018)

(吉鷹一郎)



撮影：岩城孝志



クロモンエグリトビケラ*Hydatophylax nigrovittatus* (McLachlan)

トビケラ目 エグリトビケラ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

比較的大型のトビケラで県内の山地は多くない。かつての生息地でも近年見られていない。生息を脅かす要因としては、森林開発・農業や凍結防止剤の散布の他に集中豪雨による流出なども考えられる。

分布

国内では本州の山地溪流に生息する。国外では韓国、ロシア、中国、モンゴルにも分布する。県内北部の脊梁山地に生息する。

形態・生息状況

成虫の前翅長17～20mm。前翅に明瞭な黒色紋があり、野外でも容易に同定できる。成虫は比較的高標高の山地溪流付近で初夏に採集されているとの情報がある。昼間に飛翔していることもある。幼虫は植物片で筒巣をつくるが、終齢幼虫は砂粒で作った筒巣に長い植物片を縦方向につけることが多い。

主要文献

野嶋 (2017), 谷田ほか (2018)

(吉鷹一郎)



所蔵：野崎隆夫

**クロスジヒゲナガトビケラ***Ceraclea nigronervosa* (Retzius)

トビケラ目 ヒゲナガトビケラ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

淡水海綿に寄生する特異な生態を持つ本県産の種は琵琶湖産の種とは冬季の休眠をする点などで生態的相違があることが分かっている。県内の個体群は限られており、流水域での生息地として全国的にも重要である。生息を脅かすものとして、河川改修・濁水による瀬切れ、餌となる淡水海綿の減少など。

分布

本州（滋賀、島根、岡山）に分布し、琵琶湖に多産することが古くから知られている。流水性の個体群は島根と本県でわずかに知られているのみである。

形態・生息状況

和名は翅脈が黒色であることによる。幼虫は淡水海綿の骨片を主な材料にして自らの絹糸を使い盾型の巣をつくる。食材も淡水海綿という極めて特異な生態を持つ。本県では4～5月に羽化する。本県では淡水海綿が消失する冬季は休眠することが知られるが、琵琶湖では冬季も淡水海綿が生息し本種は休眠しないことが知られている。

主要文献

上西・吉鷹 (2004), 野嶋 (2017)

(吉鷹一郎)



成虫



幼虫

撮影：吉鷹一郎



ギンボシツツビケラ

Setodes argentatus Matsumura

トビケラ目 ヒゲナガトビケラ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

かつては北海道から九州まで広く分布し、北海道では稲の害虫となっていたというが (Kuwayama1934;丸山・高井2000)、近年は密度や産地もともに激減している。生息を脅かす要因としては、薬剤散布などによる水質汚染などが考えられる。

分布

国内では北海道・本州・九州に分布。国外では朝鮮・ロシア極東、中国に分布。県内では生息が明瞭に確認された記録が少ない。

形態・生息状況

成虫の前翅長5～7mmの小型種。黄褐色の翅に特徴的な銀白色の線状紋を多数もつのが特徴。成虫は夏に採集されることが多いといわれている。泥や砂粒で微細な筒巣をつくり生息しているといわれる。

主要文献

谷田ほか (2018)

(吉鷹一郎)



撮影：高井幹生（福島県産）



クチキトビケラ

Ganonema uchidai Iwata

トビケラ目 アシエダトビケラ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内の溪流に広く生息するが個体数は多くない。多くの生息地ではここ数年確認されていない。生息を脅かす要因として、森林開発・農薬や融雪剤の薬剤散布、近年の豪雨による流失などが考えられる。

分布

本州・九州に分布。本県では吉備高原から県北部の山地溪流に広く分布するが多くはない。

形態・生息状況

前翅長20～25mm。幼虫は山地溪流の緩流部や淵の落ちなどに生息するが、中流部や湧水にも生息する。朽ち木の穴を穿った特徴的な巣をつくるという特異な習性を持つ。成虫は黒色の前翅と非常に長い触覚が特徴。初夏から夏にかけて見られる。成虫が昼間に飛翔するという記録もあるが生態はよくわかっていない。県内では近年の豪雨災害以来個体数が激減している。幼虫の生息地でも成虫は近年見られていない。

主要文献

吉鷹 (2004)、野嶋 (2017)、谷田ほか (2018)

(吉鷹一郎)



所蔵：野崎隆夫 (成虫)

撮影：岩城孝志 (幼虫)



ビワアシエダトビケラ*Georgium japonicum* (Ulmer)

トビケラ目 アシエダトビケラ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

湧水がある止水や緩流に生息するため、生息場所が限られるほか、これらの環境は、河川整備等により減少傾向にある。

分布

県内では旭川、高梁川の中流部で記録されている。
日本では本州、九州に分布する。

形態・生息状況

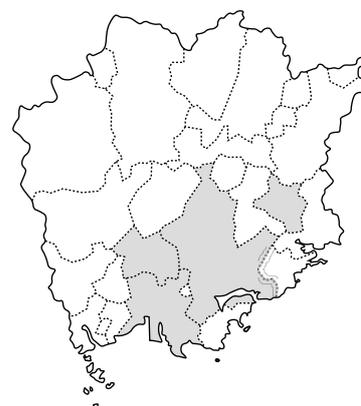
前翅長15mm前後の大型のトビケラ類である。前翅は比較的幅広く三角形、灰褐色で小さな黒い紋が散在する。触角は長く黒色と灰色の縞模様となる。幼虫は湧水のある止水や緩流に生息し、葉片や葉軸を縦方向に綴った細長い巣を住みかとして徘徊する。成虫は春から秋に出現するが、個体数は春に多く、河岸の樹木や草上に大量の個体が止まっていることがある。灯火にも飛来するが多くない。



撮影：野嶋宏一

主要文献

丸山・花田編 (2016), 野嶋 (2017), 谷田ほか (2018)
(野嶋宏一)

**キバネセセリ***Burara aquilina* (Speyer)

チョウ目 セセリチョウ科

●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：該当なし

選定理由

北部山地でわずかに記録されている希少種で、近年はほとんど確認されていない。

分布

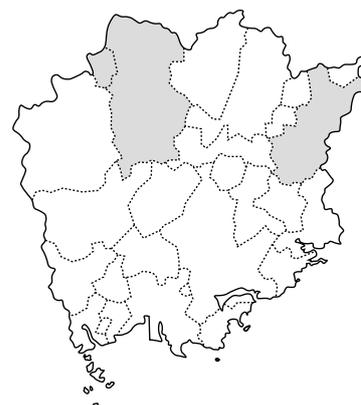
北海道、本州、四国、九州に分布。周辺離島では利尻島、奥尻島、対馬から記録されている。国外では朝鮮半島から中国北部、ロシア南東部に分布する。冷温帯性の種で北海道から九州まで分布域は広く、中部地方以北では稀な種ではないが、西日本では山地性で産地は局限される。県内での確かな記録は真庭市と新庄村だけ。寄主植物は県内に広く自生しているが、本種の分布は著しく限られる。

形態・生息状況

セセリチョウの仲間では大型の種。雄雌ともに前後翅の地色は黄褐色で、雄は無紋だが雌はやや大型で前翅中空端とその外側に黄色斑列を現す。成虫は年1回、7月から8月にかけて出現する。寄主植物はウコギ科のハリギリ。森林性の種でハリギリの自生する冷温帯落葉広葉樹林とその周辺に生息している。成虫の飛翔はきわめて敏速で、林縁を旋回しながら活動する。リョウブやイケマ、オカトラノオなどに訪花するほか獣糞等にも集まることもある。雄は路上の湿地や崖等でしばしば吸水する。朝夕の薄暮時に活発に活動し、夜間灯火に飛来することがある。幼虫はハリギリの葉の一部を折り返して巣を作りその中に潜む。越冬態は幼虫で樹皮下に潜って行う。



所蔵：倉敷昆虫館 (撮影：中村具見)

**主要文献**

福田ほか (1984b), 猪又 (1990), 白水 (2006), 橋本 (2007), 生田 (2012)
(中村具見)

ギンイチモンジセセリ

Leptalina unicolor (Bremer et Grey)

チョウ目 セセリチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

北部山地では比較的安定した生息環境が維持されているが、中南部では生息地が限られ減少傾向が認められる。

分布

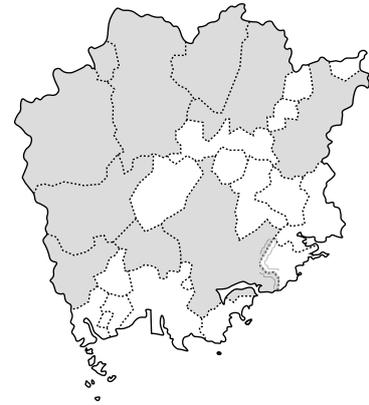
北海道、本州、四国、九州に分布しており、西日本では局地的な傾向がみられる。県内では北部山地に多くの産地が知られており、場所によっては普通に見られるが、吉備高原以南では新見市南部をはじめ局地的な確認例があるにすぎない。南部では岡山市、総社市、高梁市、井原市等で散発的な記録があるものの、追認されない産地が少なくない。国外では朝鮮半島、中国東北部、中国北部に分布する。



撮影：中村具見

形態・生息状況

小型のセセリチョウ。雄雌ともに前翅頂部が尖った細長い独特の翅形が特徴である。前後翅表は雄雌ともに黒褐色、後翅裏面は黄褐色で基部から外縁に向けて銀白色の条紋がある。春型はこの銀白色条が明瞭に現れるが、夏型では黄色味を帯びて地色に近く目立たなくなる。成虫は通常は年2回の発生で、春型は4月下旬から5月、夏型は7月から8月にかけて出現する。10月に第3化とみられる発生が確認されることもある。寄主植物はイネ科のススキ、チガヤ、オオアブラススキ等。これらが生える草原の地表近くを低く緩やかに飛ぶほか、地表でしばしば吸水する。越冬態は亜終齢又は終齢幼虫。



主要文献

福田ほか (1984b), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)

ホシチャバネセセリ

Aeromachus inachus (Ménétrières)

チョウ目 セセリチョウ科

●岡山県：絶滅危惧 I 類 ●環境省：絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由

中北部に局地的な産地が知られるが、現在は中国山地に局限された生息地が残されているだけで衰亡傾向が著しく、採集圧も高い状況にある。

分布

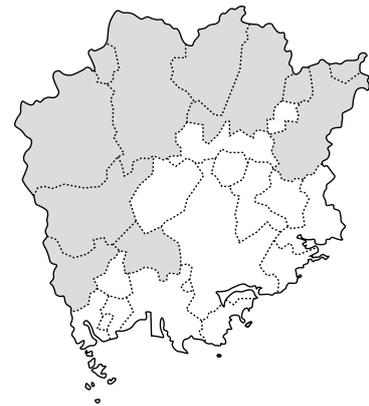
本州と対馬に分布する。本州では東北・関東・中部地方の山地と、兵庫県中西部から山口県までの山地帯に局地的に分布している。県内では、吉備高原中西部から中国山地にかけて生息地が点在するが、吉備高原では近年全く生息情報は得られていない。国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国北部等に分布する。



撮影：中村具見

形態・生息状況

もっとも小型のセセリチョウ。雄雌ともに翅表は黒褐色で前翅中央部に小白斑列がある。裏面は黄褐色で翅表と同様の小白斑列を現す。雌は雄よりもやや大型で翅形は丸みを帯びる。本種は他のセセリチョウ類に比べて小型なことや、後翅裏面の斑紋等から容易に区別される。成虫は、吉備高原等の低標高地では6月下旬から9月中旬にかけて年2回発生し、第2化の個体は著しく小型となる。中国山地では年1回の発生で、7月中旬から8月に出現する。成虫は農耕地周辺の小規模な草地、山地の灌木を交えた草原等に生息している。成虫の飛翔は敏速ではないが、小さく見失いやすい。活動領域はあまり広くなく、アザミ類やオカトラノオ等に訪花する。寄主植物はイネ科のオオアブラススキなど。越冬態は3齢幼虫。



主要文献

福田ほか (1984b), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)

スジグロチャバネセセリ

Thymelicus leoninus leoninus (Butler)

チョウ目 セセリチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

林縁や疎林周辺等の生息環境が荒廃したところも多く、減少傾向が認められる。

分布

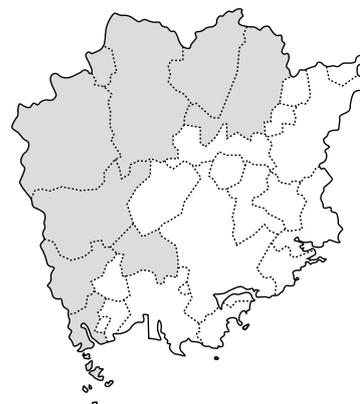
北海道（南西部）、本州、四国、九州に分布する。西日本では近畿地方に分布の空白地帯があり、兵庫県西部から山口県にかけての中国山地一帯及び九州の内陸山地に産地が点在する。四国では愛媛県南部の鹿島付近に局限された生息地がある。県内では北部山地から吉備高原南西部にかけて分布域は広いが産地はやや局地的である。国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部等に分布する。



撮影：中村具見

形態・生息状況

小型のセセリチョウ。雄の前後翅表は鮮やかな濃橙色で、外縁は幅広く黒帯で縁取られる。雌は外縁の黒帯が一層幅広くなり、基半部は暗褐色となる。雄は前翅中室下方に黒条（性標）があり、雌はこれを欠く。雌は近縁のヘリグロチャバネセセリに酷似するが、前翅表中室外方の黒褐色斑が第4室に侵入することや色調が全体に明るいこと等で区別できる。成虫は年1回、6月中旬から7月にかけて出現する。明るい疎林的環境や林縁部の草地等が生息地となっており、低所を敏速に飛翔して、アザミ類やヒメジョオン、オカトラノオ等に訪花する。寄主植物はイネ科のヤマカモジグサ、クサヨシ等。初齢幼虫で越冬する。



主要文献

福田ほか (1984b), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)

コキマダラセセリ

Ochlodes venatus (Bremer et Grey)

チョウ目 セセリチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

中国山地の草原に生息しているが、地域開発、植生遷移等による生息環境の荒廃に伴い減少傾向にある。

分布

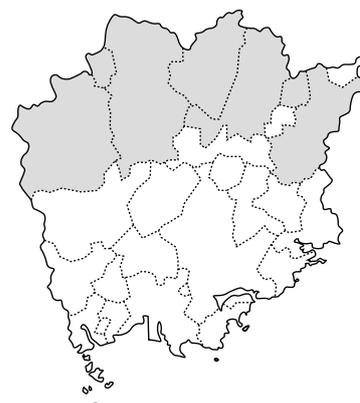
北海道と本州の山地に分布。西日本では中国山地の高地帯に局限された生息地が知られている。国外では朝鮮半島、中国北部からロシア南東部に分布する。県内では北部山地に局地的な産地が知られている。吉備高原以南の低地からの採集記録が散見されるが、これらは同属のヒメキマダラセセリの誤認の可能性が高い。



撮影：中村具見

形態・生息状況

やや大型のセセリチョウ。雄は全体が橙黄褐色で翅表中央に黒条（性標）を有し、雌は暗褐色で淡黄色の斑紋がある。雌はヒメキマダラセセリと斑紋が似ているが、本種の方が大型で翅色が一層明るい。また、本種は冷温帯域の山地草原にのみ生息しており生息地はかなり限定される。県内における垂直分布の下限は500m程度。成虫は年1回、6月下旬から7月にかけて出現する。湿原の周辺や火入れ等により維持されている山地草原が生息地となっている。成虫は敏速に飛翔して、アザミ類やオカトラノオなどに訪花吸蜜する。寄主植物はイネ科、カヤツリグサ科の各種植物。越冬態は5齢幼虫。



主要文献

福田ほか (1984b), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)

ミヤマチャバネセセリ

Pelipidas jansonis (Butler)

チョウ目 セセリチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県内に広く分布するが、中南部の低山丘陵地帯では衰亡傾向が顕著である。

分布

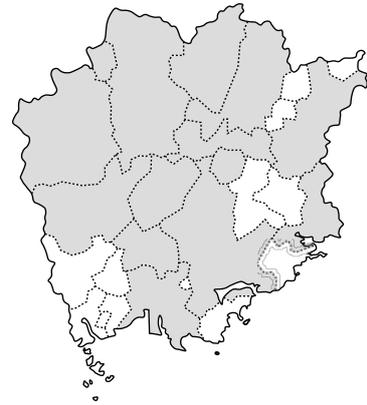
本州、四国、九州に広く分布しており、一般に産出は局地的とされる。周辺離島では佐渡、隠岐から知られる。国外では、朝鮮半島、中国東北部に分布する。局地的ながら県内各地から記録されている。中国山地のススキ草原等では今も少なくないが、中南部地域では近年ほとんど確認されていない。主に河川の流域沿いや農耕地周辺に形成された二次的な草原に生息しており、生息環境の植生変化が存亡に影響しているとみられる。



撮影：中村具見

形態・生息状況

中型のセセリチョウ。雄雌ともに翅表は黒褐色、裏面は黄褐色で、前後翅に白斑列がある。同属のチャバネセセリを含めて同所的に生息する近似種がいくつかいるが、本種は後翅裏面中室に明瞭な銀白色斑を現すことで一見して区別できる。成虫は年2回の発生で、春型は4月下旬から6月、夏型は7月中旬から8月にかけて出現する。春型に比べて夏型は一回り大型となる。寄主植物はイネ科のススキ、オオアブラススキ、チガヤ、ヨシ等。越冬態は蛹。越冬に際して巣は作らない。成虫は日当たりのよいススキ草原等に生息し、敏速に飛んでアザミやオカトラノオ、カワラナデシコなどに訪花吸蜜する。



(中村具見)

主要文献

福田ほか (1984b), 猪又 (1990), 白水 (2006)

ギフチョウ

Luehdorfia japonica Leech

チョウ目 アゲハチョウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

本来分布していた在来個体群は、多くの産地で姿を消しており衰亡傾向が著しい。

分布

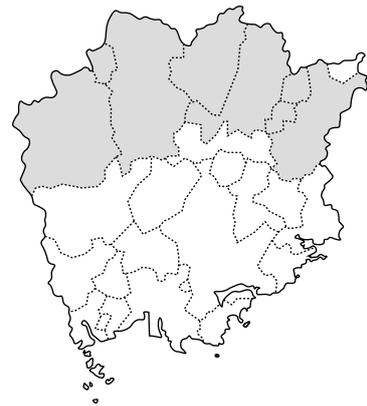
本種を含む *Luehdorfia* 属は原始的なアゲハチョウ類で、日本と東アジア地域から4種が知られている。本種は、本州の特産種で東北地方から中国地方までの山地帯に分布する。県内では北部山地の渓谷地帯等に生息地が点在する。隣接する兵庫、鳥取、広島県では沿岸部まで分布域が広いが、岡山県では中部以南からは発見されていない。道路工事等の地域開発による生息環境の破壊等に加えて、希少な産地として採集圧が高い状況が続き、在来の多くの産地で姿を消した。津山市や美作市等で1980年代以降確認されている個体群は人為的な移入による国内外来種とみられ、生態系への影響が懸念される。



撮影：中村具見

形態・生息状況

黄色と黒の縞模様の後翅には鮮やかな赤斑と橙色斑列がある。成虫は年1回、4月上旬から発生し高地帯では5月にかけて出現する。明るい雑木林内や林縁を緩やかに飛び、スミレ類やミツマタなどに訪花するほか、発生地に近い山頂や稜線に集まる習性がある。寄主植物はウマノスズクサ科のミヤコアオイ、ヒメカンアオイ、ウスバサイシン、フタバアオイ。越冬態は蛹。



関係法令の指定状況

「岡山県文化財保護条例」により、真庭市蒜山の旧川上村一円の発生地が天然記念物に指定されている。

特記事項

鏡野町で「町の蝶」に制定されている。

主要文献

福田ほか (1982), 猪又 (1990), 岡山昆虫談話会ギフチョウ調査会 (2006), 白水 (2006)

(中村具見)

ツマグロキチョウ

Eurema laeta (Boisduval)

チョウ目 シロチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：絶滅危惧 I B類(EN)

選定理由

全国的に減少傾向とされるが、県内では季節的または地域的な個体数変動はみられるものの、目立った衰亡傾向は窺えない。

分布

暖地性の種で本州（福島県以南）、四国、九州及び周辺離島では対馬、種子島、屋久島に分布する。奄美諸島以南の南西諸島でも記録はあるが偶産とされる。県内では局地的ながらほぼ全域で確認されている。国外では台湾から東南アジア、オーストラリアまで東洋熱帯に広く分布する。

形態・生息状況

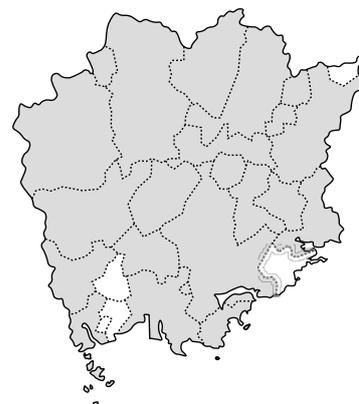
小型のシロチョウ。翅表は明るい黄色で前翅頂部から外縁にかけて黒色の縁取りがある。季節の変異は顕著。夏型は丸味を帯びた翅形でキタキチョウと紛らわしいが、本種は小型で外縁の黒斑の形状が異なること等で区別できる。秋型は大型で前翅頂部が角張った特異な翅形となるほか、地色が一層濃色で後翅裏面中央に2本の平行する褐色条が現れる。成虫は6月から11月頃まで、年4回程度発生を繰り返す。寄主植物はマメ科のカワラケツメイ。成虫で越冬する。寄主植物が自生する河川の堤防や河原、山地のシバ草原や荒地等に生息する。夏型は山地で群棲するが、秋型は南部低地で多くみられることから秋季に低地へ移動している可能性が高い。裏面が赤みを帯びた秋型個体は、大陸からの移動個体と推定されている。越冬前の晩秋には、日当たりのよい斜面の山裾などに集まることが多い。

主要文献

福田ほか（1982）、猪又（1990）、白水（2006）、淀江（2016）
（中村具見）



撮影：中村具見



スジボンヤマキチョウ

Gonepteryx aspasia Ménétriers

チョウ目 シロチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

吉備高原以北に分布しているが、開発により生息環境が荒廃して減少傾向が窺える。

分布

本州、四国、九州に広く分布するが、西日本では山地帯に生息地が限られる傾向がある。国外では朝鮮半島、中国東北部などに分布。県内では中部以北の山地で記録されており、吉備高原に比較的多くの産地が知られているが、南限に近い地域では姿を消したところもある。瀬戸内沿岸部からは確かな記録は知られていない。

形態・生息状況

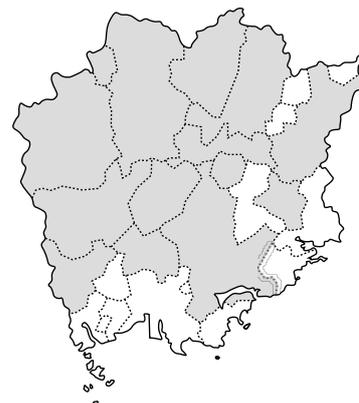
中型のシロチョウ。雄は全体が鮮やかな黄色で雌は黄白色、雄雌ともに前後翅中室に橙色斑を現す。前翅頂及び後翅第3脈先端が突出した独特な翅形から、一見して本種と判別できる。成虫は年1回、6月上旬から7月に出現する。アザミやヒメジョオンに訪花するほか、地表で吸水することも多い。羽化直後はやや不活発でしばしば草叢の葉裏に潜むような行動を見せる。短期間活動して夏眠に入り姿を消すが、9月になると再び林縁を活発に飛ぶ姿が見られるようになる。越冬態は成虫。越冬後の成虫は翅の裏面にシミのような汚点が目立つ。晩秋や早春の低温期に活動する成虫は、地面に横倒しになって日光浴する。雌は明るい樹林内で芽吹いたばかりの寄主植物の新芽に産卵する。寄主植物はクロウメモドキ科のクロウメモドキ、キビノクロウメモドキ等。

主要文献

福田ほか（1982）、猪又（1990）、白水（2006）
（中村具見）



撮影：中村具見



ウラミアカシジミ

Japonica saepestriata (Hewitson)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

里山の落葉広葉樹林に広く生息する種であったが、1990年代後半から急速に減少して衰亡傾向が著しい。

分布

北海道の一部、本州のほぼ全域、四国の北部などに分布している。紀伊半島南部にはウバメガシを寄主植物とする別亜種が生息しているが、県内で瀬戸内沿岸部に多いウバメガシ林からは見出されていない。国外では朝鮮半島からロシア南東部、中国東北部などに分布する。県内の広い地域から記録されているが、近縁のアカシジミと異なり冷温帯域まで分布は及ばず、吉備高原の台地面から平野部の里山等やや乾燥した落葉広葉樹林がみられる地域で個体密度が高い。特に、薪炭林として短伐期で更新されてきた若いアベマキ林で多く発生していたが、こうした雑木林の放置・荒廃が本種の衰亡に影響しているとみられる。

形態・生息状況

大型のシジミチョウで、雄雌ともに翅表全体が橙黄色、裏面は細い黒条が縞模様になっている。雌は前翅表の翅頂部が幅広く黒色で縁取られることで雄と区別できる。成虫は年1回、6月上旬から7月にかけて出現する。寄主植物はブナ科のアベマキ、クヌギ、ナラガシワ等。越冬態は卵。幼虫は若葉を綴って巣を作る習性がある。成虫は日中は不活発で樹林内の低木などに静止しているが、黄昏時になると樹冠部の梢上を群飛する。

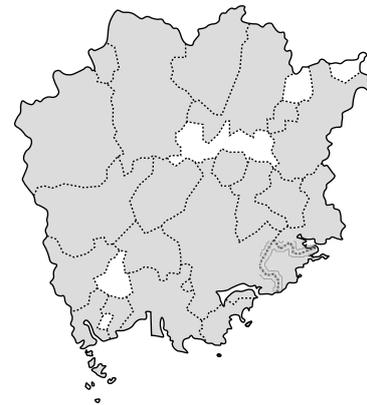
主要文献

福田ほか (1984a), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)



撮影：中村具見



ウラクロシジミ

Iratsume orsedice (Butler)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

寄主植物であるマンサクの葉枯れ被害の拡大とともに、近年は個体数の急激な減少をみている。

分布

北海道の一部、本州、四国、九州に分布する。西日本では冷温帯落葉広葉樹林が主な生息域であり、県内では主に北部山地の渓谷地帯等で局地的に記録されている。寄主植物は吉備高原以北の山地に局地的ながら広く自生しているが、本種の分布は限られる。国外では、台湾、中国西部から知られる。

形態・生息状況

中型のシジミチョウ。雄の翅表は光沢のある銀白色、雌は前後翅とも黒褐色で基半部だけ灰白色なので雄雌は一見して区別できる。裏面は雄雌ともに黒褐色の地色に亜外縁に白色で縁取られた黒斑列等を現す等、ミドリシジミ類では他にみられない独特の斑紋を有する。成虫は年1回、6月中旬から7月にかけて出現する。寄主植物はマンサク科のマンサク（アテツマンサク、マルバマンサク）。越冬態は卵。食樹の芽吹きとともに孵化した幼虫はこれを食して成長する。成虫は夕方活動し、雄は渓谷の林縁等を一定方向に緩やかに飛び交う習性がある。飛行中の雄は羽ばたきがフラッシュのようになって、遠くからでも本種であることが容易に判別できる。

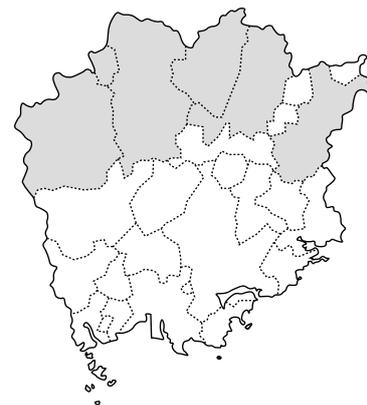
主要文献

福田ほか (1984a), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)



撮影：中村具見



ヒサマツミドリシジミ*Chrysozephyrus hisamatsusanus* (Nagami et Ishiga)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：該当なし

選定理由

暖温帯上部に広く分布する種と思われるが、現在は社寺林や深い渓谷斜面等の比較的自然度の高い環境に遺存的に分布するだけである。

分布

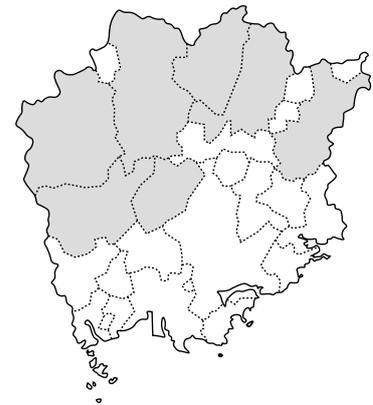
本州、四国、九州の常緑広葉樹林帯に局地的に分布する。県内では、中北部の山地に限られた産地が知られている。

形態・生息状況

中型のシジミチョウ。雄の翅表は金属光沢のある緑色で外縁は黒く縁どられる。雌は全体が黒褐色で前翅表基部と中室に鮮やかな青藍色斑及び中室外側に橙色斑を現す。雄雌ともに裏面は濃灰褐色で中央部に明瞭な白帯があり、肛角部付近でV字状となることで近似種と区別される。尾状突起はミドリシジミ類の中ではもっとも長いものの一つである。成虫は年1回、6月上旬から7月にかけて出現する。成虫は発生地を離れて山頂や稜線等に移動する習性がある。特に雄は、晴天の午後から夕方にかけて高木の枝先等に静止して占有行動を行う。なわばり空間に他の雄が飛来するとこれを敏速に追飛し、しばしば2個体で回転飛翔を行う。雄雌ともに午前中はクリやアカメガシワ、ヤブニッケイ等を訪れて吸蜜する。雄は盛夏前に姿を消すが、雌は夏眠後9月から活動を再開し、10月頃まで生存して寄主植物の休眠芽に産卵する。寄主植物はブナ科のウラジロガシ。越冬態は卵。



撮影：中村具見

**主要文献**

福田ほか (1984a), 猪又 (1990), 白水 (2006), 三宅 (2019)
(中村具見)

クロミドリシジミ*Favonius yuasai* Shirôzu

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：該当なし

選定理由

生息地がやや局限されており、開発により生息環境が悪化したところもみられる。

分布

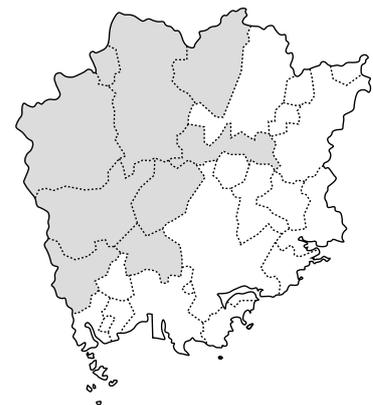
本州（東北地方南部から中部地方の内陸部及び兵庫県北部と中国地方の内陸山地）、九州（熊本、宮崎県境の山地）に分布する。県内では中間温帯のクスギ林が主な分布域となっており、吉備高原中西部から中国山地（新見市、新庄村、真庭市、鏡野町）にかけて産地が点在している。岡山県は中国地方における分布域の東限にあたる。国外では朝鮮半島中部に分布する。

形態・生息状況

雄翅表は同属の近縁種とは異なり、暗褐色で銅色光沢を有する。雌はやや大型で茶褐色の翅表には光沢がなく、翅形が丸みを帯びる。雄の裏面は濃褐色、雌はより明るい褐色でいずれも細い白帯と肛角部に橙赤色斑がある。成虫は年1回、6月中旬から7月に出現し、寄主植物であるクスギ、アベマキ（ブナ科）の古木が多い落葉広葉樹林に生息する。雄は日中樹冠部においてほとんど活動しないが、早朝の薄暗い時間帯及び夕方に梢上を活発に飛ぶ習性がある。雄雌ともにクリの花によく訪れる。寄主植物は県内各地に普遍的に分布するのに、本種の分布は著しく限られる。越冬態は卵。新緑の頃、終齢幼虫は樹幹部や太枝下面樹皮上等に静止する習性がある。蛹化は地表の落葉下等で行われる。



撮影：中村具見

**主要文献**

福田ほか (1984a), 猪又 (1990), 白水 (2006)
(中村具見)

フジミドリシジミ

Sibatanoiozephyrus fujisanus (Matsumura)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：該当なし

選定理由

冷温帯落葉広葉樹林を代表するブナ林に生息する種で、現在は残存するブナ林に依存して局地的な分布を示している。

分布

北海道（渡島半島）、本州、四国、九州の山地帯に自生するブナ林に生息する日本固有種。西日本では冷温帯林のみられる山地帯に分布は限られる。県内では、中国山地に局地的な産地が残されているだけで、イヌブナを含むブナ属樹種の分布域に比べると本種の分布は限られている。

形態・生息状況

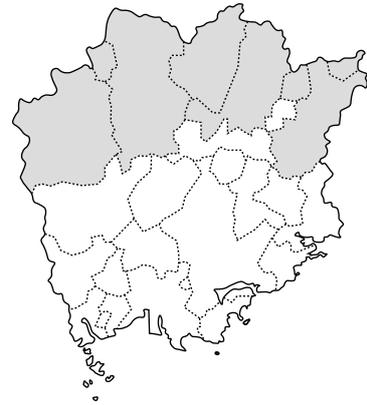
ミドリシジミ類の中では小型の種。雄翅表は金属光沢のある明るい青色で、雌は一樣に暗褐色。裏面は雄雌ともに灰褐色で、雌の方が一層褐色味を帯びており、独特の斑紋から近似種との区別は容易である。成虫は年1回、6月中旬から7月にかけて出現する。寄主植物はブナ科のブナ、イヌブナ。ブナが自生する冷温帯落葉広葉樹林が主な生息地であるが、より低所の暖温帯上部に自生するイヌブナにも発生する。ただし、吉備高原中西部地域ではイヌブナが局地的に分布しているが、これまで本種は確認されていない。越冬態は卵。開芽時期の早いブナを食する本種は、他の冷温帯性ミドリシジミ類に先駆けて発生する。成虫は早朝に樹林内の低木上などに降りていることが多い。日中はほとんど活動しないが、夕方にはブナ林の梢上を活発に飛び占有行動を示す。

主要文献

福田ほか（1984a）、猪又（1990）、白水（2006）
（中村具見）



撮影：中村具見



ミヤマカラスシジミ

Fixsenia mera (Janson)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

生息地が局限された種で、森林伐採、開発等の影響で衰亡傾向が認められる。

分布

北海道の一部、本州、四国、九州の主に山地帯に分布する日本固有種。西日本では、中国・四国・九州の冷温帯が主な分布域で、生息地は局限されている。県内では吉備高原西北部から中国山地のやや冷涼な山地帯に局地的産地が残されている。ベニモンカラスシジミと混生する地域もあるが、本種の方が垂直的な分布域は高い。

形態・生息状況

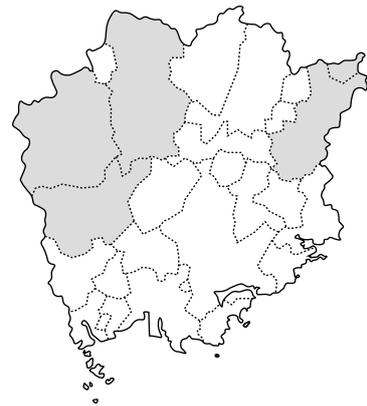
小型のシジミチョウ。雄雌ともに翅表は一樣に黒褐色、裏面は茶褐色で細い白条と後翅肛角部に橙色斑を有する。雌はやや大型で裏面の色調が淡色となる。近縁のカラスシジミ、ベニモンカラスシジミとは裏面の白条の形状及び肛角部橙色斑内側に黒斑列を現すことで区別できる。年1回の発生で、7月上旬から8月にかけて出現する。ベニモンカラスシジミとの混棲地では本種の方が半月程度遅れて発生するため、成虫が混飛することはなく時期的な棲み分けがみられる。寄主植物はクロウメドキ科のクロウメドキ、キビノクロウメドキ。越冬態は卵。成虫は午後から夕方にかけて活動し、開けた空間に面した林縁の灌木等に飛来して占有行動を示す。枝先に静止した時には体を横倒しにして日光浴をする。午前中は林縁のヒメジョオン等で訪花吸蜜する個体が見られる。

主要文献

福田ほか（1984a）、猪又（1990）、白水（2006）
（中村具見）



撮影：中村具見



ベニモンカラスシジミ*Fixsenia iyonis kibiensis* (Shirôzu et M.Nanba)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

岡山県は1969年に本州で初めて発見された中国地方亜種のタイプ産地である。産地は少なくないが石灰岩採掘、農地整備、道路工事等により生息環境が消滅したところもみられる。

分布

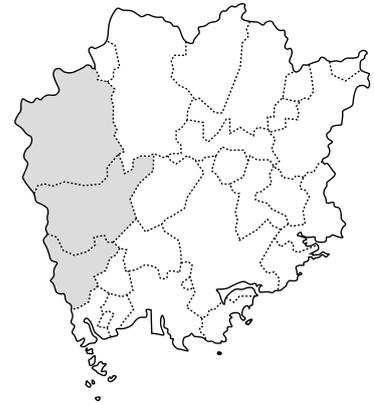
本州、四国に5つの分布圏が知られており、固有の地理的変異を示すことから名義タイプ亜種を含めて4亜種に区分されている。中国地方亜種は、岡山県西部から広島県東部にかけての高梁川水系一帯に分布している。県内の主な生息地は石灰岩台地とその周辺にあり、分布域は比較的広いが生息地は局地的である。寄主植物が同じ同属のミヤマカラスシジミと混生する場合もあるが、本種の分布域はより低所にある。国外では中国大陸西部に別亜種が分布する。



撮影：中村具見

形態・生息状況

小型のシジミチョウ。前後翅表は雄雌ともに暗褐色で、前翅表に橙赤色斑を現す。この橙赤色斑は雄の方が顕著で、雌は薄く現れるか消失する個体もある。この橙赤色斑を現す近縁の種は国内にはいない。成虫は年1回、5月下旬から6月にかけて出現する。寄主植物はクロウメモドキ科のクロウメモドキ、キビノクロウメモドキ等。寄主植物の自生する石灰岩の岩場や岩屑地などが生息地となっている。成虫は樹冠部の開けた空間などに現れ、雄はその空間に面した枝先を占有する。雌はウツギやイボタノキ、ヒメジョオンなどで訪花吸蜜する。越冬態は卵。

**主要文献**

福田ほか (1984a), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)

キマダラルリツバメ*Spindasis takanonis* (Matsumura)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

高原の疎林や寺社の境内、公園等人為的な影響を受けやすい環境に生息しており、開発等の影響で減少傾向が認められるほか、採集圧も高い。

分布

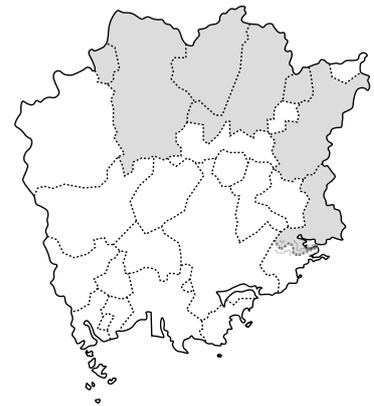
本州の岩手県から広島県まで分布しており、分布域は孤立的、離散的である。近畿地方から中国地方の鳥取県にかけてやや広く分布する。県内では、新庄村から真庭市を経て美作市や備前市北部にかけて、局地的な産地が点在している。備前市では近年全く確認されていない。



撮影：中村具見

形態・生息状況

小型のシジミチョウ。翅表は暗褐色で雄は通常その上に紫青色の光沢を現すが、雌はこれを欠く。裏面は雄雌ともに淡黄色に数本の黒条が走り、2対の尾状突起を有する。裏面の地色は通常は黄白色だが橙色を帯びたものまで変異が認められる。成虫は年1回の発生で、低地では6月上旬から、山地帯では6月下旬から7月にかけて出現する。山地のカシワヤクリ等の疎林、サクラが植栽された公園緑地等に主に生息している。午前中は林縁のクリやヒメジョオン等を訪れて吸蜜することが多い。午後3時頃から夕方にかけて、雄は開けた空間に飛来して低木や丈の高い草本の枝先などを占有し、周辺を活発に飛翔する。雌はハリブトシリアゲアリの巣があるサクラなどの枝や幹上に産卵し、幼虫はハリブトシリアゲアリの巣中に入って、アリから給餌を受けて成長する。

**主要文献**

福田ほか (1984a), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)

クロシジミ

Niphanda fusca (Bremer et Grey)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

県内各地で記録されていたが、生息環境が荒廃して多くの産地が消滅し衰亡傾向が著しい。

分布

本州、四国、九州及び隠岐、対馬に分布しており、一般に生息地は局地的である。県内では北部山地から南部丘陵まで、局地的ながら広く記録されている。近年は中南部からはほとんど姿を消しており、クヌギやカシワの点在する火山性草原の残る中国山地で生息が確認されているだけである。国外では朝鮮半島から中国東北部、シベリアなどに分布。

形態・生息状況

やや大型のシジミチョウ。雄の翅表は淡黒褐色で暗紫色の光沢を有しているが、雌は一様に暗褐色を呈する。裏面は淡褐色の地色に褐色斑があり、全体が白化した個体もみられる。雄は前翅が尖りやや細長い翅形だが雌は大型で丸みが強く、雄雌で翅形が大きく異なる。成虫は年1回、6月中旬から7月にかけて出現し、9月頃まで生き残りの個体がみられる。雄は樹冠部等を敏速に飛翔するが、雌は草上を緩やかに飛んでヒメジョオン等で吸蜜することが多い。好蟻性昆虫の一種で、母蝶はアブラムシが寄生したカシワやアカマツの細枝、ススキ等に産卵し、若齢幼虫はアブラムシの分泌物を食餌として成長する。その後幼虫はクロオオアリの巢中に運び込まれ、アリから給餌を受けて成長する。

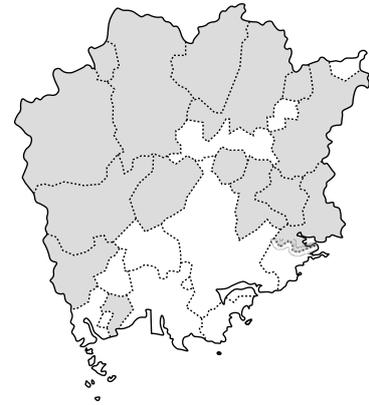
主要文献

福田ほか (1984a), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)



撮影：中村具見



シルビアシジミ

Zizina emelina (de l'Orza)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

人為的に維持された草原等不安定な植生に依存しているため、全国的に減少傾向にある。県内でも河川堤防の改修、草地の維持管理形態の変化等の影響で衰亡傾向が窺える。

分布

暖地性の種で本州の栃木県以西、四国、九州に局地的に分布する。周辺離島では淡路島、隠岐、対馬、壱岐等から記録がある。南西諸島産は別亜種とされてきたが、近年分子系統解析等に基づいて別種とされた。国外では朝鮮半島南部、チベット等に分布。県内では中南部の広い地域から記録されているが、産出は局地的である。

形態・生息状況

小型のシジミチョウ。雄の翅表は青藍色で外縁は黒く縁どられ、春・秋型に比べて夏型は一層幅広くなる。雌は全体が暗褐色で、早春や晩秋の低温期に羽化する個体は、前翅基半部に薄く青藍色鱗を現すものが多い。裏面の地色は白色から灰褐色で小さな黒斑を有する。人家の周辺に普通に見られるヤマトシジミとよく似ているが、後翅裏面中央部第6室基部の黒斑が内側にずれて、これらの黒斑列が円弧状にならないこと等で区別できる。成虫は4月から11月にかけて数回の発生を繰り返す。河川の堤防、ため池や棚田の土手など草刈り等により維持されてきた草原に生息している。成虫はミヤコグサやコマツナギ等の自生する草地を低く活発に飛び交う。寄主植物はマメ科のミヤコグサ等。越冬態は幼虫。

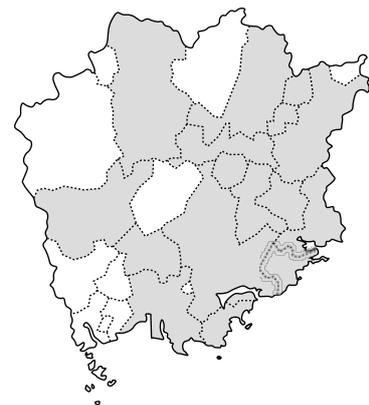
主要文献

福田ほか (1984a), 猪又 (1990), 白水 (2006)

(中村具見)



撮影：中村具見



クロツバメシジミ

Tongeia fischeri shojii Satonaka

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

寄主植物が自生する生息環境が開発等で次第に失われており、減少傾向が続いている。

分布

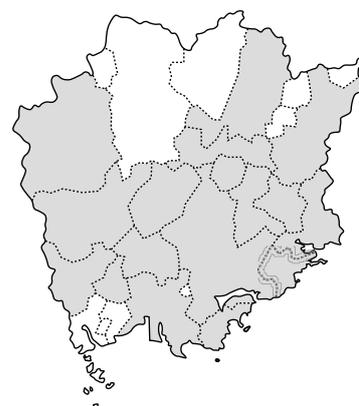
国内では本州、四国、九州に局地的に分布。①関東・中部地方、②近畿地方西部から山口県東部までの瀬戸内沿岸部及び四国・九州の内陸部、③山口県西端及び九州北部から西部にかけての対馬を含む沿岸部等、の三つの分布域があり、斑紋の差異等から各々亜種区分されている。国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部などに分布する。本県産は②の中国地方・四国・九州内陸亜種に含まれる。県内では中南部に生息地が点在しており、細かな地理的変異が認められる。倉敷市街地など南部低地では、寄主植物が残されていても全く見られなくなった産地が少なくない。



撮影：中村具見

形態・生息状況

小型のシジミチョウ。雄雌ともに翅表は黒褐色で、灰白色の裏面には小さな黒斑列を現す。成虫は4月中旬から11月にかけて年4～5回の発生を繰り返す。もっとも普遍的な寄主植物はベンケイソウ科のツメレンゲで、他にマルバマンネングサ、イワレンゲ等。これらが自生する日当たりのよい露岩地や古い瓦屋根、石垣、山間部では棚田の石積み等が生息地となっている。また、道路建設に伴い生じた崖や擁壁等に生息することもある。成虫は寄主植物の周辺をほとんど離れることなく活動する。越冬態は幼虫（2齢～5齢）。



主要文献

福田ほか（1984a）、猪又（1990）、白水（2006）、有田・前田（2019）
（中村具見）

スギタニルリシジミ

Celastrina sugitanii (Matsumura)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：留意 ●環境省：該当なし

選定理由

冷温帯の渓谷林に生息する種で、生息環境が維持されれば衰亡の恐れは少ないと考えられるので生態系を含めた保全が求められる。

分布

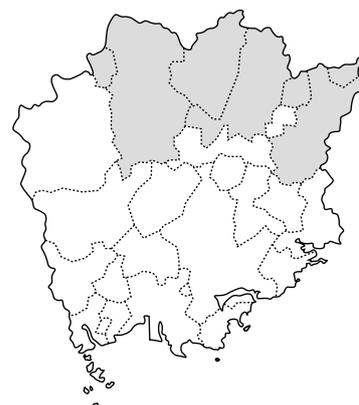
北海道、本州、四国、九州に分布する。中国地方では冷温帯に局地的な産地が知られており、県内では新庄村から美作市にかけての中国山地の渓谷等に局限された生息地が残されている。国外では台湾、中国、朝鮮半島、ロシア南東部、サハリンに分布する。



撮影：中村具見

形態・生息状況

小型のシジミチョウ。雄の翅表は暗青紫色で外縁は細く黒帯で縁どられ、雌は明るい青紫色で外縁は幅広く黒色となる。裏面は雄雌ともに暗灰色で小黑斑が点在する。近縁のルリシジミとは、表裏面ともに色調が暗いこと等で一見して区別できる。成虫は年1回、4月中旬から5月上旬にかけて出現する。寄主植物はトチノキ科のトチノキで、母蝶は花蕾などに産卵し幼虫はこれを食べる。越冬態は蛹。成虫は寄主植物の自生する渓谷の林道上などを緩やかに飛び、キブシ、フキなどを訪れて吸蜜する。湿地に多数の雄が集まって吸水する光景がしばしば観察される。午後になると高所の樹冠部を活発に飛び交うようになる。全国的にはトチノキの自生しない地域でキハダやミズギに依存して分布を拡大している例も知られているが、県内ではこうした観察例は確認されていない。



主要文献

福田ほか（1984a）、猪又（1990）、白水（2006）
（中村具見）

ゴマシジミ

Phengaris teleius daisensis (Matsumura)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

植生遷移、開発等による生息環境の悪化に採集圧も加わって多くの産地で絶滅もしくは絶滅に瀕している。

分布

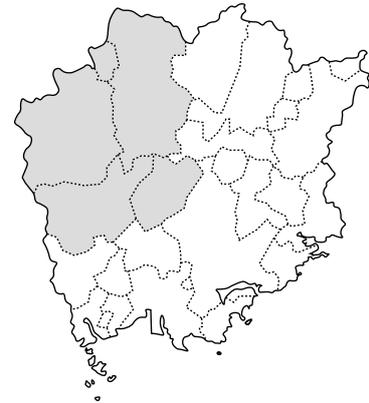
北海道及び本州、九州の山地に分布。国外では朝鮮半島から中国東北部、ヨーロッパにかけてユーラシア大陸北部に広く分布する。地理的変異が著しく国内では4亜種に区別されている。本県産は全体に大型で前後翅表の青色部の発達がよく、標記の亜種とされる。県内では、吉備高原西北部から中国山地の西半で記録されており、真庭市が中国地方における分布域の東限となる。吉備高原では耕作地の周辺、伐採跡地、湿原等に生息していたが、現在は大半の地域で姿を消している。中国山地では火山性草原や採草放牧地等で生息が確認されている。



撮影：中村具見

形態・生息状況

大型のシジミチョウ。雄雌ともに翅表の青色部が発達する。裏面は灰褐色～灰白色で黒斑列を有する。斑紋の個体変異及び地理的変異が少なくない。成虫は年1回、7月中旬から8月にかけて出現し、低標高地ほど発生が遅れる傾向がある。盛夏の草原を緩やかに飛び、ワレモコウなどに訪花する。母蝶はワレモコウ（バラ科）の花穂に産卵し幼虫はこれを食べた後、クシケアリの巢中に運ばれアリの幼虫・卵を食べて成長する。アリの巢中で越冬し、翌夏蛹化する。



関係法令の指定状況

「岡山県自然保護条例」により、自然環境保全地域（鯉ヶ窪地域）の野生動植物保護地区において保護すべき種に指定されている。

主要文献 福田ほか（1984a）、猪又（1990）、白水（2006）
（中村具見）

ヒメシジミ

Plebejus argus micrargus (Butler)

チョウ目 シジミチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

北部山地では今も多産する生息地が残されているが、吉備高原では大半の地域から姿を消しており衰亡傾向が顕著である。

分布

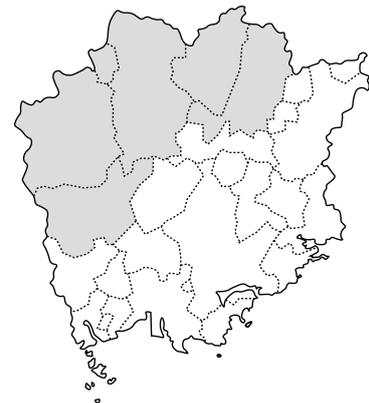
北海道、本州、九州に分布する。中国地方では中国山地一帯に局地的に分布しており、岡山県はその分布域の東限にあたる。中国地方の個体群は中部地方低地産とともに、雄外縁の黒帯が幅広く発達することから標記の亜種とされている。県内では高梁市から新見市にかけての吉備高原西北部及び中国山地に局地的な産地が知られており、津山市阿波が東限となっている。国外では朝鮮半島からサハラ、中国東北部よりヨーロッパにかけてユーラシア大陸の北部に広く分布する。



撮影：中村具見

形態・生息状況

小型のシジミチョウ。雄の翅表は青藍色、雌は黒褐色で後翅外縁に橙色斑を現すので雄雌は容易に区別できる。裏面は灰褐色で黒斑列と亜外縁部に橙色斑を現し、雌は雄よりも褐色味を帯びる。成虫は年1回、6月中旬から7月にかけて出現する。湿原とその周辺の草原が主な生息地であるが、中国山地では乾性の火山性草原や林道沿いの小規模な草地等にも広く生息している。日当たりのよい草叢を低く緩やかに飛んで、オカトラノオ、シロツメクサ、アザミ類などに群れて吸蜜するほか、雄は湿地で吸水することも多い。寄主植物はキク科のマアザミやヨモギ等。越冬態は卵。



主要文献

福田ほか（1984a）、猪又（1990）、白水（2006）
（中村具見）

ウラギンスジヒョウモン*Argyronome laodice* (Pallas)

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

里山に広く分布する普通種であったが、全国的に衰亡傾向が著しく、県内各地からも近年急速に姿を消している。

分布

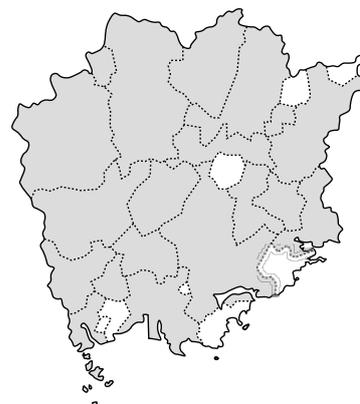
北海道、本州、四国、九州と周辺離島を含め全国に広く分布する。県内でもほぼ全域から記録があり、特に平地から低山地の里山を中心に普通に見られた種である。現在は、吉備高原南西部から瀬戸内沿岸部等の限られた地域で確認されているにすぎない。国外では、朝鮮半島からサハリン、中国東北部を経てヨーロッパまでユーラシア大陸に広く分布する。



撮影：中村具見

形態・生息状況

中型のタテハチョウ。前後翅表は橙色の地に豹紋様の多数の黒斑列を現す。後翅裏面は中央部の銀白色斑紋列を境に、基半部は淡緑黄色、外半は茶褐色で色調が異なる。雌は雄よりも一回り大型で、前翅頂近くにくさび状の小白斑がある。成虫は年1回、6月上旬から7月にかけて出現する。河川の堤防やため池の土手、採草放牧地などの明るい草原に多く、疎林に囲まれた古い休耕田等にも生息する。盛夏には活動を休止するが、9月頃から晩秋まで再び姿を見ることが出来る。寄主植物は各種スミレ類(スミレ科)。産卵は地上の枯葉等寄主植物以外に行われ、卵または初齢幼虫で越冬する。成虫は明るい草原を敏速に飛び交い、アザミ類、オカトラノオ、クリ等で吸蜜する。



(中村具見)

主要文献

福田ほか(1983)、猪又(1990)、白水(2006)

オオウラギンヒョウモン*Fabriciana nerippe* (C. Felder et R. Felder)

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧ⅠA類(CR)

選定理由

県内各地で記録されていたが、近年確かな生息情報はもたらされておらず、絶滅したものと考えられる。

分布

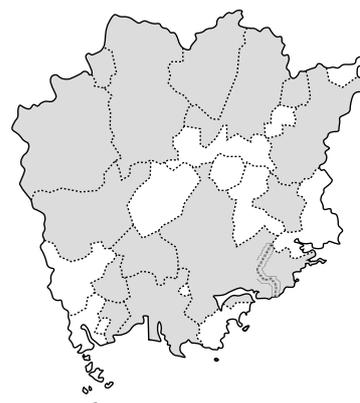
本州、四国、九州及び周辺離島(淡路島、隠岐諸島等)に分布する。全国的に衰亡傾向の著しい種で、現在は本州(山口県)と九州の山地草原に局限された生息地が残されているだけである。県内では、1960年代までは平野部から山地帯まで各地で見られたが、その後急速に衰亡し、1980年代の中国山地での記録を最後に確認されていない。国外では朝鮮半島から中国東北部にかけて分布する。



所蔵 中村具見

形態・生息状況

雄翅表は明るい橙黄色で豹紋様の黒斑列を有する。雌は黒斑や黒条が発達して暗化するとともに著しく大型となるほか、前翅端近くに白斑を現す。雄裏面は明るい黄緑色だが、雌は灰緑褐色で大きな銀白斑がよく目立つ。成虫は年1回、6月上旬から7月にかけて出現し、雌は10月頃まで活動する。近縁のウラギンヒョウモンとは、本種の方が一般に大型で翅形が丸みを帯びていること、後翅裏面亜外縁の銀白斑がM字形を呈すること等で区別できる。明るい草原を好み、河川の堤防や火山性草原、採草放牧地等に生息し、アザミ類やオカトラノオ等、各種の草花を訪れる。こうした草原の管理放棄、放牧地の荒廃、河川改修等により生息適地が著しく減少した。寄主植物はスミレ(スミレ科)。越冬態は初齢幼虫。

**主要文献**

福田ほか(1983)、猪又(1990)、白水(2006)

(中村具見)

ウスイロヒョウモンモドキ*Melitaea protomedea* Ménétriès

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠA類(CR)

選定理由

中国山地に多くの生息地が知られていたが、近年は激減しており衰亡傾向が著しい。中国地方特産種として特に採集圧が高かった。

分布

国内では本州西南部の特産種。兵庫県から広島・島根両県にかけての中国山地一帯に分布する。県内では北部中国山地及び新見市草間台地とその周辺等に局地的な生息地が知られている。国外では朝鮮半島から中国東北部など大陸に分布している。

形態・生息状況

小型のタテハチョウで橙黄色の翅表に筋状の黒斑列を有する。近縁のヒョウモンモドキと似ているが、本種の方がはるかに小型。吉備高原に分布する個体群は、中国山地のものよりもやや大型である。成虫は年1回の発生、吉備高原では6月上旬から、中国山地では6月下旬から7月にかけて出現する。幼虫の食草はオミナエシ科のカノコソウ、オミナエシ。越冬態は幼虫。農耕地周辺のカヤ場など小規模な草地や中国山地では火山性草原、放牧地等が生息地となっている。明るい草原上を低く緩やかに飛び、オカトラノオやアザミ、ヒメジョオンなどに訪花する。現在、鏡野町を除く大半の地域で野生個体群は姿を消したものとみられる。

関係法令の指定状況

国内希少野生動植物種（種の保存法）、鏡野町上齋原のウスイロヒョウモンモドキ生息地（岡山県指定天然記念物）

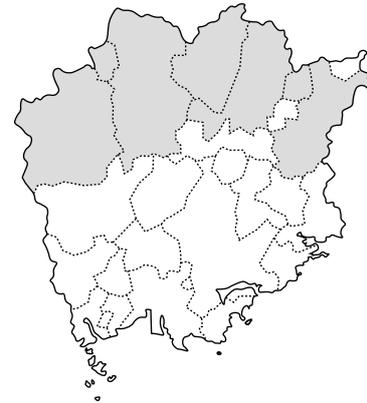
主要文献

福田ほか（1983）、猪又（1990）、白水（2006）

（中村具見）



撮影：中村具見

**ヒョウモンモドキ***Melitaea scotosia* Butler

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：絶滅 ●環境省：絶滅危惧ⅠA類(CR)

選定理由

全国的に衰亡傾向が著しい種で、県内でも近年は全く確認されず、絶滅したと思われる。希少種として採集圧が高い状況が認められた。

分布

本州の東北地方（福島県）、関東・中部地方の山地及び兵庫県中部から山口県にかけて、局限された生息地が知られていた。国外では朝鮮半島から中国東北部などに分布する東アジアの特産種。県内各地に産地が点在していたが、多くの地域で姿を消しており、1990年代前半に中国山地と吉備高原北西部で確認された記録が最後と思われる。

形態・生息状況

雄翅表は橙黄色の地に筋状の黒斑を有する。雌も同様の斑紋で、地色が黄褐色となり一層暗化する個体もみられる。裏面は明るい黄色で波状の黒斑と橙色斑列が並ぶ。成虫は年1回、6月上旬から7月に出現する。寄主植物はキク科のタムラソウ、キセルアザミ等。これらが自生する湿原とその周辺の草原に生息する。成虫は発生地をほとんど離れることはなく、アザミ類等各種の花を訪れる。幼虫は集団で営巣し越冬する。吉備高原では山間の休耕田等、里山の近傍にわずかに生き残っていたが、生息環境の荒廃に伴い姿を消した。

関係法令の指定状況

国内希少野生動植物種（種の保存法）

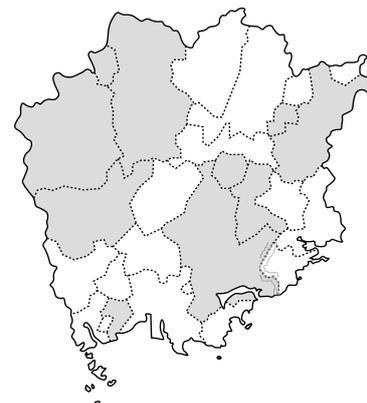
主要文献

福田ほか（1983）、猪又（1990）、白水（2006）

（中村具見）



所蔵 中村具見



シータテハ

Polygonia c-album (Linnaeus)

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

選定理由

北部山地等からわずかな記録が知られていたが、1970年代以降確かな生息情報はなく県内からは絶滅したものとみられる。

分布

北海道、本州、四国、九州に分布。寒地性の種で中部地方以北の山地帯には広く生息し稀な種ではないが、西日本では山地性となり産地は局限される。県内では1930年代の岡山市での記録を除くと、北部山地から散発的な記録が知られるだけで、確かな記録は真庭市での1964年の採集例が最後と思われる。国外では、台湾（山地）、朝鮮半島からサハリン、中国東北部、ヨーロッパまでユーラシア大陸北部に広く分布する。

形態・生息状況

雄雌ともに翅表は橙褐色で黒斑を有する。裏面は黄褐色（夏型）から灰褐色（秋型）。前後翅外縁は波型に切れ込んだ独特の形をしている。近縁のキタテハとは、前後翅外縁の湾入が一層顕著で、凸部前端が丸みを帯びていること、前後翅亜外縁内側の黒斑上に藍色鱗を散布しないこと等で区別できる。成虫は年2回、6月から9月にかけて発生し、秋型が成虫で越冬する。成虫の飛翔は敏速で、夕方にかけてなわばりを作り、一定の範囲を活発に活動する。湿地で吸水するほか樹液や落果で吸汁する。越冬成虫は4月から5月にかけて、岡山市、鏡野町、新見市などで得られたことがある。幼虫の寄主植物は、ニレ科のハルニレ、オヒョウなど。

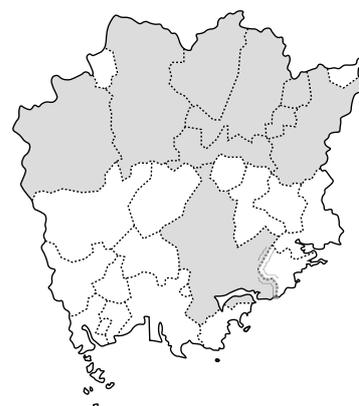
主要文献

福田ほか（1983）、猪又（1990）、白水（2006）

（中村具見）



所蔵：倉敷昆虫館（撮影：中村具見）



オオムラサキ

Sasakia charonda (Hewitson)

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

里山林の荒廃、開発等により生息環境が悪化して全国的に減少傾向にあるため、里山の環境を代表する種として保全が望まれる。

分布

北海道（石狩低地帯）、本州、四国、九州、佐渡島の主に山地帯に分布する。県内では吉備高原から中国山地にかけて分布域は広く、南西部では沿岸部低地からも記録されている。寄主植物が同じゴマダラチョウが市街地等にも適応して普遍的に生息するのに対して、本種は森林の環境から離れることはない。東アジアの固有種で、国外では朝鮮半島から中国大陸、ベトナム、台湾に分布する。

形態・生息状況

大型のタテハチョウ。雄雌ともに黒褐色の翅表に白斑列を現す。雄の基半部は青紫色に輝くが雌はこれを欠く。裏面は全体が一様に銀白色から黄色味を帯びた個体まで変異がみられる。成虫は年1回、6月から7月にかけて出現する。雄は小高い丘陵や山頂などに飛来して占有行動を示す。この時、他のチョウや鳥類などが飛来するとこれを激しく追飛する。雄雌ともにクヌギやオニイトヤ等の樹液に好んで集まる。寄主植物はニレ科のエノキ、エゾエノキ、コバノチョウセンエノキ。越冬態は幼虫（4～5齢）で、寄主植物の根際などに積もった落葉下で越冬する。1957年、日本昆虫学会で「日本の国蝶」に選定されている。

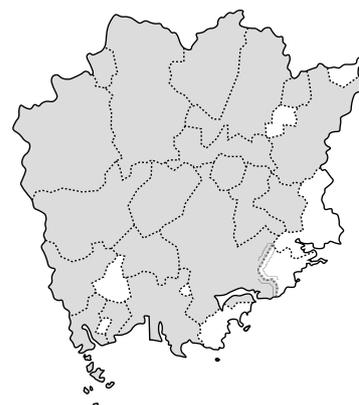
主要文献

福田ほか（1983）、猪又（1990）、白水（2006）

（中村具見）



撮影：中村具見



ウラナミジャノメ

Ypthima multistriata nipponica Murayama

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

県内各地から記録されていたが、大半の生息地から姿を消す等、衰亡傾向が著しい。

分布

本州（神奈川県西部及び福井県南部以西）、四国、九州に分布。周辺離島では対馬、壱岐、屋久島等から知られる。国外では朝鮮半島、中国大陸、台湾に分布している。県内では中南部で多く記録されており、北部からも散発的な記録がある。産出は局地的である。

形態・生息状況

雄雌ともに翅表は濃灰褐色、裏面は灰白色の地に細かな黒条が縞模様となっており、前翅に1個後翅に3個の明瞭な眼状紋を有する。よく似た普通種のヒメウラナミジャノメは本種の第1化が羽化する時期には発生末期で既に汚損していること、本種の方がやや大型で後翅裏面眼状紋が異なること等で明確に区別できる。ただし、飛翔しているときは紛らわしい。成虫は年1～2回、6月から9月にかけて出現するが、年1回の発生に止まる地域もある。第2化の個体はやや小型となる。寄主植物はシナダレスズメガヤ、カゼクサ、ニワホコリ、ススキ等の各種イネ科植物。越冬態は幼虫。成虫は林縁の草上等をやや活発に飛び、ヒメジョオン等を訪れる。かつては道路沿いや耕作地周辺の草地に点々と生息していたが、減少傾向が顕著で、現在は湿原等の周辺にわずかに生き残っているにすぎない。

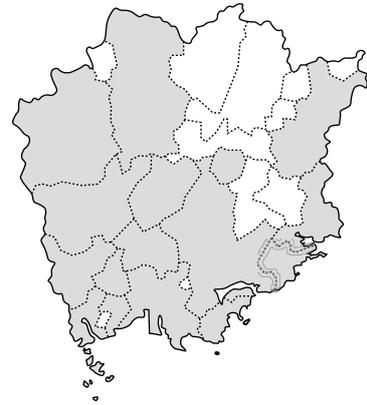
主要文献

福田ほか(1984b)、猪又(1990)、白水(2006)

(中村具見)



撮影：中村具見



ヒメヒカゲ

Coenonympha oedippus arothius Okada et Torii

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

県内各地の湿原等に生息地が点在していたが、現在は大半の地域から姿を消しており衰亡傾向が著しい。

分布

本州の特産種で中部地方から中国地方に分布する。周辺離島では小豆島、鹿久居島に生息している。中部地方の山地帯に分布する個体群（長野県・群馬県亜種）と中部地方の低地から近畿・中国地方にかけて分布する個体群（本州中部・近畿・中国地方亜種）の二亜種に区分されている。本県産は後者に含まれ、やや大型で裏面の眼状紋の発達が良い。県内で現存する生息地は局限されている。国外では朝鮮半島からヨーロッパまでユーラシア大陸に広く分布する。

形態・生息状況

翅表は雄雌ともに黒褐色で、雄に比べて雌の方が淡色となる。裏面は明るい黄褐色で外縁に沿って黄環で縁取られた眼状紋を現す。裏面の色調は暗色味の強いものから明るいものまで変異が認められる。成虫は年1回、低地では5月下旬から6月、山地帯では6月後半から7月にかけて出現する。成虫はモウセンゴケやサギソウの生える湿性草原や灌木類を交えた草原、山地の火山性草原等に生息し、草上を低く緩やかに飛ぶ。寄主植物は各種カヤツリグサ科植物等で県内ではホンモンジスゲから幼虫が得られている。3齢幼虫で越冬。

関係法令の指定状況

「岡山県自然保護条例」により、自然環境保全地域（鯉ヶ窪地域）の野生動植物保護地区において保護すべき種に指定されている。

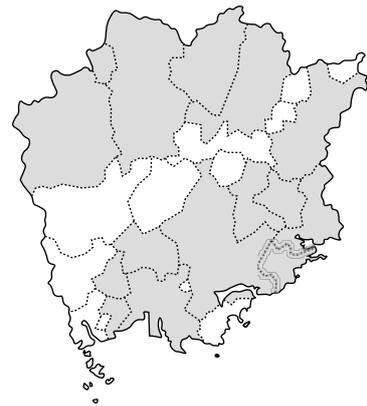
主要文献

福田ほか(1984b)、猪又(1990)、吉田(1990)、白水(2006)

(中村具見)



撮影：中村具見



ウラジャノメ*Lopinga achine* (Scopoli)

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：絶滅 ●環境省：該当なし

選定理由

1950年に美作市後山で採集された記録が唯一の確認例で、その後生息情報は全く得られていない。

分布

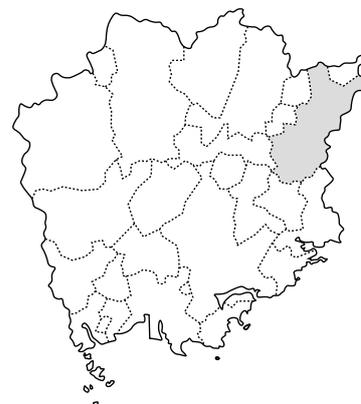
北海道、本州（山形・宮城県境、福島県、関東地方北部から中部地方及び中国地方）の山地に分布する。中国地方では広島、島根、山口県にまたがる西中国山地に局地的な産地が知られている。県内では美作市後山のみ。後山は山域の大部分が氷ノ山後山那岐山国定公園の特別保護地区に指定されているため、自然環境は当時からほとんど変化はない。また、周辺の東中国山地からもこれまで全く発見されていない。国外では朝鮮半島から中国東北部、ヨーロッパまでユーラシア大陸北部に広く分布する。



所蔵：中村具見（山梨県産）

形態・生息状況

雄雌ともに翅表は灰褐色で、裏面はやや明るい黄褐色。前後翅裏面の亜外縁には黄環で縁取られた眼状紋列がある。その内側にある白帯は、西中国山地の個体群は北海道産と同程度に広がるものがある。成虫は年1回の発生で、低標高の地では6月中旬から、高地帯では7月から8月に出現する。広島県で確認されている寄主植物は、カヤツリグサ科のヒカゲスゲ、ニシノホンモンジスゲ等。越冬態は3～4齢幼虫。西中国山地では標高1200m以上の山頂部と深い渓谷斜面の岩場等が生息地となっている。成虫は林間や渓谷の崖地等を緩やかに飛ぶ。

**主要文献**

福田ほか（1984b）、猪又（1990）、渡辺（1993）、白水（2006）
（中村具見）

キマダラモドキ*Kirinia fentoni* (Butler)

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

局限された生息地が開発等により失われる等して衰亡傾向が顕著である。

分布

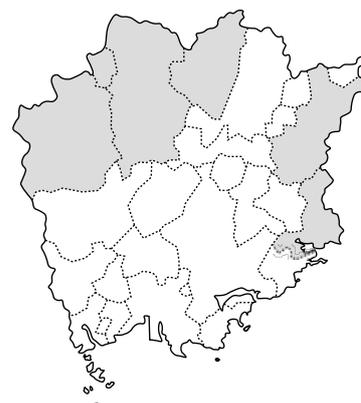
北海道、本州、四国、九州の山地に局地的に分布している。県内では新見市から新庄村、真庭市、鏡野町等にかけての中国山地の高原地帯及び備前市北部に兵庫県から連続する局地的な生息地が知られている。国外では朝鮮半島から中国東北部、アムールに分布する。

形態・生息状況

雄の翅表は黄褐色、後翅亜外縁には不鮮明な黒紋を現す。雌の翅表は黄色の明色斑が発達する。裏面は雄雌ともにより明るい黄褐色で、後翅亜外縁には明瞭な眼状紋列がある。裏面の地色は白色と黄色の二つのタイプがある。成虫は年1回、備前市北部では6月下旬から、中国山地では7月上旬から出現し9月頃まで見られる。乾燥した草原にクヌギやカシワ等の落葉広葉樹が点在する疎林の環境に生息することが多い。日中は不活発で樹林内の下草等に静止しており、驚くと草叢の茂みなどに姿を隠す。クヌギ等の樹液に好んで集まる。寄主植物は各種のカヤツリグサ科、イネ科草本。初齢幼虫で越冬する。



撮影：中村具見

**主要文献**

福田ほか（1984b）、猪又（1990）、白水（2006）
（中村具見）

オオヒカゲ

Ninguta schrenkii (Ménétrières)

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

山地の湿原等に生息するが、農地開発、水路改修等により生息環境が荒廃して急速に減少している。

分布

北海道と本州に分布。中国地方では山地帯に局部的に生息するが、山陰側ではやや低地にも分布している。県内では北部山地のほかに吉備高原西北部でも稀ながら得られている。国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、中国西部、チベットに分布する。

形態・生息状況

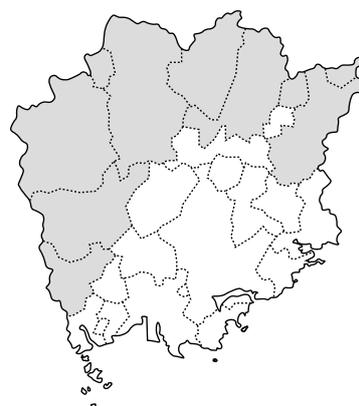
ジャノメチョウ亜科では大型の種である。雄雌ともに翅表は暗灰褐色で、後翅表に黒斑列があり、後翅裏面には明瞭な眼状紋を現す。裏面の地色はやや明るい灰褐色で、その色調は暗化したものから白色部の発達したものまで変異がみられる。雄は後翅表基部に銀色鱗がある。成虫は年1回、吉備高原では6月下旬から、北部山地では7月に出現し、生き残りの個体は9月頃までみられる。寄主植物はカヤツリグサ科の各種植物で、県内ではアブラガヤから終齢幼虫が得られている。羽化直後の成虫は寄主植物の自生する湿原や水路沿い、ハンノキの湿地林周辺等で見られるが、次第に樹林の中へ移動する傾向がある。日中は不活発で樹林内の下草上に静止することが多く、しばしば樹液を訪れる。曇天時や夕方には林縁部に出て緩やかに飛ぶ。越冬態は2齢または3齢幼虫。

主要文献

難波 (1983), 福田ほか (1984b), 猪又 (1990), 白水 (2006)
(中村具見)



撮影：中村具見



クロヒカゲモドキ

Lethe marginalis (Motschulsky)

チョウ目 タテハチョウ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧 I B類 (EN)

選定理由

産地が限られており、森林伐採、農地開発等による生息環境の悪化に伴い減少傾向が認められる。

分布

本州、四国、九州に分布する。いずれの地域でも生息地は局部的。県内では吉備高原中西部から中国山地の山麓部にかけて産地が点在しており、垂直分布の上限は600m付近までで冷温帯域には及んでいない。吉備高原の台地面に比較的多くの産地が知られており、分布密度が高くなっている。国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、中国に分布する。

形態・生息状況

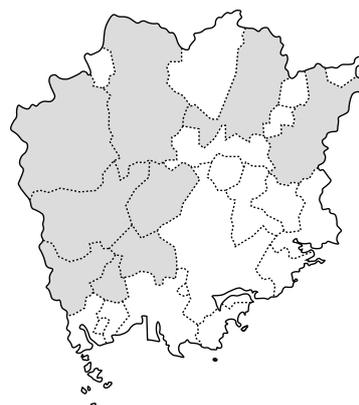
前後翅表は暗褐色で、裏面は外縁に沿って明瞭な眼状紋列がある。雌は雄よりも大型で翅形が丸みを帯びる。近縁のクロヒカゲやヒカゲチョウとは、本種の方がやや大型で前翅裏面亜外縁に通常3個現れる眼状紋のうち最下方の眼状紋が最大となることで区別できる。成虫は年1回、7月上旬から8月にかけて出現する。寄主植物はイネ科、カヤツリグサ科の各種植物。落葉広葉樹林とその周辺に生息しており、日中は樹林内の下草上に静止していることが多い。人の気配には敏感で、近づくと素早く反応して飛び去る。樹液に集まり吸汁することも多い。雄は夕方、林道上等の空間を往復しながら活発に飛び、高所の枝先やひらけた幹上で占有行動を示す。越冬態は幼虫。

主要文献

福田ほか (1984b), 猪又 (1990), 白水 (2006)
(中村具見)



撮影：中村具見



ツシマキモンチラシ*Eterusia watanabei* Inoue

チョウ目 マダラガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内での記録は1市1カ所1例のみで、定着しているかどうかは現時点では断定できないが、偶産種ではなく発生・隔離分布の可能性が高いと考えられる。

分布

県内では、高梁市臥牛山で2015年6月13日に採集された雌1個体の記録が唯一のものである。

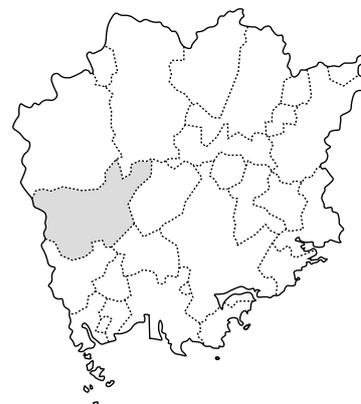
県外では、本州（和歌山県、広島県）、対馬に分布。対馬のみに特産する独立種としてタイワンリチラシから分離された本種だが、その後、和歌山県と広島県から記録された。和歌山県の記録は1例のみだが、広島県からは複数市から少なくない記録がある。国外では、中国に分布する。



所蔵：渡辺和夫

形態・生息状況

開張50～65mm。雄の腹部は黒く節間に黄色の筋が入る。雌の腹部は黄色。前翅は黒色で、新鮮な個体は暗緑色の光沢がある。斑紋は黄色。年1化で、成虫は6月中旬～7月に出現する。雌雄とも灯火に飛来することもあるが、基本的には昼飛性で、対馬では、クリ、クマノミズキ、アカメガシワに訪花する。県内の記録もクリの花に来ていたもので、非常に新鮮な個体。寄主植物はサカキ科のヒサカキ。

**主要文献**

広渡ほか（2013）、清水・角島（2014）、渡辺（2016）
（渡辺和夫）

ハイロボクトウ*Phragmataecia castaneae* (Hübner)

チョウ目 ボクトウガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内の生息は4市9カ所で確認されている。湿地性の種であるため、池沼開発や湿地開発による生息環境への影響が大きく、また、耕作地への農薬散布による周辺に生息する個体群への影響も存続を脅かす要因として考えられる。

分布

県内では、真庭市1カ所、津山市1カ所、岡山市5カ所、玉野市2カ所の記録がある。これらの記録から、県南部の平地の湿地が主たる生息地のように思われる。近年では玉野市で、2007年～2012年にかけての4例6個体の確認記録がある。

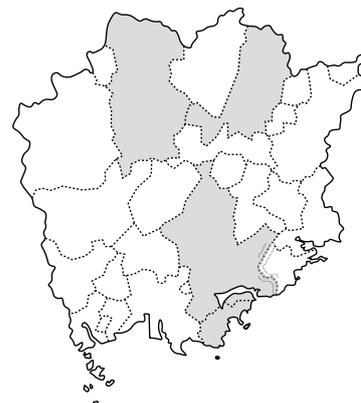
県外では、北海道、本州、四国、九州に分布。国外では、朝鮮半島からヨーロッパまでのユーラシア大陸とアフリカに広域に分布する。



所蔵：三宅誠治

形態・生息状況

開張35～38mm。トンボのような独特の翅形を持ち、前後翅はやや褐色を帯びた灰色で、脈間に暗灰色鱗を散布する。ボクトウガ科としては特異な色彩斑紋をしているため、他種との区別は容易。雌の腹部は長い。寄主植物はイネ科のヨシで、幼虫はヨシの茎に潜入する。ヨシの生える湿地で灯火に飛来する。成虫は6～7月に出現するとされるが、県内では5月中旬～7月初旬までの記録がある。

**主要文献**

井上ほか（1982）、落合（2005）、広渡ほか（2013）、三宅（2013）
（渡辺和夫）

ギンボシスズメ

Parum colligata (Walker)

チョウ目 スズメガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

県内での確認は、6市町の8カ所のみ。2000年に高梁市で記録された後、2002年、2003年にも高梁市で追加記録されている。その後の記録はなく、他は1979年以前の少数の記録があるのみである。存続を脅かす要因は不明。

分布

県内では、新見市、真庭市、鏡野町、津山市、高梁市、倉敷市から記録があるが、近年の記録は高梁市からのもの（川上町穴門山神社1例、備中町布瀬上布瀬磐窟溪2例）のみである。

県外では、北海道、本州、四国、九州、対馬、奄美大島、沖縄本島、西表島に分布。近年では中部地方南部以西の記録しかないようである。国外では、台湾、朝鮮半島、中国東北部～南部、インドシナ半島、フィリピン（ルソン島）に分布する。

形態・生息状況

開張70～90mm。前翅はやや緑色を帯びるが、古い標本では褐色に変色してしまう。雌雄とも前翅中室に和名の由来となった銀白紋のある特徴的な斑紋なので、他種との区別は容易。成虫は、6月下旬～7月上旬と8月の年2回出現する。寄主植物はクワ科のカジノキ、コウゾ。

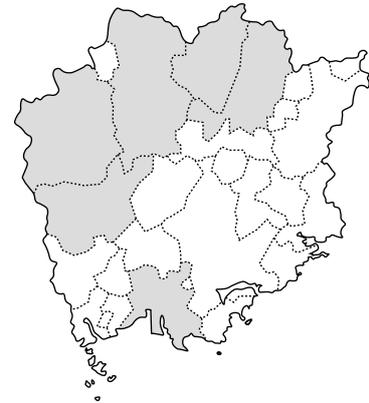
主要文献

井上ほか（1982）、渡辺（2003）、岡山県（2010）、三宅（2010）、駒井ほか（2011）、岸田（2011a）、松田（2014）

（渡辺和夫）



所蔵：渡辺和夫



ヒメスズメ

Deilephila askoldensis (Oberthür)

チョウ目 スズメガ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

中国地方では岡山県のみで生息が確認（3市町3カ所）されている。1964年から1969年まで散発的に得られた後、1980年の1個体の確認以降はまったく得られていない。火山性草原や河川敷などを生息地とするため、生息環境の変化が懸念される。

分布

県内では、岡山市で6個体、総社市で1個体、吉備中央町で1個体の古い記録があるのみ。

県外では、北海道、本州（青森県、秋田県、宮城県、静岡県、新潟県、長野県、群馬県）、四国（香川県）、九州（熊本県、大分県）に分布。長野・群馬県境の高地草原と九州の九重山系や阿蘇山などの火山性草原では個体数も少なくないとされ、他の地ではいずれも局地的かつ散発的とされる。国外では、朝鮮半島、中国北部～中部、シベリア東部に分布する。

形態・生息状況

開張50mm内外。前後翅の外縁は弱く鋸歯状となる。県内では5月上旬、8月、9月中旬に得られており、8月の記録がほとんど。複数個体が記録されているのは岡山市（西大寺）のみである。寄主植物はアカネ科のカワラマツバ、キバナカワラマツバで、これらは高原の草地や日当たりのよい河原のような環境に多いとされており、県内の記録から見ると、岡山県における生息地は河原や河川敷ではないかと推定される。

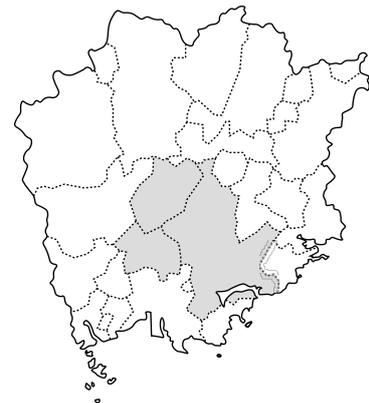
主要文献

井上ほか（1982）、岡山県（2010）、駒井ほか（2011）、岸田（2011a）、宮田（2013）

（渡辺和夫）



所蔵：伊藤國彦



タツカモクメシャチホコ

Kamalia tattakana (Matsumura)

チョウ目 シャチホコガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

1970年代に県内では若干の記録があるが、2011年に記録されるまで、発見されていない。その後も現在まで記録がない。

産地の限定、林相の変化などが存続を脅かす要因と思える。

分布

東北地方から沖縄諸島まで分布する。県内では鏡野町（上斎原）、水無国有林（新見市）絹掛の滝（新見市）から記録されている。

形態・生息状況

イイギリ（ヤナギ科）を食樹とし、年2化（5～8月に出現）と考えられている。開張は雄65～72mm、雌72～80mm程度。前翅は純白で内横線は太く黒色であることなどで、他の近縁種と区別される。

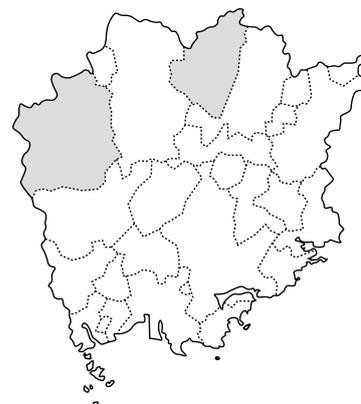
主要文献

楨本（1979）、井上ほか（1982）、岡山県（2010）、岸田（2011b）、伊藤（2012）、石川（2013）

（伊藤國彦）



所蔵：伊藤國彦



クワヤマエグリシャチホコ

Ptilodon kuwayamae (Matsumura)

チョウ目 シャチホコガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内での確認地点は1市4カ所に限られる。山地の草原に生息するとされ、開発や管理放棄など人為的な影響を受けやすいと考えられる。

分布

県内では、真庭市の蒜山高原一帯から少数の個体が見られているのみであるが、2003年、2007年に各1個体という比較的新しい例もある。それ以外は1984年以前の記録。

県外では、北海道と本州、四国、九州の標高の高い山地草原にやや局地的に分布。国外では、朝鮮半島、ロシア南東部（沿海州）に分布する。

形態・生息状況

開張は、雄で31mm内外、雌で31～36mm内外。同属の中では最も小型。雄の触角は歯状で両側に繊毛束を出し、雌の触角は肉眼では糸状に見える。前翅はやや短く、黄褐色～橙褐色で紫赤色を帯びることはなく、外横線は前縁に向かって強く曲がる。後翅は淡色。年2化で、成虫は6月初旬と8月に出現する。県内では、6月下旬と8月下旬～9月初旬の記録がある。寄主植物はマメ科のヤマハギで、単食性。

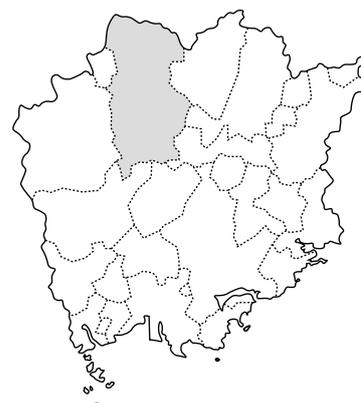
主要文献

井上ほか（1982）、三宅（2008）、駒井ほか（2011）、岸田（2011b）

（渡辺和夫）



所蔵：三宅誠治



スゲドクガ

Laelia coenosa (Hübner)

チョウ目 ドクガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内に広く分布しているが、湿地の減少とともに、減少傾向が続いている。

分布

北海道、本州に分布する。国外では朝鮮半島からヨーロッパまでユーラシア大陸に広く分布するという。

形態・生息状況

開張は雄31～37mm、雌40mm内外。年2化で5～6月と8～9月に出現する。寄主植物としてマツカサススキ（カヤツリグサ科）、ヒメガマ（ガマ科）、ヨシ（イネ科）などが知られている。

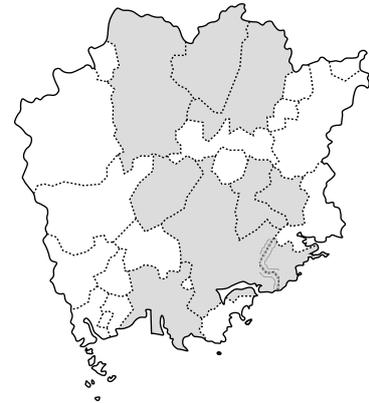
主要文献

井上ほか（1982）、岸田（2011b）、石川（2013）

（伊藤國彦）



所蔵：三宅誠治



トラサンドクガ

Kidokuga torasan (Holland)

チョウ目 ドクガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内で確認された生息地は1市1村の2カ所のみで、全国的にも散発的な記録のみ。草原性の種であり、特に管理放棄などによる草原環境の変化が存続を脅かす。

分布

県内では、長い間、1966年8月に津山市黒沢山で灯火採集によって得られたものが唯一の記録だったが、2004年5月に新庄村田浪で再確認された。その後の記録はない。

県外では、本州（静岡県以西）、四国、九州、対馬に分布。いずれの地でも局地的かつ記録も散発的で個体数も少ない。国外では中国から記録があるが、おそらく別種の同定間違いであろうとされており、現状では日本固有種と思われる。

形態・生息状況

開張は、雄で21mm内外、雌で25mm内外。雄の前翅は濃い橙色で中室外に斑紋があり、後翅は多少とも黒っぽくなる。雌は前後翅とも橙黄色で無紋。年2化。成虫は5月と7～8月に出現。県内で、春先の個体がススキ草原で昼過ぎ頃にひざ元の低い所を複数個体が活発に飛び回る姿が観察され、また、交尾も観察された。昼飛性が強いいため灯火へ誘引されることが少なく、そのことが採集記録の少ない原因の一つではないかと推定されている。春の個体はススキ草原が生息地であることが判明したが、夏の個体が同様にススキ草原を生息地としているかどうかは、依然として不明。

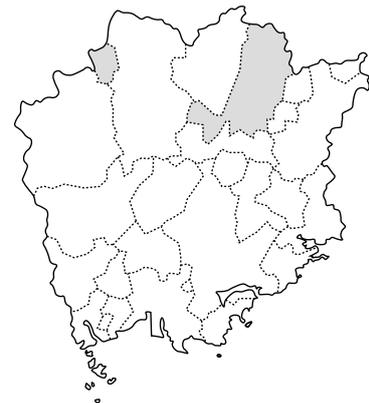
主要文献

井上ほか（1982）、渡辺（2006）、岡山県（2010）、岸田（2011b）

（渡辺和夫）



所蔵：渡辺和夫



キバラヒトリ

Epatolmis luctifera (Denis et Schiffermuller)

チョウ目 ヒトリガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：該当なし

選定理由

県内では恩原高原（鏡野町）が唯一の産地とされていたが、同地からは1985年以降記録がない。2005年蒜山（真庭市）で1個体が採集されたが、その後の記録はない。

おそらく草原の減少と衰退が本種の衰亡の要因になっていると思える。

分布

本州、九州に分布する。国外ではヨーロッパから朝鮮半島まで広く分布するという。

形態・生息状況

開張は雄38mm内外、雌34mm内外、体は暗黒褐色の長毛におおわれ、腹部背面は濃黄色。ヤナギ類（ヤナギ科）、オオバコ科、タンポポ科（キク科）などが寄主植物として知られている。

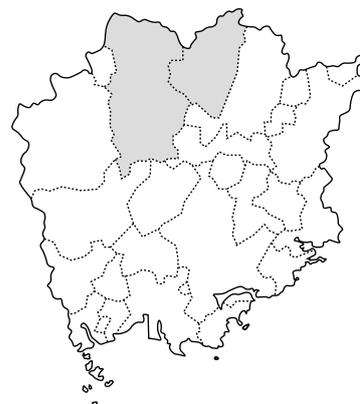
主要文献

井上ほか（1982）、三宅（2008）、岡山県（2010）、岸田（2011b）、石川（2013）

（伊藤國彦）



所蔵：伊藤國彦



エゾベニシタバ

Catocala nupta (Linnaeus)

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

県内で確認された生息地は4市町5カ所のみで、確認個体数も非常に少ない。1984年以降は記録がなかったが、2019年に再確認された。森林伐採や道路工事（林道工事）などによる生息環境への影響が危惧される。

分布

県内では、真庭市、鏡野町、勝央町、美作市の中国山地帯から局地的に記録されているのみ。2019年に真庭市下和津黒高原で、35年ぶりに再確認された。

県外では、北海道や本州中部地方以北の山岳地帯の各所で見られるが、近畿地方以西では散発的な記録しかない。国外では、台湾、東アジアからヨーロッパまでのユーラシア温帯に広く分布する。

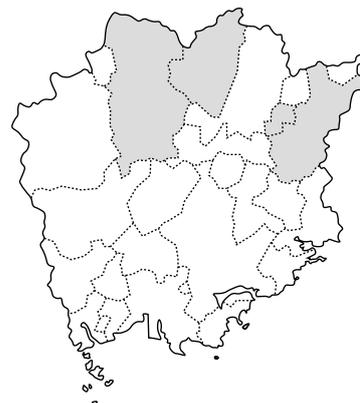
形態・生息状況

開張68～80mm内外。オニベニシタバとは、後翅中央の黒色帯の幅がより広くて強い鋸歯状にならず、後翅外縁の前よりにやや目立つ白色部があることで区別でき、ベニシタバとは、前翅の色調が灰色ではないこと及び後翅の色調が桃色ではなく橙赤色であることで区別できる。成虫は7～10月に出現。寄主植物はドロノキ等のヤナギ類。真庭市では、ヤマナラシから幼虫が得られているが、飼育途中で死亡したため、成虫にまで至っていない。ヤマナラシからの記録は、日本では大変貴重なものとされている。県内に生息する*Catocala*属の中で、最も確認例の少ないもののひとつであろう。

主要文献

井上ほか（1982）、難波（1984、1986）、岡山県（2010）、岸田（2011b）、伊藤（2020）

（渡辺和夫）

所蔵：倉敷市立自然史博物館
（撮影：伊藤國彦）

クビグロケンモン

Acronicta digna (Butler)

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内の生息は4市5カ所で確認されている。人手の入った湿性の草原を生息地としており、こうした環境は湿地開発、池沼開発、湿地乾燥化などの影響を受けやすい。また、農薬散布による周辺の個体群への影響も憂慮される。

分布

県内では、真庭市蒜山百合原、総社市黒尾、岡山市奥矢津、倉敷市下津井、倉敷市福江の5カ所から記録がある。1981年以降の記録がなかったが、2013年に総社市から記録された。

県外では、北海道、本州、四国、九州、対馬に分布するが、産地は局地的。国外では、台湾、朝鮮半島、中国（黒龍江省、河南省、湖北省、湖南省）、ロシア南東部に分布する。

形態・生息状況

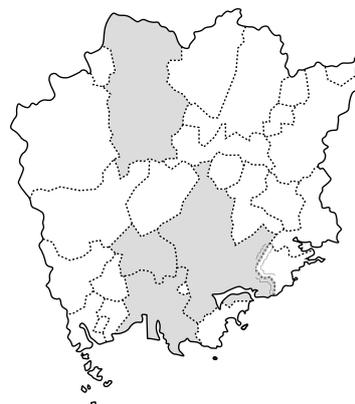
開張43～47mm。前翅地色は灰黒色で紫色を帯びる。黒褐色の外横線が後角付近で大きく半円状にえぐれているのが特徴。後翅は、春に出現する個体は淡い黄白色、夏に出現する個体は外半が暗色となり、外横線と横脈紋が認められる。年2化で、成虫は4～5月と7～8月に出現する。寄主植物はアヤメ科のカキツバタ、タデ科のイタドリ。

主要文献

井上ほか (1982), 増井 (2004), 岸田 (2011b), 脇本・渡辺 (2019)
(渡辺和夫)



所蔵：倉敷市立自然史博物館



クシロツマジロケンモン

Craniophora minuscula Kiss et Jinbo

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：留意 ●環境省：該当なし

選定理由

県内で生息が確認されているのは3市7カ所のみ。本州では隔離的な分布を示す。

分布

県内では、県西部の新見市から高梁市を経て井原市までの間のごく限られた地点から記録されているが、いずれの地でも個体数は非常に少ない。近年では、高梁市から2000年（川上町穴門山神社）と2009年（備中町布瀬上布瀬磐窟溪）の記録がある。

県外では、北海道に広く分布するほか、本州では岩手、長野、鳥取、広島のみ隔離的に分布する。国外では、朝鮮半島などに分布するとされていたが、別種の日本固有種であることが報告された。

形態・生息状況

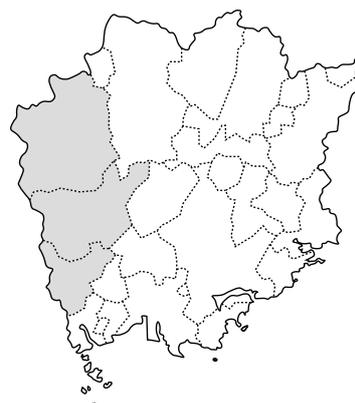
開張28～30mm。同属の他種とは、小型であること、前翅中横線が大きく屈曲することで区別可能。後翅は雄では白色、雌では暗色を帯びる。中国地方の個体は大きくて異質だが、交尾器は北海道のものとも一致するため同種とされている。年2化で、6～9月にかけて発生するとされるが、県内では高梁市で5月初旬の記録がある。一時期、県内分布の様相がベニモンカラスジミに近いことからキビノクロウメドキとの関係が示唆されたが、現在では、モクセイ科のイボタノキが寄主植物であることが知られている。イボタノキは比較的広く生育しているので、本種の特異的な分布には寄主植物以外の要因があるものと思われる。

主要文献

井上ほか (1982), 渡辺 (2003), 岡山県 (2010), 三宅 (2010), 岸田 (2011b), 中村 (2014), 枝 (2016)
(渡辺和夫)



所蔵：渡辺和夫



アオモンギンセダカモクメ

Cucullia argentea (Hufnagel)

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内3市3カ所からの記録があるが、1970年代以降は確認されていない。河川のはん濫（川相変化）や河川開発などの影響を受けやすい不安定な環境に依存しているため、存続が危惧される。

分布

県内では、倉敷市、総社市、津山市で記録されている。非常に少ない。

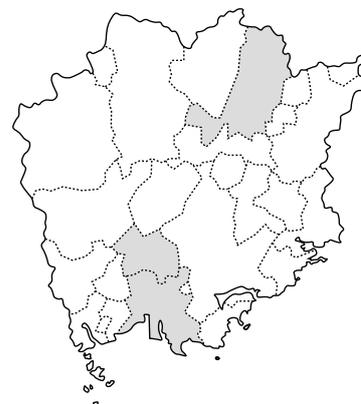
県外では、秋田、富山、新潟、福井、石川の日本海側諸県と、兵庫、香川、愛媛、山口の瀬戸内沿岸諸県に偏った分布を示し、岐阜県、佐賀・長崎県境の草原や対馬からの記録もあるが、いずれも局地的。国外では、朝鮮半島、中国北部、モンゴル、ロシア南東部からヨーロッパに分布する。



所蔵：中村具見

形態・生息状況

開張38mm内外。前翅は銀白色で、淡い草緑色～抹茶色の網目状の斑紋がある。後翅は白色で、外縁部はやや黒褐色。縁毛は白色。年1化で、成虫は8～9月に出現する。寄主植物はキク科のカワラヨモギで、カワラヨモギは砂浜海岸や河川中流域のレキ河原、草原など、植生があまり豊かではない砂質土壌のやや乾燥した環境に生育するとされる。山口県（秋吉台）では石灰岩台地上の草原、日本海側諸県では海岸付近での確認例もあるようだが、県内では河原や河川敷が本種の生息地であろうと推定される。成虫は、キキョウ科のツリガネニンジンの花を好んで訪れるという。



主要文献

片山（1959）、山砥（1964）、岡山県（1978）、井上ほか（1982）、岡山県（2010）、岸田（2011b）（渡辺和夫）

ヤヒコカラスヨトウ

Amphipyra subrigua Bremer et Grey

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：留意 ●環境省：該当なし

選定理由

確認された生息地は2市4カ所のみで、全国的に見ても生息地は少なく局地的で、隔離分布を示す。

分布

県内では、県西部の新見市から高梁市にかけて広がる石灰岩地域に局地的に分布しており、生息地における個体数もあまり多いものではない。

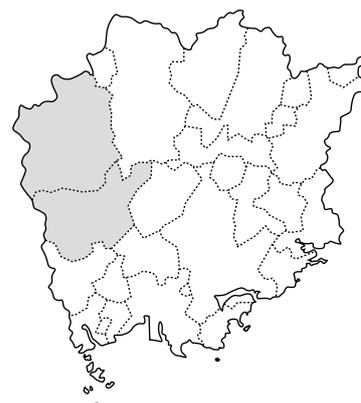
県外では、新潟県、東京都、岐阜県、広島県に隔離的に分布。国外では、中国（河北省、四川省）に分布する。



所蔵：渡辺和夫

形態・生息状況

開張34～40mm。前翅は濃い茶褐色。外横線は黒色波状で灰色に縁取られる。環状紋は扁平でその外方に向かって翅脈に沿う黒色条を持つ。後翅は前翅よりやや淡い茶褐色。同属の他種に比べて著しく小型。寄主植物はツゲ科のツゲ。ツゲに固有で、ツゲは石灰岩地域に生育することから、「岩場の蛾」として知られている。県内における本種の分布もほぼ石灰岩地域に限定されている。年1化で、成虫は初夏に羽化して樹皮下などで夏眠し、晩夏から再び活動して秋に交尾・産卵することが知られている。県内での夏眠は観察・確認はされていないが、成虫が得られているのは6月～7月中旬と8月末から9月下旬であるので、このことからほぼ夏眠の事実は裏づけられる。



主要文献

井上ほか（1982）、新潟県（2001）、岡山県（2010）、岸田（2011b）、中村（2014）（渡辺和夫）

コンゴウミドリヨトウ*Stauropora celsia* (Linnaeus)

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧 I B類 (EN)

選定理由

1985～1998年にかけて、5個体が記録されたが、その後は未発見。全国でも産地は新見市のみで他県での近似環境でも未発見である。

分布

ユーラシア種とされ、朝鮮半島、中国～ロシア南東部、モンゴル、シベリア～ヨーロッパ、などに分布するとされている。国内では新見市が唯一の産地。

形態・生息状況

年1化と推定され、10～11月に出現する。日本での生態などは未知。開張36～46mm 前翅の地色は若緑色、褐色の中央帯および亜外横線が目立つ、後翅は濃褐色。

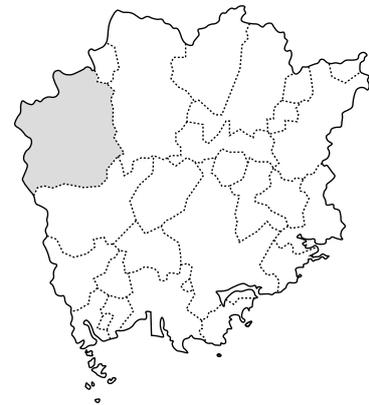
ヨーロッパではハルガヤ属、ノガリヤス属、カモガヤ属などの植物が寄主植物として知られている。

主要文献

井上ほか (1982), 岡山県 (2010), 岸田 (2011b), 石川 (2013)
(伊藤國彦)



所蔵：大阪市立自然史博物館

**オオチャバネヨトウ***Nonagria puengeleri* (Schawerda)

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：絶滅危惧 II 類 ●環境省：絶滅危惧 II 類 (VU)

選定理由

県内で確認された生息地は3市5カ所のみ。生息環境も湿地という特異な環境で、個体数も極めて少ない。1978年以降、長い間記録がなかったが、2010年に32年ぶりに再確認された。湿地環境は開発行為によって消滅する傾向にあり、管理放棄による乾燥化に伴う寄主植物の生育地の減少がみられるほか、農薬の散布が周辺に生息する個体群の存続に影響を与える恐れもある。

分布

県内では、倉敷市の栄町、児島宇野津、児島赤崎の3つの記録があるのみだったが、2010年に玉野市東高崎（1雌）と岡山市南区迫川（幼虫採集：1雌羽化）で再確認された。

県外では、北海道東部、本州、九州に分布するが、北海道東部を除き、いずれの地でも産出は局地的。国外では、中国（黒竜江省）、ロシア南東部に分布。

形態・生息状況

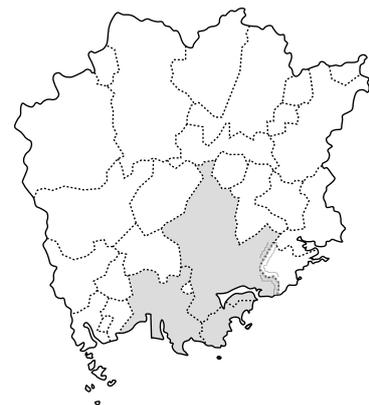
開張は、雄で40mm内外、雌では50mmを超える。前翅は濃赤褐色で外横線はわずかに黒点列が現れ、中室端に1白点が現れる。後翅は淡い黄白色で外縁部が暗色化する個体もある。成虫は6～8月に出現する。寄主植物はガマ科のガマ。幼虫はガマの茎部から見つかっている。雌の腹部は長くて腹側に湾曲し、骨化した1対の針状の突起を持ち、これで茎を傷つけて産卵するといわれている。低地の沼沢地や河畔に局地的に残存する種と考えられる。

主要文献

井上ほか (1982), 岡山県 (2010), 岸田 (2011b), 三宅 (2013)
(渡辺和夫)



所蔵：三宅誠治



キスジウスキヨトウ

Capsula sparganii (Esper)

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

湿地環境の指標種とされ、多くの県でレッドデータブックにリストアップされている。県内でも湿地環境の変化で、減少傾向と思える。

分布

北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。国外では朝鮮半島、中国、ロシア南東部、モンゴル、シベリアからヨーロッパに分布するという。

形態・生息状況

開張29～44mm 成虫の翅色などには変異が多い。

寄主植物としてガマ（ガマ科）ミクリ（ミクリ科）が知られている。年1化で、低層湿原から内陸盆地まで垂直分布は比較的幅広い。成虫は6～9月に出現する。

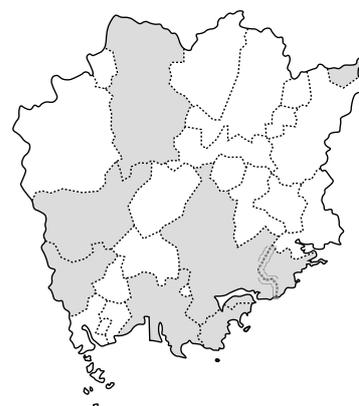
主要文献

井上ほか（1982）、岸田（2011b）

（伊藤國彦）



所蔵：三宅誠治



ギンモンアカヨトウ

Plusilla rosalia Staudinger

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

県内で確認された生息地は2市4カ所のみ。個体数も非常に少なく、1970年以降の記録はない。低湿地に依存する種と考えられており、湖沼開発、湿地開発、湿地乾燥化などによる生息環境への影響を強く受けるとともに、農薬散布による個体群への影響も危惧される。

分布

県内では、倉敷市住吉町、倉敷市庄、岡山市福田、岡山市西大寺の4カ所から、1970年以前の古い記録があるのみ。県南部の湿地が主たる生息地と考えられる。

県外では、北海道、本州、四国、九州の低湿地や河川敷、火山草原などで得られるが、比較的少ないようである。国外では、朝鮮半島、中国（黒竜江省、江蘇省、湖北省）、ロシア南東部に分布する。

形態・生息状況

開張21～28mm。前翅地色は赤紫色、中央帯は褐色を帯び、内外横線に銀白色条が現れる。後翅地色は淡褐色、横脈紋と屈曲する外横線が現れる。年2化以上で、成虫は4～9月に出現するとされるが、県内の記録は、5月中旬、7月上旬、8月下旬～9月上旬の3期に大別される。低地の池周辺等の湿地環境に生える池畔植物に依存すると考えられるが、こうした環境は低地ではほとんど姿を消しつつある。寄主植物はタデ科のヤナギタデ。

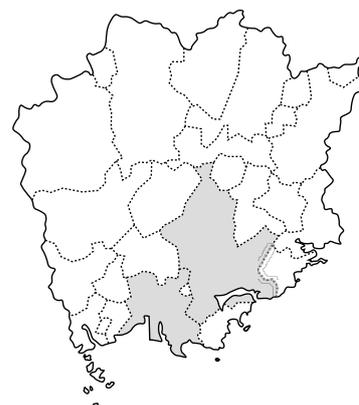
主要文献

井上ほか（1982）、岸田（2011b）、宮田（2013）

（渡辺和夫）



所蔵：中村具見



ウスミモンキリガ

Eupsilia contracta (Butler)

チョウ目 ヤガ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

県内では中・南部に若干の記録があるが、湿地の減少などで最近の記録がない。

分布

北海道，本州，四国，九州のハンノキ（カバノキ科）の自生する湿地に分布する。
国外では朝鮮半島，ロシア南東部に分布するという。

形態・生息状況

開張40～45mm。前翅は黄褐色～褐色と変異があるが内横線と外横線は淡色で明瞭。環状紋，腎状紋も淡色に縁取られる。

年1化で10月に羽化し翌年4月頃まで見られる。寄主植物はハンノキ。

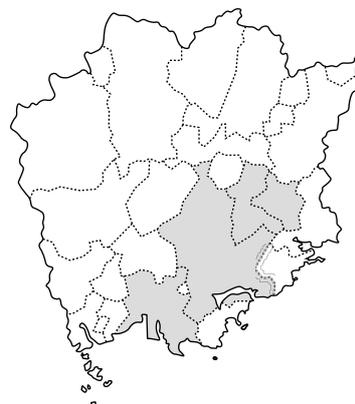
主要文献

井上ほか（1982），伊藤（2000），岸田（2011b）

（伊藤國彦）



所蔵：伊藤國彦



主な参考文献

- 赤枝一弘, 1958. 自宅附近で採集した蜻蛉2種. すずむし, 8(4):11.
- 赤枝一弘, 1959. 訂正. すずむし, 9(4):8.
- 赤枝一弘, 1964. 阿哲郡大佐町布瀬のサナエトンボ4種. すずむし, 14(2):5.
- 赤枝一弘, 1965. 岡山市 西大寺市のとんぼ. すずむし, 15(2):10-13.
- 赤枝一弘, 1973. ミヤマサナエを新庄村で採集. すずむし, (110):28.
- 安東瑞夫, 1952. 熊山附近の蜻蛉. すずむし, 2(6):9.
- 安東瑞夫, 1956. 作東の蜻蛉類1. すずむし, 6(2):1-5.
- 青野孝昭, 1951. ネジロハキリバチ倉敷に産す. すずむし, 1(2):7.
- 青野孝昭, 1983. 酒津八幡山東麓より船穂橋橋下にかけての高梁川河川敷の蝶・甲虫類. 倉敷の自然－高梁川河川敷, pp.41-58. 倉敷市企画部.
- 青野孝昭, 1987. 高梁川下流の歩行虫類. 倉敷市立自然史博物館研究報告, (2):43-53.
- 青野孝昭, 1988. 3. 海辺の昆虫第5回特別展「倉敷の海辺のいきもの」解説 倉敷の海辺のいきもの, pp.19-21. 倉敷市立自然史博物館.
- 青野孝昭, 1989. 由加山にいた2種の甲虫. 自然史博物館だより, (1):3.
- 青野孝昭, 1996. 岡山県自然保護センターの甲虫類. 岡山県自然保護センター研究報告, 別巻第1号:49-73.
- 青野孝昭, 2000. 岡山県内甲虫分布記録種の訂正. すずむし, (135):23-26.
- 青野孝昭, 2001. 岡山県内で採集された甲虫類の分布資料[1]. すずむし, (136):49-54.
- 青野孝昭, 2008. 岡山市旭川磯河原の小調査報告－カワラバツタねらいがルリナガツツハムシの発見に－. すずむし, (143):3-5.
- 青野孝昭, 2014. ニッポンハナダカバチの観察記. すずむし, (149):27-30.
- 青野孝昭, 2015. ヤブカラシの花にきた昆虫の確認記録. すずむし, (150):2-7.
- 青野孝昭・近藤光宏, 1986. 街中の緑地 鶴形山の昆虫. 倉敷市立自然史博物館研究報告, (1):41-73.
- 青野孝昭・奥島雄一, 1994a. クロカナブンの採集記録. すずむし, (128):27.
- 青野孝昭・奥島雄一, 1994b. 倉敷市生物目録<昆虫編>, 倉敷市生物目録, pp.93-233. 倉敷市立自然史博物館.
- 青野孝昭・近藤光宏・脇本浩・萱原潤・堀公典・中田暢彦・大久保正幸・藤島道彦, 2013. ヒイゴ池湿地の昆虫調査報告. ヒイゴ池湿地環境調査報告書2013, pp.1-69.
- 有田斉・前田善広, 2019. 珠玉の標本箱 日本産蝶類標本写真およびデータベース(20) シジミチョウ科⑩クロツバメシジミ, 62pp. NRC, 大阪.
- Collingwood, C. A., Ants (Hymenoptera, Formicidae) from North Korea. Ann. Hist. Nat. Mus. Hung., 68, 295-309.
- 土畑重人, 1997. 瀬戸内海沿岸におけるシロヘリハンミョウの記録. すずむし, (131):75.
- 同和鉱業株式会社, 2001. 岡山パブリックゴルフ場機能回復工事.
- 枝恵太郎, 2016. 抄録 クシロツマジロケンモンは日本特産の新種である. 蛾類通信, (278):87.
- 福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中蕃・田中洋・若林守男・渡辺康之, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅰ) アゲハチョウ科・シロチョウ科, 277pp. 保育社, 大阪.
- 福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中蕃・田中洋・若林守男・渡辺康之, 1983. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ) タテハチョウ科・テングチョウ科編, 325pp. 保育社, 大阪.
- 福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中蕃・田中洋・若林守男・渡辺康之, 1984a. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ) シジミチョウ科編, 373pp. 保育社, 大阪.
- 福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋昭・高橋真弓・田中蕃・田中洋・若林守男・渡辺康之, 1984b. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ) ジャノメチョウ科・セセリチョウ科編, 373pp. 保育社, 大阪.
- 船越俊平, 1958. 倉敷市福田町産昆虫雑記(二). すずむし, 8(1):2-7.
- 原田裕康, 1987a. ネジロハキリバチ遂に我が家へ!. すずむし, (122):35.
- 原田裕康, 1987b. アナアキアシプトハナバチの新産地. すずむし, (122):36-37.
- 原田裕康, 1987c. フクイアナバチ岡山県にも産す. 福井虫報, (1):30.
- 原田裕康, 1994. 後山の昆虫相－ハチ類－. みちしるべ, (18):117-122.
- 原田裕康, 1996. フクイアナバチ. 福井虫報, (19):50.
- 橋本秀明, 2007. 岡山県真庭市でキバネセセリを採集. ゆらぎあ, (25):20-21.

昆虫類

- 橋本響, 2012. ヨツボシカミキリの記録. すずむし, (147) : 48.
- Hayashi, M., 2007. Ecological notes on the adult stage of *Graphelmis shirahatai* (Nomura) (Coleoptera, Elmidae). *Elytra*, 35(1) : 102-107.
- 林憲一, 1962. オオキトンボ (*Sympetrum uniforme* Selys) を採集. すずむし, 12(2) : 2.
- 林憲一, 1964. 岡山のマダラナニワトンボのこと. すずむし, 13(4) : 6-7.
- 林成多, 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7) : 29-126.
- 林成多, 2012. フタホシカギアシゾウムシの関連植物. SAYABANE NS, (8) : 19-20.
- 林正美・税所康正編, 2011. 日本産セミ科図鑑, 223pp. 誠文堂新光社.
- 広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則(編), 2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅲ. 学研教育出版, 東京.
- 堀繁久, 2005. 日本産ダイコクコガネ属の現況. 昆虫と自然, 40(2) : 6-9.
- 池田綱介・青野孝昭・近藤光宏, 2010. 岡山県におけるカワラバットの野外観察昆虫と自然, 45(9) : 29-33.
- 生田敬, 2012. キバネセセリ(表紙写真). ゆらぎあ, (30) : 表紙, 表紙裏.
- 今坂正一, 1980. 岡山県未記録のハムシ. すずむし, (117) : 3-4.
- 今坂正一, 2005. 日出生台で採集した甲虫類. 二豊のむし, (42) : 1-11.
- 今坂正一, 2009. 大野原で確認した昆虫類 - 長崎県RDB調査の見直し調査の一環として -. こがねむし(長崎昆虫研究会会誌), (75) : 1-25.
- 今坂正一・大塚健之, 2011. 2010年に熊本県阿蘇地方の草原で採集した甲虫類について. 熊本昆虫同好会報, 54(2) : 1-27.
- 稲田和久, 2001. 岡山県のカワゲラ類(第1報), 兵庫陸水生物, 53 : 17-40.
- 稲田和久, 上野哲郎, 富田佳世, 1998. 岡山県のシノビアミメカワゲラ(第1報) 兵庫陸水生物, 49 : 39-45pp.
- 猪又敏男, 1990. 原色蝶類検索図鑑, 223pp. 北隆館, 東京.
- 井上治彦, 2018. 伊丹市のハチ. 伊丹市昆虫館研究報告, (6) : 23-35.
- 井上寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
- 井上清, 1972. 岡山県にヒラサナエを訪ねて. *Gracile*, (13) : 8-9.
- 井上大輔・中島淳, 2009. 福岡県の水生昆虫図鑑, 195pp.
- 石川和宏, 2013. 六虫会で得られた蛾類データ集. 六虫会と中国地方の蛾類, pp.79-95.
- 石川忠・高井幹夫・安永智秀, 2012. 日本原色カメムシ図鑑第3巻. 全国農村教育協会.
- 石綿進一・竹門康弘・藤谷俊仁, 2018. カゲロウ目. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第2版, pp.47-149. 東海大学出版部, 平塚.
- 磯野裕紹・磯野倫応, 2013. 赤磐市軽部でウマノオバチを採集. しぜんしくらしき, (87) : 14.
- 伊藤國彦・安東瑞夫, 1981. 岡山市市街地周辺部の昆虫相(1) - 膜翅目 -. 岡山県立短期大学研究紀要, 25 : 19-27.
- 伊藤國彦・安東瑞夫, 1986. 岡山市市街地周辺部の昆虫相(4) - 網翅目・直翅目 -. 岡山県立短期大学研究紀要, 30 : 11-16.
- 伊藤國彦・安東瑞夫, 1989. 鬼ノ城ゴルフ場建設環境アセスメントによる昆虫現況調査の再調査実施報告, pp.1-16. 岡山県の自然を守る会.
- 伊藤國彦, 2000. 岡山県蛾類資料(1). 岡山県立短期大学部伊藤研究室所蔵蛾類資料, 144. 岡山県立短期大学部.
- 伊藤國彦, 2012. タツカカモクメシャチホコの記録. みちしるべ, (48) : 466.
- 伊藤國彦・黒田健二, 2020. 40年ぶりに採集されたエソベニシタバ(原文ママ, 正しくは「エゾベニシタバ」). 岡山の自然, (210) : 1.
- 岩田泰幸, 2010. 新潟県におけるスズキベッコウハナアブの追加記録とチャイロスズメバチ巣下より得られた本種幼虫について. はなあぶ, 30-1 : 13-16.
- 岩田泰幸・渡貫修太郎・渡貫さとみ, 2012. 新潟県中越地区のアヤスジミゾドロムシ. 月刊むし, 東京, (497) : 31-35.
- 池上弘季・奥島雄一, 2011. 岡山県におけるオオクワガタの記録. しぜんしくらしき, (79) : 9-10.
- Jia, F.-L. & Y. Wang (2010) A revision of the species of *Enochrus* (Coleoptera: Hydrophilidae) from China. *Oriental Insects*, 44: 361-385.
- 加賀玲子・川島逸郎・莉部治紀, 2018. ウマノオバチ *Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre) の生活史, 特にその

- 寄主について. Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.), (7) : 59-66.
- カミシマ技研株式会社, 2007. 第3期神島産業廃棄物最終処分場事業に係わる環境影響評価書.
- Kano, R., Field, G. & Shinonaga, S. (1967) Sarcophagidae (Insecta: Diptera). Fauna Japonica, 7, [xii] + pp.1-168 + 41 pls.
- 笠原須磨生・松本俊信, 1989. 日本産歩行虫ノート: 本州で発見された日本新記録のホソアトモンアオゴミムシ(新称). 甲虫ニュース, (87/88) : 5-7.
- 片山豊八, 1959. 美作産蝶蛾目録. 岡山と昆虫, pp.1-60. 日本昆虫学会第十九回大会後援会事務局, 岡山.
- Katbeh-Bader A. & Arabyat S. (2004) The bee flies (Diptera: Bombyliidae) of Jordan. Denisia 14, zugleich Kataloge der OÖ. Landesmuseen Neue Serie 2, pp.353-384.
- 加藤学, 2005. 岡山県北部: 鏡野町でのウマノオバチの記録と若干の生態記録. つねきばち, (5) : 21-24.
- 加藤学, 2016. 笠岡市におけるヤマトハキリバチの記録. すずむし, (151) : 31.
- 加藤学, 2017. 岡山県におけるフジジガバチの記録と生息環境. 中国昆虫, (30) : 47-49.
- 加藤学・瀬島翔馬・狩山俊悟, 2007. 岡山県鏡野町のハチ(有剣類). 倉敷市立自然史博物館研究報告, (22) : 5-35.
- 桂孝次郎, 1973. 蒜山(岡山県)のカンアオイとオサムシ. 蒜山の生物調査報告, pp.183-192.
- 川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志, 2005. 日本産コガネムシ上科図説, 第1巻, 食糞群, 189pp. 昆虫文献六本脚, 東京.
- 川合禎次, 谷田一三共編, 2005. 日本産水生昆虫: 科・属・種への検索, 1342pp.
- Kawakami, Y. & Hayashi, M., 2010. A new distributional record of *Enochrus (Lumetus) bicolor* (Coleoptera, Hydrophilidae) from Osaka City, Honshu, Japan. Elytra, Tokyo, 38: 25-26.
- 木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会, 東京. 538pp.
- 木下善久, 2019. 吉備高原都市自然レクリエーション区(四平山)で記録の少ない甲虫3種を確認. すずむし, (154) : 56.
- 岸田泰則(編), 2011a. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ. 学研教育出版, 東京.
- 岸田泰則(編), 2011b. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ. 学研教育出版, 東京.
- 小橋理絵子, 2004. 倉敷市でウスルリモンハナバチを採集. しぜんしくらしき, (51) : 17.
- 小原悠雲・西俣美咲・森春歌・吉本幸恵・松田咲実・黒木出・中村圭司, 2014. 岡山県下で初めて発見されたベニイトトンボ(イトトンボ科). Naturalistae, 18 : 43-45.
- 児島孝宣, 2015. 1969年に新見市で発見されていたヒメハルゼミ. みちしるべ, (51) : 536.
- 国土交通省, 2018. 河川環境データベース河川水辺の国勢調査. (2018年8月29日アクセス)
- 国土交通省, 2002. 平成14年高梁川[底生動物]. 岡山河川事務所, Web上.
- 国土交通省, 2006. 平成15年旭川[陸上昆虫]. 岡山河川事務所, Web上.
- 国土交通省, 2007a. (河川水辺の国勢調査) 吉井川2004年度陸上昆虫類等. 河川環境データベース(国土交通省Web).
- 国土交通省, 2007b. (河川水辺の国勢調査) 高梁川2005年度陸上昆虫類等. 河川環境データベース(国土交通省Web).
- 国土交通省, 2012. 水辺の国勢調査平成22年度高梁川陸上昆虫類等.
- 駒井古実・吉安裕・那須義次・斉藤寿久(編), 2011. 日本の鱗翅類-系統と多様性. 東海大学出版会, 神奈川.
- 近藤光宏, 1951. ハッチョウトンボの記録第1号. すずむし, 1(8) : 2-3.
- 近藤光宏, 1979. 真庭郡新庄村土用及び周辺地域の昆虫類 直翅目・双翅目・膜翅目, pp.43-69. 俣野川発電所上部調整池予定地域(真庭郡新庄村土用)の昆虫調査.
- 近藤光宏, 1984b. ヤマトマダラバッタを沙美の海岸で! すずむし, (119) : 23.
- 近藤光宏, 1991. 高梁市臥牛山昆虫目録 網翅目・直翅目・半翅目・脈翅目・双翅目・膜翅目, 1-11. 高梁市臥牛山昆虫目録. 高梁市教育委員会「臥牛山の猿生息地」調査団.
- 近藤光宏, 1997. ヤマトマダラバッタ(バッタ科). 倉敷の自然, (65) : 2.
- 近藤光宏, 1998. 羅生門の昆虫-トビムシ目・トンボ目・ゴキブリ目・カマキリ目・ナナフシ目・ガロアムシ目・バッタ目・カメムシ目・ハエ目・ハチ目・シリアゲムシ目・ハサミムシ目・アミメカゲロウ目. 羅生門自然環境保護調査報告書, pp.117-144.
- 近藤光宏, 1999a. 岡山県内産アリ科採集品目録, すずむし, (134) : 1-9.

昆虫類

- 近藤光宏, 1999b. キオビホオナガスズメバチの採集記録. すずむし, (134) : 25.
- 近藤光宏, 2000. 珍しいヤドリスズメバチの記録. すずむし, (135) : 19-20.
- 近藤光宏, 2007. 児童の手でニッポンハナダカバチを記録. すずむし, (142) : 50.
- 近藤光宏, 2008. 岡山県におけるカワラバットの記録について. すずむし, (143) : 22.
- 近藤光宏, 2009. 高梁美しい森の昆虫, すずむし, (144) : 57-62.
- 近藤光宏, 2013. 岡山県のバットとハチについて. 高梁川, (71) : 63-77.
- 近藤光宏・三宅宗夫, 1975. 岡山県の広腰亜目(膜翅目)その1. すずむし, (112) : 1-17.
- 近藤光宏・渡辺昭彦, 2001. 笠岡市北木島調査報告すずむし, (136) : 77-79.
- 近藤要一, 1984a. フサヒゲルリカミキリ岡山県に産す. すずむし, (119) : 21.
- 紺野剛・古田治, 2006. ツリアブ科ノート トラツリアブ倉敷市での再発見. はなあぶ, 21 : 87-91.
- 紺野剛・青野孝昭・山本厚宏, 2010. ツリアブ科ノート トラツリアブ, その後. はなあぶ, 29 : 43-47.
- Koshiyama, Y., R. Miyata & T. Miyatake, 2012. Meateating enhances larval development of *Anthracophora rusticola* Burmeister (Coleoptera: Scarabaeidae), which breeds in bird nests. Entomological Science, 15: 23-27.
- 越山洋三・武智礼央・中尾浩平, 2017. 錦海塩田跡地でオオキトンボとオナガアカネを確認. すずむし, (152) : 3-4.
- 倉敷昆虫同好会, 1988. 岡山の昆虫, 271pp. 山陽新聞社, 岡山.
- 倉敷昆虫同好会, 2012. 重要薬用植物園昆虫調査報告. すずむし, (147) : 1-34.
- 栗原稔茂, 1939. 甲蟲について. 博物同好會々報, (1) : 29-38.
- 黒田健二・伊藤國彦, 2017. 出先半島の昆虫 (1). みちしるべ, (53) : 564-565.
- 楠田雲居, 1964. フサヒゲサシガメを倉敷で採集. すずむし, 13(4) : 10.
- 槇原寛・阿部學・新里達也・早川浩之・飯嶋一浩, 2004. ワシタカ類の巣で生活するアカマダラハナムグリ. 甲虫ニュース, (148) : 21-23.
- 槇本精二, 1979. 水無山国有林の蛾. すずむし, (116) : 1-37.
- 丸山博紀・花田聡子編, 2016. 原色川虫図鑑成虫編. 株式会社全国農村教育協会.
- 増井武彦, 2004. クビグロケンモン. 香川県レッドデータブックWEB版, 香川県環境森林部みどり保全課.
- 松田隆嗣, 2014. ギンボシスズメ. 改定しまねレッドデータブック, 鳥根県自然環境課.
- 松沢寛, 1964. 流下式塩田の害虫オオツノハネカクシの生態に関する知見. 日本応用動物昆虫学会誌, 8 : 251-256.
- 道信淳, 1963. 県北部のカミキリムシ採集品目録. すずむし, 13(2) : 12-16.
- 美作虫の会, 1968. チョウ・カミキリ・ハチ・トンボ分布資料. 美作の昆虫, (1) : 1-26.
- 光畑雅宏, 2018. マルハナバチを使いこなす, 127pp. 農文協.
- 三宅誠治, 2008. 蒜山高原の蛾類. ホシザキグリーン財団研究報告, (11) : 149-203.
- 三宅誠治, 2010. 磐窟溪の蛾類. ホシザキグリーン財団研究報告, (13) : 227-264.
- 三宅誠治, 2013. 児島半島の蛾類. ホシザキグリーン財団研究報告, (16) : 141-188.
- 三宅誠治, 2019. 岡山県に於けるヒサマツミドリシジミの生息状況. 倉敷市立自然史博物館研究報告(34) : 1-24.
- 宮田彬, 2013. 九重昆虫記-昆虫の心を探る1(改訂版). 431pp. (資)エッチエスケー, 東京.
- Miyatake, M., 1963. Two new species of the genus *Bledius* s. str. from Shikoku, Japan (Coleoptera: Staphylinidae). Transactions of the Shikoku Entomological Society 7: 106-111.
- 水野弘造, 1953. 豪溪のトンボ2, 3について. すずむし, 3(1) : 4.
- 森生枝, 1996. 定例観察会報告 アカトンボの観察. 自然保護センターだより, 5(12) : 5.
- 森生枝・十川巡一・十川和幸, 2006. 岡山県で陸生種ヤマトビイロトビケラ(トビケラ目, エグリトビケラ科). 岡山県自然保護センター研究報告, (14) : 71-74.
- 森正人・北山昭, 2002. 改定版図説日本のゲンゴロウ, 231pp. 文一総合出版.
- 守安敦, 1994. 高梁川のキイロヤマトンボ. しぜんしくらしき, (11) : 12.
- 守安敦, 1996a. キイロヤマトンボ幼虫を岡山県西部及び広島県東部で採集. すずむし, (129) : 20.
- 守安敦, 1996b. キイロヤマトンボの岡山県における分布と新産地. すずむし, (130) : 6-7.
- 守安敦, 1996c. 種松山のキイロヤマトンボ生息地について. すずむし, (130) : 22-23.
- 守安敦, 1996d. 倉敷市内のトンボに関する追加記録(1). しぜんしくらしき, (16) : 11-13.

- 守安敦, 1997a. 岡山県におけるグンバイトンボの分布と新産地. すずむし, (132) : 13-15.
- 守安敦, 1997b. 岡山県におけるハネピロエゾトンボの分布と新産地. すずむし, (132) : 15-17.
- 守安敦, 1997c. 岡山県におけるミヤマサナエの分布と新産地. すずむし, (132) : 17-18.
- 守安敦, 1997d. 岡山県におけるアオハダトンボの分布と新産地. すずむし, (132) : 18-20.
- 守安敦, 1998a. 岡山県におけるムスジイトトンボの分布と新産地. すずむし, (133) : 21-22.
- 守安敦, 1998b. 倉敷市水江のナゴヤサナエ. しぜんしくらしき, (27) : 8-9.
- 守安敦, 2002. ヒロシマサナエの新産地. 昆虫と自然, 37(14) : 43.
- 守安敦, 2003. 岡山県で採集したトンボ. すずむし, (137) : 31-42.
- 守安敦, 2015. ベニイトトンボを倉敷市で採集. すずむし, (150) : 29-30.
- 守安敦・原田 浩・近藤隆夫・北山 拓, 2010. オオキトンボを岡山市, 総社市で採集. すずむし, (145) : 1-4.
- 永幡嘉之, 1996. 岡山県でアカネキスジトラカミキリを採集. みちしるべ, (22) : 164.
- 長瀬博彦・渡辺恭平, 2018. ハチ目. 神奈川県昆虫誌2018, pp.934-1038. 神奈川県昆虫談話会.
- 内藤親彦・吉田浩史・中峰空・森田年則・池田隆直・鈴木壽也・中西明徳, 2004. 兵庫県におけるハバチ類の種多様性. 兵庫県立人と自然博物館 自然環境モノグラフ, (1) : 10pl+85pp.
- 中村慎吾, 2014. 広島県昆虫誌〔改訂増補版〕Ⅲ. 比婆科学教育振興会, 広島.
- 中村剛之・加藤大智・三枝豊平, 2015. 三重県, 徳島県におけるカスミハネカの記録(双翅目, ハネカ科). 三重県総合博物館研究紀要, 1 : 23-24.
- Nakanishi, K., 2012. Biological notes on *Haliplus sharpi* Wehncke, 1880 (Coleoptera: Halipidae). Elytra, New Series, 2:107-108.
- 中野一成, 2006. 津山市にてアカアシオオアカミキリ採集される. みちしるべ, (37) : 319-320.
- 難波通孝, 1983. 生態写真集 岡山の蝶 マクロの目でみるチョウの世界, 127pp. 丸善岡山支店, 岡山.
- 難波通孝, 1984. ムラサキシタバの幼虫を採集. 昆虫と自然, 19(14) : 7-8.
- 難波通孝, 1986. 訂正とおわび. 昆虫と自然, 21(14) : 10.
- 那須敏・古村俊治, 1994. 岡山県で発見されたヤノコモンタマムシ. 月刊むし, (281) : 2-4. 東京.
- 日本直翅類学会, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, 500pp.
- 日本直翅類学会編, 2016. 日本産直翅類標準図鑑, 384pp.
- 日本昆虫目録編集委員会編, 2013. 日本昆虫目録 第7巻第1号 鱗翅目(セセリチョウ上科-アゲハチョウ上科), 119pp. 日本昆虫学会, 東京.
- 日本昆虫目録編集委員会編, 2016. 日本昆虫目録 第5巻, 186pp. 権歌書房, 福岡.
- 新潟県, 2001. レッドデータブックにいがた. 新潟県県民生活・環境部環境企画課.
- 西本浩之・河瀬直幹, 2006. トビケラ科ヤチトビケラ属(新称)の発見, 日本産新種の形態的・生態的特徴. 昆虫と自然, 41(8) : 4-6.
- 西崎健二, 1986. 近年のタガメの生息及び生態. すずむし, (121) : 28.
- 野嶋宏一, 2017. 岡山県のトビケラ相. 陸水生物学報, 32 : 107-131.
- 野尻湖昆虫グループ, 1985. アトラス・日本のネクイハムシ-化石同定への手引き-, 182pp.
- Nozaki Takao, 1999. A new terrestrial caddisfly, *Nothopsyche montivaga* N.sp., from Japan (Trichoptera: Limnephilidae), In H. Malicky and P. Chantaramongkol (eds.) Proceedings of the 9th International Symposium on Trichoptera, 299-309. Faculty of Science, Chiang Mai University, Chiang Mai.
- Nozaki, Takao, 2002. Revision of the genus *Nothopsyche* Banks (Trichoptera: Limnephilidae) in Japan. Entomological Science, 5:103-124.
- Nozaki Takao, 2017. Discovery in Japan of the second species of the genus *Dolichocentrus* Martynov (Trichoptera: Brachycentridae). Zootaxa, 4227 (4) : 554-562.
- 野崎達也・野崎陽子, 2005. 岡山県で採集した異翅亜目(Heteroptera)の記録. すずむし, (140) : 31-62.
- 野崎達也・野崎陽子, 2006. 岡山県沿岸部における半翅目(Hemiptera)～瀬戸内市邑久町宇藤の事例～. すずむし, (141) : 1-14.
- O'Brien, Charles W., Askevold, Ingolf S. et Morimoto, Katrura., 1994. Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagoos Germar* (Coleoptera : Curculionidae) II. Taxonomic treatment of the species of Japan. : ESAKIA. 34, 1-73.
- 小川弘展, 2009. 岡山県産ナナフシ目の分類と分布(その1). しぜんしくらしき, (70) : 2-6.

昆虫類

- 岡島秀治・荒谷邦雄監修, 2012. 日本産コガネムシ上科標準図鑑, 444pp. 学研教育出版, 東京.
- 岡本忠, 1964. カミキリムシ科採集目録. すずむし, 14(1): 5-7.
- 岡本忠, 2007. ゴミアシサシガメの記録. すずむし, (142): 32.
- 岡本忠, 2017. ハマダラハルカを総社市で記録. すずむし, 152: 47.
- 岡山県, 1978. 岡山県の昆虫－岡山県昆虫生息調査報告書－. 岡山県環境部自然保護課, 岡山.
- 岡山県, 1985. 自然保護基礎調査報告書－湖沼・湿地地域生物学術調査結果－, 74pp. 岡山県環境保健部自然保護課, 岡山.
- 岡山県, 1993. おかやまの自然 第2版. 岡山県環境保健部自然保護課, 岡山.
- 岡山県, 2010. 岡山県版レッドデータブック2009 動物編. 岡山県環境文化部自然環境課, 岡山.
- 岡山昆虫談話会ギフチョウ調査会(伊藤國彦, 若槻匡志, 吉田嘉男, 三宅誠治), 2006. 岡山県東部のギフチョウについて, 月刊むし(422): 46-51.
- 奥田好秀, 1984. 岡山県におけるヒメビロウドカミキリの記録. 月刊むし, (166): 37.
- 奥島雄一, 1994. 瀬戸内地方におけるシロヘリハンミョウの記録. 甲虫ニュース, (108): 5.
- 奥島雄一・植松蒼, 2016. ネグロクサアブの記録. しぜんしくらしき, 99: 9-10.
- 奥島雄一・瀬島翔馬, 2007. 笠岡諸島六島で採集した昆虫類. しぜんしくらしき, (63): 5-9.
- 小野洋, 1951. ゴミムシ. すずむし, 1(3): 4.
- 小野洋, 1952. 青色螢光誘蛾燈に対する2, 3ガムシの趨光生活動とその気象因子に関する小調査(予報). 新昆虫, 5(8): 14-16, 19.
- 大島康宏・荻部治紀, 2001. 岡山県で発見された *Davidius moiwanus sawanoi* について. Tombo, 27: 12-13.
- 大對桂一・前田泰生・宮永龍一, 2016. 鳥根県からウスルリモンハナバチの初採集記録. 中国昆虫, (29): 21-22.
- 落合和泉, 2005. ハイイロボクトウ. レッドデータブックとちぎ, 栃木県環境森林部自然環境課.
- 埼玉県環境部みどり自然課(編), 2018. 埼玉県レッドデータブック 動物編 2018 (第4版), 420pp.
- 齋藤諭, 2012. 日本産ヨモギハムシ図鑑. 月刊むし, 東京, (491): 10-26.
- 齋藤諭・南雅之, 2016. 日本初記録のシラタカハムシについて. 月刊むし, 東京, (544): 12-15.
- 酒井香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説, 第2巻, 食葉群 I, pp.173. 昆虫文献六本脚, 東京.
- 千田喜博・守安敦・奥島雄一, 2004. 岡山県で確認されたヒヌマイトトンボ. 月刊むし, (406): 3-4.
- 清水健一・角島幸二, 2014. ツシマキモンチラシの一産地. 広島虫の会会報, (53): 62.
- 清水高男・稲田和久・内田臣一, 2018. カワゲラ目. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第2版, 271-324. 東海大学出版部, 平塚.
- 白水隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 336pp. 学習研究社, 東京.
- 重井博, 1976a. 福山山系のトンボ目. 倉敷の自然－福山山系・林熊野神社山系・下津井城山－, pp.56-58.
- 重井博, 1976b. 由加山のトンボ目. 倉敷の自然－福山山系・林熊野神社山系・下津井城山－, pp.207-209.
- 重井博, 1981. 久々井地点の昆虫トンボ目. 久々井地点の昆虫, pp.55-64.
- 重井博・近藤光宏・宇野弘之・青野孝昭, 1983. 昆虫類 赤穂地点における動物調査(鹿久居島) 報告書. pp.79-120. 株式会社関西総合環境センター.
- 重井博・青野孝昭・近藤光宏・中村具見・渡辺和夫, 1997. 若杉原生林の昆虫. 自然保護基礎調査報告書－若杉原生林生物学術調査－, pp.35-107. 岡山県地域振興部環境保全局自然保護課 岡山.
- 重井博・青野孝昭・近藤光宏, 1998a. 北木島の昆虫. 自然保護基礎調査報告書(鹿久居島・北木島・六口島), pp.144-166. 岡山県地域振興部環境保全局自然保護課, 岡山.
- 重井博・青野孝昭・近藤光宏, 1998b. 六口島の昆虫. 自然保護基礎調査報告書(鹿久居島・北木島・六口島), pp.197-123. 岡山県地域振興部環境保全局自然保護課 岡山.
- 十川巡一, 2007. 山の中で見つけた不思議なトビケラーヤマトビロトビケラー. 自然保護センターだより, 16(3): 3-6
- Suenaga, H., 2013. Notes on *Cassida ferruginea* and *Cassida mongolica* in Japan, with descriptions of their reproductive systems (Coleoptera: Chrysomelidae: Cassidinae). Genus 24(3-4): 325-333.
- 末長晴輝, 2014. 岡山県におけるハムシ類の分布記録(1). すずむし, (149): 31-32.
- 末長晴輝, 2017a. 岡山県におけるキボシチビコツブゲンゴロウ. SAYABANE N. S., (28): 48-49.
- 末長晴輝, 2017b. 岡山県産甲虫類の記録. すずむし, (152): 7-8.
- 末長晴輝・山地治, 2018. 岡山県におけるアヤスジミゾドROMシの採集記録. SAYABANE N. S., (31): 39-40.

- 末長晴輝・竹本拓矢, 2017. 中国・四国地方のシラタカハムシとクロルリハムシについて. SAYABANE N. S, (28) : 24-26.
- 末長晴輝・渡部晃平・山地治, 2017. 岡山県におけるサメハダマルケシゲンゴロウとオオマルケシゲンゴロウの初記録. SAYABANE N. S, (28) : 51-52.
- 鈴木邦雄, 2017. 富山県のオオサルハムシ—附：本種の寄主植物に関する覚書—. SAYABANE N. S, (28) : 43-45.
- 田口英成, 1987. 広島県付近の膜翅類 (第2報). 広島虫の会会報, (26) : 17-19.
- 武田寛生・武田雅生, 2019. 津山市産ウマノオバチ類の記録. しぜんしくらしき, (109) : 17.
- 武田隆, 2016. シラタカハムシの生態. 月刊むし, (550) : 44-47. 東京.
- 竹内幸夫・山地治, 1996. 岡山県産コガネムシ類の追加記録及び訂正. すずむし, (130) : 1-5.
- 滝沢春雄, 2007. 日本産ハムシ科生態覚書 (3). 神奈川虫報, (158) : 37-48. 小田原.
- 滝沢春雄, 2009. 日本産ハムシ科生態覚書 (4). 神奈川虫報, (168) : 1-11. 小田原.
- 滝沢春雄, 2011. 日本産ハムシ科生態覚書 (5). 神奈川虫報, (173) : 35-51. 小田原.
- 滝沢春雄, 2014. 日本産ハムシ科生態覚書 (8). 神奈川虫報, (182) : 37-46. 小田原.
- 田中伸一・田中馨, 2008. 山口県の有剣類. 山口のむし, (7) : 112-129.
- 谷田一三・野崎隆夫・伊藤富子・服部壽夫・久原直利, 2018. トビケラ目. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫科・属・種への検索 第2版, pp.449-687. 東海大学出版部, 平塚.
- Tojo, K. & K. Matsukawa. 2003. A description of the second species of the family Dipteromimidae (Insecta: Ephemeroptera), and genetic relationship of two dipteromimid mayflies inferred from mitochondrial 16S rRNA gene sequence. Zoological Science, 20:1249-1259.
- 鶴石達, 1999. 長野県伊那谷におけるオオナガレトビケラ *Himalopsyhe japonica* (Morton) の生態 (予報). 兵庫陸水生物, 50 : 15-27.
- Tsuruishi, T. 2003. Life cycle of a giant carnivorous caddisfly, *Himalopsche japonica* (Morton) (Trichoptera: Rhyacophilidae), in the mountain stream of Nagano, Central Japan. Limnology, 4:11-18.
- 鶴石達, 2004. オオナガレトビケラの分布と生活史. 昆虫と自然, 39 (6) : 23-25.
- 上西実・吉鷹一郎, 2004. 岡山県旭川水系のトビケラ相. 岡山県自然保護センター研究報告, (12) : 13-19.
- 脇悠太, 2019. 和気町田賀でイネネクイハムシを観察. すずむし, (154) : 10.
- 脇本浩, 2004. 岡山県自然保護センターのハチ類. 岡山県自然保護センター研究報告, (12) : 1-11.
- 脇本浩, 2013. 岩屋のウマノオバチ. すずむし, (148) : 5-6.
- 脇本浩・渡辺和夫, 2019. 総社市鬼城山ビジターセンター外壁の電灯に飛来した蛾類. すずむし, (154) : 25-29.
- 渡辺昭彦, 1992. オオナギナタハバチを岡山県で採集. すずむし, (127) : 8.
- 渡辺昭彦, 1994. 蒜山高原の興味深いハムシ. すずむし, (128) : 14-15.
- 渡辺昭彦, 1977. 岡山県のコメツキムシ. すずむし, (114) : 1-16.
- 渡辺昭彦, 2001. 岡山県内で採集された注目すべき昆虫. すずむし, (136) : 82.
- 渡辺一雄, 1993. 中国山地における氷期の遺存種 ウラジャノメ, 矢田脩・上田恭一郎(編), 日本産蝶類の衰亡と保護 第2集 : pp.111-124. 日本鱗翅学会・(財)日本自然保護協会, 大阪.
- 渡辺和夫, 2003. 川上町穴門山神社の蛾類. すずむし, (137) : 7-30.
- 渡辺和夫, 2006. トラサンドクガの記録と生態. すずむし, (141) : 18.
- 渡辺和夫, 2016. 岡山県におけるツシマキモンチラシとキンケウスバイラガの記録. すずむし, (151) : 12.
- 渡部晃平, 2011. 岡山県におけるオオヒメゲンゴロウの記録. SAYABANE N. S, (3) : 27-28.
- 渡部晃平, 2013. 岡山県におけるオオヒメゲンゴロウの生息状況(コウチュウ目, ゲンゴロウ科). 倉敷市立自然史博物館研究報告, (28) : 61-63.
- 渡部晃平・新田涼平, 2013. 岡山県におけるキイロコガシラミズムシの記録. SAYABANE N. S, (10) 31-32.
- 渡部晃平・新田涼平, 2015. 岡山県におけるマダラコガシラミズムシの追加記録. すずむし, (150) : 55.
- 渡部晃平・日鷹一雅, 2013. 四国南西部の水田におけるマダラコガシラミズムシ成虫の発生動態. 保全生態学研究, 18 : 101-105.
- 渡辺毅, 1979. Ⅲ阿新のトンボ. 続新見阿哲の記録, pp.71-75.
- 山地治, 1986. 岡山県より採集した甲虫類の記録. すずむし, (121) : 13-19.
- 山地治, 1987. 岡山県より採集した甲虫類の記録. すずむし, (122) : 24-28.

昆虫類

- 山地治, 1989. 岡山県から採集した水生半翅目(1985～1987年の採集記録). すずむし, (123): 1-5.
- 山地治, 1990. 岡山県より採集した甲虫類の記録. すずむし, (124): 11-19.
- 山地治, 1994. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (128): 7-13.
- 山地治, 1996. 岡山県から採集した甲虫類の記録・訂正. すずむし, (129): 23-25.
- 山地治, 2000. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (135): 10-12.
- 山地治, 2002. カワラハンミョウとヨドシロヘリハンミョウの記録. みちしるべ, (30): 249.
- 山地治, 2003a. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (137): 43-46.
- 山地治, 2003b. 岡山県野生生物調査検討会現地調査報告書. すずむし, (137): 77-78.
- 山地治, 2004. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (138): 20-24.
- 山地治, 2005. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (140): 79-84.
- 山地治, 2012. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (147): 61-62.
- 山地治, 2013. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (148): 1-3.
- 山地治・福田元信, 2001. 岡山県から採集した陸生カメムシ類の記録. すずむし, (136): 33-41.
- 山地治・福田元信, 2003. 岡山県から採集した陸生カメムシ類の記録[II]. すずむし, (137): 67-71.
- 山地治・渡辺昭彦, 1991. 岡山県より採集した甲虫類の記録. すずむし, (126): 11-20.
- 山砥司朗, 1964. アオモンギンセダカモクメを倉敷で採集. すずむし, 14(1): 9.
- 山砥司朗, 1968. 岡山県内産ゴミムシの採集記録. すずむし, (101): 23-24.
- 安田剛長, 2008. 岡山県におけるヒメハルゼミの新産地. すずむし, (143): 16.
- 安田剛長, 2019. 岡山県におけるネアカヨシヤンマのヤゴの生息環境. すずむし, (154): 3-4.
- 安江安宜, 1955. 久米郡二上山. すずむし, 5(8): 1-3.
- 安江安宜, 1974. 岡山県北部国定公園拡張予定地域の昆虫類調査報告. 東中国山地自然環境調査報告, 163-172.
- 淀江賢一郎, 2016. 大陸方面から山陰地方に飛来する迷入種(蝶), 日本鱗翅学会中国支部会報(17): 34-37.
- 吉田嘉男, 1990. ヒメヒカゲの幼虫をホンモンジスゲより採集, みちしるべ(9): 43.
- 吉田浩史・八木剛, 2012. 兵庫県の注目すべき双翅目. きべりはむし, 34: 12-25.
- Yoshihara, K., 2016. The insects of Japan, Vol. 6. Coleoptera, Curculionidae, Baridinae. 171 pp., Touka Shobo Co. Ltd., Fukuoka.
- 吉岡大成, 2011. 岡山県でコガタノゲンゴロウを採集. しぜんしくらしき(76): 11-12.
- 吉鷹一郎, 2004. 岡山県富村白賀川の水生昆虫. 岡山県自然保護センター研究報告, (12): 21-30.
- Yoshitake, H.・A. Yoshida, 2013. A biological note on *Bagous bipunctatus* (Kono) (Coleoptera, Curculionidae, Bagoinae). Japanese Journal of Systematic Entomology, 19, pp. 217-220, 2013.
- 吉富博之・白金晶子・疋田直之, 1999. 矢作川水系のヒメドロムシ. 矢作川研究, (3): 95-116.
- 湯浅卓雄, 1996. 岡山県自然保護センターの水生動物[魚類, 底生動物]. 岡山県自然保護センター研究報告, 別巻第1号: 75-82.
- 財団法人リバーフロント整備センター編, 1997. 陸上昆虫類等調査編—旭川平成6年度河川水辺の国勢調査年鑑.
- 財団法人リバーフロント整備センター編, 2000. 陸上昆虫類調査編—旭川平成10年度河川水辺の国勢調査年鑑.